頭註

國譯本草綱目

第十一冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍
監修・校註　理學博士　白井光太郎
顧問　木村博昭
考定　理學博士　牧野富太郎
考定　理學博士　脇水鐵五郎
考定　岡田信利
考定　矢野宗幹
考定　木村康一
譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目 第十一册

目次

本草綱目介部第四十五卷

本草綱目介部第四十六卷

介部第四十六卷目錄……一

本草綱目禽部第四十七卷

本草綱目禽部第四十八卷

本草綱目禽部第四十九卷

山禽類

本草綱目介部

第四十五卷

本草綱目介部目錄第四十五卷

李時珍曰く、介蟲は三百六十あつて龜をその長としてある。龜は蓋し介蟲の靈長なるものだ。周官には『鼈人は(一)互物を取り、時を以て(二)籍す。春は鼈、蜃を獻じ、秋は龜、魚を獻じ、祭祀には(三)蠯——音は排(ハイ)——(四)蠃——音は螺(ラ)——(五)蚳——音は池(チ)——を共し、以て(六)醢人に授く』とあるのだから、介物はやはり聖世の供饌にも廢てられなかつたものである。況やまた藥品に充てらるるに於てをや。唐、宋の本草にはいづれも蟲魚部中に混入されてあつたが、本書は介部としてこれを分離し、凡て四十六種を龜鼈、蚌蛤の二類に分類した。

神農本草經八種　梁の陶弘景註。
名醫別錄五種　梁の陶弘景註。
唐本草　唐の蘇恭。
本草拾遺十種　唐の陳藏器。
海藥本草二種　唐の李珣。
蜀本草一種　蜀の韓保昇。
開寶本草二種　宋の馬志。
嘉祐本草八種　宋の掌禹錫。
圖經本草一種　宋の蘇頌。
本草綱目六種　明の李時珍。

(一)互物ハ火戴禮註ニ、互物ハ甲アルモノ、蒲胡龜鼈ノ屬是ナリ。
(二)籍ハヤスヲ云フ註ニ、以テ泥中ヲ杓刺シ之ヲ搏取スルナリ。
(三)蠯ハ大蛤。
(四)蠃ハ螔蝓。
(五)蚳ハ蟻ノ子。
(六)醢人ハ官名、周禮天官ノ屬、四豆ノ實ヲ掌ル、豆ハ祭器。

本草蒙筌一種　明の陳嘉謨。

附註

魏呉普本草　李當之藥錄　齊徐之才藥對　唐甄權藥性
宋雷斅炮炙論　唐孟詵張鼎食療　孫思邈千金　南唐陳士良食性
楊損之刪繁　蕭炳四聲　宋寇宗奭衍義　大明日華
金張元素珍珠囊　元李杲法象　朱震亨補遺　呉瑞日用
王好古湯液　明寧源食鑑　明汪穎食物　明汪機會編

介の一　龜鼈類十七種

水龜　本經　秦龜　別錄　蠵龜　綱目　鼂鼊を附す。
瑇瑁　開寶　散八兒を附す。　綠毛龜　蒙筌　瘧龜　拾遺
鶚龜　拾遺　旋龜を附す。　攝龜　蜀本　賁龜　綱目
鼈　本經　納鼈　圖經　能鼈　綱目　朱鼈　拾遺
珠鼈　綱目　黿　拾遺　蟹　本經　鱟　嘉祐

右附方　舊十九　新四十六

介の一　龜鼈類十七種

(一)水龜（本經上品）

和名　しながめ
學名　(Ocadia sinensis, Gray.
科名　いしがめ(石龜)科

釋名　**玄衣督郵**　時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『龜は頭が蛇と同じだ。故にその文字は上は它に從ひ、その下に甲、足、尾の形を象したものだ』とある。它は古の蛇の字だ。又、爾雅には龜を十種擧げてあつて、郭璞は文に隨つて傳會してあるが、甚だ明確でない。蓋し山、澤、水、火の四種は、通常の龜をその生ずる場所に因つて區分したものである。その大いさ一尺以上に達したもので、水に棲むものをば寶龜といひ、蔡龜ともいふ。山に棲むものをば靈龜といふ。いづれも國の守寶であるが、まだ變化する能力のないものだ。その齡百千年に達すれば、五色を具へ、或は

〔龜〕
―山・水の二種あり―

(一)木村(重)曰ク、背甲ハ扁平稍卵形頭部吻端稍尖リ、甲及ビ側面ニ黃色ノ線アリテ美ナリ。臺灣、南支那ニ分布ス、一般ニシユイクキ(水龜)ト稱ス。

(二)炎地ハ火ノ燃エル地。

(三)運、或ハ連カ。

大に、或は小に、さまざまに變化する。その龜の水に棲むをば神龜といひ、山に棲むをば筮龜といふ。いづれも龜の聖なるものだ。火龜といふは火鼠などのやうに(二)炎地に生ずるもの、攝龜といふは呷蛇龜、文龜といふは蟕蠵、瑇瑁のことである。後世では山、澤、水、火の差異を區別せずして、通じて小なるものを神龜とし、年久しきものを靈龜としてあるが、誤である。本經では、龜甲をただ水中のものと言つてある。而るに諸家の註に始めて神龜を用ゐるといひ出したが、しかし神龜は得難いもので、現に一般には、ただ水中の普通の龜を取つて藥に入れる。故に此には總稱して水龜なる標名の下に諸種の龜を綜括した。

【集解】時珍曰く、甲蟲は三百六十あつて、神龜がその長である。龜は、形は離に象り、その神は坎に在り、上の隆くして文あるは天に法り、下の平にして理あるは地に法つてあつて、陰に背き、陽に向ひ、頭は蛇の如く、頸は龍の如く、骨が外に在り、肉が内にあり、腸は首に接屬して能く任脈に(三)運り、肩廣く、腰大きく、卵生にして情思を以て子を抱養する。離れてゐながら守護するのだ。その呼吸は耳を以てし、雌と雄と交尾するが、蛇とも交接する。或は、大腰にして雄なしともい

ふが、それは謬だ。現に一般にその底甲を視て雌と雄との區別をつけてゐる。龜は春、夏に蟄を出て甲を脱し、秋、冬は穴に藏れて(四)導引するものだ。それ故に靈妙にして壽命が長いのである。南越志には『神龜は拳ほどの大いさで色は金の如く、上甲の兩邊は鋸齒の如く、爪は至つて利く、樹に攀ぢ上つて蟬を食ふ』とあり、抱朴子には『千歲の靈龜は五色具はり、玉の如く、石の如く、變化測り難いもので、或は大に、或は小に、或は蓮葉の上に游び、或は(五)蓍叢の上に伏す』とあり、張世南の質龜論には『龜は老いれば神あるもので、年八百に達したものは反つて錢ほどの大いさになり、夏は蓮の葉の上に游び、冬は蓮根の節の中に藏れる。その息には煤煙のやうな黑氣があるので、蓮の心に居てもそれがゐることが明瞭に判る。もしこの氣を見ても驚き慌てるに及ばぬものだ。潛かに油管を含んで噀けば龜はその姿を隱せぬものである』とある。或は、龜は鐵聲を聞けば伏し、蚊に嗜されると死ぬ。(六)香油を眼に抹すると水に入れても沈まなくなる。桑の老木で煮れば爛れ易いともいふ。いづれも物には相互に相制伏する微妙な關係があるからだ。

龜甲 [釋名] **神屋**(本經) **敗龜版**(日華) **敗將**(日華) **漏天機**(圖經) 時珍

(四)導引ハ今日ノ體操ニ似タルコト、呼吸シ俯仰シ手足ヲ屈伸スルコト。

(五)蓍ハ耆ニ同ジ。

(六)香油、本草彙言ニ桊油ニ作ル。

曰く、いづれも隱名だ。

【集解】別錄に曰く、龜甲は南海の池澤、及び湖水中に生ずる。採取に一定の時期はない。濕に中らしめてはならぬ。濕すれば有毒である。

陶弘景曰く、これは水中の神龜の長さ一尺二寸のものを用うるを善しとする。(七)厴は卜に用うべく、殼は藥に入るべく、また仙方にも入れる。生きた龜を炙いて取るべきものである。

韓保昇曰く、(八)湖州、江州、交州のものは、骨が白くして(九)厚く、その色が鮮明だ。卜に用ゐ、藥に入れて最も良し。

大明曰く、卜龜は、小さいもので腹の下に曾て十回も卜の文象を鑽つたことのあるものを敗龜版と名ける。藥に入れて良好だ。

蘇頌曰く、今は(一〇)江湖の地方いづれにもある。藥用には神龜を用うべきもので、心臟部に當つた一个處に四方透明にして琥珀のやうな色のある神龜版が最も佳し。そのものの頭が方で脚が短く、殼が圓く版の白いものは陽龜、頭が尖つて脚が長く、殼が長く版の黃なるものは陰龜であつて、(一一)陰人には陜(陽の俗字)を用ゐ(一二)陜人に

(七)厴ハ底甲ヲ指ス。

(八)湖州ハ唐ニ置ク、今ノ浙江省吳興縣ソノ舊治ナリ。江州ハ石部雲母ノ註、交州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(九)本草彙言ニ厚字上ニ肉字アリ。

(一〇)江湖ハ江西、湖南、揚子江、洞庭湖ニ沿ヘル地方ヲ指ス。

(一一)陰人ハ陰氣ノ人ナラン。

(一二)陽人ハ陽氣ノ人ナラン。

(二三)攻ハ甲ヲ取ルヲ云フ。

は陰(陰の俗字)を用ゐるのであるが、今の醫家はかやうな區別を知らない。

時珍曰く、古代には、龜を取るには秋を以てし、龜を(二三)攻むるには春を以てしたものだ。現今の龜を取る者は、一時に數十百を採り聚めて、生ながら鋸で甲を取り、その肉を食ふ。彼等の仲間で龜王、龜相、龜將などいふ名目があるが、それは皆その腹、背、左、右の文に因つて區別するのであつて、龜の眞中の文を千里といひ、その首の横文第一級の左右にある斜理がみなその千里に接續するものが龜王である。それ以外の龜にはかやうになつてゐない。事を占ふに、帝王はその王を用ゐ、文には相を用ゐ、武には將を用ゐ、それぞれその等級に隨つて用ゐたものだといふが、その說は逸禮の記載に『天子は一尺二寸、諸侯は八寸、大夫は六寸、士庶は四寸』とある說と符合するところがあつて、やはり甚だ筋道が立つてゐる。かの神龜、寶龜などいふものになつては、世間一般には得難いものであるから、藥に入れるにはやはりこの寸法に依つて用うべきもののやうである。日華が、卜龜に用ゐる小甲といつたのは、蓋し簡便な方法を採用したまでのことだ。又、按ずるに、經に『龜甲は濕に中らしめてはならぬ。一名神屋といふ』とあり。陶氏は『厴は卜に供すべ

し、殼は藥に入るべし』といつてあるのだから、古代には上、下の甲いづれも用ゐたものらしい。日華に至つて、始めて龜版を用ゐるといひ出してから、後世一般に主としてそれを用ゐるやうになつたのである。

〔正誤〕　吳球曰く、旣往の諸大家が敗龜版を用ゐて陰を補したのは、その氣を借りたものである。今は一般に鑽つたことのあるもの、及び煮たものを用ゐるが、それでは性氣が無くなつて了ふものだ。ただ靈山諸谷にある風に因て墜ちた自敗せるものが最も佳い。田池中の自敗せるものはこれに次ぎ、人間が打ち壞つたものは又これに次ぐ。

時珍曰く、按ずるに、陶氏は生きた龜から炙つて取つたものを用ゐるといひ、日華は灼いたことの多いものを用ゐるといひ、いづれも生性、神靈のあるものを以てすることになつてゐるのであつて、敗とは鑽り灼くこと陳くして敗れたやうになつたものといふ意味である。吳氏はこの意味を理解せずして、反て自死し枯敗した版を用ゐるもの、また灼いては性を失ふものと考へたのであるが、それは謬だ。風で墜ちて自死せしのものも無いことはないが、それはやはりただの山龜である。淺薄

な學者は異論を立てて世を誤り、一般鄙俗の輩はそれに據つて物識顔をするものだから、此にその妄を正して置く。

修　治　龜甲を鋸で四邊を切り去り、石上で磨淨して灰火で炮き、酥を塗つて黄に炙いて用ゐる。また酒で炙き、醋で炙き、猪脂で炙き、灰に燒いて用ゐる場合もある。

氣　味　【甘し、平にして毒あり】甄權曰く、毒なし。時珍曰く、按ずるに、經には『濕に中れば有毒だ』とあるのだから、濕に中らぬものは無毒である。之才曰く、沙參、蜚蠊を惡み、狗膽を畏れ、銀を痩す。

主　治　【甲は、漏下赤白を治し、癥瘕を破る。痎瘧、五痔、陰蝕、濕痺、四肢の重弱、小兒の顖の合はぬもの、久しく服すれば身を輕くし、飢ゑず】(本經)【驚き恚りの氣の心腹痛で久しく立ち得ぬもの、骨中の寒熱、傷寒勞復、或は肌體の寒熱で死せんとするには、これを湯にして用ゐるが良し。久しく服すれば氣を益し、智を資け、健啖ならしめる。燒灰は小兒の頭瘡の燥き難きもの、婦人の陰瘡を治す】(別錄)【殼は久嗽に主效があり、瘧を斷つ】(弘景)【殼を炙つて末にし、酒で服すれ

ば風脚弱に主效がある】（蕭炳）【版は血痲痺を治す】（日華）【燒灰は脫肛を治す】（甄權）
【下甲は、陰を補し、陰血不足に主效があり、瘀血を去り、血痢を止め、筋骨を續ぎ、勞倦、四肢無力を治す】（震亨）【腰脚の酸痛を治し、心、腎を補し、大腸を益し、久痢、久洩を止め、難産に主效があり、癰腫を消す。燒灰を臁瘡に傅ける】（時珍）

【發明】　震亨曰く、敗龜版は金、水に屬し、大いに補陰の功のあるものだが、本草にその說明を缺いたのは遺憾であつた。蓋し龜なるものは陰中の至陰の物であつて、北方の氣を稟けて生ずるものだ。故に能く陰を補し、血を治し、勞を治するのである。

時珍曰く、龜と鹿とは、いづれも靈妙にして壽命の長いもので、龜は首を常に腹に向つて藏し、能く任脈を通ずるものだ。故にその甲を取つて以て心を補し、腎を補し、血を補するは、いづれも陰を養ふ結果である。鹿は鼻が常に反つて尾に向ひ、能く督脈に通ずるものだ。故にその角を取つて以て（一四）命を補し、精を補し、氣を補するは、いづれも陽を養ふ結果である。かやうに物理の玄微、神工の能事は、龜甲の主たる諸病が皆陰虛、血弱の系統に屬する事實に就いて見ても自ら心解される

（一四）命ハ本經逢原ニ命門トアリ。

次第である。又、鼈甲の條を見よ。

附方　舊二、新十二。【補陰丸】丹溪の方である。龜の下甲を酒で炙き、熟地黄を九蒸九晒して各六兩、黄柏を鹽水に浸して炒り、知母を酒で炒つて各四兩を石器で末にし、猪脊髓で和して梧子大の丸にし、百丸づつを空心に溫酒で服す。一方では地黄を去り、五味子を炒つて一兩を加へる。【瘧疾の止まぬもの】龜版を燒いて性を存して研末し、方寸匕を酒で服す。(海上名方)【抑結して散ぜぬもの】龜の下甲を炙いて五兩、側柏葉を炒つて一兩半、香附を童尿に浸して炒つて一兩を末にし、米糊で梧子大の丸にし、一百丸づつを空心に溫酒で服す。【胎産下痢】龜甲一枚を醋で炙いて末にし、一日一回、一錢を水で飲服する。(經驗方)【難產に分娩を催す】祕錄では、龜甲を燒いて末にし、方寸匕を酒で服す。○摘玄では、臨產三五日にして分娩せず、死に垂たるもの、及び母の體格が矮小で交骨の開かぬものを治す。乾龜殼一個を酥で炙き、婦人の頭髮一握を灰に燒き、川芎、當歸各一兩を用ゐ、七錢づつを秤つて水で煎じて服し、人間が五支里步行するほどの時間を隔てて再び一服する。生胞、死胎いづれも下る。【腫毒の初期】敗龜甲一枚を燒いて研り、四錢を

酒で服す。(小品)【婦人の乳毒】上記の方に同じ。【小兒の頭瘡】龜甲を灰に燒いて敷く。(聖惠方)【月蝕耳瘡】同上。【口吻に生じた瘡】同上。【臁瘡の朽臭せるもの】生龜一箇の殼を取つて醋で黄に炙き、更に煅いて性を存して火毒を出し、輕粉、麝香を入れ、葱湯で瘡を洗淨して搽敷する。(急救方)【人に咬まれた傷瘡】龜版骨、鱉肚骨各一片を燒いて研り、油で調へて搽る。(葉氏摘玄)【豬咬の瘡】龜版を燒いて研り、香油で調へて搽る。(葉氏摘玄)

肉　【氣味】【甘く酸し、溫にして毒なし】弘景曰く、羹、臛にして用ゐれば大いに補するものだ。しかし神靈多きものだから輕しく殺してはならない。記載された書籍は甚だ多いから、此に一一具說するわけに行かぬ。思邈曰く、(二五)六甲の日には十二月のいづれの月にも食つてはならね。人の神を損ずるものだ。豬肉、菰米、瓜、莧と食ひ合はせてはならぬ。人を害するものだ。

【主治】【酒に釀したものは、大風の緩急、四肢拘攣、或は久しき癱緩の收まらぬものを治して皆差える】(蘇恭)【煮て食へば、濕痺、風痺の身腫、踒折を除く】(孟詵)【筋骨疼痛、及び一二十年の寒嗽を治し、瀉血、血痢を止める】(時珍)

(二五)六甲ハ甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅。

【發明】 時珍曰く、按ずるに、周處の風土記に『江南では、五月五日に肥龜を煮て鹽豉、蒜、蓼を入れて食ひ、菹龜と呼んでゐる』とある。陰內陽外の意味を取つたものだ。

【附方】 舊一、新六。【熱氣濕痺】 腹內の激熱するには、龜肉を五味と共に煮て食ふ。微泄して奏效する。(普濟方) 【筋骨疼痛】 烏龜一個を四脚に分け、その一脚づつを用ゐて天花粉、枸杞子各一錢二分、雄黃五分、麝香五分、槐花三錢を入れ、水一椀で煎じて服す。(纂要奇方) 【十年の欬嗽】 或は二十年に及び、醫療の奏效せぬには、生龜三箇を普通の方法の如く調理して腸を去り、水五升で三升に煮取つて麴を浸し、秫米四升を普通の方法の如くにして釀し、全部を飲み盡す。永く再發せぬ。○又、ある方では、生龜一箇を炊甑中に入れて殺して取り出し、人に尿を放洒させて浸し、三日目に燒いて研り、醇酒一升でその末を和し、乾飯のやうにして頓服する。須臾にして大に吐し、嗽囊を吐出すれば癒える。小兒には量を半減する。【痢、及び瀉血】 烏龜肉に沙糖水で椒を拌和して炙き、煮て食ふ。回數多く用ゐれば癒える。(普濟方) 【勞瘵の失血】 田龜を煮て肉を取り、葱、椒、醬油を和して煮て食ふ。陰

を補し、火を降し、虛勞、失血、喀血、欬嗽、寒熱を治す。屢〻實驗がある。（吳球便民食療）【年久しき痔漏】田龜二三箇を煮て肉を取り、茴香、葱、醬を入れて常に食ふ。屢〻效驗を得た。この疾は大いに糟、醋等のもの、熱物を忌む。（便民食療）

血　〔氣味〕【鹹し、寒にして毒なし】〔主治〕【脫肛に塗る】（甄權）【打撲傷損を治するに、酒に和して飮む。同時に生龜肉を擣いて塗る】（時珍）

膽汁　〔氣味〕【苦し、寒にして毒なし】〔主治〕【痘後の目腫で月を經て開かぬには、これを取つて點けるが良し】（時珍）

溺　〔采取〕頌曰く、按ずるに、孫光憲の北夢瑣言に『龜は性の嫉妬深いもので、蛇と交尾する。それを取つて瓦盆中に入れて置き、鏡に映して他の龜に見せると淫情を發して尿を洩すものだ。それを器に取收める。又、ある方法では、紙撚に火を點けてその尻に點けても失尿するが、これではやや緩なるものだ』とある。

時珍曰く、今は一般に、ただ猪鬃、或は松葉でその鼻を刺して尿を出させる。この方が更に簡便なやうだ。

〔主治〕【耳に滴せば聾を治す】（藏器）【舌下に點ければ、大人の中風舌瘖、小

兒の驚風不語を治す。胸、背に摩すれば、龜胸、龜背を治す】（時珍）

【發明】時珍曰く、龜尿は竅に走り、骨に透るものだ。故に能く瘖、聾、及び龜背を治し、（一六）髭髮を染めるのである。按ずるに、岣嶁神書に『龜尿で瓷器を磨れば能く軟かになり、墨を磨つて石に書けば能く數分の深さに入る』とあるを見ても推知される。

【附方】舊一、新二。【小兒の龜背】龜尿を胸、背に摩り、久しく繼續すれば瘥える（孫眞人）【中風不語】烏龜尿少量を舌下に點けるが神妙である（壽域）【若じらが】龜尿で水蛭の細末を調へ、日毎に撚れば自ら黑くなる。その末は粗いものを用ゐることを忌む。（談野翁方）

（一）秦　龜（別錄上品）

和　名　やまがめ
學　名　Geomyda spengleri (Gmelin)
科　名　いしがめ（石龜）科

【釋名】**山龜**　宗奭曰く、龜は四方にいづれもあるが、ただ（二）秦地方の山中には、老龜の極めて大きくして壽命の多いものがゐる。故にこれを取つて用ゐたもの

（一六）本草洞詮ニ髮チ鬚ニ作ル。

（一）木村（重）曰ク、背甲ハ卵形ナルモ後部ヤヤ廣ク吻短シ、腹甲ノ前周緣黃色ナリ。南支那、スマトラ、琉球等ニ分布ス、一般ニサンクキ（山龜）ト稱ス。

(二)秦トハ今ノ陝西省地方ヲ指ス。

で、その產地を以て區別した名稱だ。

【集解】別錄に曰く、秦龜は山の陰の土中に生ずる。二月八日に採る。

保昇曰く、今は江南、嶺南の處處にあつて、冬期には土中に藏れ、春、夏、秋は出て溪谷に游ぶ。古代にはただ秦地のもののみを取つたのだ。

弘景曰く、これは山中の龜で、水に入らぬもののことだ。その形は大小一定せぬ。方藥に用ゐることは稀なものだ。

恭曰く、秦龜とは蟕蠵のことで、更に別物ではない。

士良曰く、秦地方では蟕蠵を山龜と呼ぶ。この物だ。

藏器曰く、蟕蠵は海水中に生ずるもの、秦龜は山の陰に生ずるものだ。これは深山中の大龜である。石碑の臺石の龜形が是である。草根、竹萌を食物とし、冬は蟄し、春に出る。卜占家はやはりこれを取つて山澤に關する占をする。揭げ取つた甲は器物の飾にもなるものだ。

頌曰く、蟕蠵は嶺南に生ずる別の一種の山龜であつて、秦龜ではない。龜は種類の甚だ多いもので、その總ての種類を識るは六ヶ敷いことである。蓋し近世では貨

幣にもこれを用ゐず、卜の方法を知るものも稀なところから、あまり貴重視されなくなつた。

時珍曰く、山中の通常の龜をば鹿が嗜んで食ふ。その大きくして卜に使用し得るものを靈龜といふ。年百歳に達して能く變化するものは筮龜といひ、或は蓍草の下に伏し、或は卷耳、芩葉の上に游ぶもので、抱朴子に所謂『山中で巳の日に時君と稱するは龜のことだ』とあるはこの物だ。蟕蠵に就ては、或は山龜であらうといひ、或は海水中に生ずるといひ、その說が一定せぬが、按ずるに、山海經に『蟕龜は深澤中に生ず』とあり、應劭の漢書の註に『靈蠵は大龜である。雌を蟕蠵といひ、雄を玳瑁といふ』とあるに觀れば、秦龜とは山龜のこと、蟕蠵とは澤龜のことで、爾雅の山龜、澤龜、水龜と合致する。蓋し一種中の二類なのだ。故にその占卜に用ゐ、藥に入れ、器を飾る等の效用が全く同一なのだ。

甲 [修治] 李珣曰く、卜に用ゐたことのあるものほど妙である。酥、或は酒を用ゐて黃に炙いて用ゐる。

[氣味] 【苦し、溫にして毒なし】 [主治] 【濕痺氣で身重く、四肢關節の動

搐し得ぬを除く】(別錄)【頑風冷痺、關節氣壅、婦人の赤白帶下。積癥を破る】(孟詵)【心を補す】(宗奭)【鼠瘻を治す】(時珍)

發明 宗奭曰く、大龜は物に對して靈なるものだ。故に方家ではこれを補心に用ゐるので、それが甚だ效驗がある。時珍曰く、龜甲の條を見よ。

附方 新一。【鼠瘻】劉涓子の方。山龜殼を炙き、狸骨を炙き、甘草を炙き、雄黃、桂心、乾薑と等分を末にして方寸匕を飲服し、同時に艾で瘡上に灸し、蜜で少量を和して瘡中に入れるが良し。

頭 **主治** 【陰乾し、炙き硏つて服すれば、長途深遠なる地點まで山に入つても迷はなくなる】(孟詵) 弘景曰く、前臑骨を佩びてもその通りだ。

(一)蠵龜(綱目)

和名　あかうみがめ
學名　Caretta olivaceus (Eschscholtz.)
科名　うみがめ(蠵)科

釋名 蠵蠵 音は玆夷(シイ)である。靈蠵(漢書) 靈龜(郭璞註) 鼂鼊 音は拘壁(コウヘキ)である。一には蚼蠏と書いてある。負屭 音は備戲(ビキ)であ

(一)木村(重)曰ク、海產ノ大ナルモノ地中海、印度洋、太平洋、太西洋ニ分布ス。イークヰ(蠵龜)ト稱スルモノニあをうみがめモアレドモ、市販ニテハあかうみがめ

め多キニヨリ之ヲ取ル。

(二)碑趺ハ石碑ノ臺。

る。雜爼に係臂と書いたのは正しくない。皮を 鼉筒 と名ける。時珍曰く、蟕蠵とはその鳴聲が茲夷といふやうに聞えるから名けたものだ。龜鼊とは南方人が黿皮を呼ぶときの發音だ。負屭とは力のある狀態であつて、現に(二)碑趺の形はこれに象つて作つてある。或は、大なるが蟕蠵、負屭で、小なるが龜鼊だといふ。甚だ判りよい。

〔蟕蠵〕

集解 弘景曰く、蟕蠵は廣州に生ずる。

恭曰く、卽ち秦黿のことだ。

藏器曰く、蟕蠵は海邊に生ずる。甲に文があつて物の飾になるものだ。山黿のことではない。

保昇曰く、蘇恭の說は通論でない。按ずるに、郭璞の爾雅註に『蟕蠵は涪陵郡に出る火黿であつて、その緣甲の文は瑇瑁に似たもので、能く鳴く。甲はやはり卜に用ゐられる。俗に靈黿と呼ぶものだ』とあるがこのものだ。

頌曰く、蟕蠵は別の一種であつて、山黿の大なるものだ。秦黿ではない。嶺表錄

に『(三)潮循間に甚だ多い。人間がその背上に立つとそのまま負ふて行く。その鄕人は殼を生ながら取つた完全なものを貴ぶので、それを取るときには木を用ゐてその肉を換出するのだが、その際、龜が苦痛に堪へずして吼える聲が物凄く、牛のやうな聲で山谷を振はすばかりだ。古人の所謂生龜脫筒とはこれを指したものである。工人はその甲の通明な黄色のものを煮て、瑇瑁を拍陷して器に作る。これを龜筒といふ』とある。藥に入るにもやはり生脫のものを主とする。

日華曰く、蟕蠵、卽ち龜鼊であつて、皮は珍玩物とし、物の裝飾に用ゐる。

時珍曰く、蟕蠵に關する諸說は一定せぬが、按ずるに、山海經には『龜鼊は深澤中に生ず』とあつて、その註に『大龜である。甲には文彩があり、瑇瑁に似て薄い』とある。應劭の漢書の註には『靈龜は大龜であつて、雄を瑇瑁といひ、雌を蟕蠵といふ』とある。いづれも出處が古典であり、衆くの人人の考覈檢討を經たものだ、この二說に據るならば、蟕蠵、卽ち龜鼊の大なるものといふことになる。藏器、日華の說を以て正しきものとなすべきであらう。これは海邊に生じて山に棲息し、水中に入つて食物を攝るところの瑇瑁の屬である。山龜ならば水中には入らないものだ。

(三)潮循、潮州ハ隋ニ置ク、今ノ廣東省潮安縣ソノ舊治ナリ。循州ハ今ノ廣東省歸善縣ソノ舊治ナリ。今ハコノ地方ヲ潮循道トス。

故に功用が專ら解毒にあることも瑇瑁と相同じいのであつて、その點でも了解されるわけである。劉欣期の交州記には『蚼𧌒は瑇瑁に似て大いさ笠ほどあり、四足は(四)縵胡にして指爪がなく、その甲には黑珠の文采がある。その斑は錦文のやうだが、薄くして色淺く、器に作れるほどのものでない。ただ(五)貼飾に使ふ位のものだ。今は一般にこれを鼊皮と呼ぶ』とある。臨海水土記には『その形は龜鼊のやうだ。その甲には黄點があつて光があり、廣さ七八寸、長さ二三尺のものである。彼の地ではこれを瑇瑁の僞物にする。肉は黿のやうな味で食へる。卵は鴨卵ほどの大いさの正圓のものだ、生で食へば鳥卵よりも美味だ』とある。西陽雜俎には『係臂は龜のやうな形狀だ。南海に生ずる。捕取する者は必ず先づ祭つて後に取る』とある。

〔附錄〕(六)𪓟𪓰 音は迷麻(メイマ)である。鼂 音は朝(テウ)である。時珍曰く、按ずるに、臨海水土記に『𪓟𪓰は形狀は𪓟𪓰に似て甲が薄く、その形は龜に似た大きいもので、味は極めて美味だ。一箇に付て三斛の膏がある。又、鼂といふがある。これも𪓟𪓰のやうなもので、腹は羊胃のやうなもので、やはり啖へる。いづれも海邊の沙中に生ずる』とある。

(四)縵胡ハ肉裙ナリト周禮註ニ見ユ。
(五)貼飾トハ象嵌ノ如キカ。
(六)木村(重)曰ク、𪓟𪓰、和名あをうみがめ、學名Chelonia japonica,(Thunb.) うみがめ科 あをうみがめヲ言フカ、熱帶、亞熱帶附近ニモ産ス。後攷ヲ俟ツ。

肉　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【風熱を去り、腸、胃を利す】(時珍)

血　【氣味】【鹹し、平にして微毒あり】【主治】【俚俗の者の毒箭傷を療ず】(弘景)【刀箭に中つて悶絶したるには、刺して血を飲めば平安になる】(日華)　藏器曰く、南方の地で用ゐ、毒箭の樵銅、及び蛇汁毒にもやはり多くこれを養つて用ゐる。

龜筒　【釋名】**鼊皮**【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】【主治】【血疾、及び刀箭の毒に中りたるには、煎汁を飲む】(大明)【藥毒、蠱毒を解す】(時珍)

(一)瑇瑁(宋開寶)

和名　たいまい
學名　Eretmochelys squamosa (Girard.)
科名　うみがめ(蠵龜)科

【釋名】**玳瑁**　代味(タイマイ)と發音し、又、毒冒(トクモク)と發音する。時珍曰く、その功力は毒を解するもので、毒物から(二)媢嫉されるものの意味で名けたものだ。

(一)木村(重)曰ク、鼈甲細工ニ用ウル海産ノ龜、熱帶ニ多ク南日本ニモ産ス。

(二)媢嫉ハネタムナリ。

(三)廣南ハ廣東、廣西以南。

(四)大觀本草ニハ裙邊ノ下ニ有花ノ二字アリ。

【集解】藏器曰く、瑇瑁は嶺南の海岸、山水の間に生ずる。大いさ扇ほどのものだ。龜甲に似て中に文(もん)がある。

士良曰く、その身は龜に似て、首、嘴は鸚鵡(あうむ)のやうなものだ。

頌曰く、現に(三)廣南にはいづれにもある。龜の類だ。大なるものは盤ほどあり、その腹、背の甲には皆紅點斑文がある。藥に入れるには生のものを用うべきものだ。生なれば靈妙(れいめう)なるもので、凡そ有毒の飲食物に遇ふと、必ず自ら動搖するが、死んだものではその靈妙な作用がない。今一般には雜龜筒で作つた器皿を多く用ゐてゐるが、あれは皆殺して取つたものか、又は一旦煮拍したものである。故に生のものはまことに得難い。

〔瑇瑁〕

時珍曰く、按ずるに、范成大の虞衡志に『玳瑁は海洋の深い處に生じ、狀態は龜、黿のやうで殼がやや長く、背に十二片の甲があり、黑、白の斑文が相錯(あひまじは)り、その(四)邊は鋸歯(きよし)のやうに缺けてゐる。足は無くして四鬣(しれふ)があり、前は長く、後が短く、背には甲のやうな斑文の鱗がある。海人は鹽水に入れ小魚を與へて飼養する』とある。

又、顧玠の海槎錄には『大なるものは得難く、小なるものは時時ある。但し老いたものは甲が厚くして色が明かだが、少いものは甲が薄くして色が暗い。世間では鞕たれてその血が斑に成るのだといふが、それは謬だ。これを捕取したときは、必ずその身を倒に懸けて沸き返る醋を潑けるのであるが、それで甲は片片毎に手に隨つて落ちるものだ』とある。南方異物志には『大なるは籧篨ほどあつて、背上に大いさ扇ほどの鱗がある。それを取下すと文が現はれるのだ。煮て柔かにして器に作るのだが、その修治に鮫魚皮を用ゐ、瑩くに枯木葉を用ゐれば光澤が出る』とある。陸佃は『瑇瑁は再交せず、卵を望んで影抱する。これを護卵といふ』といつてある。

附錄　(五)**撒八兒**　時珍曰く、按ずるに、劉郁の西域記に『(六)西海中に出る、玳瑁の遺精であつて、鮫魚がそれを呑んで一旦食つてから吐出し、それが年久しくして結晶するものである。その價格は金と匹敵する。僞物は犀牛の糞で作る』とある。切に謂ふに、この物はかやうに貴重視される以上、必ず何かの功用がなければならぬ筈と思ふが、果して玳瑁の遺精なりや否やも判らず、探究すべき考證の手掛りもない。姑く此に附錄して後の博識に俟つ。

(五) 木村(重)曰ク、撒八兒未詳。
(六) 西海トハ今ノ地中海ヲ指スモノノ如シ。

甲 〔氣味〕 【甘し、寒にして毒なし】 宗奭曰く、藥用には、生のものを用ゐれば性味が完全だ。一旦湯、火を經たものでは用をなさぬ。生、熟の犀の場合と同様だ。

〔主治〕 【嶺南の百藥の毒を解す】(藏器) 【癥結を破り、癰毒を消し、驚癇を止める】(日華) 【心風を療じ、煩熱を解し、氣血を行り、大、小腸を利す。功は肉と同じ】(士良) 【磨汁を服すれば蠱毒を解し、生で佩びれば蠱毒を辟ける】(蘇頌) 【痘毒を解し、心神の急驚、客忤、傷寒の熱結、狂言を鎭める】(時珍)

〔發明〕 時珍曰く、玳瑁の解毒、清熱の功は犀角に同じ。古方には用ゐてなかつたが、宋時代に入つて至寶丹に用ゐたのが始めである。又、鼈甲の條を見よ。

〔附方〕 舊一、新三。【蠱毒を解す】生玳瑁を磨つて濃汁を作り、一盞を水で服すれば消する。(楊氏産乳) 【痘毒の豫防】流行時にこれを服すれば、未發のものは內消し、已に發したものも稀少で免れる。生玳瑁、生犀角を各汁に磨つて一合を和勻し、一日三回、半合づつを溫服するが最も良し。(靈苑方) 【痘瘡の黑陷】乃ち心熱で血が凝るのである。生玳瑁、生犀角を共に汁に磨つて一合に、猪心血少量、紫草湯五匙

を入れて和勻し、溫服する。(開人規痘疹論)【風に當つて目に涙の出るもの】乃ち心、腎の虛熱である。生瑇瑁、羚羊角各一兩、石燕子一雙を末にし、一日一回、一錢づつを薄荷湯で服す。(鴻飛集)

肉 [氣味]【甘し、平にして毒なし】[主治]【諸風毒。邪熱を逐ひ、胸膈の風熱を去り、氣血を行り、心神を鎭め、大、小腸を利し、婦人の經脈を通ずる】(士良)

血 [主治]【諸藥毒を解す。刺してその血を飲む】(開寶)

(一)綠毛龜(蒙筌)

和名　くさがめ
學名　Geoclemys reevesii (Gray.)
科名　いしがめ(石龜)科

[釋名] **綠衣使者**(綱目)

[集解] 時珍曰く、綠毛龜は南海の(二)內鄕、及び(三)唐縣に出るとあるが、今はただ蘄州でこれを方物に充てるだけである。飼養販賣を營業とする者は、溪澗からこれを取つて水缸中に入れ、魚鰕を餌として飼ふのであるが、冬になつてその水を

(一)木村(重)曰ク、背甲稍長圓形ニシテ腹甲ノ接合面ノミ黃色ナリ、吻端稍尖ル。朝鮮、東南支那、日本南部ニ產ス。背甲ニ綠藻類ノ附著セルヲみのがめト稱ス。一般ニルーモークヰ(綠毛龜)ト呼ブ。

(二)內鄕、今ノ河南省汝陽道ニ內鄕縣ア

レドモ、此ニハ南海トアレバソノ地トハ異ルガ如シ。或ハ南海ハ南陽ノ寫誤カ。
(三) 唐縣ハ今ハ河北省保定道ニ屬ス。漢ニ置ク。

除くと久しい間に長さ四五寸の毛が生えてゐて、その毛の中に金線があり、脊骨に三稜があつて、その底中に象牙のやうな色の部分が生ずる。

〔綠毛龜〕

大いさ五銖錢ほどのものが眞物だ、他の龜では、久しく養へばやはり毛は生えるが、ただ大きいことと、金線が生ぜぬことと、底中の色が黄黑であるだけの相異がある。南齊書の記載に『永明年間に、青毛の神龜を獻じたものがあつた』とあるはこの物だ。又、錄異記に『唐の玄宗の時、方士が徑一寸の小龜を獻じた。金色愛すべきもので、椀中に置けば能く蛇虺の毒を避けるさうだ』とある。これもやはり龜類中の特異なものだ。

〔修治〕 時珍曰く、この龜は古方には用ゐてない。近世の滋補の方に往往用ゐてあるが、大體に於て龜甲と同功だ。劉氏の先天丸にこれを用ゐてあるが、その方は、龜九箇を用ゐ、活きた鯉二尾を釜中に入れて水を入れ、米篩で覆ふてその上に龜を載せ、蒸熟して肉を取つて晒乾し、その甲をば酥で黄に炙き、それを藥に入れて用ゐる。又、甲、肉、頭、頸を倶に用ゐることもある。

【氣味】【甘く酸し、平にして毒なし】

【主治】【任脈を通じ、陽道を助け、陰血を補し、精氣を益し、痿弱を治す】（時珍）【額の端に縛り付けて置けば能く邪瘧を禁じ、書笥に收藏して置けば蠹蟲を辟ける】（嘉謨）

（一）瘧龜（拾遺）

和名　缺
學名　Platysternum megacephalum, Gray.
科名　いしがめ（石龜）科

【集解】藏器曰く、高山の石下に生ずる。頭が偏で嘴が太い。

【氣味】【毒なし】

【主治】【老瘧の不定時に發作するものを痎瘧と名ける。俚俗には妖瘧と呼ぶ。この龜を灰に燒いて二錢を頓服する。微し利するものだ。頭を用ゐるが一層佳良だ。或は發作時にそれを煮た湯の中に坐浴する。或は病人の寢臺の附近に懸ける】（藏器）

（一）鶚龜（拾遺）

和名　まるがめ
學名　Cyclemys flavomarginata, Gray.
科名　いしがめ（石龜）科

（一）木村（重）曰ク、體ハ扁平ニ尾長ク、吻ハ可成長ク嘴狀ヲ呈ス。福建省及南方ノ河水ニ產ス。

（一）木村（重）曰ク、背甲稍卵形ナルモ後方ヤヤ廣シ、爪ヨク

發達ス、腹中ハ黒色。支那、臺灣等ニ分布ス。コレニ不詳ノ所多シ、今假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。

(三)本書ニ相ヲ柤(音ハ紕チウ)ニ作ル。相陽之山、怪水、未考。

(一)楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

集解　藏器曰く、南海に生ずる。形狀は龜のやうで長さ二三尺あり、兩眼が側部にあつて鴨のやうなものだ。また水龜とも呼ぶが前に掲げた水龜とは異ふ。

附錄　**旋龜**　時珍曰く、按ずるに、山海經に『(三)相陽の山、怪水焉に出づ、中に旋龜多し。首は鳥、尾は虺、聲は木を破るが如し。これを佩ぶれば聾を已む』とあるが、やはりこの物の類である。

氣味　【毒なし】

主治　【婦人の難產。臨月にこれを佩び、臨產時に、燒いて末にして酒で服す】(藏器)

攝龜(蜀本草)

和名不明
學名不明
科名不明

釋名　**呷蛇龜**(日華)　夾蛇と書いてある。**陵龜**(郭璞)　**鴦龜**(陶弘景)　**蠳龜**(抱朴子)　恭曰く、鴦龜は腹が折けるもので、蛇を見ると呷つて食ふ。故に(一)楚地方では呷蛇龜と呼ぶ。江東で陵龜と呼ぶは丘陵にゐるからだ。時珍曰く、呷蛇なる名

稱が既にあつたところから見ると、攝といふはやはり(三)蛇の音の轉訛したものであらう。蠳もやはり鴦の音の轉訛らしい。

[集解] 弘景曰く、鴦は小龜であつて、處處にゐる。狹小にして尾が長い。吉凶を卜ふに用ゐると、龜とは正反對に表れる。

保昇曰く、攝龜は腹が小さくして中心が横に折け、能く自ら開閉し、好んで蛇を食ふ。

——呷蛇龜〔攝龜〕——

肉 [氣味] 【甘し、寒にして毒あり】 詵曰く、この物は蛇を啗ふものだ。肉は食はれない。殼も用ゐるに堪へぬものだ。

[主治] 【生で研つて撲損の筋脈傷に塗る】(士良) 【生で搗いて蛇傷を罨ふ。蛇を食ふものだからだ】(弘景)

尾 [主治] 【これを佩びれば蛇を辟ける。蛇咬には、刮つて末にして傅ければ愈える】(抱朴子)

甲 [主治] 【人咬瘡の潰爛には、灰に燒いて傅ける】(時珍) 摘玄に記載がある。

(三) 蛇ハ呷ノ誤、一
呷ハ音サウ。

賁龜　音は奔(ホン)である。(綱目)

和名　不明
學名　不明
科名　不明

【釋名】三足龜(爾雅)

【集解】時珍曰く、按ずるに、山海經に『(一)狂水、西に(二)伊水に注ぐ。中に三足龜多し。これを食へば大疾なし。以て腫を已む可し』とあり、唐書に『(三)江州から六眼龜を獻じた』とあり、大明會典に『(四)暹羅國から六足の龜を獻じた』とあり、宋史に『趙霆が兩頭の龜を獻じた』とある。これまた前代には一般に知られなかつたものだ。

肉

【氣味】

【主治】【これを食へば時疾を辟け、腫を消す】(山海經)

(一)鼈　(本經中品)

和名　しなすつぽん
學名　Amyda sinensis, (Wiegmann.)
科名　すつぽん(鼈)科

(一)狂水、中次七經、大苦之山ノ條下ニアリ。伊水ノ支流ニシテ、河南省登封縣南方陽城山脈中ノ大苦山ヨリ出ヅ。狂水今ナホソノ名ヲ呼ブ。
(二)伊水ハ河南省熊耳山ニ源ヲ發シ同省偃師縣ニテ洛水ト合シ黄河ニ入ル。
(三)江州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(四)暹羅國、即チ今ノシヤム國。

(一)木村(重)曰ク、背甲ハ暗彩、頭部ハ淡青色、腹甲ハ乳白色ヲ常トスレドモ體

[釋名]　團魚(俗名)　(二)神守　時珍曰く、鼈は歩行する態が蹩躠たるものだから鼈といつたのだ。淮南子に『鼈は耳無くして神を守る』とある。神守なる名稱はそれから出たものだ。陸佃は『魚が滿三千六百個に達すれば蛟龍がそれを引いて飛ぶのであるが、納鼈が守るのでそれを免れる。故に鼈を神守と名ける』といつた。

河伯從事　(古今注)

[集解]　時珍曰く、鼈は甲蟲であつて、水に居り陸に生じ、脊は穹くして脇に連る。黿と同類だ。四面の縁に肉裙があるところから、黿は甲が肉を裹み、鼈は肉が甲を裹むといふのである。耳が無く、目を以て聽く。雌のみのもので雄がなく、蛇、及び黿と雌雄の配匹をなす。故に萬畢術に『黿脂を燒けば鼈を誘ひ寄せる』といつたのだ。夏期に子を孵化して成育する、抱くこと影を以てするといふ、即ち遠方より保護してゐるもので、埤雅に『卵生し、思抱す』とあるもこれを謂つたのだ。その位置は日影に隨つて轉ずる。水中にこの物がゐると必ずその上に浮沫がある。それを鼈津といふ。一般にその沫を目當に取るもので、現に呼鼈者といふがあつて、一種微妙な聲を作し掌を撫して呼び寄せ、その津を目當にして捕取するが、百十に

一帶ニ灰色ノモノナリ、(黿ノ項參照)南支ニ多キモ廣東省ヨリ北支ニ分布サル、一般ニキヤユー(甲魚)ドゥユー(團魚)ト稱スル。

(二)神守ノ二字、本草彙言、本草洞詮共ニ守神ニ作ル。

一回も失たない。管子に『(三)涸水の精なるを名けて蟡といふ。名を以てこれを呼んで取るべし』とある。魚鼈は正にこの類だ。類従には『鼉一たび鳴けば鼈伏す』とある。その性が相制するのだ。又、蚊を畏れるもので、生きた鼈が蚊に叮されると死ぬ。鼈を料理する場合に蚊を入れて煮れば爛れるものだ。しかし蚊を熏ずるにもまた鼈甲を用ゐる。物の性にかやうな報復の關係あるは不思議なものだ。淮南子に『膏が鼈を殺す』とあるが、これは他の生物に類推は出來ぬことだ。

〔鼈〕
大なるを黿といふ。帯なきを納といふ。三足のものを能といふ。

鼈甲　修治

別錄に曰く、鼈甲は(四)丹陽の池澤に生ずる。採るに一定の時期はない。

〇頌曰く、今は處處にあるが、(五)岳州、(六)沅江に產する甲に九肋のあるものが勝れたものだ。藥に入れるには、醋で黃に炙いて用ゐる。

〇弘景曰く、これを採取したならば、生で甲を取つて肉を剔去したものが好し。凡そ(七)連厴、及び(八)乾巖あるものならば眞物であるが、肋骨の出たものは煮熟したも

(三)白井云ク、涸ハ水名ナリト云フガ何處ナルヤ未詳。

(四)丹陽ハ草部芳草類積雪草ノ註ヲ見ヨ

(五)岳州ハ草部隰草類連翹ノ註ヲ見ヨ。

(六)沅江ハ鱗部蛇類鱗蛇ノ註ヲ見ヨ。

(七)連厴ハ下甲上甲ニ連續スルモノ。

(八)乾巖ハ乾燥セル肉塊ノコトナラン。

のだから用ゐられない。

○斅曰く、凡そこれを使用するには、必ず綠色で九筋の肋があり、裙多く、重量七兩あるものを用ゐるを上とする。瓶の底を六一泥で固め、乾くを待つて甲をその中に置き、物を以てその瓶を搘へ上げ、癥塊を治し心を定むる藥の場合には、その瓶中に頭醋を入れて大火で煎じ、醋三升を煎じ盡したとき、裙、肋骨を去つて炙き乾して藥に入れる。勞を治し熱を去る藥の場合には、醋を用ゐずして童尿を用ゐ、一斗二升を煎じ盡したとき、裙を去り骨を留め、石臼で粉に搗いて雞胜皮で裹み、東流水三升を入れた盆の上に置き、一夜經て取つて用ゐる。かくすれば萬倍の藥力がある。

○時珍曰く、按ずるに、衛生寶鑑には『凡そ鼈甲は、煆竈灰一斗、酒五升に一夜浸し、膠、漆のやうに煮爛して用ゐるが更に佳く。桑柴灰を用ゐるが就中妙だ』とある。

氣味 【鹹し、平にして毒なし】○之才曰く、礬石、理石を惡む。

主治 【心腹癥瘕、堅積寒熱。痞疾、息肉、陰蝕、痔核、惡肉を去る】(本經)

【溫瘧、血瘕の腰痛、小兒の脇下堅を療ず】(別錄)【宿食、癥塊、痃癖、冷瘕、勞瘦。

骨熱、骨節間の勞熱、結實壅塞、下氣、婦人の漏下五色を除き、瘀血を下す】（甄權）
【血氣を去り、癥結、惡血を破り、胎を墮し、瘡腫、腸癰、幷に撲損瘀血を消す】（日華）【陰を補し、氣を補す】（震亨）【老瘧、瘧母、陰毒、腹痛、勞復、食復、斑痘、煩喘、小兒の驚癇、婦人の經脈不通、難產、產後の陰脫、男子の陰瘡、石淋を除き、潰癰を斂める】（時珍）

【發明】宗奭曰く、經の本文中には勞を治することを言つてないが、ただ藥性論に、勞瘦、骨熱を治すと言つてあるところから、虛勞にこれを多く用ゐる。しかしそれには甚だ基準があるのであつて、用劑を過量にしてはならないものだ。
時珍曰く、鼈甲なるものは厥陰、肝の經の血分の藥であつて、肝は血を主るものである。嘗て注意して視るに、龜、鼈の屬はそれぞれ功力に特長を有するのであつて、鼈は色靑くして肝に入る。故にその主たるものは瘧、勞の寒熱、痃瘕、驚癇、經水、癰腫、陰瘡であつて、いづれも厥陰の血分の病である。瑇瑁は色赤くして心に入る。故にその主たるものは心風、驚熱、傷寒、狂亂、痘毒、腫毒であつて、いづれも少陰の血分の病である。秦龜は色黃にして脾に入る。故にその主たるものは

頭風、濕痺、身重、蠱毒であつて、いづれも太陰の血分の病である。水黿は色黑くして腎に入る。故にその主たるものは陰虚、精弱、腰脚の痠痿、陰瘧、洩痢であつて、いづれも少陰の血分の病である。介蟲は陰類だからいづれも陰の經の血分の病を主とするのであつて、その類に從ふのである。

附方　舊十三、新六。【老瘧、勞瘧】鼈甲を醋で炙つて研末し、酒で方寸匕を服す。隔夜に一服し、早朝に一服し、發作時に一服する。斷たざるものなし。雄黃少量を入れるが更に佳し。(肘後)【奔豚氣痛】上に心腹に沖るには、鼈甲を醋で炙つて三兩、京三稜を煨いて二兩を用ゐ、桃仁を皮尖を去つて四兩を湯に浸して汁に研り、三升を二升に煎じて末を入れ、煎じて良久しくして醋一升を投じ、餳のやうに煎じて餅に收め、半匙づつを空心に酒で服す。(聖濟錄)【血瘕癥癖】甄權曰く、鼈甲、琥珀、大黃等分を散にし、二錢を酒で服す。少時して惡血が下る。婦人患者の場合、小腸中の血が下り盡したならば服用を休める。【痃癖癥積】甄權曰く、鼈甲を醋で黃に炙いて研末し、牛乳一合で一匙づつを調へて毎朝服す。【婦人の漏下】甄權曰く、鼈甲を醋で炙つて研末し、一日二回、方寸匕を清酒で服す。○又、乾薑、鼈甲、訶黎

勒皮等分を末にし、糊で丸にし、一日二回、空心に三十丸づつを服す。【婦人難產】鼈甲を燒いて性を存して研末し、酒で方寸匕を服すれば立ろに分娩する。(梅師)【勞復、食復】危篤の大病の回復期に勞を受け、胃を傷め、ために復して死せんとするには、鼈甲を燒いて研り、方寸匕を水で服す。(肘後方)【小兒の癇疾】鼈甲を炙いて研り、一日二回、一錢づつを乳で服す。蜜で丸にして服するもよし。(子母錄)【突然の腰痛】俯仰し得ぬには、鼈甲を炙いて研末し、一日二回、方寸匕を酒で服す。(肘後方)【沙石淋痛】九肋の鼈甲を醋で炙いて研末し、一日三回、方寸匕を酒で服す。石が出て瘥える。(肘後方)【陰虛の夢泄】九肋の鼈甲を燒いて研り、一字づつを、酒半盞、童尿半盞、葱白七寸を共に煎じて葱を去つたもので日晡時に服す。臭汗の出るを度とする。(醫壘元戎)【吐血の止まぬもの】鼈甲、蛤粉各一兩を共に黃色に炒り、熟地黃一兩半を晒乾し、末にして二錢づつを食後に茶で服す。(聖濟錄)【癰疽煩喘】小便の利せぬには、鼈甲二兩、燈心一把、水一升半を六合に煎じ、二回に分服する。凡そ患者の大小便に血あるは中壞である。黑靨となつて膿なきは十人が十人まで死亡する不治のものだ。(龐安時傷寒論)【癰疽の斂らぬもの】發背と一切の瘡とに拘ら

ず、鼈甲を燒いて性を存し、研つて摻る。甚だ妙である。（李樓怪症奇方）【腸癰肉痛】鼈甲を燒いて性を存して研り、一日三回、一錢づつを水で服す。（傳信方）【陰頭に瘡を生じたるもの】治し難いものだ。鼈甲一枚を燒いて研り、雞子白で和して傅ける。（千金翼）【瀋唇緊裂】鼈の甲、及び頭を燒き、研つて傅ける。（類要）【指を人に咬まれて爛れたもの】久しくして脫せんとするには、鼈甲を灰に燒いて傅ける。（葉氏摘玄方）

肉

〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】頌曰く、久しく食すれば、性冷にして人を損する。

藏器曰く、禮記に『鼈を食ふには醜を去る』とあるは、頸下にある龜の形のやうな軟骨をいふのであつて、これを食へば水病を患ふものだ。凡そ鼈は、三足あるもの、赤足のもの、獨目のもの、頭、足の縮まぬもの、その目の四方の陷んだもの、腹下に王の字、卜の字文のあるもの、腹に蛇文のあるもの――これは蛇の變化したものだ――山上にゐるもの――旱鼈と名ける――は、いづれも人を殺す毒がある、食つてはならない。

弘景曰く、雞子。莧菜と食ひ合はせてはならない。昔、ある人が鼈を剉み、赤莧

で包んで濕地に置いたところ、十日ばかり經つとみな生鼈になつてゐたといふ。又、ある人が鼈甲屑を裹んで置いたところ、五日ばかり經つとみな鼈になつてゐたといふ。

思邈曰く、猪、兎、鴨の肉と食合せれば人を損するものだから食つてはならぬ。芥子と食合せれば惡瘡を生ずるものだから食つてはならぬ。妊婦が食へば項の短い子が生れるものだ。

時珍曰く、按ずるに、三元參贊書に『鼈は性冷にして水病を發す。冷勞氣、癥瘕のある者は食ふべきものでない』とあるが、生生編に『鼈は性熱なり』とあり、戴原禮は『鼈の陽は上甲に聚るものだ。久しく食すれば人をして發背を生ぜしめる』といつてあつて、性冷なりといふ說に反對してゐるやうに見えるが、蓋し鼈の性は本來熱なるものではないのであつて、これを食ふ場合に椒や薑などの熱物を甚だ多く和するために、その本來の性を失ふに過ぎない。鼈の性は葱、及び桑灰を畏れるものだ。凡て鼈を食ふには、必ず沙河の小鼈を取るべきもので、頭を斬つて血を去り、桑灰湯で煮熟して骨、甲を去り、水を換へ再び煮て葱、醬を入れ、羹に調理して食

ふが良いのである。その膽の味は辣いものだが、破つて湯中に入れ、椒を代へて用ゐれば腥氣を辟ける。李九華は『鼈肉は涼を主り、鼈甲は散を主る。鼈を食ふには、甲少量を剉み込めばやや平衡を得るものだ』といひ、又『薄荷で鼈を煮れば能く人を害す』といつた。これはみな一般人の氣付かぬことだ。

【主治】【傷中に氣を益し、不足を補す】（別錄）【熱氣、濕痺、腹中の激熱には、五味で煮て食ふ。微泄するものだ】（藏器）【婦人の漏下五色で羸瘦するものは、常にこれを食ふが宜し】（孟詵）【婦人の帶下、血瘕腰痛】（日華）【血熱を去り、虛を補す。久しく食すれば性冷である】（蘇頌）【陰を補す】（震亨）【臛にして食へば、久痢を治し、髭鬚を長くし、丸にして服すれば、虛勞、痃癖、脚氣を治す】（時珍）

【附方】新三。【痃癖氣塊】大鼈一箇を、蠶沙一斗、桑柴灰一斗で五回淋した淋汁と共に泥のやうに煮て骨を去り、再び煮て膏にし、擣いて梧子大の丸にし、一日三回、十丸づつを服す。（聖惠方）【寒濕脚氣】忍び難く疼くには、團魚二箇、水二斗を一斗に煮て魚を去つて汁を取り、蒼耳、蒼朮、尋風藤各半斤を加へ、七升までに煎じて渣を去り、盆に盛つて熏蒸し、溫むを待つて浸し洗ふ。神效がある。（乾坤生意）

（九）除日ハ十二月晦日ノコトカ。

【骨蒸欬嗽】潮熱するには、團魚丸――團魚一箇を柴胡、前胡、貝母、知母、杏仁各五錢と共に煮て、熟するを待つて骨、甲、裙を去り、再び煮て肉を食ひ汁を飲み、右の諸藥を焙じ研つて末にし、骨、甲、裙の煮汁で和して梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを空心に黃芪湯で服し、服し盡したならば蔘、芪の藥で調和する。（奇效方）

脂 主治 【（九）除日に白髮を拔き、この脂を毛孔中に塗れば生えなくなる。再び生えしめんとするときは白犬の乳汁を塗る】（藏器）

頭 陰乾する。主治 【燒灰は小兒の諸疾、婦人產後の陰脫下墜、尸疰、心腹痛を療ず】（恭）【歷年の脫肛で癒えぬものに傅ける】（日華）

附方 舊一、新二。【小兒の尸疰】勞瘦し、或は時に寒熱するには、鼈頭一箇を灰に燒き、一日一回、新汲水で半錢を服す。（聖惠方）【產後の陰脫】千金では、鼈頭五箇を燒いて研り、一日三回、井華水で方寸匕を服す。錄驗では、葛根二兩を加へて酒で服す。【大腸脫肛】久積虛冷には、鼈頭を炙いて研り、一日二回、飮で方寸匕を服す。同時に末を腸の端に塗る。（千金）

頭血　主治　【脫肛に塗る】（甄權の說にある）【風が血脈に中つて口、眼の喎僻するもの、小兒の疳勞潮熱】（時珍）

發明　時珍曰く、按ずるに、千金方に『目瞤し、唇動き、口喎するは、みな風が血脈に入つたものだ。急に小續命湯を服し、外用には鼈血、或は雞冠血で伏龍肝散を調へて塗り、乾けば再び塗る。甚だ妙である』とある。蓋し鼈血の性は急縮して血に走るものだ。故に口喎、脫肛の病を治するのである。

附方　新二。【中風口喎】鼈血で烏頭末を調へて塗り、止んだならば揭げ去る。（肘後方）【小兒の疳勞】潮熱往來し、五心煩燥し、盜汗し、咳嗽するを治するに主たる鼈血丸——黃連、胡黃連を各〻秤つて二兩を、鼈血一盞に吳茱萸一兩と共に一夜浸して炒り乾し、茱萸と鼈血とを去つて研末し、柴胡、川芎、蕪荑各一兩、人參半兩、使君子仁二十個を末にして入れ、粟米粉で煮た糊で和して黍米大ほどの丸にし、一日三回、兒の大小を量つて熟水で服す。（全幼心鑑）

卵　主治　【鹽で貯藏して煨いて食へば小兒の下痢を止める】（時珍）

爪　主治　【五月五日に取つて衣領中に藏せば人をして忘れざらしめる】（肘後）

(一)木村(重)曰ク、しなすつぽんニ似ルモ背甲ノ前方ヤヤ隆起セル瘤節アリ、詳悉ハ不明ナルモ假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ、南方支那ニ産ス。

(一)納鼈（宋圖經）

和名 缺
學名 Trionys steindachneri
科名 すつぽん(鼈)科

【集解】頌曰く、鼈の裙なくして頭、足の縮まぬものを名けて納といふ。また納と書く。

肉【氣味】【毒あり】頌曰く、これを食へば人をして昏塞せしめるが、黄芪、呉藍の煎湯を服すれば立ろに解す。

甲【氣味】【小毒あり】

【主治】【傳尸勞、及び婦人の經閉】(蘇頌)

能鼈 奴來の切(ダイ)（綱目）

和名 不明
學名 不明
科名 不明

【釋名】三足鼈

【集解】時珍曰く、爾雅に『鼈の三足のものを能といふ』とあり、郭璞は『今

は『(一)吳興(二)陽羨縣の君山池中に出る』といつてある。或は『鯀黃熊に化す』といふをこの物だといふが、それは誤だ。

肉　氣味　【大寒にして毒あり】　頌曰く、これを食へば死ぬ。

時珍曰く、按ずるに、姚福の庚巳編に『(三)太倉の民家である時三足鼈を取り、妻に烹らせてそれを食ひ、食ひ畢つて寢室に入つたが、少頃すると形體が溶けて血水となり、殘つたものは、ただ髮だけになつて了つた。ところが隣家の者がそれを疑ひ、妻が殺害したものらしいと官に訟へたので、縣知事黃廷宜が取調べたが、根據不明のために判決の下しやうがない。そこで別に三足鼈を取つてその妻に調理させ、一人の死刑囚にそれを食はせて獄舍に入れて置いて見ると、やはり前の人と同樣に溶けて了つた。それで始めてその疑獄が解決した』とある。竊かに謂ふに、能は有毒にしても此にいふ程であらうとは思はれぬが、けれども理外の事もあるのだから、やはり臆斷は容さない。しかし山海經に『(四)從水、三足鼈多し。これを食へば蠱なし』とあり、近頃またある者が誤つて食つたが無事だつたといふ事實もあるから問題だ。蓋し有毒にして人を害するとはいひ、やはり骨、肉を頓に溶化するほどでは

(一)吳興ハ三國吳ノ郡名、今ノ浙江省吳興縣ニ治ス。

(二)陽羨ハ漢ノ縣名。故城ハ今ノ江蘇省宜興縣ノ南五支里ニ在リ。

(三)太倉ハ明ノ州名、今ノ江蘇省太倉縣ソノ治ナリ。

(四)從水、山海經ニ從山ヨリ出ヅトアレドモ所在未詳。

ないであらう。

主治 【折傷に痛を止め血を化するに、生で擣いて塗る。道家で諸種の厭穢死氣を辟けるに、或はこの像を畫いて止める】（蘇恭）

（一）朱鼈（拾遺）

和名 缺
學名 Amyda sp.
科名 すつぽん（鼈）科

集解 藏器曰く、南海に生ずる。大いさ錢ほどのもので、腹は血のやうに赤い。水中に在つて水馬の脚に著けばみな倒れるといふことだ。時珍曰く、按ずるに、淮南子に「朱鼈波に浮べば必ず大雨あり」とある。

主治 【男子が佩びると刀劍もその人を傷け得ない。婦人が佩びると媚色がある】（藏器）

（二）珠鼈（綱目）

和名 缺
學名 Amyda sp.
科名 すつぽん（鼈）科

（一）木村（重）曰ク、體形しなすつぽんニ同ジ、體色赤褐色ヲ帶ビタリ。浙江省、江蘇省ニ分布サル、食用ニ供セズ、一般ニチユヒ（赤鼈）ト稱ス。

（二）木村（重）曰ク、小型ノしなすつぽん又ハ幼キしなすつぽんヲ呼ブ、支那本土ニ分布ス。チユヒ（珠

【集解】時珍曰く、按ずるに、山海經に『(二)葛山(三)澧水に珠鼈あり。狀肺の如くにして目あり、六足、珠あり』とあり。一統志には『(四)高州の海中に生ずる。狀態は肺のやうだ。四目、六足あつて珠を吐く』とあり。呂氏春秋には『澧水の魚の美なるものを名けて珠鼈といふ。六足にして珠あり』とあり。淮南子には『蛤蟹、珠鼈は月と與に盛衰する』とあり。埤雅には『鼈珠は足にあり、蚌珠は腹に在り』とある。いづれもこの物を指したのだ。

【氣味】【甘く酸し、毒なし】【主治】【これを食へば疫癘を辟ける】（時珍）

(一)黿（拾遺）

和名　鈇
學名　Pelochelys cantorii.
科名　すつぽん(鼈)科

【釋名】時珍曰く、按ずるに、說文には『黿は大鼈なり』とある。甲蟲では黿が最も大なるものだ。故にその文字は元に從ふのであつて、元とは大の意味である。

【集解】頌曰く、黿は南方に生ずる、江湖中に產する大なるものは周圍一二丈ある。南方人はこれを捕つて食ふ。肉には五色あるが、白いものが多い。その卵は

鼈)ト稱ス。
(二)葛山、未詳。
(三)澧水ハ河南省桐柏縣ノ西北胎簪山ノ北麓ニ源ヲ發シ、唐河ニ入ル。
(四)高州ハ唐ニ置ク、今ノ廣東省茂名縣東北四十支里ニ舊治アリ。

(一)木村(重)曰ク、大型ニシテ吻ハ尖ラズ鈍シ、廣東省海南島ニ產ス、しなすつぽんの巨大ナルヲ云フ事アリ、蘇州西園ニ飼ハルルモノハ此例ナリ、ユウ(黿)ト稱ス。

圓くして大いさ雞、鴨の卵ほどあり、一回に一二百箇を産む。人間がやはりそれを掘り取つて鹽淹けにして食ふ。煮てもその白が凝らぬものだ。

藏器曰く、性容易に死なぬものだ。その肉を盡く剔り取つてもなほ物を咬まうとする。烏、鳶を張り得る。——卽ち口を開いて烏鳶を取る勢がある。

弘景曰く、この物の老いたるを能といふ。變じて魅を爲すものだ。急の場合以外には食はぬ。

時珍曰く、黿は鼈のやうで大きく、背に腡䐡があり、青黄色で頭が大きく頸が黄である。腸は首に接屬してゐる。鼈を以て雌となし、卵生し思抱する。故に『黿鳴けば鼈應ず』といひ、淮南子に『黿脂を燒けば以て鼈を致す』といつたのであつて、いづれも氣類の相感である。張鼎は『その脂で鐵を摩すれば明になる』といつた。或は、この物は水に在つて魚を食ふ。人と體を共にし、十二種の動物に肖た肉を具へるもので、裂いて懸けて置くと一夜にして垂長するやうに思はれるものだといふ。

甲

【氣味】【甘し、平にして毒なし】

【主治】「黄に炙いて酒に浸して用ゐれば、瘰癧を治し、蟲を殺し、風を逐ふ

惡瘡、痔瘻、風頑、疥瘙を治する功力は鼈甲と同じ』（藏器）『五臟の邪氣。百蟲の毒、百藥の毒を殺し、筋骨を續ぐ』（日華）『婦人の血熱』（蘇頌）

肉　［氣味］『甘し、平にして微毒あり』

［主治］『濕氣、邪氣、諸蟲』（藏器）『これを食へば補益する』（陶弘景）

脂　［主治］『風、及び惡瘡に摩る』（孟詵）

膽　［氣味］『苦し、寒にして毒あり』　［主治］『喉痺には、生薑、薄荷汁に少量を溶化して服し、吐を取る』（時珍）

（一）蟹（本經中品）

和名　缺
學名　Eriocheir japonica, der Haan.
科名　クラプスス科

［釋名］　螃蟹（蟹譜）　郭索（揚雄方言）　橫行介士（蟹譜）　無腸公子（抱朴子）　雄を蜋螘といひ、雌を博帶といふ。（廣雅）　宗奭曰く、この物の來るは秋初であつて、蟬のやうに殼を蛻する。蟹なる名稱は必ずその意味を取つたものだらう。

時珍曰く、按ずるに、傅肱の蟹譜に『蟹は水蟲である。故にその文字は蟲に從ふ

（一）木村（重）曰ク、鉗脚大ニシテ絨總トシタル長毛ナ特徴トス。中秋ノ候特ニ珍味トセラレ高價トナル、淡水產。デインハイ（田蟹）モウハイ（毛蟹）ノ名ニテ知ラル。

(三)伊洛ハ草部隰草類木賊附錄問荊ノ註ヲ見ヨ。

のだ。また魚の屬でもある。故に古文は魚に從つた。その横行するものなるところから螃蟹といひ、その行く時の聲から郭索といひ、外部が骨なるところから介士といひ、內部が空なるところから無腸といふ」とある。

集解 別錄に曰く、蟹は(三)伊洛の池澤、諸水中に生ずる。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、蟹は種類が甚だ多いが、蝤蛑、擁劍、蟛螖はいづれも皆藥に入れない。海邊にはまた蟛蜞といふがある。蟛螖に似て大きく、蟹に似て小さく、食つてはならぬものだ。蔡謨が初めて江南へ來たとき、蟛蜞を識らずして喫つたために、危ふく死なんとしたことがある。

〔蟹〕

その時、謨は『爾雅を十分に讀んで置かなかつたために、學者の意見に誤られた』と嘆じたといふ。

○頌曰く、今は淮海、汴京、河北の陂澤中に多くゐるが、伊洛では反つて得難い。現に一般に食品としての佳味とされてゐる。俗間の傳說に、蟹は八月一日に長さ一

二寸ばかりの稻の芒（穗）を二本取つて東に向つて進み、その首長に年貢として輸送するものだといふ。現に南方で蟹を捕るに、やや早期なれば芒を銜むものがある。降霜後に人が芒を輸送する時分に始めて食へるものだ。然らざれば尤も猛烈な毒がある。その種類は甚だ多く、六足のものをば蛫――音は跪（キ）――と名け、四足のものをば比と名ける。いづれも大毒があるから食つてはならぬ。その殼が闊くして黃色の味噌といふものの多いものをば蠘と名け、南海中に生ずる。その螯は最も鋭くして刈り切るやうに物を斷るものだ。これを食へば風氣を行る。扁にして最も大きく、後足の闊いものをば蝤蛑と名け、南方の地では撥棹子と呼ぶ。その後脚が棹のやうだからであつて、一名蟳といふ。潮に隨つて殼が退け、一回退けるごとに一回長大になる。その大なるものは升ほどあり、小なるものは盞楪ほどだ。兩螯が手のやうになつてゐるところが他の多くの蟹と異る點である。力の至つて强いもので、八月頃よく虎と鬪ひ、虎がその爲めに負かされる。一方の螯が大きく、一方の螯が小さいものをば擁劒、一名桀步と名け、常に大螯を鬪爭に用ゐ、小螯を物を食ふに用ゐる。また執火と名けるは、その螯の色が赤いからである。その最も小さく

して毛なきものをば蟛蜎と名ける。蜎の音は越(エツ)であつて、呉地方では彭越と訛つて呼ぶ。爾雅には『蜎は蠌なり、小なるものは蟧なり』とあり、郭璞の註に『即ち蟛蜎なり』とある。

○時珍曰く、蟹は横行する甲蟲である。外剛に、内柔であつて、卦に於ては離に象り、眼が骨で成り、腹は蜩の如く、腦は蜣の如く、足は鱟の如く、二本の螯があり、八本の跪があり、鉗利く、爪尖り、殼は脆くして堅く、十二の星點があり、雄は臍長く、雌は臍團く、腹中の黄は月の盈虚に應ずる。その性甚だ躁しいもので、聲を引き沫を噴いて死に至つて已む。流水に生ずるものは色黄にして腥く、止水に生ずるものは色紺にして馨しい。佛書に、その子を散じて後には直ちに自ら枯死するとある。降霜前には物を食ふので有毒だが、降霜後には將に蟄せんとするときだから美味である。海に入つて芒を輸るなどいふことはやはり謬談だ。蟛蜞といふは蟛蜎より大きいもので、陂池や田港中に生ずるものだから有毒で、人を吐下せしめる。蟛蜞に似て沙穴中に生じ、人を見ると走るものは沙狗といふもので、食はれない。蟛蜞に似て海中に生じ、潮が來ると穴から出てそれを眺めてゐるものは望潮といふも

ので、食へる。兩螯(りやうがう)が極めて小さくして石のやうなものは蚌江(はうかう)といふもので、食はれない。溪澗の石穴中に生じ、小さくして殼が堅く赤いものは石蟹といふもので、野人はこれを食ふ。又、海中には、紅蟹といふ大きくして紅色なるもの、飛蟹といふ能く飛ぶものがある。(三)善化國にある百足の蟹といふは海中の蟹であつて、大いさ錢ほどのものだ。腹下にまた楡莢(ゆけふ)のやうな小蟹がゐる。それは蟹奴といふものだ。蚌の腹にゐるものは蠣奴(れいど)といふもので、また寄居蟹と呼ぶ。いづれも食はれない。蟹の腹中に小木鼈子のやうで白い蟲のゐるものは食はれない。甚しく風を發するものだ。

宗奭曰く、蟹を採取する時期は八九月で、蟹浪の頃にその水を出るところを伺つて拾ふのである。夜になつて火光で照して捕ると、時に黄と白とが殼中に滿ちてゐるものがある。

【修治】時珍曰く、凡そ蟹は、生で烹ても、鹽で貯藏し、糟で貯藏し、酒で浸し、醬汁で浸してもみな佳味な食品となる。ただ久しく置いたものは沙し易く、燈火に當てても沙し、椒を加へると膩(しよく)し易いものだが、皂莢、或は蒜、及び韶粉(せうふん)を用

(三) 善化國、未詳。

ゐれば沙し臓することを免れる。白芷を用ゐれば黄が散ぜぬ。葱、及び五味子と共に煮れば變色しない。貯藏した蟹をば蝑蟹といふ。蝑の音は潟(セキ)である。

蟹　【氣味】【鹹し、寒にして小毒あり】弘景曰く、まだ霜に遭はぬうちは甚だ有毒だ。水莨を食ふからかやうに有毒となるのであつて、人がそれに中毒した場合に、治療を加へねば多くは死亡するといふことだ。獨螯のもの、獨目のもの、兩目の向ひ合ふもの、六足、四足のもの、腹に毛のあるもの、腹中に骨のあるもの、頭背に星點のあるもの、足が斑で目の赤いもの、いづれも食つてはならぬ。有毒で人を害するものだ。冬瓜汁、紫蘇汁、蒜汁、豉汁、蘆根汁はいづれもその毒を解す。

鼎曰く、娠婦がこれを食へば横に歩む子が生れる。

宗奭曰く、この物は極めて風を動ずるものだ。風疾の人は食つてはならぬ。屢々その事實に遭遇して居る。

時珍曰く、柿、及び荊芥と食合せてはならぬ。霍亂を發し、風を動ずるものだ。木香汁で解し得る。詳細は柿の條を見よ。

【主治】【胸中の邪氣、熱結痛、喎僻、面腫。能く漆を敗る。これを燒けば鼠を

招く】(本經)　弘景曰く、仙方では、これを用ゐて漆を化して水にし、長生の術としてこれを服する。黒犬血を三日間灌いでこれを燒けば諸鼠が畢く集つて來る。頌曰く、その黄は能く漆を化して水にする。故に漆瘡にこれを塗る。その螯を畑に燒けば鼠が庭に集つて來る。【結を解し、血を散じ、漆瘡を癒し、筋を養ひ、氣を益す】(別錄)【諸熱を散じ、胃氣を治し、經脈を理し、食物を消化する。醋で食へば肢節を利し、五臟中の煩悶の氣を去り、人に益あり】(孟詵)【産後に肚痛して血の下らぬには、酒でこれを食ふ。筋骨折傷には、生で搗いて炒つて罯ふ】(日華)【能く斷絶した筋骨を續ぐ。殼を去つて黄と共に搗き爛し、微し炒つて瘡中に納入すれば筋が連る】(藏器)【小兒の解顱の合はぬには、螯と白及末とを搗いて塗る。合するを度とする】(宗奭)【莨菪の毒を殺し、鱓魚の毒、漆の毒を解し、瘧、及び黄疸を治す。搗いて膏にして疥瘡、癬瘡に塗る。搗いて汁を耳聾に滴す】(時珍)

(四)**蝤蛑**

氣味　【鹹し、寒にして毒なし】

主治　【熱氣を解し、小兒の痞氣を治す。煮て食ふ】(日華)

(五)**蟛蜞**

氣味　【鹹し、冷にして毒あり】

(四)木村(重)曰ク、蝤蛑ハ學名 Eriocheir sp. 科名グラプスス科。蟛蜞ト同種ナ云フコトアリ、詳悉

【主治】【膏を取つて濕癬・疽瘡に塗る】（藏器）

(六)**石蟹**【主治】【搗いて久しき疽瘡に傅ければ瘥えぬものなし】（藏器）

【發明】愼微曰く、蟹は蛇、鱓の穴以外には寄らないものだ。故に鱓を食つて中毒した場合には蟹を食へば直ちに解す。性の相畏の關係だ。沈括の筆談に『關中には蟹がゐない。土地のものがその形狀を怪んで、乾いたものを取つて門の上に懸けて置いたところ、それで瘧を辟けたといふ。識らないのは人間ばかりでなく、鬼まで識らなかつたものと見える』とある。

〔蝤蛑〕

時珍曰く、諸種の蟹は性みな冷であつて、やはり甚しい毒はなく、蝑にしたものが最も良い。新鮮な蟹を薑醋で和して、醇酒を酌み交す時の肴にし、黃を咀み螯を持つて食ふは風味なかなか面白いものだ。何處に毒があらう。無暗に貪り嗜む者は、一時に十幾箇も食ひ、その上に葷羶の物を雜食し、知らず識らず平常に倍加する飲食物を攝るといふことを敢てする。それでは

ハ後攷ヲ俟ツ。
(五)木村(重)曰ク、蟛蜞ハ學名 Eriocheir sinensis, Gray. グラプスス科。田蟹ト頗似ナルモヤヤ體高ク、南支ノ湖、沼ニ多シ、一般ニパンキー(蟛蜞)ト稱サル。
(六)木村(重)曰ク、石蟹ハ學名 Potamon lunsi, Doflein. グラプスス科。支那本土ニ分布サルル陸蟹ナリ、一般ニチイハイ(石蟹)ト稱サル。前ノ俗名ハ揚子江邊ノモノナレドモ、廣東省ニハ別ニ一屬アリ。

腸、胃が傷み、腹痛し、吐利することも當然といはねばならぬ。それを蟹が惡かつたといふのであるが、蟹に何の咎があらうか。洪邁の夷堅志に『襄陽で、ある盜賊が生漆を被り、兩の眼に塗したために漆瘡が蔓延し、全然物を見ることが出來なくなつた。ところがその村のある老人が石蟹を捜し採らせ、それを搗き碎いて濾した汁を點けさすと、その汁に隨つて漆が外へ流れ出し、瘡は癒え、それを用ゐただけで果して舊の通りに明になつた。漆が蟹を畏れるは何の關係に因るものか判らない』とある。

附方　新三。【濕熱黃疸】蟹を燒いて性を存して研末し、酒糊で梧桐子大ほどの丸にし、一日二回、五十丸づつを白湯で服す。（集簡方）【骨節離脫】生蟹を搗き爛らし、熱酒を傾け入れて數椀を連飮し、その渣を塗る。半日以内に骨の內部に谷谷と聲があつて好結果を得る。乾蟹の燒灰を酒で服するも好し。（唐瑤經驗方）【鱓魚の中毒】蟹を食へば解す。（董炳驗方）

蟹爪　主治　【胞を破り、胎を墮す】（別錄）【宿血を破り、產後の血閉を止める。酒、及び醋湯で煎じて服するが良し】（日華）【能く胎を安んず】（鼎）頌曰く、胡

治の方に、孕婦が僵仆れたために胎が上に心を搶くを治するに蟹爪湯といふがある。

【生胎を墮し、死胎を下し、邪魅を辟ける】(時珍)

附方　新二、【千金神造湯】胎兒の死亡したもの、幷に雙胎の一兒が死し一兒の生けるを治す。これを服すれば死せるものを出し、生けるものを安全にする神驗の方である。蟹爪一升、甘草二尺、東流水一斗を葦薪で二升までに煮て滓を濾し去り、眞阿膠三兩を入れ、烊かして頓服する。或は二回に分服する。もし衰弱甚しくして服し得ぬ場合には、灌ぎ込めば活きる。【下胎蟹爪散】妊婦にある病を治せんがために胎を去らんとするに用ゐる。蟹爪二合、桂心、瞿麥各一兩、牛膝二兩を末にし、空心に一錢を溫酒で服す。(千金)

殼　主治　【燒いて性を存して蜜で調へ、凍瘡、及び蜂蠆傷に塗る。酒で服すれば、婦人の兒枕痛、及び血崩腹痛を治し、積を消す】(時珍)

附方　新三、【崩中腹痛】毛蟹殼を燒いて性を存し、一錢を米飲で服す。(證治要訣)【蜂蠆の螫傷】蟹殼を燒いて性を存して研末し、蜜で調へて塗る。(同上)【熏じて壁虱を辟ける】蟹殼を烟に燒いて熏ずる。(摘玄)

鹽鱟汁　【主治】【喉風腫痛には、口一パイに含んで少しづつ嚥めば消く。】（時珍）

鱟魚(一)

音は后（コウ）である。（宋嘉祐）

和名　しなかぶとがに
學名　Limulus longispina, v. d. Hoeven.
科名　劍尾類

【釋名】時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『鱟は候である。鱟は善く風を候ふものだから鱟といつたのだ』とある。

【集解】藏器曰く、鱟は南海に生ずる。大なるものも小なるものも皆牝牡相隨つてゐるもので、牝には目が無いので牡に隨つてゐて始めて行動するものだ。牡がゐなくなれば牝が死ぬ。

時珍曰く、鱟の形狀は(二)惠文冠のやうでもあり、また熨斗の形のやうでもあり、廣さ一尺餘、その甲は瑩かに滑かで青黑色だ。背は(三)鏊のやう、眼は骨で、眼は背上に在り、口は腹下に在り、頭は蜣螂の如く、十二本の足が蟹のやうに腹の兩旁に在り、長さは五六(四)尺、尾の長さ一二尺で、三稜があつて棕莖のやうだ。背上に角のやうな高さ七八寸の骨があつて、石珊瑚の狀態のやうだ。海を渡る場合にはいつも

(一)木村(重)曰ク、胸甲ハ半圓形ニシテ脚ハ甲ノ下面ニアリ、棘尾長ク、コレニ小針アリ、大ナルモノハ甲徑一尺ニ達ス。湖南省方面ノ淵ニ多シ、日本ニハコレニ類スルモノ一種アリ、小兒ノ玩弄物ニ過ギズ。ゴーユー(鱟魚)ト稱ス。

(二)惠文冠トハ戰國趙ノ惠文王所制ノ武冠ヲイフ。黄金璫ヲ加ヘ、蟬ヲ附シテ飾トナシ、挿ムニ貂尾ヲ以テストイフ。故ニ貂璫、貂蟬トモ稱ス。

(三)鏊ハ燒盤、今ノ餠ヲ烙ク者ノ如キモノ、俗名フライパン。

(四)尺ハ寸ノ誤。

(五)醯醬ハ酢ヅケ。

相手を負ひ、背を現はし、風に乗じて游いでゐる。それを俗に鱟帆と呼び、また鱟障ともいふ。その血は碧色で、腹に黍粟米のやうな子がある。その子は(五)醯醬になるものだ。尾に栗ほどの珠がある。

〔鱟〕
十二足にして雌が雄を負ふて行く

その行動には雌が常に雄を負ふてゐるもので、その雌を失ふと雄が行動し得なくなる。漁夫は必ずその雙對になつたものを捕るもので、雄は小さく雌は大きい。これを水中に置くと雄は浮び雌は沈む。故に閩地方では婚禮に用ゐる。この物は沙上に藏れ伏すものだが、やはり自ら飛躍する。皮殼は甚だ堅く、冠にもなり、また屈すれば杓にもなる。香中に入れると能く香氣を發する 尾は小さい如意にもなる。脂を焼けば鼠が集つて來る。その性蚊を畏れるもので、螫されると卽死する。また隙漏る光を畏れ、漏る光で射られるとやはり死ぬものだが、しかし日中に暴らされたのでは往往にして無事でゐる。南方人はその肉で鮓醬を作る。小なるをば鬼鱟と名ける。食へば人體に害あるものだ。

肉【氣味】【辛く鹹し、平にして微毒あり】藏器曰く、毒なし。詵曰く、多食すれば、嗽、及び瘡癬を發する。

【主治】【痔を治し、蟲を殺す】(孟詵)

尾【主治】【燒き焦して用ゐれば、腸風瀉血、崩中帶下、及び産後の痢を治す】(日華)

【發明】藏器曰く、骨、及び尾を灰に燒いて米飲で服すれば、大いに産後の痢に主效がある。但し必ず先づ生地黄の蜜煎等を服し訖つて然る後にこれを服するのである。これで斷たぬものはない。

膽【主治】【大風癩疾に蟲を殺す】(時珍)

【附方】新一。【鼉膽散】大風癩疾を治す。鼉魚膽、生白礬、生綠礬、膩粉、水銀、麝香各半兩を星の見えぬまで研り、一錢づつを井華水で服す。五色の涎を取下して妙である。(聖濟總錄)

殼【主治】【積年の呷嗽】(時珍)

【附方】新一。【積年の咳嗽】呀呷して聲を作すには、鼉魚殼半兩、貝母を煨い

て一兩、桔梗一分、牙皂一分を皮を去つて酥で炙き、末にして煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを含んで汁を嚥む。三丸まで服すれば惡涎を吐出して瘥える。(聖惠)

本草綱目介部第四十五卷 終

本草綱目介部

第四十六卷

本草綱目介部目錄第四十六卷

介の二　蚌蛤類二十九種

牡蠣 本經　蚌 嘉祐　馬刀 本經　蝛蜼 嘉祐
蜆 嘉祐　眞珠 開寶　石決明 別錄　海蛤 本經
文蛤 本經　蛤蜊 嘉祐 即ち蛤粉。　蟶 嘉祐
擔羅 拾遺　車螯 嘉祐　魁蛤 別錄 即ち瓦壟子。
車渠 海藥　貝子 本經　紫貝 唐本　珂 唐本
石蜐 綱目 即ち龜脚。　淡菜 嘉祐　海蠃 拾遺 即ち甲香。
甲煎 拾遺　田蠃 別錄　蝸蠃 別錄　蓼蠃 拾遺
寄居蟲 拾遺　海月 拾遺 海鏡を附す。　海燕 綱目
郎君子 海藥

右附方　舊二十二　新九十六

介の二　蛤蚌類二十九種

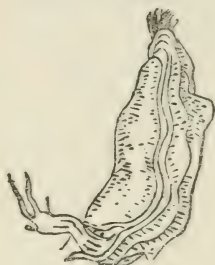
牡蠣(一)（本經上品）

和名　かき
學名　Ostrea gigas, Thunb.
科名　かき(牡蠣)科

〔釋名〕　**牡蛤**（別錄）　**蠣蛤**（本經）　**古賁**（異物志）　**蠔**　弘景曰く、道家の方では、左顧のものを雄とするので、牡蠣と名け、右顧のものをば牝蠣とする。或は、尖頭のものが左顧だともいふが、孰れが是なりや詳でない。

藏器曰く、天の生ずる萬物にはみな牝、牡がある。ただ蠣は鹹水が結成したもので、塊然として動かないものだ。陰陽の性を如何なる方法に依つて現してゐるか疑問だが、經に牡といつたのは雄を意味したものだと思ふ。

〔牡　蠣〕

(一)木村(重)曰ク、南滿洲及北支那ニ産シ可成大トナル、日本ト同種ノモノ及ビけがきモアリ。一般ニトウリー(針蠣)ト稱ス。

宗奭曰く、本經には左顧とは言つてない。ただ陶氏の說から出たのである。しかし段成式はまた『牡蠣の牡は雄の意味ではない。牡丹はあるが牝丹はないではないか、それと同樣だ。この物は目のないものだ。また顧盼するわけもあるまい』といつてある。

時珍曰く、蛤蚌の屬はいづれも胎生、卵生であるが、獨りこの物だけが化生であつて、純ら雄のみで雌がない。故に牡なる名稱が生じたのだ。蠣といひ、蠔といふは、その物の粗大なることを言ひ表したものである。

集解　別錄に曰く、牡蠣は東海の池澤に生ずる。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、今は(二)東海、永嘉、晉安に產する。これは百歲の鵰が變化したものだといふことだ。十一月に採取し、大なるものを好しとする。その生じてゐる狀態は、石に附著していづれも口を上方に擧げ、腹を南に向けてゐるものだ。それを注意して見ると口が斜に東に向つてゐるものを左顧といふのである。廣州、南海に產するものも同じだが、ただ多くは右顧だから用ゐるに堪へない。丹方、及び鹽を煮るにはいづれもこれで釜を泥る。水火に耐へて破れ漏らぬものだといふ。いづれもその

(二)東海トハ山東江蘇附近ノ沿海ヲイフ。永嘉ハ草部芳草類馬蘭ノ註、晉安ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

（三）通州、泰州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。南海ハ福建、廣東ノ南ノ海洋ヲイフ。閩中ハ金部鐵ノ註參照。

甲口を除き、ただ朏朏として粉のやうなもののみを取つて用ゐる。

○頌曰く、現に海岸にはいづれにもゐるが、（三）通州、泰州、及び南海、閩中に就中多い。いづれも石に附著して生じ、磈礧として相連る。その房のやうになつてゐるものを蠣房と呼び、晉安地方では蠔莆と呼ぶ。初生にはただ拳石ほどのものだが、漸次に四面に擴大して一二丈にも達し、嶄巖として山のやうに見える。俗にそれを蠔山と呼ぶ。一房毎に內部に一塊の肉があり、大房は馬蹄ほど、小房は人の指の腹ほどのもので、潮の來る毎に諸房がみな開き、小蟲がその中に入ると合せ取つて腹に充てる。海人がこれを取るには、いづれもその房を鑿り取り、烈火で逼つてその肉を挑げ取り、それを食品に當てるのだが、味は好美であつて更に益するところがある。海に產する諸族中での最も貴重なものだ。

○時珍曰く、南海地方では、その蠣房を土塀に塗り込み、又、殼を灰に燒いて壁に粉り、その肉を蠣黃と呼んで食ふ。

○保昇曰く、又、蝹蠣といふ形の短いものもあるが、藥用には入れない。

○斅曰く、石牡蠣といふ頭邊にみな大小ともに沙石を夾むものがあつて、眞に牡蠣

に似たものだが、ただそれは龜殼のやうに圓いものだ。海牡蠣といふは用ゐ得るものだが、ただ男子がこれを服すると髭がなくなる。眞の牡蠣は火で煆いて用ゐる。それを試驗するに、瑿を用ゐてかざして見ると、手に隨つて走起するものが眞物だ。瑿とは千年の琥珀をいふ。

修治　宗奭曰く、凡そこれを用ゐるには、泥で固濟して燒き、粉にして用ゐることになつてゐるが、また生で用ゐることもある。

斅曰く、凡て眞の牡蠣を用ゐる。先づ二十箇を用ゐ、東流水に鹽一兩を入れたもので一伏時煮て、再び火中に入れて赤く煆き、粉に研つて用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、陶隱居は『牡蠣は、童尿を五日に一回づつ換へて四十九日間浸して取出し、硫黃末を米醋で和したもので上を塗り、黃泥で固濟して煆いてから用ゐる』といつてある。

氣味　【鹹し、平なり、微寒にして毒なし】　之才曰く、貝母が使となる。甘草、牛膝、遠志、蛇牀子と配合するが良し。麻黃、辛夷、吳茱萸を惡む。硇砂を伏す。

主治 【傷寒寒熱、温瘧で洒洒たるもの、驚恚怒氣。拘緩、鼠瘻、婦人の帶下赤白を除く。久しく服すれば、骨節を強くし、邪鬼を殺し、天年を延べる】(本經)【留熱の關節、營衞に在るもの、虚熱の去來不定なるもの、煩滿、心痛、氣結を除き、汗を止め、渇を止め、老血を除き、洩精を澁じ、大、小腸を澀し、大、小便を止め、喉痺、欬嗽、心、脇下の痞熱を治す】(別錄)【身に粉れば大人、小兒の盜汗を止める。麻黄根、蛇牀子、乾薑と共に粉にして用ゐれば陰汗を去る】(藏器)【婦人の崩中を治し、痛を止め、風熱、風瘧、鬼交精出を除く】(孟詵)【男子の虚勞に腎を補し、神を安じ、煩熱、小兒の驚癇を去る】(李珣)【脇下の堅滿、瘰癧、一切の瘡を去る】(好古)【痰を化し、堅を耎にし、熱を淸し、濕を除き、心、脾の氣痛、痢下、赤白濁を止め、疝瘕積塊、癭疾結核を消す】(時珍)

發明 權曰く、病の虚して熱多きには、地黄、小草と共にこれを用ゐるがよし。

好古曰く、牡蠣は足の少陰に入り、堅を耎にするの劑である。柴胡を以て引けば能く脇下の硬を去り、茶を以て引けば能く項上の結核を消し、大黄を以て引けば能

く股間の腫を消し、地黃を以て使とすれば能く精を益して收濇し、小便を止める。腎の經の血分の藥である。

成無己曰く、牡蠣の鹹は以て胸脇の滿を消し、以て水氣を泄し、痞するをば消し、硬きをば耎かならしめる。

元素曰く、水を壯にするの主藥であつて、(四)陽光を制するから渴して水を飮まんとする慾求を起さなくなる。故に蛤蠣の類は能く渴を止めるのだ。

附方　舊七、新十四。【心、脾の氣痛】氣が實して痰あるには、牡蠣を煅いて粉にし、二錢を酒で服す。(丹溪心法)【瘧疾寒熱】牡蠣粉、杜仲等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを溫水で服す。(普濟方)【氣虛の盜汗】上記の方を末にし、方寸匕づつを酒で服す。(千金方)【虛勞の盜汗】牡蠣粉、麻黃根、黃芪等分を末にし、一日一回、二錢づつを水二盞で七分に煎じて溫服する。(本事方)【產後の盜汗】牡蠣粉、麥麩を黃に炒つて等分を、一錢づつ猪肉汁で調へて服す。(經驗)【消渴飮水】臘日、或は端午の日に、牡蠣を黃泥で固濟して赤く煅き、研末して一錢づつを、活きた鯽魚の煎湯で調へて服す。ただ二三服で癒える。(經驗方)【百合病が渴に變じたも

(四)陽光ハ陽氣ヲ云フ。

の】傷寒から傳變して百合病となり、寒のやうで寒でもなく、熱のやうで熱でもなく、臥したいやうで臥すでもなく、歩行したいやうで歩行する心もなく、食慾があるやうであるでもなく、口が苦く、小便が赤色となり、藥を服めば吐き下し、かくて渇疾に變化して久しく瘥えぬには、牡蠣を熬つて二兩、栝樓根二兩を細末にし、一日三回、方寸匕づつを米飮で調へて服して效を取る。(張仲景金匱玉函方)【病後常に鼻衄を出すもの】少しく勞すれば作るものである。牡蠣十分、石膏五分を末にし、方寸匕を酒で服す。また蜜で丸にして一日三回服するもよし。(肘後方)【小便淋悶】血藥を服しても奏效せぬには、牡蠣粉、黃蘗を炒つて等分を末にし、一錢づつを小茴香湯で服して效を取る。(醫學集成)【小便の數多きもの】牡蠣五兩を灰に燒き、小便三升を二升に煎じたもので三回に分服する。神效がある。(乾坤生意)【夢遺、便溏】牡蠣粉を醋糊で梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを米飮で服す。(丹溪方)【水病囊腫】牡蠣を煆いて粉にして二兩、乾薑を炮いて一兩を研末して冷水で調へ、糊にして上に掃き、須臾にして囊が火の如くに熱するとき再び掃く。小便が利して癒える。一方では、葱汁、白麪を用ゐて共に調へる。小兒には乾薑を用ゐない。(初虞世

（五）古賁ハ牡蠣ノ一名。

古今錄驗方）【月水不止】牡蠣を煆いて研り、米醋で搜して團にし、再び煆いて研末し、米醋で艾葉末を調へて熬つて膏の如くしたもので梧子大の丸にし、四五十丸づつを醋湯で服す。（普濟方）【金瘡出血】牡蠣粉を傅ける。（肘後）【破傷濕氣】口禁し、强直するには、牡蠣粉二錢を酒で服し、同時に外部に傅けて效を取る。（三因方）【發背の初期】（五）古賁粉灰を雞子白で和して四圍に塗る。頻りに試みて效を取る。（千金方）【癰腫の未だ成らぬもの】これを用ゐて毒を拔く。水で牡蠣粉末を調へて塗り、乾けば更に塗る。（姚僧坦集驗方論）【男女の瘰癧】經驗では、牡蠣を煆いて研末して四兩、玄參末三兩を麪糊で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを酒で服す。服し盡せば根を除く。○初虞世は『瘰癧は、已に破れたると、まだ破れぬとに拘らず、牡蠣四兩、甘草一兩を末にし、每食後に臘茶湯で一錢を調へて服す。その效神の如し』といつてある。【甲疽潰痛】胬肉が趾甲を裹んで膿血が出て痊えぬには、牡蠣頭の厚い部分を生で研つて末にし、一日三回、二錢づつを紅花煎酒で調へて服し、同時にそれを敷いて效を取る。（勝金方）【顏色の黧黑なるもの】牡蠣粉を研末して蜜で梧子大の丸にし、一日一回、三十丸づつを白湯で服し、幷にその肉を炙いて食ふ。（普濟方）

（一）木村(重)曰ク、蚌ハ支那ノ河、江、湖ニ多キ淡水産ノ二枚貝ナリ。種類多ク復變種モ多シ。殆ンド皿狀ノモノ又ハ小刀狀ニナレルモノモアリ。パン(蚌)ト呼ブ。又或地方ニテハ海濱産ノ一種ヲ呼ブコトアリ。

肉

氣味 【甘し、溫にして毒なし】

主治 【煮て食へば、虛損を治し、中を調へ、丹毒、婦人の血氣を解す。薑、醋で生で食へば、丹毒、酒後の煩熱を治し、渴を止める】（藏器）【炙いて食へば甚だ美味で、肌膚を細にし、顏色を美くする】（蘇頌）

蚌（一）（宋嘉祐）

和名 どぶかひ
學名 Anodonta woodiana, (Lench)
科名 からすかひ(烏貝)科

〔蚌〕

釋名 時珍曰く、蚌と蛤とは同類だが形を異にするもので、長きをば通じて蚌といひ、圓きをば通じて蛤といふ。故に蚌の文字は丰に從ひ、蛤の文字は合に從ふのであつて、いづれも形容である。後世それを混じて蛤蚌と稱するは正しくない。

集解 弘景曰く、雀が大水に入つて蜃となるといふ、蜃とは蚌のことだ。

(二)江ハ長江、漢ハ漢水ヲイフ。

(三)洞庭ハ今ノ湖南省ノ洞庭湖、漢沔ハ湖北省ノ南部、揚子江、漢水ノ合流點附近一帶ヲイフ。

藏器曰く、(二)江、漢沿流の大小の河水、池沼中に生ずる。老蚌は珠を含む。殼は粉にする材料にはならぬものだ。大蛤のことではない。

時珍曰く、蚌は種類が甚だ繁多なものだ。現に處處の江、湖中にゐるが、(三)洞庭、漢沔に特に多い。大なるは長さ七寸あまりあつて牡蠣などのやうな狀態だ。小なるは長さ三四寸で石決明などのやうな狀態だ。その肉は食物になり、その殼は粉になる。湖沔地方ではいづれも型に入れて錠にしたものを蚌粉と稱し、また蛤粉といつて賣つてゐる。古代にはこれを蜃灰といひ、墻壁の塗飾や墓壙を闔ぐに用ゐたものだ。當今石灰を用ゐるやうなものである。

肉　氣味　【甘く鹹し、冷にして毒なし】宗奭曰く、性微冷なり、多食すれば風を發し、冷氣を動ずる。震亨曰く、馬刀、蚌、蛤、螄、蜆は大同小異なものだ。寇氏はただ冷といふに止まつて濕をいつてないが、濕は熱を生じ、熱久しければ氣が上升して痰を生じ、風を生ずる。何處が冷であらうぞ。

主治　【渇を止め、熱を除き、酒毒を解し、眼赤を去る】(孟詵)【目を明にし、濕を除き、婦人の勞損下血に主效がある】(藏器)【煩を除き、熱毒を解す。血崩、帶

下、痔瘻、丹石の藥毒を壓す。黄連末を入れて汁を取り、赤眼、眼睛に點ける。(日華)

蚌粉

[氣味]【鹹し、寒にして毒なし】日華曰く、能く石亭脂を制す。鏡源に曰く、能く硫黄を制す。

[主治]【諸瘡。痢、幷に嘔逆を止める。醋で調へて癰腫に塗る】(日華)【爛殼粉は、反胃、心胸の痰飲を治す。米飲を用ゐて服す】(藏器)【熱を解し、濕を燥し、痰を化し、積を消し、白濁、帶下、痢疾を止め、濕腫、水嗽を除き、目を明にする。陰瘡、濕瘡、痱痒に擦る】(時珍)

[發明] 時珍曰く、蚌蛤と海蛤粉とは同功である。いづれも水に產するものであつて、病を治する要點はただ熱を淸し、濕を行るに在るのみのものだ。日華はこの物の瘡を治することを言つたが、近頃、一小兒で瘡を病み、ただこの粉のみを食つて他のものは一向に食はぬものがあつた。やはり特異なものの一例だ。

[附方] 新六。【反胃吐食】眞正の蚌粉を用ゐ、毎服二錢を秤つて生薑の搗汁一盞で和し、再び米醋を入れて共に調へて送下する。(急救良方)【痰飲咳嗽】眞蚌粉を新瓦で紅く炒つて靑黛少量を入れ、淡虀水に麻油數點を滴したもので二錢を調へ

て服す。〇類編に「宋の徽宗の時、李防禦が入內醫官であつたが、たまたま帝の寵愛深きある妃が痰嗽を病ひ、徹宵眠れず、顏面が盤のやうに浮腫したので、徽宗は李を召して「誠心誠意事に當り、もし三日以內に治效を奏さねば死罪に行はれて異存なし」との誓をさせて治療を命じた。しかし李の技量では到底治癒の自信がないのだから、その當惑は悲愴なものだつた。淚とともに妻と別れを告げてゐると、不圖、戶外を「欬嗽の藥、一文に一貼、これさへ服めば直ぐ睡れる」といふ流し賣りの聲が通る。李は早速呼び留めてその一貼を開いて見ると、その藥は色が淺碧のものだつた。猛烈な危險性のものではないかとも危惧され、先づ二服を併せて自ら試みに服んで見たが、しかしその結果は何等の異狀も認めなかつたので、そこで三貼を一服に併せて參入し、それを妃に與へて服ませたところ、嗽はその晚のうちに止まり、曉方には顏面の浮腫も消いて了つた。內侍からその由を早速帝に奏上すると、天顏大いに喜ばれて、値萬緡の金帛を賜つた。ところで李にはその處方の提出を命ぜられることがまだ一の不安だつたので、ひそかに曩に買つた賣藥屋の住居を捜し出し、酒を馳走し、多價の金を提供して傳授を受けた。それが右の方であつ

た。その時賣藥屋は「私は若い頃軍隊にゐたが、隊長がこの方を用ゐるのを見てゐて、それを實は盜んだのだ。今は餘生をこれで送つてゐる」といつた』とある。

【癰疽赤腫】米醋で蚌蛤粉を和して塗り、乾くを待つて易へる。（千金方）【雀目夜盲】夜になると視力がなくなるには、（四）建昌軍の螺兒蚌粉三錢を末にして水飛し、雄猪肝一葉を披開してその粉を納れて括りつけ、第二米泔で煮て七分に熟し、別の蚌粉を蘸けて食ひ、その汁で送下する。一日一回試みる。夜明砂と同功である。（直指方）【脚指の濕爛】蚌蛤粉を乾して搽る。（壽域）【積聚痰涎】胸膈の間に結して心腹疼痛が晝夜止まず、或は乾嘔し、噦食するには、炒粉丸が主效がある。蚌粉一兩を巴豆七粒と共に赤く炒り、豆は去つて用ゐず、醋でその粉を和して梧子大の丸にし、二十丸づつを薑酒で服す。男子の臍腹痛には茴香湯で服す。婦人の血氣痛には童尿を和して服す。（孫氏仁存方）

（一）馬刀（本經下品）

和名　まて
學名　Solen gouldi, Conrad.
科名　まてがひ(竹蟶)科

（四）建昌軍ハ宋ニ置キ、元ニ路トシ、明ニ府トス。今ノ江西省南城縣ソノ舊治ナリ。

（一）木村(重)曰ク、馬刀ハ日本産ノまてがひニ同ジ Solen brevis ナル種アリ。食用ニ供サル。海産

［校正］　拾遺の齊蛤を併せ入る。

［釋名］　**馬蛤**（別錄）　**齊蛤**（吳普）　**蜌**（爾雅）音は陛（ヘイ）である。**螷**　品（ヒン）蜱（ヒ）排（ハイ）の三種の發音がある。記載は周禮にある。**蝏螷**　音は亭廦（テイヒ）である。**單母**　音は善母（ゼンボ）である。**焷岸**　焷の音は掣（セイ）である。時珍曰く、大なるものを俗に馬の字をつけて呼ぶ。その形が刀のやうだからかく形容して名けたのだ。蛤といひ、螷（ひ）といふはいづれも蚌の字の音の轉訛したもので、時代の古今に因つて方言が異つて來たのだ。說文に『圓なるを蠣といひ、長きを螷といふ』とある。（二）江、漢地方では單姥（ぜんぼ）と呼び、（三）汴（べん）地方では焷岸と呼ぶ。吳普の本草に『馬刀、即ち齊蛤』とあるが、唐、宋の本草にはそれを遺漏し、陳藏器は齊蛤として重出した。此にはこの一條に併記する。

［集解］　別錄に曰く、馬刀は（四）江、湖の池澤、及び東海に生ずる。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、李當之は『江、漢に生ずる。長さ六七寸、その肉を食へば蚌に似たものだ』といつた。今は一般に多くは識（し）らないが、大抵今の蝏螷に似たものだ。しか

ノ二枚貝、アアタオ（馬刀）ト稱サル。

（二）江漢ハ揚子江、漢水。

（三）汴ハ草部芳草類香薷ノ汴洛ノ註參照。

（四）江湖ハ鱗部龍類水龜ノ註ヲ見ヨ。

し方には用ゐられてない。

韓保昇曰く、江、湖中に生ずる。細く長い小蚌のことで、長さ三四寸、濶さ五六分のものだ。

頌曰く、今は處處にある。多くは沙泥中に在るもので、頭が少し鋭い。一般にはやはり蚌と呼んでゐる。

藏器曰く、齊蛤は海中に生ずる。形狀は蛤のやうで兩頭が小さく尖つたものだ。海人はこれを食ふ。別に功用はない。

〔馬刀〕

時珍曰く、馬刀は蚌に似て小さく、形體は狹くして長い。その類は甚だ多いもので、長短、大小、厚薄、斜正一定せぬが、性、味、功用は概して同一だ。

殼 煉粉を用ゐる。

氣味 【辛し、微寒にして毒あり。水を得れば人の腸を爛らす。又曰く、水を得れば良し】恭曰く、火を得れば良し。時珍曰く、按ずるに、吳普は「神農、岐伯、桐君は鹹し、毒ありといひ、扁鵲は小寒にして大毒ありといふ」といつた。藏器曰く、遠志、蠟はいづれも齊蛤を畏れる。

〔主治〕【婦人の漏下赤白、寒熱。石淋(せきりん)を破り、禽獸を殺し、鼠を賊(そこな)ふ】(本經)【能く五臟の間の熱、(五)肌中の鼠䑋(そけい)を除き、煩滿を止め、中を補し、厥痺(けっぴ)を去り、機關を利す】(別錄)【水癊(すゐえい)、氣癭、痰飮を消す】(時珍)

肉　蚌に同じ。

(一)蝛　𧊕　音は成進(カンシン)である。　(宋嘉祐)

和名　缺
學名　Cultellus sp.
科名　まてがひ(竹蟶)科

〔釋名〕生𧊕(嘉祐)　蝛蛤(水土記)

〔集解〕藏器曰く、蝛𧊕(かんしん)は東海に生ずる。蛤に似て扁く、毛がある。

頌曰く、蛤に似て長く、身が扁い。

宗奭曰く、(二)順安軍界(じゅんあんぐんかい)の河中にやはりこれがゐる。馬刀と似寄つたもので、肉は頗る冷だ。その地ではこれを鮓(さく)にして食ふが、遠隔地へ輸送するわけには行かぬものだ。

〔蝛　𧊕〕

(五) 白井曰ク、肌、恐クハ誤字。

(一) 木村(重)曰ク、蝛𧊕ハ日本ニテゆきのあさト稱スルモノニ似タル二枚貝ニシテまてニ類シ、殼面ニ絹糸狀ノ輪紋アリ。圖ヲ示シテ後攷ヲ俟ツ。

(二) 順安軍ハ蟲部化生類ノ蜚蝱ノ註ヲ見ヨ。

殻　【主治】【燒いて末にして服すれば痔病を治す】（藏器）

肉　宗奭曰く、多く食へば風を發する。

(一)蜆（宋嘉祐）

和名　鈌
學名　Corbicula fluminalis.
科名　しじみ（蜆）科

【釋名】扁螺　時珍曰く、蜆とは(二)晛の意味だ。殻の内部に太陽の初めて出たときの光彩のやうな光が輝いてゐるものだ。隋書に『劉臻の父顯は蜆を嗜み、蜆を呼んで扁螺（へんら）といつた』とある。

【集解】藏器曰く、處處にある。小さい蚌のやうで色は黒い。能く天候の風雨を見て殻で飛ぶものだ。

時珍曰く、溪、湖中に多くゐる。やはりその類の多いもので、大小、厚薄一定しない。漁家では多くこれを食ふ。

〔蜆〕

肉　【氣味】【甘く鹹し、冷にして毒なし】藏器曰く、微毒あり。多く食へば

(一)木村(重)曰ク、蜆ハ日本産ノしじみニ似テ而モ殻側味チ帯ブ、他種アレドモ一般的ノモノチトレリ。支那ニテハ好ミテ食フ。

(二)晛ハ日氣ナリ、太陽ノ光氣チイフ。

嗽、及び冷氣を發し、腎を消す。

主治　【時氣を治し、胃を開き、丹石藥の毒、及び疔瘡を壓し、濕氣を下し、乳を通ず。糟で煮て食ふが良し。生で浸して取つた汁で疔瘡を洗ふ】(蘇恭)【暴熱を去り、目を明にし、小便を利し、熱氣、脚氣、濕毒を下し、酒毒目黄を解す。浸した汁を服すれば消渇を治す】(日華)【生蜆を浸した水で痘、癰を洗へば瘢痕がなくなる】(時珍)

爛殼　氣味　【鹹し、温にして毒なし】

主治　【痢を止める】(弘景)【陰瘡を治す】(蘇恭)【失精、反胃を療ず】(日華)【灰に焼き飲で服すれば、反胃吐食を治し、心胸の痰水を除く】(蔵器)【痰を化し、嘔を止め、呑酸、心痛、及び暴嗽を治す。灰に焼いて一切の濕瘡に塗る。蚌粉と同功である】(時珍)

附方　舊一、新二。【卒嗽の止まぬもの】白蜆殼を搗いて細末にし、一日三回、一錢づつを熟米飲で調へて服す。甚だ效がある。(記載は急救良方にある)【痰喘咳嗽】白蜆殼の多年の陳きものを焼いて性を存し、極細末にし、一日三回、一錢づつを米飲

で調へて服す。（急救方）【反胃吐食】黄蜆殼、竝に田螺殼を、いづれも久しく泥中にあつたものを取つて等分を炒つて白灰にし、二兩づつに白梅肉四個を入れて搗き和して丸にし、再び砂合子中に入れ、蓋をして泥で固濟し、煆いて性を存して細に研末し、二錢づつを人參縮砂湯で調へて服す。然らざれば陳米飲で調へて服するもよし。凡そ心腹脹痛を覺えて將に反胃を發せんとするときは、この藥を以て治す。（百一方）

(一)眞珠（宋開寶）

和名　しんじゆ
學名　Pearls

【釋名】珍珠（開寶）蚌珠（南方志）蠙珠（禹貢）

【集解】李珣曰く、眞珠は南海に出るは石決明から產する。蜀中、(二)西路、(三)女瓜に出るものは蚌蛤から產するもので、光は白くして甚だ好いが、舶來のものの采光の耀くには及ばない。穴を穿けるには金剛で鑽りあけるものだ。頌曰く、現に(四)廉州に產し、(五)北海にもある。珠牡、または珠母といふ蚌の類に

(一)木村(重)曰ク、川產ニテハかはしんじゆがひ（南支那ニ產ス）Margarita margaritifera, L. ヨリ採ルモ光彩可ナラズ、海產ノしんじゆかひヨリ採ルヲ多トス、河產海產共ニアリ。
(二)西路ハ今ノ新疆省ノ地、及ビソノ以西、以南ヲイフ。
(三)女瓜、未詳。
(四)廉州ハ唐ニ置ク今ノ廣東省合浦縣ソ

生ずる。按ずるに、嶺表錄異に『廉州のある洲島には島上に大池があつて、その池を珠池といふ。毎年刺史親ら珠を扱ふ營業者を監督し、その池に入れて老蚌を採り、それから珠を剖取して貢納物とする。その池は海上の島にあるのだから、土地の者は底が海と通じてゐるらしいと考へてゐるが、しかしその池水は(六)淡水であるところを見ると甚だ合點が行かぬ。その地の者はその蚌の小なるものの肉を採つて脯にして食ふが、やはり往往にして米粒ほどの細珠が出ることがある。これはこの池の蚌には大、小いづれも珠があると見える』とある。しかし現に珠牡採取者は、海濱で取るのであつて、必ずしもその池中から取るに限つたことはないといふ。北海に産する珠蚌といふは種類が少し別だ。その地の者がその肉を取る場合に或は珠が出ることもあるが、甚だしい光瑩でない。やはり何時何れの蚌からも出るといふわけでもなく、藥用にも堪へぬものだ。又、蚌中の一種に江珧に似たものがあつて、その腹からも珠が出る。しかしいづれも南海のやうに珍奇にして且つ多く出るに及ばない。

○宗奭曰く、(七)河北の溏濼中にも一寸圍りほどのものが出るが、色が多くは微紅で、

ノ舊治ナリ。

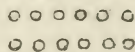
(五)北海ハ渤海、黄海ヲ指ス。

(六)譯者曰ク、綱目原文ニハ「池水乃淡。此不可測也」トアレドモ、嶺表錄異ノ本文ニハ「又。池水至深。莫測也」トアツテ、「深さが判らぬ」ノ意ナリ。

(七)河北ノ溏濼ハ今ノ河北省地方ノ沼池、水流ヲイフ。

(八)合浦縣、今ノ廣東省合浦縣ノ地。

珠母も廉州のものとは類似せぬ。但し淸水、急流の場所にあるものはその色が白く光り、濁水、及び流れぬ場所にあるものはその色が暗いのだ。

時珍曰く、按ずるに、廉州志には『(八)合浦縣の海中に梅、靑、嬰の三池がある。蜑人が蚌を取るには、長い繩を腰に繫ぎ籃を携へて水中に入り、蚌を拾ひ取ると、籃に入れ腰の繩を振つて舟に合圖をする。すると上から舟人が急にそれを引き揚げるのだ。若し水中から一筋でも血が浮んで來たならば、それは魚腹に葬むられたものとなつてゐる』とある。又、熊太古の冀越集には『禹貢に「淮夷の蠙珠」とあるが、後世では嶺南から出る。現に南珠は色が紅く、西洋珠は色が白く、北海珠は色が微し靑く、その地方それぞれの色がある。予が嘗て見たところでは、蜑人が海中に入つて珠子樹といふものを

〔眞珠牡〕

數擔取つて來た。その樹の狀態は柳枝のやうなもので、その樹に蚌が生じて上下し得ないやうになつてゐる。その樹は石に生じてゐるので、蜑人は石を鑿つて樹を取

り、その樹から蚌を取るのである。甚だ異様なものだ』とある。又、南越志には『珠には九種の品級がある。五分から一寸八九分までのものを大品とし、光彩があつてその一邊が金を鍍したやうなものを璫珠と名ける。それに次ぐものが走珠、滑珠等の品級だ』とあり、格古論には『南番珠は色白く圓く耀くものを上とし、廣西のものこれに次ぐ。北海珠は色微青なるものを上とし、粉白、油黃なるものは下である。西番では馬價珠を上とし、色は翠の如く青い。老色にして石粉、青油烟を夾むものは下である』とある。蚌は凡て雷を聞けば瘷まり痩せるもので、その珠を孕む狀態は妊娠のやうなものだ。故に珠胎といふのである。中秋に月の無かつたときは蚌に胎がない。左思の賦に『蚌蛤の珠胎は月と盈虧す』といつたのはそのことだ。陸佃は『蚌蛤には陰陽、牝牡がなく、雀から蛤に化成する。故に生ずる珠が專ら陰の精なるのだ』といつてある。龍の珠は頷に在り、蛇の珠は(九)口に在り、魚の珠は眼に在り、鮫の珠は皮に在り、鼈の珠は足に在り、蜘蛛の珠は腹にあるが、いづれも蚌の珠に及ばない。

修治　李珣曰く、凡そこれを使用するには、新しく完全にしてまだ鑽り綴つ

(九) 本草彙言ニハ口ヲ目ニ作ル。

たことのないものを粉のやうに研つて始めて服食するに堪へる。細かでないと人の臟腑を傷めるものだ。

斅曰く、凡そこれを使用するには、新しいものを絹袋に盛り、平底の鐺に牡蠣四兩を入れて四面を物で支へてよく落付やうにした中へ入れ、それに地楡、五花皮、五方草を各々剉んで四兩を詰め、漿水を入れて火を住めずに三晝夜煮て取出し、甘草湯で淘淨し、臼で細に搗いて二重に篩ひ、更に二萬回研つて始めて服食すべきものだ。

愼微曰く、抱朴子に『眞珠は、徑一寸以上のものを服食すれば人をして長生せしめる。酪漿で漬ければみな化して水銀のやうになり、浮石、蜂巣、蛇黄等の物をそれに合せると長さ三四尺まで引き延びる。丸にして服す』とある。

時珍曰く、凡そ藥に入れるには、首飾に用ゐたもの、及び尸氣に觸れたものを用ゐてはならぬ。人乳で三日間浸し、煮て前記のやうに搗き研る。ある法では、絹袋に盛り、豆腐の中へ入れて一炷香の間煮る。かくすれば珠を傷めぬものだといふ。

【氣味】【鹹く甘し、寒にして毒なし】

【主治】【心を鎭める。目に點ずれば膚翳、障膜を去る。顏に塗れば潤澤ならし

(一〇)逆臚トハ胸腹手足ノ皮皆腫ルルヲ云フ。
(一一)麩豆瘡ハ痲疹。

め、顔色を好くする。手、足に塗れば皮膚の(一〇)逆臚を去る。綿で裹んで耳を塞げば聾を治す】(開寶)【瞖を磨し、痰を墜す】(甄權)【面䵟を除き、洩を止める。知母と合せれば煩熱、消渇を療ず。左纏根と合せれば小兒の(一一)麩豆瘡の眼に入りたるを治す】(李珣)【小兒の驚熱を除く】(宗奭)【魂魄を安じ、遺精、白濁を止め、痘、疔の毒を解し、難産に主效があり、死胎、胞衣を下す】(時珍)

【發明】時珍曰く、眞珠は厥陰、肝の經に入る。故に能く魂を安じ、魄を定め、目を明にし、聾を治す。

【附方】舊三、新九。【魂を安じ、魄を定める】眞珠末豆一粒ほどを、蜜を蜆殼に一箇ほどと和し、一日三回服す。就中小兒に宜し。(肘後)【卒忤の言語不能】眞珠末を雞冠血で和して小豆大の丸にし、三四粒を口中に納れる。(肘後)【灰塵の眯目】大なる珠で拭へば明になる(格古論)【婦人難産】眞珠末一兩を酒で服すれば立ろに娩出する。(千金)【胞衣不下】眞珠一兩を研末して苦酒で服す。(千金)【腹中で胎兒の死亡せるもの】眞珠末二兩を酒で服すれば立ろに出る。(外臺)【癍痘の發せぬもの】珠子七箇を末にし、新汲水で調へて服す。(儒門事親)【痘瘡、疔毒】方は穀部豌豆の條を

見よ。【肝虚目暗】ぼんやりとして見えぬには、眞珠末一兩、白蜜二合、鯉魚膽二箇を和合し、銅器で一半までに煎じ、新しい綿で漉して瓶に盛り、頻に點けて瘥を取る。(聖惠方)【靑盲で見えぬもの】方は上に同じ。【小兒の中風】手足拘急するには、眞珠末を水飛して一兩、石羔末一錢を用ゐ、一錢づつを水七分で四分に煎じ、一日三囘に溫服する。(聖惠方)【目に生じた頑瞖】眞珠一兩、地楡二兩、水二大盌を煮乾し、眞珠を取つて醋に五日間浸し、熱水で醋氣を淘り去り、細末に研つて少量づつを點ける。瘥えるを度とする。

石決明(一) (別錄上品)

和名 あはび
學名 Haliotis gigantica, Gmelin.
科名 あはび(石決明)科

【釋名】 九孔螺(日華) 殼を 千里光 と名ける。 時珍曰く、決明といひ、千里光といふはその功力に因る名稱だ。九孔螺といふは形を形容した名稱だ。

【集解】 弘景曰く、俗にこれを紫貝のことだといふ。世人はみな水に漬けて眼を熨するが、頗る明になる。又、これは鰒魚の甲で、石に附著して生じ、大なるは手

(一) 木村(重)曰ク、石決明ハ日本ニ產スルモノト同ジ、又小型ナル一種ヲ產ス、北支那ノ海ニ多シ。

ほどあり、明かに五色に耀く。內部にはやはり珠を含むものだといふ。

○恭曰く、これは鰒魚の甲で、石に附著して生ずる。狀態は蛤のやうだが、ただ一片のみのもので對をなさない。七箇の孔のあるものが良し。今俗に紫貝を用ゐてゐるが、全然誤りだ。

○頌曰く、今は嶺南の州郡、及び萊州の海邊にいづれもある。採取に一定の時期はない。舊註には、或はこれを紫貝とし、或は鰒魚の甲としてあるが、按ずるに、紫貝とは卽ち今の砑螺のことで、全然この類のものではない。鰒魚とは王莽が嗜きだつたといふそのもので、一邊が石に附著して美しく明に光るものだ。自ら一種をなすもので、決明と相近い。決明の殼は、大なるは手ほどあり、小なるは指二三本の大いさほどのもので、水に浸して眼を洗ふに用ゐられる。七孔、九孔のものが良く、十孔のものは佳くない。海人はやはりその肉を噉ふ。

○○宗奭曰く、(三)登萊の海濱に甚だ多く、その地では肉を採つて料理に使ひ、また乾して贈答品にもする。肉と殼と兩ながら用ゐ得るものだ。

○○時珍曰く、石決明は形が長く、小蚌のやうで扁く、外皮は甚だ粗く、孔が細かくし

(三) 登萊、今ノ山東省登州、萊州地方ヲイフ。

てざらざらするが、內面は光があり、背側には殊更に穿けたやうな孔が一行に通つてゐる。石崖の上に生ずるものだ。海人は水を(三)泅いでその不意に乘じて取る。かくすれば取り易いが、さうせねば緊く粘著して了つて容易に取れない。陶氏は紫貝をこの物とし、雷氏は眞珠牡をこの物とし、楊倞の荀子の註には鼇甲をこの物としたが、いづれも誤りだ。ただ鰒魚とは一種中の二類である。故は功用が同じものだ。

〔石決明〕

(四)吳越地方では、糟決明、酒蛤蜊を美味な食品としてゐるが、卽ちこのものだ。

修治 珣曰く、凡そこれを使用するには、麪で裹んで煨熟し、粗皮を磨り去つて搗爛し、再び乳細して麪のやうになつたところで藥に入れ得るものだ。

斅曰く、五兩に對し鹽半兩の割合とし、瓷器に入れて東流水で一伏時煮てから、末に搗いて粉に研り、再び五花皮、地楡、阿膠各十兩を入れて東流水で三回淘り、日光で乾して再び一萬回研つて藥に入れる。十兩まで服したならば永く山龜を食つてはならぬ。犯せば目の視力を喪ふ。

時珍曰く、今の方家は、ただ鹽と東流水とで一伏時煮て研末し、水飛して用ゐる。

(三)泅ハ辭書ニ浮行水上トアリ。

(四)吳越ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。

殼　〔氣味〕【鹹し、平にして毒なし】保昇曰く、寒なり。宗奭曰く、肉と殼と同功だ。

〔主治〕【目障瞖痛、青盲。久しく服すれば精を益し、身を輕くする】（別錄）【目を明にし、障を磨す】（日華）【肝、肺風熱の青盲、內障、骨蒸勞極】（李珣）【水飛して外障瞖に點ける】（寇宗奭）【五淋を通ずる】（時珍）

〔附方〕舊一、新四。【羞明して日光を怕れるもの】千里光、黃菊花、甘草各一錢を水で煎じて冷服する。（明目集驗方）【痘後の目瞖】石決明を火で煆いて研り、谷精草と各等分を共に細末にし、猪肝に蘸けて食ふ。（鴻飛集）【小便五淋】石決明を粗皮を去り、末に研つて水飛し、一日二回、二錢づつを熟水で服す。淋中に軟、硬物のあるときは朽木末五分を加へる。（勝金方）【肝虛の目翳】凡そ氣虛、血虛、肝虛で眼白が倶に赤く、夜は雞啄のやうに浮翳を生ずるには、海蚌殼を焼いて灰にし、木賊を焙じて各等分を末にし、三錢づつを薑、棗を水で煎じて滓共に一口に服す。每日二回服す。（經驗方）【青盲、雀目】石決明一兩を焼いて性を存し、外に蒼朮三兩を皮を去つて末にし、その藥末三錢づつを猪肝を披開した中に入れて括りつけ、砂罐で

煮熟し、その蒸氣で目を薫じ、冷えるを待つてその肝を食ひ、汁を飲む。（龍目論）【白酒の酸を解す】石決明を多少に拘らず、その數箇を火で煆いて細末に研り、酒を盪熱して置いて、中にその末を入れて攪きまぜ、一時蓋をして置いて取つて飲む。味が酸くなくなる。

(一)海蛤（本經上品）

和名　かひがら
學名　Shells of bi-valves.

【釋名】時珍曰く、海蛤とは、海中の諸蛤の爛殼の總稱である。單に一種の蛤のものと限るのではない。舊本に『一名魁蛤』とあるので魁蛤のみを指すかのやうに見えるが、それは書誤りに過ぎないのだ。ここに削除する。

【集解】別錄に曰く、海蛤は東海に生ずる。

保昇曰く、現に登萊、(二)滄州の海沙の波が打ち寄する處にはいづれもある。四五月に沙を淘つて取る。南海にもある。

〔海　蛤〕

(一) 木村(重)曰ク、はまぐりノ如キ海産二枚貝ノ殼ノ總稱ト見ルヲ至當トス。

(二) 滄州ハ草部毒草類甘遂ノ註、登萊ハ石決明ノ註ヲ見ヨ。

恭曰く、海蛤は、巨勝子のやうに細かで、淨く滑に瑩かに光るものが好し、粗くして杏仁の半分ほどの大いさのものをば豘耳蛤といふ。藥用にならぬものだ。

時珍曰く、按ずるに、沈存中の筆談に『海蛤とは海邊の沙泥中から取る。大なるは碁子ほど、小なるは油麻粒ほどのもので、黃白色、或は黃赤色のものが相雜る。蓋し一類のみではないのであつて、諸蛤の殼が海水のために磨りへらされ、久しい間に瑩かに光るやうになり、全然舊質がなくなつたものだ。蛤は類の至つて多いものだから一一いづれの蛤とは區別しかねる。故に通じて海蛤といつたのだ』とある。その他の說明は下條を見よ。

[正誤] 吳普曰く、海蛤は頭に文がある。その文は鋸齒のやうだ。

時珍曰く、これは魁蛤をいふのであつて海蛤ではない。蓋し誤である。此に正して置く。

○弘景曰く、海蛤は至つて滑澤なもので、雁の屎の中から取る。二三十回したものが良いといふことだ。今一般にあるものは、多くは相類するものを取つて磨蕩したものだ。

日華曰く、これは雁の食つた鮮の蛤が糞になつて出るものだ。文彩のあるものは文蛤、文彩のないものが海蛤である。郷人はまた、海邊の爛蛤殼が風濤で磨りへらされて瑩淨になつてものを拾ひ取つて僞物にする。

藏器曰く、二說いづれも非である。海蛤とは、海中の爛殼が久しく沙泥中にあつて風波に淘り洗はれ、自然に圓く淨らかになつたものだ。大なるものも小なるものもあるが小なるものを佳しとする。一一雁の腹中から出るものではない。文蛤とはまだ爛れない時の文のある殼のことだ。この海蛤と文蛤との二物はもと同一類であつて、あだかも爛蜆と蚌殼との相異のやうなものだが、主なる功力はやはり生のものと同じでない。假令雁が蛤殼を食ふにしても、文と文ならぬものを擇り別けて食ひさうなことはあるまい。

宗奭曰く、海蛤と文蛤とに就ては陳氏の說が極めて正しい。現に海中に雁はゐない。そこに糞のあるわけがあらうか。蛤に肉のある時ならばまだ食ふといふこともあるが、既に肉のなくなつたものではないか。食ひ得るわけが何處にあらうぞ。更にまた二三十回糞するなどいふことがあらうか。陶氏の說は謬だ。

時珍曰く、海蛤といふは諸蛤の爛殼のことだ。文蛤は獨立した一種類である。陳氏のいふ文蛤はまだ爛れぬ時の殼を指してゐるが、それでは一般諸蛤のまだ爛れぬものをも指すやに見えて、その說は穩でない。但し海中の蛤蚌は形色と名稱とに差異はあるが、性味は相類し、功用も同じもので、甚しい區別はない。

修治　斅曰く、凡そ海蛤を使ふ場合に游波蟲の骨を用ゐてはならぬ。眞に似てゐるが、ただこれは表面に光のないものだ。誤つてこれを餌へば狂走して水に投身したがり、鬼物の祟のやうになる。ただ醋だけがこれを解し、立ろに癒えるものだ。海蛤は、漿水で一伏時煮て、一兩每に地骨皮、柏葉各二兩を入れて共に一伏時煮、東流水で三回淘つて粉に搗いて用ゐる。

保昇曰く、これを採取したならば、半天河で(三)五十刻煮て枸杞汁を拌ぜ、菫竹筒中に入れて一伏時蒸し、搗いて用ゐる。

氣味　【苦く鹹し、平にして毒なし】　吳普曰く、神農は苦しといひ、岐伯は甘しといひ、扁鵲は鹹しといふ。權曰く、小毒あり。之才曰く、蜀漆が使となる。狗膽、甘遂、芫花を畏る。

(三) 五十刻ハ一日間。

【主治】【欬逆上氣、喘息煩滿、胸痛寒熱】(本經)【陰痿を療す】(別錄)【十二種の水滿急痛に主效があり、膀胱、大、小腸を利す】(唐註)【水氣浮腫を治し、小便を下し、嗽逆上氣、項下の瘤癭を治す】(甄權)【嘔逆、胸脇脹急、腰痛、五痔、婦人の崩中帶下を療ず】(日華)【消渇を止め、五臟を潤ほし、丹石を服した人の瘡を生じたるを治す】(蕭炳)【熱を淸し、濕を利し、痰飲を化し、積聚を消し、血痢、婦人の血の結胸、傷寒で反て汗し、搐搦するもの、中風癱瘓を除く】(時珍)

【附方】舊二、新七。【水癊腫滿】藏器曰く、海蛤、杏仁、漢防已、棗肉各二兩、葶藶六兩を末にし、研つて梧子大の丸にし、一回に十丸づつ水を利下するまで服するが妙である。【水腫發熱】小便の通ぜぬには、海蛤湯が主效がある。海蛤、木通、猪苓、澤瀉、滑石、黄葵子、桑白皮各一錢、燈心三分を水で煎じ、一日二回服す。(聖惠方)【石水肢瘦】腹だけが大なるには、海蛤丸が主效がある。海蛤を煆いた粉、防已各七錢半、葶藶、赤茯苓、桑白皮各一兩、陳橘皮、郁李仁各半兩を末にし、蜜で梧子大ほどの丸にし、一日二回、五十丸づつを米飲で服す。(聖濟總錄)【氣腫、濕腫】海蛤、海帶、海藻、海螵蛸、海昆布、鳧茨、荔枝殼等分を流水で煎じて服す。一日

二回（何氏）【血痢内熱】海蛤、(四)石蜜を水で調へ、一日二回、二錢づつを服す。（傳信）

【傷寒血結】胸脹痛近くべからざるものは、仲景には方が無い。海蛤散を主とし、幷に(五)期門穴を刺すがよし。海蛤、滑石、甘草各一兩、芒硝半兩を末にし、二錢づつを雞子淸で調へて服し、更に桂枝紅花湯を服す。その汗を發すれば癒える。蓋し(六)膻中に血聚すれば小腸が壅し、小腸が壅すれば血が行らなくなるのである。これを服すれば小腸が通ずるから血が流行して胸膈が利するのだ。（朱肱活人書）【傷寒搐搦】寇宗奭曰く、傷寒で汗を出すことが徹底せずして手脚の搐するものである。海蛤、川烏頭各一兩、川山甲二兩を末にし、酒で彈子大の丸にし、扁たく捏つて患む方の足の心下に置き、別に葱白を擘いてその藥を蓋ふて帛で纒定し、暖室中で脚を膝上まで熱水に浸し、水が冷えれば又熱水を添へ、全身に汗の出るを度とする。凡そ三日に一回試みて反應のあるを度とする。【中風癱瘓】方は上に同じ。又、鯪鯉甲の條に記載がある。【衄血の止まぬもの】蛤粉一兩を七回羅ひ、槐花半兩を炒り焦して研勻し、一錢づつを新汲水で調へて服す。（楊氏家藏方）

(四) 蟲部ニ石蜜ノ解アリ。

(五) 期門ハ乳中ト肋骨ノ下限トノ中間ニアリ。

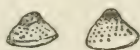
(六) 膻中ハ經穴名、ミヅオチ（鳩尾）ノ稍上ニアリ。

（一）木村（重）曰ク、文蛤ハ日本ノはまぐりニ似ル、殻表ニ電光形ノ美ナル模様アリ。他ニ三種ニ産ス。

（一）文蛤（本經上品）

和名 缺
學名 Meretrix lusoria.
科名 はまぐり（蛤）科

【釋名】 **花蛤** 時珍曰く、いづれも形を以て呼んだ名だ。

【集解】 別錄に曰く、文蛤は東海に生ずる。表に文がある。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、大、小いづれも紫斑がある。

保昇曰く、今は萊州の海中に出る。三月中旬に採る。背上に斑文がある。

〔文蛤〕

恭曰く、大なるものは圓くして三寸、小なるものは圓くして五六分のものだ。

時珍曰く、按ずるに、沈存中の筆談に「文蛤とは現に呉地方で食ふ花蛤のことで、その形は一方が小さく一方が大きく、殻に花斑のあるものだ」とあるは正にそのものだ。

【修治】 海蛤に同じ。

氣味　【鹹し、平にして毒なし】

主治　【惡瘡、五痔を蝕す】(本經)【欬逆、胸痺、腰痛、脇急、鼠瘻、大孔出血、婦人の崩中漏下】(別錄)【能く煩渴を止め、小便を利し、痰を化し、堅を軟にし、口、鼻中の蝕疳を治す】(時珍)

發明　時珍曰く、按ずるに、成無已は『文蛤の鹹は腎に走つて水氣に勝つ』といつた。

附方　舊一、新一。【傷寒文蛤散】張仲景は『病の陽に在るは、汗して解すべきものだ。反つて冷水を噀き、或は灌ぎ、更に煩熱を益し、水を欲し、渴せぬには、この散を主とする。文蛤五兩を末にし、方寸匕づつを沸湯で服す。甚だ效がある。

【口、鼻の疳蝕】數日にして蝕し盡さんとするには、文蛤を灰に燒き、臘猪脂で和して塗る。(千金翼)

(一)蛤蜊

音は梨(リ)である。(宋 嘉祐)

和名　おきしじみ
學名　Cyclina sinensis, Gmelin.
科名　はまぐり(蛤)科

(一)木村(重)曰ク、蛤蜊ハ殼頂ヲ中心ニ輪脈アリ、幅一寸ニ達スルアリ。支那海

ニ多産シ、食用貝ノ代表ナリ。地方ニヨリテハしほふき、はひかひヲ云フ事アリ。ハーリー（蛤蜊）ト云フ。
（二）閩ハ福建地方、浙ハ浙江地方。
（三）海錯、書經ニ「厥貢海錯」海物惟錯」トアリ。海産物ヲ錯トイフ。海産ノ名物トイフが如キ意味ナリ。
（四）嘻笑作罪、未詳。

【釋名】 時珍曰く、蛤の類で人體を利するものだからかく名けたのだ。

【集解】 機曰く、蛤蜊は東南海中に生ずる。白殼、紫唇で大いさ二三寸のものだ。（二）閩、浙地方では、その肉を取つて（三）海錯に充て、また醬醯にも作る。殼を火で煅いて粉にしたものを蛤蜊粉と呼ぶ。

〔蛤蜊〕

肉 【氣味】 【鹹し、冷にして毒なし】 藏器曰く、この物の性は冷ではあるが、丹石を服する人と相反す。これを食へば腹が結痛する。

【主治】 【五臟を潤ほし、消渇を止め、胃を開き、老癖で寒熱となりたるを治す。婦人の血塊には煮て食ふがよし】（禹錫） 【煮て食へば酒を醒す】（弘景）

【發明】 時珍曰く、按ずるに、高武の痘疹正宗に『俗に、蛤蜊海錯は能く疹を發し、多くは脾、胃を傷損し、痰を生じ、嘔吐し瀉痢するといふが、これはみな（四）嘻笑作罪だ。又、痘毒が目に入りたるには、蛤蜊汁を點ける。空青に代へ得るものだといふが、そもそも空青なるものは銅の精氣を得て生ずるもので、性寒であつて赤目を治するに用ゐるものだ。痘毒の場合は臟腑の毒氣上衝である。空青で治し得る

（五）木村（重）曰ク、蛤蜊粉ハ二枚貝ノ灰分即チ「カルシウム」ヲ謂フナルベシ。Ash of shells.

筈のものでない。蛤蜊は寒ではあるが、而も濕中に火あるものだからこれも心得て置く必要がある」とある。

（五）蛤蜊粉　［釋名］　**海蛤粉**　時珍曰く、海蛤粉とは海中の諸蛤の粉をいふのであつて、江湖に産する蛤粉、蚌粉と區別するための名稱だ。今は一般に、ただ海粉、蛤粉と呼んで區別してゐる。寇氏の所謂、紫蛤の灰とはこの物を指したのだ。近世では單に蛤蜊粉のみを藥に入れることになつてゐるが、しかし商人の所有品はやはり多くは紫蛤のものだ。概して海中の蚌、蛤、蚶、蠣は、性、味が鹹、寒で甚だしい相違はない。功能も軟、散で大同小異だ。江湖の蚌蛤は鹹水に浸漬されないものだが、これはそれとは異つて、ただ能く熱を淸し、濕を利するだけのものである。今の藥種店には線粉のやうな狀態のもので海粉と稱する一種があるが、それは水に遇へば爛れ易い。蓋し後世の者がただその名にかこつけて販賣してゐるだけのものだが、しかし海中の沙石の間に出るものだから、その功力はやはり能く痰を化し、堅を耎にする。

［修治］　震亨曰く、蛤粉は蛤蜊を燒煅して作る粉だ。煎藥には入れない。

時珍曰く、按ずるに、呉球は『凡そ蛤粉を用ゐるには、紫口の蛤蜊を炭火で煆いて作つたものを取り、熟栝樓を子を連ねたものと共に搗き和して團にし、風乾して用ゐるが最も妙だ』いつてある。

【正　誤】　機曰く、丹溪は『蛤粉とは海石のことだ』といつてある。寇氏は海石の事實を以て蛤粉に註してある。して見ると、この二物は通じ用うべきものだ。海石、卽ち海粉。蛤粉、卽ち蛤蜊殼を燒いて作つたものである。

時珍曰く、海石とは海中の浮石のことだ。石部に詳記してある。汪機は、朱、寇二氏の說なりと誣ひて引證し、陳嘉謨の本草にもまたそれを引據してあるが、現に朱、寇二先輩の著書に就いて調べて見るに、いづれもさやうな說はない。此にその誤を正して置く。

【氣　味】【鹹し、寒にして毒なし】

【主　治】【熱痰、濕痰、老痰、頑痰、疝氣、白濁、帶下。香附末と共に薑汁で調へて服すれば心痛に主效がある】（震亨）【熱を淸し、濕を利し、痰食を化し、喘嗽を定め、嘔逆を止め、浮腫を消し、小便を利し、遺精、白濁、心脾疼痛を止め、積塊

を化し、結氣を解し、癭核を消し、腫毒を散じ、婦人の血病を治す。油で調へて湯火傷に塗る】（時珍）

【發明】震亨曰く、蛤粉は、能く降し、能く消し、能く耎にし、能く燥する。時珍曰く、寒は火を制して鹹は潤下する。故に能く降すのだ。寒は熱を散じて鹹は血に走る。故に能く消するのだ。堅きをば鹹を用ゐて耎にする。それはその水に屬して性の潤なる點を應用するのだ。濕をば滲を以て燥する、それは火化を經たもので小便を利する點を應用するのだ。

好古曰く、蛤粉なるものは腎の經の血分の藥だから、濕嗽、腎滑の疾に主效があるのだ。

【附方】舊一、新三。【氣虛水腫】昔、滁州の酒庫攢司陳通が水腫を患つて瀕死に陷つたとき、多くの醫師は治療し得なかつたが、一老女が大蒜十箇を泥のやうに搗いた中に蛤粉を入れて梧子大の丸にし、毎食前に二十丸づつを白湯で服ませたところ、服し盡すと小便が桶に數箇ほど出て癒えた。（普濟方）【心氣疼痛】眞蛤粉を炒つて白くし、香附末等分を佐藥とし、白湯に淬して服す。（聖惠方）【白濁、遺精】潔古

は『陽盛にして陰虚するから精が漏れるのだ。眞珠粉丸が主效がある。蛤粉を煆いて一斤、黄柏を新瓦で炒つて一斤を細末にし、白水で梧子大の丸にし、一日二回、一百丸づつを空心に溫酒で服す。蛤粉は味が鹹いもので、且つ能く腎陰を補し、黄柏は苦いもので心火を降す。【雀目、夜盲】眞蛤粉を黄に炒つて末にし、化した油蠟で和して皂子大の丸にし、猪腰子中に入れて麻で縛り、一日一回、蒸して食ふ。(儒門事親)

(一)蟶 丑眞の切(チン)と綖音する。 (宋嘉祐)

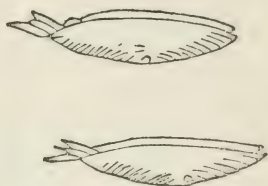
和名 あげまき
學名 Novaculina constricta, Lamark.
科名 きぬたますほがひ(礁眞蘇枋貝)科

釋名

集解 藏器曰く、蟶は海泥中に生ずる。長さ二三寸、太さ指ほど、兩頭の開いたものだ。

時珍曰く、蟶は海中の小蚌である。その形は長短、大小一定せず、江、湖中の馬刀、蜬、蜆と似たもので、その種類が甚だ多い。(二)閩粤地方では田にこれを種ひ、

(一)木村(重)曰ク、蟶ハまてニ似タル海産ノ二枚貝ニシテ、軟泥地ニ埋沒シテ生息ス、九州地方ニ多シ。

(二)閩、粤ハ福建、廣東、廣西地方ヲイフ。

潮泥の打ち上げて來て沃ぐのを候ち、それを蟶田といふ。その肉をば蟶腸と呼ぶ。

肉　氣味【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、天行病後に食つてはならぬ。

主治【虛を補し、冷痢を治するには、煮て食ふ。胸中邪熱の煩悶を去るには食後に食ふ。丹石を服した人に與へるに宜し、婦人產後の虛損を治す】(嘉祐)

〔蟶〕

擔羅（拾遺）

和名不詳
學名不詳
科名不詳

集解　藏器曰く、蛤の類であつて、新羅國に生ずる。彼の地では食ふ。

氣味【甘し、平にして毒なし】主治【熱氣。食物を消化する、昆布に雜へて羹にすれば結氣を治す】(藏器)

(一)木村(重)曰ク、車螯ハあげまきニ似テ更ニ黒色ヲ帯ビ、殼又硬シ。寧波附近ニテハツアーゴー(車螯)ト稱ス

車螯(一)(宋嘉祐)

和名 缺
學名 Psamosolen sp.
科名 きぬたますほがひ科

〔釋名〕 蜃 音は腎(ジン)である。時珍曰く、車螯は俗に訛つて昌娥蜃といふ。蛟蜃の蜃と同名ではあるが物は異ふ。周禮に『鼈人は互物を掌り、春は鼈蜃を獻じ、秋は龜魚を獻ず』とあるところを見ると、蜃とは大なる蛤の通稱であつて、やはり單に車螯のみを指した名稱ではなかつたらしい。

〔集解〕 藏器曰く、車螯は海中に生ずる。大蛤のこと、卽ち蜃のことである。能く氣を吐いて樓臺を現すものだ。春、夏島嶼を圍繞して常にこの氣がある。

頌曰く、南海、北海いづれにもあつて、採取に一定の時期はない。その肉を食つて見ると、蛤蜊のやうだが堅硬で味が劣る。近世では癰疽に多くこの殼を用ゐるが、北方の海のものは用ゐるに堪へない。背の紫色なるものを海人はやはり紫貝と呼んでゐるが、これは誤だ。

〔車　螯〕

時珍曰く、殼は色が紫で玉のやうに鮮かな光があり、花のやうな斑點がある。海人は火で炙つて殼の開いたとき肉を取つて食ふ。(二)鍾疏は『車螯、蚶、蠣は、眉目內に缺け、獱殼外に緻づ。香なく臭なし、瓦礫と何ぞ殊らん。宜しく庖廚に充て、永く口食と爲すべし』とあり、羅願は『雀は淮に入つて蛤となり、雉は海に入つて蜃となる。蜃とは大蛤のことだ。肉は食物になり、殼は器物の飾になり、灰は墻壁を罨り塞ぐ材料となり、粉にして顏の化粧品にもなる。俗に蛤粉と呼ぶ。また或は珠を生ずることもあつて、用途の多いものだ』といひ、又、臨海水土記には『車螯に似て角の正しからぬものをば移角といふ。車螯に似て殼の薄いものをば姑勞といふ。車螯に似て小なるものをば羊蹄といひ、(三)羅江に出る』とある。古代には一般に雉の化したものをば蛟蜃の蜃だと考へてゐたのである。而るに陳氏、羅氏はそれを蛤蜃の蜃としたが、それは誤りらしい。鱗部蛟龍の條に詳述してある。

肉　[氣味]　【甘く鹹し、冷にして毒なし】詵曰く、多食してはならぬ。　[主治]　【酒毒、消渴、竝に癰腫を解す】(藏器)

殼　[氣味]　肉に同じ。　[主治]　【瘡癤、腫毒には、二回赤く燒き醋に淬して

(二)鍾岏人名、疏ハ岏ノ誤、何晏之門生也、世說ニ出ヅ。

(三)羅江ハ唐ニ縣ヲ置ク、卽チ今ノ四川省ノ羅江縣ナリ。

（旨）一盞ハ二盞ノ誤カ。

末にし、甘草と等分を酒で服す。幷に醋で調へて傅ける】（日華）【積塊を消し、酒毒を解し、癰疽發背の焮痛を治す】（時珍）

【發明】 時珍曰く、車螯は、味は鹹く、氣は寒であつて降る、陰中の陰であつて、血分に入る。故に宋時代には、これを癰疽の治療に用ゐて惡物を取り下し、奇功があるといつたものだが、やはり患者の氣血、虛實、老少の如何を審にした上で用うべきものである。今の外科にはこれを用ゐることを知る者が尠い。

【附方】 新二。【車螯轉毒散】發背癰疽を治し、發病後年月の淺深と大人、小兒とを問はず、病根を利し去るので傳變を免れる。車螯、卽ち昌娥の背が紫色で光があつて厚いものを、鹽で固濟して赤く煆き、火毒を出して一兩、甘草末一錢半、輕粉五分を末にし、毎服四錢を、栝樓一箇、酒（旨）一盞を一盞に煎じて調へて服す。五更に惡物を轉下するを度とし、なほ下らぬときは再服する。甚しきものも二服以上を必要とせぬ。（外科精要）【六味車螯散】治症は上に同じ。車螯四個を黃泥で固濟して赤く煆き、毒を出して研末し、燈心三十莖、栝樓一箇の仁を取つて香しく炒り、甘草節を炒つて二錢、これを一服とし、三味を酒二盌に入れて半盌に煎じ、滓を去つ

て蜂蜜一匙を入れ、それで車螯末二錢、膩粉少量を調へて空心に温服する。惡涎毒を下すを度とする。(本事)

(一)魁　蛤　(別錄上品)

和名　はいがひ
學名　Anadara granosa, Linne.
科名　ふねがひ(鬼蛤)科

校正　時珍曰く、宋嘉祐には別に蚶の條を揭げてあるが、此には郭璞の說に據つて一條に合併した。

釋名　**魁陸**(別錄)　**蚶**　一には魽と書いてある。　**瓦屋子**(嶺表錄)　**瓦壟子**　時珍曰く、魁とは羹斗(かひじやくし)のことだ。この蛤は形がそれに肖てゐるからかく名けたのである。蚶とは味が甘いから、文字は甘に從ふのだ。按ずるに、嶺表錄異に『(二)南方の地では空慈子と名ける。尚書の盧鈞は、その殼が瓦屋の壟のやうなところから瓦屋、瓦壟と改稱した。廣地方ではその肉を珍重し、炙いて酒の肴にして天臠と呼んでゐる』とある。廣地方ではこれを蜜丁と謂ふ。名醫別錄に『一名活東』とあるは誤だ。活東とは蝌斗のことで、爾雅に記載されてある。**伏老**　頌曰く、

(一)木村(重)曰ク、魁蛤ハ支那本土ノ海岸ニ分布ス。殼ニハ隆起放射線アリテ淡水ノ多少注入スル所ヲ好ミテ捿ム、淡水中ニ產スルモノヲ特ニモウハー(毛蛤)ト稱ス。

(二)嶺表錄異ニハ『南中舊呼爲蚶子』トアリ。

說文に『老伏翼は化して魁蛤となる』とある。それで伏老と名けたのだ。

【集解】別錄に曰く、魁蛤は東海に生ずる。正圓で、兩頭が空で表に文がある。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、形は紡に似たもので、輕く小さく、狹く長く、外に縱横の文理がある。これは老蝠が變化したものだといふ。方に用ゐることは至つて稀だ。

保昇曰く、今は萊州に出る。形は圓く長く、大腹、檳榔に似て兩頭に孔がある。

〔魁蛤〕—蚶・瓦壟子—

藏器曰く、蚶は海中に生ずる。殼が瓦屋のやうだ。

時珍曰く、按ずるに、郭璞の爾雅註には『魁陸、即ち今の蚶であつて、狀態は小蛤のやうに圓く厚い』とあり、臨海異物志には『蚶の大なるものは徑四寸あり、背上の溝文が瓦屋の壟に似たものだ。肉は極めて佳味である』とある。現に(五)浙東附近では海濱の畑田でこれを種ひ、蚶田と呼んでゐる。

肉【氣味】【甘し、平にして毒なし】鼎曰く、寒なり。炳曰く、溫なり。凡

(五)浙東トハ浙江省ノ東部ヲ指ス。

それを食つたならば、直ぐに飯を食つて壓する。さうせねば口が乾くものだ。時珍曰く、按ずるに、劉恂は『炙いて食へば人體を益するが、過多なれば壅氣する』といつた。

主　治　【痿痺、洩痢、便膿血】(別錄)【五臟を潤ほし、消渇を止め、關節を利す。丹石を服した人はこれを食ふが宜し。瘡腫、熱毒を免れる】(鼎)【心脊の冷氣、腰脊の冷風。五臟を利し、胃を健にし、健啖ならしめる】(藏器)【中を温め、食物を消化し、陽を起す】(蕭炳)【血色を益す】(日華)

殼　修　治　日華曰く、凡そこれを用ゐるには、陳久なるものを取り、炭火で赤く煆き米醋に淬すこと三回、火毒を出して粉に研る。

氣　味　【甘く鹹し、平にして毒なし】　主　治　【燒いて醋に淬し、醋で丸にして服す。一切の血氣、冷氣、癥癖を治す】(日華)【血塊を消し、痰積を化す】(震亨)【肉を連ねて燒いて性を存し、研つて小兒の走馬牙疳に傅けるが有效である】(時珍)

發　明　時珍曰く、鹹は血に走つて堅きを耎にする。故に瓦壟子は能く血塊を消し、痰積を散するのだ。

(一)車渠（海藥）

和名　しやこ
學名　Tridacna gigas, L.
科名　しやこかひ（車渠貝）科

〔校正〕玉石部より此に移し入る。

〔釋名〕**海扇**　時珍按ずるに、韻會に『車渠は海中の大貝であつて、背上の壟文が車輪の渠のやうだから名けたものだ。車溝を渠といふ』とある。劉積の霏雪錄には『海扇は海中の甲物であつて、その形は扇のやうで背の文は瓦屋のやうだ。三月三日に潮の盡きたとき出る』とある。梵書にはこれを牟婆各(二)揭拉婆といつてある。

〔車渠〕

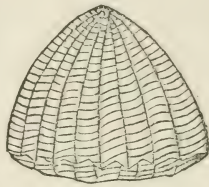
〔集解〕李珣曰く、車渠は、玉石の類だといふ。(三)西國に生ずる。形が蚌蛤のやうで文理がある。西域では七寶の一に數へられてゐる。

時珍曰く、車渠は大蛤だ。大なるは長さ二三尺、濶さ一尺ばかり、厚さ二三寸あり、殼の溝壟は蚶殼のやうで深く大きく、全體に縱の文が

(一)木村(重)曰ク、最大ノ二枚貝ニシテ印度方面ニ多産シ、南方支那ニモ棲ム。二三ノ書、車渠ハほたてがひ(海扇)ト云フモ、ココニハしやこヲ採ル、海月ノ項參照。

(二)一本、揭ヲ掲ニ作ル。

(三)西國トハ地中海沿岸地方ヲイフ。西域ハ今ノ新疆省ノ地ナリ。

（四）道家ニテ精神、魂魄ノ居ル處ヲ屋宅ト稱ス。此ニ宅トイフハ、恐ラクソノ屋宅ノ意ナラン。

あつて瓦溝のやうだ。横の文はない。殼の內部は玉のやうに白皙だ。やはり甚だ高價なもので、番人はこれを器物の飾にする。これは玉石類のものだとか、或は玉類中にも車渠といふものがあつて、それがこの蛤に似てゐるからこの蛤もさういふのだなどといふ謬妄をいふもある。沈存中の筆談には『車渠は、大なるものは箕ほどあり、背に渠壟があつて蚶殼のやうなものだ、これで作つた器は精緻にして白玉のやうだ』とあり、楊愼の丹鉛錄には『車渠で盃を作る』とあり、その註に『酒を一分まで多く滿て過ぎても溢れないといふ。實際に試みたが果してその通りだつた』とある。

殼〔氣味〕【甘く鹹し、大寒にして毒なし】〔主治〕【神を安じ、（四）宅を鎮める。諸毒藥、及び蟲螫を解するには、玳瑁と等分を人乳に磨つて服す。極めて效驗がある】（珣）

〔發明〕時珍曰く、車渠は蓋し瓦壟の大なるもののことだ。故にその功用もやはり彷彿たるものなのである。

（一）木村(重)曰ク、貝子ハ海產ノたからがひナリ。中部支那ヨリ南支那ニ亙ッテ多シ、貝色薄黃、黃、白色等種種アリ。バイツ(貝子)ト稱シ、小兒ノ寶除トスル所アリ。種ハ他ニ二三アリ、又二三ノ屬アリ代表的ノモノヲトル。

貝子（一）（本經下品）

和名　めんがたたからがひ
學名　Erosaria moneta, L.
科名　たからがひ(寶貝)科

釋名　**貝齒**（別錄）　**白貝**（日華）　**海肥**　俗に貝と書く、音は巴（ぺ）である。

時珍曰く、貝の字は象形の文字であつて、その中の二點はその齒刻を象り、その下の二點はその垂れた尾を象つたものだ。古代には貝を貨幣とし、龜を貴寶として交易をなしたもので、その二箇を朋といつた。今では雲南だけでこれを海肥と稱して通用し、單位一を庄といひ、四庄を丰といひ、四丰を苗といひ、五苗を索といふ。

〔貝　子〕

頌曰く、貝は腹下が潔白で魚齒のやうな刻がある。故に貝齒といつたのだ。

集解　別錄に曰く、貝子は東海の池澤に生ずる。採取に一定の時期はない。

弘景曰く、南海に出る。此にいふものは小さい白貝子のことで、一般に軍用のものや服器の裝飾に用ゐるものだ。

○珣曰く、雲南に極めて多く、錢貨として交易に用ゐてゐる。

○頌曰く、貝子は貝類の最小なるもので、やはり蝸のやうな狀態で長さ一寸ばかり、色は微白、また深紫黑のものもある。現に多くは穴を穿けて小兒の翫弄物にしてゐる。北方の地では衣服や氈帽に綴り付けて飾とし、理髪店で鏡の飾などにし、畫家で物を研るに用ゐる。

○○時珍曰く、貝子とは小貝子のことで、大いさは拇指の頂ほど、長さは一寸ばかり、背も腹もみな白い。この種の諸貝はいづれも背が龜の背のやうに隆く、腹下が兩方に開いて相向つて魚齒のやうな齒刻があり、その中の肉は蝌蚪のやうで首と尾とがある。故に魏子才の六書精蘊に『貝は介蟲であつて、背の穹くして渾しきは天の陽に象り、腹の平にして折けたるは地の陰に象る』とある。貝は種類の多いもので、爾雅を見ると『貝は、陸に在るを贆——音は標（ヘウ）——といひ、水に在るを蜬——音は函（カン）——といひ、大なるを魧——音は杭（カウ）——といひ、小なるを鰿——音は脊（セキ）といひ、黑きを玄といひ、赤きを貽といひ、黃質、白文なるを餘貾——音は池（チ）といひ、白質、黃文なるを餘泉といひ、博くして（二）標なるを蚆——音は

（二）標ハ頯（音ハ匡軌ノ切キ）爾雅ニハ

巴（八）——といひ、大にして險なるを蜠——音は困（キン）といひ、小にして（三）狹きを蟦——音は責（セキ）といふ』とある。又、古代の書の相貝經には甚だ詳に記述してあつて、その文に『朱仲がこれを琴高から受けて會稽の太守嚴助に遺す』といひ、『徑一尺の貝は（四）三代の（五）正瑞、靈奇の祕寶である。それに次ぐ一尺までのもので、赤電、黑雲の狀あるものをば紫貝といふ。素質、紅章のものをば（六）珠貝といふ。青池、綠文のものをば綬貝といふ。黑文、（七）黄畫のものをば霞貝といふ。紫貝は疾を癒し、朱貝は目を明にし、綬貝は氣障を（八）消し、霞貝は蛆蟲を（九）服す。齡を延べ壽を增す功能はないけれども、その害を禦ぐ點は同一である。またこれよりも下なるもので鷹喙蟬（一〇）脊のものがある。これはただ濕を逐ひ、水を去るだけのもので奇功はない。貝の大なるもので輪ほどあるものは目を明にする。南海の貝で（一一）硃礫ほどで白駁あるものは、性は寒、味は甘で水毒を止める。浮貝といふは人をして性慾を減退せしめるものだから、婦人に（一二）近けてはならぬ。それは黑白各半するものだ。濯貝といふは人をして善く驚せしめるものだから、小兒に近けてはならぬ。それは黃唇で齒に赤駁のあるものだ。（一三）雖貝といふは人をして瘧を病ましめるもので、

『蚆博而頯』トアリ、註ニ頯ハ中央廣ク、兩頭鋭キナリトアリ。
（三）爾雅ニ橢トアリ。
（四）三代ハ夏、殷、周。
（五）相貝經ニ正ヲ貞ニ作ル。
（六）同書、珠ヲ朱ニ作ル。
（七）同書ニ畫ヲ盞ニ作ル。
（八）同書ニ消ヲ清ニ作ル。
（九）同書ニ服ヲ伏ニ作ル。
（一〇）相貝經、脊ヲ背ニ作ル。
（一一）本書ニ硃ヲ朱ニ作ル。
（一二）本書ニ近ヲ親ニ作ル。
（一三）本書ニ雖ヲ雖ニ作ル。

(一四)本書ニ嚼ヲ瞬ニ作ル。
(一五)本書ニ惠ヲ慧ニ作ル。
(一六)本書ニ惡ヲ志強ニ作ル。
(一七)本書ニ鬼魅ヲ迷鬼狼豹ニ作ル。

黑鼻で皮のないものだ。(一四)嚼貝といふは人の胎を消せしめるものだから、妊婦に見せてはならぬ。それは脊に赤帶の通つてゐるものだ。(一五)惠貝といふは善く人を忘れしめるもので、非常に赤くして內殼に赤絡のあるものだ。醟貝といふは小兒を低能にし、婦人を多淫ならしめるもので、靑唇、赤鼻のものだ。碧貝といふは人をして盜ましめるもので、脊上に縷あつて唇に勾る、雨の時は重く、霽れば輕くなるものだ。委貝といふは人をして(一六)惡せしめ、夜行の場合に能く(一七)鬼魅、百獸を伏するもので、赤くして中が圓く、雨の時は輕く、霽れば重くなるものだ』とある。

[修治] 珣曰く、凡そ藥に入れるには燒いて用ゐる。

斅曰く、凡そこれを使用する場合に花蟲殼を用ゐてはならぬ。眞に似てゐるが、ただその物には效力がない。貝子は、蜜、醋で相對して浸し、蒸して取り出し、淸酒で淘り研つて用ゐる。

[氣味] 【鹹し、平にして毒あり】

[主治] 【目瞖、五癃。水道を利す。鬼疰、蠱毒、腹痛、下血】(本經)【溫疰寒熱。肌を解し、結熱を散ず】(別錄)【燒き研つて目に點ければ瞖を去る】(弘景)【傷寒狂熱】

（甄權）【水氣、浮腫を下す。小兒の疳蝕、吐乳】（李珣）【鼻淵で膿血を出すもの、下痢、男子の陰瘡を治し、漏脯、麪臛の諸毒、射罔の毒、藥箭の毒を解す】（時珍）

附方　舊四、新四。【目花翳痛】貝子一兩を燒いて麪のやうに研り、龍腦少量を入れて點ける。瘜肉があるには眞珠末等分を加へる。（千金）【鼻淵膿血】貝子を燒いて研り、一日三回、三錢づつを生酒で服す。【二便關格】通ぜずして悶脹するは二三日で死亡するものだ。貝齒三枚、甘遂三銖を末にし、漿水で和して服す。須臾にして通ずる。（肘後方）【小便不通】白海肥一對を、一箇は生、一箇は燒いて末にし、溫酒で服す。（田氏方）【下疳陰瘡】白海肥三箇を紅く煆き、研末して搽る。（簡便單方）【食物中毒】貝子一箇を含んで自ら吐く。〇聖惠では、漏脯毒、麪臛毒、及び射罔が諸肉中に在て有毒のものを治するに、いづれも貝子を燒いて研り、半錢を水で調へて服す。【射罔の中毒】方は上に同じ。【藥箭鏃の毒】貝齒を燒いて研り、一日三回、三錢づつを水で服す。（千金方）

(一)紫貝（唐本草）

和名　はなまるゆき
學名　Erosaria caputserpentis, L.
科名　たからがひ（寶貝）科

〔釋名〕**文貝**（綱目）　**砑螺**　時珍曰く、南州異物志に『文貝は甚だ大きく、質は白く、文は紫で、姿なく、自然に外飾を假らずして光彩煥爛たるものだからかく名けたのだ』とある。頌曰く、畫家が物を砑るに用ゐるから砑螺といつたのだ。

〔集解〕恭曰く、紫貝は東南海中に出る。形は貝子に似て大いさ二三寸、背に紫斑があつて骨が白い。南方の蠻地ではこれを採つて貨幣として用ゐる。

宗奭曰く、紫貝は背上が深紫色で黑斑がある。

頌曰く、貝は種類が極めて多く、古代にはこれを寶貨としたのだが、紫貝が就中高價のものだつた。後世では用ゐられず、賤しいものとされて藥中にも使用されることが稀だ。

〔紫貝〕

時珍曰く、按ずるに、陸機の詩疏に『紫貝は質白くして玉の如く、紫點が文をなしてみな行列して一个所に集り、大なるは徑一尺七八寸ある。(二)交

(一)木村(重)曰ク、紫貝ハ貝子ニ似タルたからがひナリ、山頂ニ種種ノ形ノ白斑アリ、栗色ノモノ又濃紫色ノモノアリ、南支那、臺灣等ニ分布ス、他ニ此ニ似タル種アリ。

(二)交趾ハ草部芳草類山薑ノ註、九眞ハ

趾(ち)、九眞(きうしん)ではこれを盃や盤にする』とある。

修治　貝子に同じ。

氣味　【鹹し、平にして毒なし】

主治　【目を明にし、熱毒を去る】(唐本)　【小兒の瘢疹(はんしん)(三)、目翳(もくえい)】(時珍)

附方　新一。　【瘢疹の目に入りたるもの】紫貝、卽ち砑螺(げら)一箇を生で細末に研り、羊肝(やうかん)を切片してその上に摻(ふ)り、括つて米泔で煮熟し、瓶に盛つて一夜露(さら)し、空心に嚼んで食ふ。(嬰童百問)

(一)珂(唐本草)

和名　鈌
學名　Brachydontes sp.
科名　いがひ(貽貝)科

釋名　馬軻螺(綱目)　珬　音は恤(ジツ)である。時珍曰く、珂とは馬勒(はろく)の飾であつて、この(か)貝がそれに似てゐるから名けたものだ。徐表は馬珂としてある。通典に『老鵰(らうてう)は海に入つて珬、卽ち軻(か)となる』とある。

集解　別錄に曰く、珂は南海に生ずる。採取に一定の時期はない。白くして

同上、及ビ蟲部卵生類紫鉚ノ註ヲ見ヨ。

(三) 疹下ニ入目ヲ脱ス。食物本草ニ此ノ二字アリ。

(一) 木村(重)曰ク、珂ハ日本産ノほととぎすかひニ似テ、殼ハ黒色ノ海産二枚貝ナリ、支那本土ニ分布ス。今假ニ屬名ヲ採リテ後攷ヲ俟ツ。

蚌のやうだ。

恭曰く、珂は貝類であつて、大いさは鰒ほど、皮は黄黒で骨は白い。物を装飾する材料になる。

時珍曰く、按ずるに、徐表の異物志に『馬軻螺は太さは圍り九寸、細きは圍り七八寸、長さ三四寸ある』とある。

〔珂〕

修治　斅曰く、珂は、冬期に採つた色の白膩なもの、幷に白い旋水文のあるものに限る。火に觸れてはならぬ。用をなさなくなるものだ。凡そこれを用ゐるには、銅刀で末に刮り、研細して二重に羅ひ、再び千回研る。婦人の藥には入れない。

氣味　【鹹し、平にして毒なし】

主治　【目瞖。血を斷ち、肌を生ずる】(唐本)【瞖膜、及び筋胬肉を消す。刮つて點ける】(李珣)【顔面の黒さを去る】(時珍)

附方　新二。【目に生じた浮瞖】馬珂三分、白龍腦半錢、燒いた白礬一分を研勻して點ける。(聖惠方)【顔の黒さを白くする】馬珂、白附子、珊瑚、鷹屎白等分を末にし、毎夜人乳で調へて傅け、翌朝漿水で洗ふ。(同上)

(一)石蜐 音は劫(カフ)である。(綱目)

和名 かめのて
學名 Mitella mitella, (Linne)
科名 えぼしがひ(烏帽子貝)科

釋名 紫䖳 音は劫、蜐と同じ。紫蘁 音は枴(カフ)である。龜脚(俗名)

集解 時珍曰く、石蜐は東南海中の石上に生ずる。蚌蛤(はうかふ)の屬だ。形は龜の脚のやうで、やはり爪のやうな狀態のものがある。殼は蟹(かい)、鰲(がう)のやうで色が紫だ。食へる。眞臘記に『長さ八九寸のものがある』とある。江淹の石蜐賦には『また足、翼があり、春雨に遇(あ)へば花を生ずる』とある。それは郭璞の江賦に『石蜐は節に應じて葩(は)を揚ぐ』とあるからだ。荀子は『東海に紫䖳(しきょ)、魚鹽あり』といつたのはこのものだ。或はこれを紫貝、及び石決明とするものもあるが、いづれも誤だ。

〔石蜐〕—龜脚—

氣味 【甘く鹹し、平にして毒なし】

主治 【小便を利す】(時珍)

(一)木村(重)曰ク、石蜐ハ潮ノ滿線ノ岩石ノ割目等ニ群生ス、體ハ龜ノ脚ノ如ク、柄部ニ石灰質ノ殼アリ、廣ク海濱ニ分布ス。コレニ似タル別屬アリ、今代表的ナルモノヲ採ル。

(一)淡　菜（宋嘉祐）

和名　けがひ
學名　Mytilus hirsutus, Lamark.
科名　いがひ(貽貝)科

［釋名］ **殼菜**（浙地方で呼ぶ名稱） **海蜌**　音は陛（ヘイ）である。**東海夫人**　時珍曰く、淡とはその味を、殼とはその形をいつたもの、夫人とはその似てゐるところから名けたものだ。

［集解］ 藏器曰く、東海夫人は東南の海中に生ずる。珠母に似たもので、一頭が小さくして中に少しの毛を啣む。味は甘味だ。南方の地では好んで食ふ。

詵曰く、平常燒いて食へば、苦くして人體に宜しくない。少量の米と共に先づ煮て後に毛を除き去り、再び蘿蔔、或は紫蘇、或は冬瓜を入れて共に煮れば更に妙である。

日華曰く、形狀は尾籠なものだが、甚だ人體を益する。

〔淡　菜〕
——東海夫人——

(一)木村(重)曰ク、淡菜ハ海產ノ二枚貝ニシテ、殼皮ハ黑褐色ニ棕櫚毛狀ノ長毛ヲ密生ス。支那ニ於テハ珍味トサレ高價ナリ、婦人ハ迷信的ニコレヲ好食ス。一名クンツアイ(貢菜)ト呼ビ最モ美味トサルル貝ナリ。支那海岸ニ產スルモ頗ル少シ。

(一)木村(重)曰ク、ほらがひナリ、暖海ニ產ス。道教ノ道士コレヲ法螺トシテ吹ク、ハイラ(海螺)ト呼ブ。ハイラト稱

時珍曰く、按ずるに、阮氏は『淡菜は海藻上に生ずるものだ。故に癭を治す。海藻と同功だ』といつてある。

〔氣味〕〔甘し、溫にして毒なし〕日華曰く、多食すべきものでない。多食すれば頭、目を悶闇せしめるが、微し通じをつければ止まる。藏器曰く、多食すれば丹石を發し、腸結を起す。久しく食へば頭髮が脱ける。

〔主治〕〔虚勞の傷憊、精血の衰耗、及び吐血、久痢、腸鳴、腰痛、疝瘕、婦人の帶下、產後の瘦瘠〕(藏器)〔產後の血結、腹内の冷痛。癥瘕を治し、毛髮を潤ほし、崩中帶下を治す。燒いて一頓に食つて飽かしめる〕(孟詵)〔煮熟して食へば、能く五臟を補し、陽事を益し、腰脚氣を理し、能く宿食を消化し、腹中の冷氣痃癖を除くやはり燒いて汁を沸き出させて食ふのである〕(日華)〔癭氣を消す〕(時珍)

(二)海蠃(拾遺)

和名 てつぽら
學名 Thais rud Iphi, Lamark.
科名 ほれがひ(骨貝)科

〔校正〕時珍曰く、唐本の甲香を此の一條に倂せ入る。

スル中ニハ、ばいノ如キ小ナルモノモ稱スル事アリ。

(二) 嶺外ハ廣東、廣西地方、閩中ハ福建省地方。明州、台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

[釋名] 流螺（圖經） 假猪螺（交州記） 厴を甲香と名ける　時珍曰く、螺は蠃と同じ。また蠡とも書く。蠃の文字は虫に從ふ羸の省文であつて、蓋し蟲の羸形のものといふ意味だ。厴の字は掩（エン）と發音する。閉ぢ藏れた狀態をいふ。

[集解] 頌曰く、海螺、卽ち流螺であつて、厴を甲香といふ。南海に生ずるものだ。今は(二)嶺外、閩中の近海の州郡、及び明州にいづれもある。或は台州の小なるものだけが佳いともいふ。その螺は大いさ小兒の拳ほどの青黃色のもので、長さ四五寸ある。諸種の螺の中でこの螺の肉が最も味が厚い。南方地方ではこれを食ふ。南州異物志に『甲香は大いさ甌ほどあつて、前面の一邊は直く攙へて長さ數寸あり、圍りの殼はでこぼことして刺がある。その厴を衆くの香に雜ぜて燒けば益ゝ芳しいが、この物のみを燒けば臭い』とある。今は醫家で用ゐることは稀だが、ただ香を合せる者が用ゐる。又、小甲香といふ螺子のやうな形狀のものがあつて、その蔕を取つて香を調合する。海中の螺類には非常に大なるものもあつて、珠螺といふは瑩潔で珠のやうなものだ。鸚鵡螺といふは形が鸚鵡の頭のやうだ。いづれも杯に作れる。梭尾螺といふは形が梭のやうなもので、今の佛教徒が吹くものがそれである。

（三）日南ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。漲海ハ南海ノ別稱。

いづれも藥に入れない。

時珍曰く、螺は蚌の屬であつて、大なるものは斗ほどある。（三）日南の漲海中に出る香螺は靨を甲香に雜へられる。老鈿螺は光彩があつて鏡の背面を飾るに用ゐる。紅螺は色が微紅、靑螺は色が翡翠のやうだ。蓼螺は味が蓼のやうに辛い。紫貝螺といふは紫貝のことだ。鸚鵡螺は質が白く紫で、頭が鳥の形のやうだ。その肉は常に殼から離れて食物を漁りに外部へ出る。すると寄居蟲がその留守に入つてゐるが、螺が還るとその蟲が外部へ出る。肉が魚に食はれて了ふと殼が浮き出すもので、それを人間が取つて杯に作る。

〔海　蠃〕

肉　氣味　【甘し、冷にして毒なし】

主治　【或は三四十年に亙る永き目痛には、生きた蠃の汁を取つて洗ふ。或は黄連末を內に入れて汁を取つて點ける】（藏器）【菜に合せて煮て食へば心痛を治す】（孫思邈）

甲香　修治　斅曰く、凡そこれを使用するには、生茅香、皂角と共に半日煮

て、石臼で搗いて篩つて用ゐる。

經驗方に曰く、凡そそれを使用するには、黃泥と水とで一日煮て溫水で浴過し、再び米泔、或は灰汁で一日煮て再び浴過し、蜜酒で一日煮て浴過し、焫き乾して用ゐる。

頌曰く、傳信方に記載してあるその方法は『甲香一斤毎に泔一斗半で微火で一復時煮て、泔を換へて再び煮る。かく凡て二回換へて漉し出し、多人數でその香上の涎物を刮り去り、白米三合、水一斗と微火で煮乾し、また蜜三合、水一斗で三伏時煮てから、炭火で地上を焼き熱して酒を洒いで潤ほした上にその香を鋪き、一伏時の間新瓦でその上を蓋ひ、冷えて硬まるを待つて石の臼、木の杵で搗き爛らし、沈香末三兩、麝一分を入れて和して搗き、型に入れて固めてから瓶に入れて貯へ、久しく埋めて置いてから始めて燒く。凡そこの香を燒くには、大火爐に熱灰を多く入れ、剛い炭で強く燒いて盡く燒け去るやうにすべきものであつて、爐邊に火を置き水を煖めて置けば香が散ぜぬ。この法は劉兗奉禮から出たものだ』とある。

宗奭曰く、甲香はよく香烟を(四)管するものだ。沈、檀、龍、麝の香と共に用ゐる

(四)管ハ支配スルトイフホドノ意味ナリ

が就中佳し。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】

【主治】【心腹の滿痛、氣急。痢を止め、淋を下す】（唐本）【氣を和し、神を淸し．腸風痔瘻に主效がある】（李珣）【瘻瘡、疥癬、頭瘡、𧄍瘡、甲疽、蛇、蠍、蜂の螫傷】（藏器）

（一）甲煎（拾遺）

和名未詳
學名未詳

【集解】藏器曰く、甲煎とは諸藥、及び美なる果、花と灰に燒き、蠟で和して製造した口脂のことだ。主たる治效は甲香とほぼ同じ。製造後三年を經過したものが良し。

時珍曰く、甲煎は、甲香と沈、麝等の諸藥や花物とで調製したもので、口脂にもなれば焚爇する香にもなる。

〔甲香〕

唐の李義山の詩に所謂『沈香、甲煎を延燎となす』とは

（一）木村（重）曰ク、甲煎ハ未詳、或ハ螺類ノ乾肉ヲ謂フニ非ザルカ、後攷ヲ俟ツ。

この物のことだ。

［氣味］【辛し、溫にして毒なし】

［主治］【甲疽、小兒の頭瘡、吻瘡、口邊の嘰瘡、耳後の月蝕瘡、蜂、蛇、蠍の瘡。いづれも傅ける】(藏器)

(一)田蠃 (別錄上品)

和名　たにしノ一種
學名　Viviparus quadrata.
科名　たにし(田螺)科

［集解］弘景曰く、田螺は水田中、及び湖、瀆の岸側に生ずる。形は圓く、大なるは梨、橘ほど、小なるは桃、李ほどのもので、一般に煮て食ふ。

保昇曰く、形狀は蝸牛に類して尖つて長く、青黃色である。春、夏に採取する。

時珍曰く、螺は蚌の屬であつて、その殼は旋文をなし、その肉は月の盈ち虧けに隨ふものだ。故に王充は『月天に毀け、螺淵に消す』といつたのだ。說卦に『離を蠃となし、蚌となし、龜となし、鼈となし、蟹となす』とあるは、いづれもその外剛くして內柔なるをいつたものだ。

(一)木村(重)曰ク、支那ノ淡水產ノたにしハ種類甚ダ多シ、今代表的ナルモノヲ採ル。他ニ一屬アリ家鴨飼養餌トシテ用キ、大ナルモノハ有毒トシテ食用トセズ。

肉 【氣 味】【甘し、大寒にして毒なし】

【主 治】【目熱赤痛。渇を止める】(別錄)【煮汁は熱を療し、酒を醒す。眞珠、黄連末を内に入れ、良久して汁を取つて目中に注げば目痛を止める】(弘景)【煮て食へば大、小便を利し、腹中の結熱、目下黄、脚氣衝上、小腹急硬、小便赤澀、手、足の浮腫を去る。生で浸して汁を取つて飲めば消渇を止める。肉を搗いて熱瘡に傅ける】(藏器)【丹石の毒を壓す】(孟詵)【濕熱を利し、黄疸を治す。

〔田蠃〕
蠃子は小さい

搗き爛して臍に貼れば、熱を引いて下行し、禁口痢を止め、水氣、淋閉を下す。水を取つて痔瘡、胡臭に搽る。燒き研つて瘰癧、癬瘡を治す】(時珍)

【附 方】舊二、新二十一。【消渇飲水】晝夜止まず、小便の數あるには、心鏡では、田螺五升を水一斗に一夜浸し、渇するときに飲む。毎日一回、水、及び螺を換へる。或は煮て食ひ汁を飲むも妙である。○聖惠では、糯米二升を稀粥一斗に煮て冷まし、田中の活螺三升をその中に入れ、螺が粥を食ひ盡して沫を吐くを待ち、それを取り

收めて飲む。立ろに效がある。【肝熱の目赤】藥性論では、大田螺七箇を洗淨し、新汲水で養つて泥穢を去り、水を換へて一升で洗つて螺を取り出し、清淨な器に入れ、少量の鹽花を甲中に著けて自然汁を器に承け取つて目に點ける。一箇毎にかくして用ゐてから放ち去る。【爛弦風眼】方法は上に同じ。ただ鹽花の代りに銅綠を用ゐる。【飲酒のための口の糜れ】螺蚌の煮汁を飲む。(聖惠)【酒醉の醒めぬとき】水中の螺蚌、葱、豉を煮て食ひ、汁を飲めば解す。(肘後)【小便不通】鼓の如く腹脹するには、田螺一箇、鹽半匕を生で搗き、臍下一寸三分の處に傅ければ通じる。熊彥誠が嘗てこの病に罹つたとき、この方を授けられて果して癒えた。(類編)【禁口痢疾】大田螺二箇を搗き爛らし、麝香三分を入れて餅にし、烘き熱して臍間に貼る。半日にして熱氣が下行して食思が起り、甚だ效がある。(丹溪)【腸風下血】酒毒に原因するものには、大田螺五箇を、殼が白くなつて肉が乾くまで燒いて硏末し、それを一服として熱酒で服す。(百一)【大腸脫肛】三五寸脫下したるには、大田螺二三箇を井水で三四日養つて泥を去り、雞爪黃連を硏細して末にし、それを靨中に入れて化して水となるを待ち、肛門を濃茶で洗淨し、雞翎にその末を蘸けて掃ひ、軟い帛

で托上する。自然に復して再發せぬ。（德生堂經驗方）【反胃嘔噎】田螺を洗淨して水で養ひ、泥を吐出するを待つて澄し取つて晒し、半乾して梧子大の丸にし、三十丸づつを藿香湯で服す。爛殼を研つて服するもよし。（經驗方）【水氣浮腫】大田螺、大蒜、車前子等分を搗いて膏にし、臍上に攤して貼る。水は排尿と共に下る。象山縣の一縣民がこれを病んだとき、この方を得て癒えた。（仇遠稗史）【酒疸、諸疸】田螺を數日間水で養つて泥を去り、取出して生で搗き爛らし、好酒の中に入れて布帛で濾過し、一日三回その汁を飲む。日に日に效がある。（壽域）【脚氣攻注】生の大田螺を搗き爛らして兩股上に傅け、冷氣が足まで趨ふを覺えて平安になる。又、丹田に傅けて小便を利するがよし。董守約は曾てこれを用ゐて效があつた。（稗史）【痔漏疼痛】乾坤生意では、田螺一箇の中に片腦一分を入れ、水を取つて搽る。それには豫め冬瓜湯で患部を洗淨する。○孫氏は、田螺一箇を針で刺し破り、白礬末を入れて共に一夜埋め、螺內の水を取つて瘡上に掃く。またよく痛を止めて甚だ妙である。○袖珍では、馬齒莧湯で洗淨し、活螺螄を搗いて傅ければその病が癒える。【腋氣胡臭】乾坤生意では、田螺一箇を水で養ひ、靨の開くを俟つて挑げて巴豆仁一箇を中に入

れ、盃中に夏は一夜、冬は七夜置いて自然に水になつたものを取り、常に搽る。久しくして根を絶つ。○又ある方では、大田螺一箇の中に麝香三分を入れ、露地に七週間埋めて取り出し、患部を洗ひ拭つて墨を塗り、再び洗つて見て墨のある部分が中心の患部だから、そこに三五回右の螺汁を點ければ瘥える。「瘰癧の潰破せるもの」田螺を肉共に燒いて性を存し、香油で調へて搽る。（集要方）「疔瘡惡腫」田螺に氷片を入れて水に化し、瘡上に點ける。（普濟）「風蟲癬瘡」螺螄十箇、槿樹皮末一兩を共に碗に入れ、蒸し熱して搗き爛らし、礬紅三錢を入れ、鹽水で調へて搽る。（孫氏）「指を繞る毒瘡」手、足の指に生じたるには、活田螺一箇を生で搗き碎き、それを貼つて縛れば瘥える。（多能鄙事）「妬精陰瘡」大田螺二箇を殼のまま燒いて性を存し、輕粉を入れて共に研つて傅ければ效がある。（醫林集要）

殼

〔氣味〕「甘し、平にして毒なし」

〔主治〕「燒いて研つたものは尸疰、心腹痛、失精に主效があり、瀉を止める」（別錄）「爛れたものを燒き研つて水で服すれば、反胃を止め、卒心痛を去る」（藏器）「爛殼を細末に研つて服すれば、下血、小兒の驚風、痰、瘡瘍の膿水あるを止める」（時珍）

[附方] 新三。【心、脾痛】止まぬには水甲散が主效がある。田螺殼——溪間のものでもよし——を、松柴片を層層に積んで燒き、火を吹き松灰を去つて殼を取つて研末し、烏沈湯(うちんたう)、寛中散の類で調へて二錢を服す。不傳の妙がある。(集要)【小兒の頭瘡】田螺殼を燒いて性を存し、清油で調へて搽る。(聖惠)【小兒の急驚】年古き白田螺殼を灰に燒き、麝香少量を入れて水で調へて灌ぐ(そそぐ)。(普濟)

(一)蝸嬴(別錄)

和名 ひめたにし
學名 Viviparus histricus, Gould.
科名 たにし(田螺)科

[釋名] **螺螄** 時珍曰く、師とは衆多なるをいふ。形が蝸牛(くわぎう)に似てその類のものが衆多だからこの二種の名稱があるのだ。爛殼を **鬼眼睛** と名ける。

[集解] 別錄に曰く、蝸螺は(二)江夏(かうか)の溪水中に生ずる。田螺より小さくして上に稜がある。

時珍曰く、處處の湖、溪にゐるもので、江夏、(三)漢沔(かんべん)に就中多い。大いさは指頭ほどで殼は田螺よりも厚い。ただ泥水だけを食ふものだ。春期に採り、鍋に入れて

(一)木村(重)曰ク、小型ノたにしニシテ寧波料理ニ於テハ美味ノモノトセラル、日本ニテ九州地方ニ分布ス。
(二)江夏ハ石部紫石英ノ註ヲ見ヨ。
(三)漢沔ハ鱗部魚類鮒魚ノ註ヲ見ヨ。

(冒)時珍曰ク、燭館ノ二字恐クハ訛誤ナリ。

蒸すと肉が自ら出る。それを酒で烹、糟で煮て食ふ。清明節後には中に蟲があるから用ゐられない。

藏器曰く、この物は容易に死なぬもので、誤まつて泥に入つたものをそのまま壁に塗り込んで了ふと、數年經つてもなほ活きてゐるものだ。

肉　【氣味】【甘し、寒にして毒なし】

【主治】【(冒)燭館、目を明にし、水を下す】(別錄)【渴を止める】(藏器)【酒を醒し、熱を解し、大、小便を利し、黄疸、水腫を消し、反胃、痢疾、脫肛、痔漏を治す】(時珍)　○又曰く、燭館の二字は訛誤のやうに思はれる。

【附方】新七。【黄疸、酒疸】小螺螄を養つて泥土を去り、日毎に煮て食ひ、汁を飲むが有效だ。(水類)【黄疸吐血】病後に身體、面部が倶に黄になり、一盃ほども吐血し、諸藥の奏效せぬには、螺十箇を水で漂して泥を去り、搗き爛らして一夜露し、五更にその滴んだ部分を取つて服す。二三回で血が止んで癒える。あるこの病の患者にこれを用ゐて奏效した經驗がある。(小山怪證方)【五淋、白濁】螺螄一盌を殼共に炒り熱し、白酒三盌を入れて一盌に煮取り、その肉を挑げ取つて食ひ、その酒

で飲下す。數回にして效がある。(扶壽精方)【小兒の脫肛】螺螄二三升を桶の中に鋪いて坐る。少頃して癒える。(簡便)【痘疹目瞖】螺螄を水で煮て常に食ふが佳し。(濟急仙方)【白遊風腫】螺螄肉に鹽少量を入れ、泥に搗いて貼る。神效がある。(葉氏摘玄方)

爛殼 時珍曰く、泥中、及び墻壁上の年久しきものが良し。火で煆いて用ゐる。

【氣味】同じ。【主治】【痰飲積、及び胃脘痛】(震亨)【反胃、膈氣、痰嗽、鼻淵、脫肛、痔疾、瘡癤、下疳、湯火傷】(時珍)

【發明】時珍曰く、螺なるものは蚌蛤の屬であつて、その殼の大抵蚌粉、蛤粉、蚶、蜆の類と同功なることは、總合して觀察すれば自から首肯かれる。

【附方】新十。【卒に起つて欬嗽】屋上の白螺、或は白蜆殼を搗いて末にし、酒で方寸匕を服す。(肘後方)【濕痰心痛】白螺螄殼を洗淨し、燒いて性を存して研末し、酒で方寸匕を服すれば立ろに止まる。(正傳)【膈氣疼痛】白玉散——壁上の陳い白螺螄を燒いて研り、一錢づつを酒で服するが甚だ效がある。(孫氏)【小兒の(三)軟癤】谷間の年久しき螺螄を灰に燒いて傅ける。(寄效)【湯火傷瘡】多年の乾いた白螺螄殼を煆いて研り、油で調へて傅ける。(普濟)【楊梅瘡爛】古墻上の螺螄殼、辰砂等分、片

(三) 軟癤ハ俗ニナツブシト云フ。

腦少量を末にして搽る。【小兒の(六)哮疾】南向きの墻上の年久しき螺螄を末にし、日晡時に水で適當に調へ、日の落ちる時刻に、手を擧げ合掌し歸依して呑む。卽效がある。(葉氏摘玄方)【瘰癧の已に破れたもの】土墻上の白螺螄殼を末にし、日毎に傅ける。(談埜翁方)【痘瘡の收らぬもの】墻上の白螺螄殼を洗淨し、煆き研つて摻る。(醫方摘要)

(一)蓼蠃(拾遺)

和名　缺
學名　Ethalia sp.
科名　ばていら(馬蹄螺)科

【集解】藏器曰く、蓼螺は(二)永嘉の海中に生ずる。味が蓼のやうに辛辣だ。

時珍曰く、按ずるに、韻會に「蓼螺は紫色で斑文がある。」現に(三)寧波から出る泥螺で、形狀は蠶豆のやうだ。海錯の代りにもなる。

肉【氣味】【辛し、平にして毒なし】

【主治】【飛尸、遊蠱には生で食ふ。薑醋で浸すがいよいよ佳し。(藏器)

(六)哮疾ハ百日咳。

(一)木村(重)曰ク、蓼蠃ハ海產ナリ、かたつむりニ似テ頂低シ、寧波附近ニテハニイラ(泥螺)ト稱ス、泥中ニ棲ム、生食セズ必ズ鹽藏後食ス。きさこもどきニ類ス、今假ニ屬名ヲ定メテ後攷ヲ俟ツ。

(二)永嘉ハ草部芳草類馬蘭ノ註ヲ見ヨ。

(三)寧波ハ唐ノ明州ノ地、今ノ浙江省鄞縣ソノ舊治ナリ。

(一)木村(重)曰ク、寄居蟲ハ鉗脚一有同大ニシテ第二脚ヨリ細シ、印度ヨリ日本ニ分布サル、他ニ一屬アルモ一般的ノモノナトリ、後攷ヲ俟ツ。

(一)寄居蟲（拾遺）

和名　あしほそやどかり
學名　Spiropagrus spiriger, (de Haan)
科名　パグルス科

【釋名】寄生蟲

【集解】藏器曰く、陶氏の蝸牛の註に『海邊に大いに蝸牛に似たものがある。火で殼を炙けば走り出るものだ。これを食へば人に益あり』とあるが、按ずるに、これは螺殼の間にゐる寄居のことで、螺ではない。螺蛤が蓋を開けて食物を漁るのを狙つてゐて、螺蛤が蓋を合せようとすると、已にその殼中に還つてゐるもので、海族は多くこれに宿を借られて了ふものだ。又、南海に蜘蛛に似た一種のもので螺殼中に入つて殼を負ふて走るものがある。觸れると縮つて螺のやうだが、火で炙れば出る。

〔寄居蟲〕

一名䗠といひ、格別功用のないものだ。

時珍曰く、按ずるに、孫愐は『寄居の龜殼中にゐるものを名けて蝞といふ』といつた。寄居もやはり一種だけではない。

(一)海月（拾遺）

和名　いたやがひ
學名　Pecten laqueatus, Sowerby.
科名　ほたてがひ(帆立貝)科

【釋名】玉珧　音は姚(エウ)である。江珧　馬頰　馬甲　藏器曰く、海月は蛤の類であつて、半月に似てゐるところから名けたものだ。水沫から變化したもので、煮ればやはり變じて水となる。時珍曰く、馬甲、玉珧といふはいづれもその形色に因つて名けたものだ。萬震の贊に『厥(そ)の甲の美なること珧玉の如し』とあるはこの物のことだ。

【集解】時珍曰く、劉恂の嶺表錄には『海月は大いさ鏡ほど、白色、正圓のもので、普通海岸に死んでゐる。その柱は(二)搔頭尖(さうとうせん)ほどで、その甲は玉のやうに美しい』とある。段成式の雜俎には『玉珧は、形は蚌に似て長さ二三寸、廣さ五寸、上が大きく、下が小さい。殼中の柱を炙いて食へば(三)牛頭胘項(ごづげんかう)のやうな味がある』とある。王氏の宛委錄には『(四)奉化縣では、四月に南風が吹いて來ると江瑤(かうえう)が打ち上

【氣味】缺　【主治】【顏色を益し、心志を美くする】(弘景)

(一)白井曰ク、海月玉珧元ト二物、時珍之ヲ合ス誤ナリ。木村(重)曰ク、海月ハ扇狀ノ二枚貝、左右槪ネ不同ニ膨ラム、殼表ハ淡褐赤色ナリ。支那本土ノ海岸ニ分布ス。

(二)搔頭ハサシグシ長恨歌ニ見ユ。

(三)胘ハ胃ノ厚キ處ヲ云フ。牛頭胘項ハ何物ヲ指スカ詳ナラズ。

(四)奉化縣、卽チ浙江省ノ奉化縣、今ハ

會稽道ニ屬ス。

(五) 木村(重)曰ク、海鏡、和名ひあふぎ。(帆立貝)科。左右兩殼一樣ニ膨ラミタル小型ノほたてがひニシテ、殼表ニ美麗ナル色アリ、日本ノ中南部ヨリ南方ノ海產。

(六) 瑣⿰王吉ハ璅蛣ノ誤。

げられて來て、一个處で數百採れる。蚌のやうでやや大きく、肉は腥く靭いもので食へないが、ただ四箇の肉柱だけは、長さ一寸ばかりで珂雪のやうに白く、雞汁で瀹でて食ふと肥美なるものだ。火力が過ぎると味がなくなる』とある。

附錄 (五)海鏡　時珍曰く、一名鏡魚、一名瑣⿰王吉、一名膏藥盤といひ、南海に生ずる。兩片相合して形を成すもので、殼は鏡のやうに圓く、內側は甚だ瑩かに滑で日光に映ると雲母のやうだ。その內部には蚌胎のやうな少かな肉があり、腹には大いさ豆ほどで蟹のやうな狀態の寄居蟲がゐて、海鏡が空腹になると、その寄居蟲が出て物を食ひ、歸つて來て中に入ると海鏡が滿腹する。郭璞の賦に(六)『瑣⿰王吉は蟹を腹とし、水母は鰕を目とする』とあるはこれをいつたのだ。

氣味　【甘く辛し、平にして毒なし】

主治　【消渴。氣を下し、中を調へ、五臟を利し、小便を止め、腹中の宿物を消し、人をして饑ゑ易く能く食せしめる。生薑醬と共に食ふ】(藏器)

(一)海燕（綱目）

和名不詳
學名不詳
科名不詳

集解　時珍曰く、海燕は東海に出る。大いさ一寸ばかりのもので、形狀は扁くして面が圓く、背上が青黑で腹下が白い。海螵蛸のやうに脆く、(二)簟茵のやうな紋があり、口は腹下に在つて細沙を食ひ、口の傍に五本の眞直、又は勾になつたものがあつて、それが卽ち足である。臨海水土記に『陽遂足は海中に生ずる。色は青黑で腹が白く、五本の足があるが、頭、尾が判らない。生きてゐる時は體が耎かだが、死ねば乾いて脆い』とあるはこの物だ。臨海異物志の記載に『燕魚は長さ五寸、陰雨には一丈餘も飛び起きる』とあるが、これも或は同名のものだらう。

氣味　【鹹し、溫にして毒なし】　**主治**　【陰雨の際に損痛を發するには、煮汁を服し汗を取れば解す。また滋陽藥にも入れる】（時珍）

(一)木村(重)曰ク、不詳、後攷ヲ俟ツ。白井曰ク、日本ニテハ古來たこのまくらニ充テタリ。英名Star-fish.

(二)簟茵ハ座蒲團、

郎君子（海藥）[1]

和名 すがひ
學名 Turbo coronatus, Gmeline.
科名 さざえ（夈螺）科

【集解】 珣曰く、郎君子は南海に生ずる。雌と雄とあるもので、形狀は杏仁に似て青碧色だ。眞僞を試驗するには、口に含んで熱し、それを醋中に放して見ると雌雄が互に相逐ひ、逡巡として合して下るもの、卵が粟のやうな狀態のものならば眞物である。やはり得難いものだ。

時珍曰く、顧玠の海槎錄に『相思子は、形狀は螺のやうなもので、内部が石のやうに實し、大いさ豆ほどのものだ。篋笥などの中に藏して置くと、幾年經つても壞れない。醋の中へ入れるとくるくるといつまでも廻つてゐるものだ』とある。按ずるにこれが郎君子そのものだらう。

【氣味】 缺 【主治】 【婦人の難產にはこれを手に握れば分娩する。極めて效驗のあるものだ】

本草綱目介部第四十六卷 終

（一）木村（重）曰ク、扁球形ノ卷貝ニシテ殼表黑綠色ヲ呈ス、酢中ニ投入スレバ旋回運動ヲ起ス。支那沿岸ニ分布シ食用トサル、他ニ數種アリ。シヤンツエツー（相思子）ト稱ヘラル。

本草綱目禽部

第四十七卷

本草綱目禽部目錄第四十七卷

李時珍曰く、二足にして羽あるを禽といふ。(一)師曠の禽經には『羽蟲三百六十、毛は四時に協ひ、色は(二)五方に合す』とある。山禽は岩に棲み、原鳥は地に處り、林鳥は朝嘲り、水鳥は夜㖡き、山禽は味が短くして尾が修く、水禽は味が長くして尾が促い。その交尾狀態は、或は(三)尾臎に依り、或は(四)睛睨に依り、或は聲音に依り、或は異類と交合する——雉子、孔雀が蛇と交合するの類——その生れる狀態は、或は翼で抱いて卵を孚し、或は同氣のものから變化し——鷹が鳩に變化するの類——。或は異類のものから變化し——田鼠が鴽に變化するの類——。或は變化して無情のものとなる——雀が水に入つて蛤となるの類——。物界現象の關係はかくもさまざまである。これが研究に從ふものは、容易な努力ではないわけだ。(五)少皡は(六)五鳩、九扈を取つて官名とし、詩人が(七)雄雉、鳲鳩を材料として感懷を觀した如きは、その意味にまた微妙な點がある。(八)妖夭せず、(九)覆巢せず、(一〇)殈卵せずして庖人は六禽を供し、翨——音は翅(シ)である——氏は猛鳥を攻め、哲蔟氏は(一一)夭鳥の巢を覆すことを制定さ

(一)師曠ハ周代ノ晉人、字子野、音律ヲ好クス、又善ク味ヲ知ルト稱セラル、現存ノ禽經ハ依託ノ書ニシテ後世ノ僞作ナリ。

(二)五方ハ東西南北及中央ヲ指ス。

(三)尾臎ノ臎ハ尾肉ヲ云フ。

(四)睛睨ハ眼睛ニテ睥睨スルコト。

(五)少皡ハ少昊ニ同ジ、黃帝ノ子ナリ。

(六)五鳩ハ少昊ノ時ノ官名、五鳩ハ民ヲ鳩ムル者ナリ、五鳩ハ祝鳩鴡鳩鳲鳩爽鳩鶻鳩ノ五氏ナリ、

民ヲ聚ムルヲ以テ職トス、九扈ハ少昊ノ時ノ官名、九扈トハ九農正ヲ指ス、各其職掌アリ今其解ヲ略ス。
（七）雄雉ハ詩經ノ邶風ニ見エ、鴟鴞ハ豳風ニ見ユ。
（八）妖夭ノ夭ハソコナハズト讀ム、夭ハ物ノ穉ナルヲ夭ト云フ、幼ニ同ジ。
（九）覆巢ハ巢ヲクツガヘサズト讀ム。
（一〇）殈卵ハ卵ヲヤブラズト讀ム。
（一一）夭鳥ハ惡鳥ヲ指ス。
（一二）用舍ハ取捨ニ同ジ。
（一三）仁殺ハ生殺ノ意。
（一四）記ハ玉藻王制ヲ指ス。
（一五）木村（重）曰ク、現在鳥ノ種類ハ二萬種以上、留鳥、候鳥、

れたる聖人の物に於ける（一二）用舍、（一三）仁殺の意は、まことに徒然ではなかつたと思はれる。（一四）記に『天産を陽と作す』とあるが、鳥類は陽中の陽であつて、概して多くは陽を養ふものである。ここにはその食料品、藥劑として用ゐられるもの、及び毒害なものとして注意を用するものを集載して禽部とし、すべて七十七種を水禽、原禽、林禽、山禽の（一五）四類に分類した。舊本禽部三品共五十六種の內、本書では一種を併入し、獸部より一種を移入し、蟲部より一種を移入し、有名未用より一種を移入した。

神農本草經五種　梁の陶弘景註。
名醫別錄十一種　梁の陶弘景註。
唐本草二種　唐の蘇恭。
本草拾遺二十六種　唐の陳藏器。
食療本草二種　唐の孟詵、張鼎。
開寶本草一種　宋の馬志。
嘉祐本草十三種　宋の掌禹錫。
日華本草一種　宋人大明。
圖經本草一種　宋の蘇頌。
食物本草十種　明の汪穎。
本草綱目五種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　吳普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對

漂鳥ノ別アリ、分類シテ今鳥古鳥目ハ三亞目、本書ニ走鳥亞目ト胸峰亞目トヲ載ス。
胸峰亞目ハ十四旅ヲ含ミ中十旅本書ニアリ、旅ニハ各數多ノ科アリ科ノ下又屬ヲ置ク、十旅ハ卽チ阿比、鸛、雁、鷹、鶏、鶴、鴿、杜鵑、佛法僧、雀旅ナリ。

唐甄權藥性　蕭炳四聲　唐李珣海藥　孫思邈千金
楊損之删繁　南唐陳士良食性　蜀韓保昇重註　宋寇宗奭衍義
唐愼微證類　陳承別說　金張元素珍珠囊　元李杲法象
王好古湯液　吳瑞日用　朱震亨補遺　明徐用誠發揮
寗源食鑑　汪機會編　陳嘉謨蒙筌

禽の一　水禽類二十三種

鶴 嘉祐　鸛 別錄　鶬鷄 食物 鷛鶒を附す。
陽烏 拾遺　鵚鶖 食物　鸏䴀 綱目　鵜鶘 嘉祐 卽ち淘鵞。
鵞 別錄　鴈 本經　鵠 食物 卽ち天鵞。　鴇 綱目
鶩 別錄 卽ち鴨。　鳧 食療 卽ち野鴨。　鸊鷉 拾遺　鴛鴦 嘉祐
鸂鶒 嘉祐　鵁鶄 拾遺 旋目、方目を附す。　鷺 食物
鷗 食物　鸀鳿 拾遺　鸕鷀 別錄　魚狗 拾遺 翡翠を附す。
蚊母鳥 拾遺

右附方　舊七　新十七

禽の一　水禽類二十三種

(一)鶴（宋嘉祐）

和名　そでくろづる、一名しろづる、一名そでづる。
學名　Sarcogeranus leucogeranus,(Pallas)
科名　つる（鶴）科

〔鶴〕

釋名　仙禽（綱目）　胎禽　時珍曰く、鶴の字の篆文は首を翹げて尾の短い形の形象である。あるひは、白色の(二)皠皠たるものだからかく名けたともいふ。八公相鶴經に『鶴は羽族の(三)宗にして仙人の(四)驥なり。千六百年にして胎產する』とある。胎、仙なる稱呼はここから出たものだらう。世に、鶴は卵生でないなどいふが、それは誤だ。

(一)木村重曰ク、鶴ハ全體純白色ニシテ頭ノ前方及ビ顏ハ裸出シテ青色ヲ呈ス、翼ノ風切ハ黑色、嘴ト脚ハ淡紅色。西比利亞ニ蕃殖シ、冬期ニ中部亞細亞、北部印度、東南歐洲ニ渡ル、日本ニ渡來スルコト稀ナリ。
白鶴パイハオ（北平）パゴ（南支）仙禽チエンチン（北平）ト稱ス。
此外くろづる〔灰鶴青（ウイハオチン）Megalornis grus lilfordi (Sharpe)〕たんてう〔丹頂 M. japonicus (Müller)〕まなづる〔Pseudogeranus vipio (Pallas)〕等モ產ス。

(二)皠皠ハ純白ノ貌。

集解　禹錫曰く、鶴には白いもの、玄いもの、黄なるもの、蒼いものとあるが、藥用には白いものを入れる。その他の色のものはこれに次ぐ。

時珍曰く、鶴は鵠より大きく、長さ三尺、高さ三尺餘、喙の長さ四寸、丹頂にして目赤く、頰赤く、脚青く、頸修く、尾凋み、膝粗く、指纖く、羽白く、(五)翮黑く、また灰色、蒼色のものもある。常に夜半を以て鳴き、その聲は(六)雲霄に唳び、雄は上風に鳴き、雌は下風に鳴き、聲で交つて孕む。蛇、虺をも食ひ、降眞香の烟を聞けば降り、その糞は化して石となる。いづれも物類の相感である。按ずるに、相鶴經には『鶴は陽鳥だが陰に遊ぶもので、その行動は必ず洲や渚、若くはその附近にのみ止まり、林木に集るといふことがない。二年にして(七)子毛を落して黑點を易へ、三年にして産伏する。又七年にして羽翮が具はり、又七年にして飛んで雲漢に薄り、又七年にして舞ふこと節に應じ、又七年にして鳴くこと律に中り、又七年にして大毛が落ちて(八)氄毛が生え、或は雪のやうに白く、或は漆のやうに黑い。百六十年にして雌雄互に視合つて孕み、千六百年にして形が始めて定まる。飲むけれども食はず、(九)胎化する』とある。又按ずるに、兪琰は『龜、鶴は能く任脈を運らすものだ。

(三)宗ハ大本ヲ云フ鳥ノ首領ヲ云フ。
(四)騏ハ駿足ノ馬、此處デハノリモノノ意。
(五)翮ハ尾羽。
(六)雲霄ハ虚空ノコト、オホソラ。
(七)子毛ハ初年ノ羽毛ヲ指ス。
(八)氄毛ハ字書ニ細毛トアリ。
(九)胎化ハ胎生ノコト。

故に多壽にして死といふことがない。氣が中にあるからだ』といつた。鶴の骨で笛を作るとその聲が甚だ清越だ。

白鶴血 〔氣味〕【鹹し、平にして毒なし】 〔主治〕【氣力を益し、虛乏を補し、風を去り、肺を益す】（蕭炳）

〔發明〕 禹錫曰く、按ずるに、穆天子傳に『天子（一〇）巨蒐に至る。二氏（一一）白鶴の血を獻じて飮ましむ。人の氣力を益すと云ふ』とある。

腦 〔主治〕【天雄、葱實と和して服すれば、目が明にして能く夜間字を書き得るやうになる】（抱朴子）

（一二）**卵** 〔氣味〕【甘く鹹し、平にして毒なし】 〔主治〕【痘毒を豫防し、多きをば少からしめ、少きをば出なくする。一箇づつを小兒に與へて食はす】（時珍） 記載は活幼全書にある。

骨 〔主治〕【酥で炙つて滋補藥に入れる】（時珍）

（一三）**肫中の砂石子** 〔主治〕【水に磨つて服すれば蠱の毒邪を解す】（蕭炳）

（一〇）巨蒐、小川琢治博士ノ考證ニ據レバ巨蒐、卽チ漢志朔方郡ノ渠搜ノ地トナシ漢代朔方郡ニ居タルモノノ鄕土ハ賀蘭山脈ノ西ニアリタルモノノ如シトナス。又、禹貢ニ織皮崑崙析支渠搜ノ文アリテ、蔡元定ノ傳ニ水經ヲ引イテ蓋シ朔方ノ地ニ近シトイヒ、小川博士ノ說ニ近シ。然ルニ徐佐山ハ朔方ノ渠搜ト古ノ渠搜國トヲ二トナシ、隋書ノ『東去疏勒千里、去瓜州五千五百里』トアルニ據リ、蔡說ヲ非トナス。記シテ參考ニ供ス。

（一一）白鶴、穆天子傳各種本ミナ白鵠ニ作ル。

（一二）木村(重)曰ク、卵ハ褐色ニ濃斑點アリ一腹二個ヲ常トス。

（一三）木村(重)曰ク、肫ハ嗉囊ヲ云フ。

(一)鸛　（別錄下品）

和名　かふのとり
學名　Ciconia boyciana, Swinhoe
科名　かふのとり（鸛）科

釋名　**皂君**（詩疏）　**負釜**（同）　**黑尻**　時珍曰く、鸛の字の篆文は形を象徴したもので、その背、尾の色が黑いものだから、陸機の詩疏に皂君などの諸名があるのだ。

集解　弘景曰く、鸛には兩種あつて、鵠に似て樹に巣ふものを白鸛といひ、黑色にして頸の曲るものを烏鸛といふ。今は白いものを用うべきものとなつてゐる。

宗奭曰く、鸛は、身は鶴のやうだがただ頭に丹頂がなく、(二)烏帶がなく、それとまた善く唳ばず、ただ喙で相擊つて鳴くだけのものだ。多く樓殿の屋根の端角に巢を作つてゐるものだ。嘗て朝夕この鳥を注意して觀たが、池を作つて魚を養ふといふ說のやうな事實は一向になかつた。

時珍曰く、鸛は鶴に似てゐるが頂が丹でなく、頸が長く、喙が赤く、色は灰白で翅、尾は倶に黑い。多く高木に巣ひ、その飛ぶ有樣は、勢よく大空高く揚つて旋

(一)木村（重）曰ク、鸛ハ全體純白色、只扇羽、風切羽ハ黑色、丹頂鶴ト誤ラル事多シ、東部西比利亞、北支那、朝鮮ニ多シ。兵庫縣出石郡鶴山ハ本邦ニ於ケル唯一ノ蕃殖場ナリ。白鸛パイクアン（北支）パフヰ（浙江）長脚鶴チヤンキヤオゴ（南支方言）ト稱セラレ、南支ニテハ蛇ヲ食スト謂ハル。此外なべかふ黑鸛（ヘイクアン）アリ。陽鳥ノ項參照。

(二)烏帶ハ頸ノ前部ノ黑色ノ羽毛ナラン。

(三)聒ハ嚻シクスルチイフ。蟲部科斗ノ條ニ鳴テ以テコレチ聒スレバ科斗皆出ヅトアルト同意義ナラン。

回し、さながら陣形をなして飛ぶ。天を仰いで號鳴すれば必ず雨が降る。卵を抱く場合は影を以てする。或は聲で(三)聒するものだともいふ。禽經には『鸛は三子を生み、その一が鶴になる。巽極つて震と成り、陰は陽に變ずる。震は鶴である。巽は鸛である』とある。

〔鸛〕

正誤　藏器曰く、人間が巢を探つて鸛の子を取ると、その六十里四方が旱魃になる。能く群り飛んで激しく雨を散らすものだ。その巢の中には泥で池を作り、水を含み運んでそれに湛へ、魚や蛇を飼つてその子に食はせる。鸛が卵を抱くときには、ために冷えることを恐れて礜石を取つて卵を圍み、それで燥氣を助ける。時珍曰く、寥郭たる大自然は、陰陽升降して油然として雲を作し、沛然として雨を下すのである。區區たる微鳥の私忿を以て、いかで天地を旱魃せしめ得る力があ

らうか。況や鸛は水鳥だ、雨を候つ方の側の動物ではないか。池を作るとか、礜石を取るとかいふ說は、ともに陸機の詩疏と張華の博物志から出たものだが、馬鹿げたことだ。

骨　氣味　【甘し、大寒にして毒なし】藏器曰く、小毒あり。沐湯に入れて頭を浴すれば、髮が盡く脫けて再び生えない。又、樹木を枯らす。主治　【鬼、蠱の諸疰毒、五尸、心腹痛】(別錄)　甄權曰く、單獨にこれのみを黃に炙いて研り、空心に方寸匕を暖酒で服するもよし。時珍曰く、千金には、尸疰を治するものに鸛骨丸といふがある。

(四)**脚骨**　及び　**嘴**　主治　【喉痺、飛尸、蛇虺の咬傷、及び小兒の閃癖、大腹痞滿には、いづれも煮汁を服し、また灰に燒いて飲で服す】(藏器)

(五)**卵**　主治　【痘毒の豫解。一箇を水で煮て小兒に喫はせれば、痘を出なくし、或は出てもやはり稀ならしめる】(時珍)　記載は活幼全書にある。

屎　主治　【小兒の天釣驚風の間歇不定に發るには、炒り研つて半錢に牛黃、麝香半錢、炒つた蠍五箇を入れて末にし、半錢づつを新汲水で服す】(時珍)

(四)木村(重)曰ク、脚ハ暗赤色、嘴ハ黑色、下嘴ノ下面ハ赤色。

(五)木村(重)曰ク、卵ハ白色、一腹三個乃至六個。

(一)鴾鶏（食物）

和名　まなづる
學名　Pseudogeranus vipio(Pallas)
科名　つる科

釋名　鴾鴰（爾雅）　麋鴰（爾雅）　鴰鹿（爾雅翼）　麥鶏　時珍曰く、按ずるに、羅願は『鴾、麋はその色が蒼くして麋のやうだからだ。鴰鹿とはその聲をいつたのだ。(二)關西では鴰鹿と呼び、山東では鴾鴰と呼ぶを訛つて錯落といふ。南方では鴾雞と呼び、(三)江地方では麥雞と呼ぶ』とある。

集解　頌曰く、鴾雞は、形狀は鶴ほどの大いさで、頂に丹がなく、兩頰が紅い。

時珍曰く、鴾は水鳥であつて、田澤、洲渚の間に餌を漁る。大いさは鶴ほどのもので青蒼色だが、また灰色のものもあり、頸が長く、脚が高く、群り飛ぶを見て霜の降ることを豫知し得る。或は、これは古代に鷫鷞といつたそのもので、その皮は

〔鴾鶏〕
——鴰鹿——

(一)白井曰ク、まなづるノ考定ハ岡田氏ノ説ニ從フ。
木村（重）曰ク、まなづるハ現今支那ニテハ玄鶴ト呼ビ、鴾鶏ハ死語ニ屬セリ。
(二)關西ハ函谷關以西、即チ今ノ陝西、甘肅二省ノ地ヲ指ス。
(三)江ハ江蘇地方。

裘に作り得るものだといふ。鳳と同名だ。

附録　(四)鷫鸘　時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『鷫鸘は水鳥である。雁の屬であつて、雁に似て頸長くして綠色だ。皮は裘に作り得る。霜の時には暖い土地に來るものだ』とある。故に禽經には『鸘飛べば霜ふり、鸆飛べば雨ふる。鸆、即ち商羊のことだ』とある。又、西方にゐる鳳にも鷫鸘なる名がある。

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【蟲を殺し、蠱毒を解す】（汪穎）

發明　時珍曰く、鶬は古代には多く食つたものだ。故に宋玉の小招に『鵠の酸、(五)臇に鳧、(六)煎には鴻鶬』とあり、景差の大招には『(七)炙鴰、(八)蒸鳧、(九)煔鶉を(一〇)陳ぬ』とある。今ではただ田舍者が捕へて食ふ位のもので、改まつた料理には一向用ゐない。

(一)陽烏（拾遺）

和名　なべかふ
學名　Melanopelargus niger (Linne)
科名　かふのとり(鸛)科

釋名　陽鴉（拾遺）

(四)木村(重)曰ク、鷫鸘、未詳。雁ノ異名ナリト一書ニアリ、後攷ヲ俟ツ。岡田信利曰ク、蘭山先生ハあまつばめニ充テラレタリ、後攷ヲ俟ツ。

(五)臇ハ臛ノ汁少キモノ。臛ハ肉ダケノ羹ナリ。

(六)煎トハ煎熬シタル料理ナリ。

(七)炙ハ焼キ肉。

(八)蒸、本書ニハ烝トアリ。

(九)煔ハ瀹ナリ。ユデ沈マスナリ。

(一〇)陳、本書ニハ隊トアリ。

(一)木村(重)曰ク、陽烏ハ體ノ前半ハ黒色ニシテ種種ノ光澤アリ、胸以下ハ純白色ナリ、歐洲南部ヨ

り蒙古、支那、日本等ニ分布シ、冬期ハ亞弗利加、印度ニ至ル。但シ日本ニテハ現在殆ンド見ラレズ黒鸛［ヘヘクアン(全支)］陽烏［ヤンウー(北平)］ト稱ス。

(二) 建州ハ唐ニ置ク今ノ福建省建甌縣ソノ舊治ナリ。

(三) 木村(重)曰ク、嘴ハ紅赤色。

(一) 木村(重)曰ク、禿鶖ハ體鼠色、頸ノ後方ニ灰褐色ノ三角形ノ斑紋アリ、頭上、眼先ハ皮膚裸出シ、粗ニ剛毛アリ、東部西北利亞、蒙古、支那、海南ニ分布ス、朝鮮ニ多シ。江蘇省江陰ノ動物園ニ一羽アリ(昭和五年春)南支ニハ稀ナ

［集解］ 藏器曰く、陽烏は(二)建州に出る。鸛に似て甚だ小さく、身が黒く、頭が長くして白い。

〔陽烏—烏鸛—〕

(三)嘴 ［主治］ 〔灰に燒いて酒で服すれば、惡蟲に咬まれて成つた瘡を治す〕(藏器)

(一)禿鶖（食物）

和名　くろづる、一名ねずみづる。
學名　Megalornis lilfordi(Sharpe)
科名　つる(鶴)科

［釋名］ 扶老（古今注） 鶖鶬　俗に鶖鶬と書く、時珍曰く、すべて鳥は秋になると毛が脱けて禿げるものだが、この鳥は頭が禿げてゐて、秋に(二)毨するやうでもあり、又、老人の(三)頭童のやうでもあり、また扶杖のやうな狀態でもあるところからかかる諸種の名稱が生じたのだ。說文には『禿鶖』としてある。

リ、禿鶖（トチウ）ト呼ベリ。故ニ此種名ヲ附シテ後改ヲ俟ツ。（鶴項參照）

（二）毨ハ更生毛ヲ云フ。

（三）頭童ハアタマノハゲタル貌。

（四）常賦ハ一定ノ貢納品ノコトナラン。

（五）魯トハ今ノ山東省ノ兗州ヨリ邳、泗ニ至ル一帶ノ地ヲイ

【集解】時珍曰く、禿鶖は水鳥中での大なるもので、南方に出る。大湖沼地にゐるもので、その形狀は鶴のやうで大きく、青蒼色だ。翼を張つた廣さは五六尺、頭を擧げた高さは六七尺あり、頸長く、目赤く、頭の頂には全く毛がなく、頂の皮の二寸四方ばかりが紅色で鶴の頂のやうだ。その喙は深黄色で扁く直く、長さ一尺餘あり、食物の入る喉の下には鵜鶘のやうに胡袋があり、足の爪は雞のやうで黑く。その性極めて貪惡なもので、人と能く鬪ひ、好んで魚、蛇、及び鳥の雛を喫ふ。詩に『鶖あり。梁にあり』とあるはこのもので、元から入つたもので、我が明朝の（四）常賦にもやはり鶖鶬の供御を奉るといふやうなことがある。按ずるに、飲膳正要に『鶖鶬には白いもの、黑いもの、まだらなものの三種あつて、名けて胡鶖鶬といふ。その肉にもやはり差異がある』とある。又按ずるに、景煥の閒談には『海鳥の鶢鶋は即ち今の禿鶖だ』とあつて、その説は環氏の呉記に所謂『鳥の大なるは禿鶖、小なるは鷦鷯』とあると合致してゐる。現に洪水の年に鶖がともすると人里近くまで飛んで來るので、一般人が怪しみ駭くこともあるが、これはまた（五）魯人が鶢鶋を怪んだといふ話と同じことで、いづれも平常見ないものだから怪むのだ。

肉　氣味【鹹し、微寒にして毒なし】正要に曰く、甘し、溫なり。主治【蟲、魚の中毒】(汪頴)【中を補し、氣を益し、甚だ人體を益する。炙つて食ふが就中美味だ。脯にして日常の食事にすれば氣力を强くし、奔馬に追ひつくほど走れるやうになる】(時珍) 記載は飲膳正要、及び古今注、禽經にある。

〔鶖　鷺〕

髓　氣味【甘し、溫にして毒なし】主治【精、髓を補す】(正要)

(六)喙　主治【魚骨哽】(汪頴)

(七)毛　主治【水蟲の毒を解す】(時珍) 記載は埤雅にある。

(一)鸏鸇　音は蒙童(モウ　トウ)である　(綱目)

和名　くろへらさぎ
學名　Platalea minor, Temm. et Schleg.
科名　とき(朱鷺)科

釋名　越王鳥(綱目)　(二)鶴頂(同)　鵅鷆(同)

集解　時珍曰く、按ずるに、劉欣期の交州志に『鸏鸇、卽ち越王鳥である。

(六)木村(重)曰ク、喙ハ基部綠色ニシテ先端黃色。

(七)木村(重)曰ク、毛ハ鼠色、白、灰褐色。

(一)木村(重)曰ク、くろへらさぎハ體白色、頭部黑ク、體ニ黃褐色ヲ混ズ、嘴偏平ニシテ杓子狀ヲ呈ス、支那南方ニ產ス、朝鮮、臺灣ニモ多少

水鳥であつて、(三)九眞、交趾に出る。大いさは孔雀ほど、嘴は長くして一尺餘あり、黄・白、黒色で漆のやうに光瑩だ。南方の地ではこれを飲器に作る』とある。(四)羅

【鸏䴉】

山疏には『越王鳥は形狀は鳥、鳶のやうで足が長く、口が勾つて末が冠のやうになり、二升ほどのものを受け得るやうになつてゐる。これを酒器にすれば極めて堅緻なものだ。この鳥は地を踐まず、江、湖の水を飲まず、衆くの草を啄まず、魚を食はず、ただ木葉のみを啖ふ。糞は薫陸香のやうなものだ。その山の者はこれを取つて香にする。薬用にも用ゐ得るものだ』とある。楊愼の丹鉛錄には『鸏䴉、卽ち今の(五)鶴頂だ』とある。

糞

【主治】【水で和して雜瘡に塗る】(竺眞羅山疏)

產ス、モントント發音ス、精シクハ後考ヲ俟ツ。

(二)丹羽正伯曰ク、本草綱目並ニ諸藥類書等ノ書ニ鶴頂ヲ鸏䴉ト同物ト考候ハ誤ニテ御座候、鸏䴉ノ形彷彿申候故混雜仕候ト相見申候、外ノ書ヲ考候ニ鸏䴉ハ大鳥ニテ、鶴頂ハ鴨ノコトクナリト相見申候。

(三)九眞交趾ハ草部芳草類山薑ノ註ヲ見ヨ。

(四)羅山疏ハ竺法眞羅浮山疏ノ略。

(五)白井曰ク、典籍ニ鶴頂鳥形大如鴨毛黑色黄嘴亦長其腦蓋骨厚寸餘外紅色光如黄蠟嬌黃可愛堪作腰帶出南番大海中トアリ、本草啓蒙ニ之ヲホウテンニ充ツ、曰ク和產ナシ異國ヨリ頭骨ノミ來ル、俗ニ是ヲ鳳頂ト云フ或ハ鳳顛ニ作ル、黄色ニシテ甚ダ硬ク瑪瑙ノ如シ、一方ニ赤眼アル者アリ緒締ニ造ル、今渡ルモノハ多クハ黄色ノミニシテ赤眼ナシ云云。

白井曰ク、ホウテンダマハ簪ノ珠ニモ用ウルコトアリ、予ガ母曾テ之ヲ藏セリ黄色ニシテ一方ニ紅眼アリシヲ覺ユ、丹羽正伯物產日記

ニ鶴頂嘴ノ圖アリ、之ヲ鷹司信輔氏ニ示シ鑑定ヲ請ヒシニ Rhinoplax vigil(Forster) ナランカトノ回示ヲ得タリ。

鵜鶘(一)(宋嘉祐)

和名 がらんてう
學名 Pelecanus crispus, Bruch.
科名 ペリカン科

〔釋名〕 犁鶘 鵹鶘 音は戸澤(コタク)である。**逃河** 一には淘と書く。**淘鵞**

禹錫曰く、昔、肉を竊(ぬす)んだある者が河に入つてこの鳥に化したので、今でも肉を有つてゐる。それで逃河と名けたのだといふ。

〔鵜鶘 ——淘河——〕

時珍曰く、これは俗間の語り草だ。按ずるに、山海經に『(二)沙水、犁鶘(りこ)多し。その名を自ら呼ぶ』とある。それが後世轉訛して鵜鶘(ていこ)となつたのだ。又、吳諺に、『夏至前に來るものを犁鶘と呼び、水を主(つかさど)るといふ。夏至後に來るものを犁塗と呼び、旱を主るといふ』とある。陸機が

(一) 木村(重)曰ク、鵜鶘ハ體白色、背面ノ羽毛軸ハ黒ク下喉ニ黄斑アリ、歐洲ノ東南部、北部亞弗利加、蒙古支那ニ分布ス。鵜鶘(テイウ(南支))ト稱ス。

(二) 沙水、東次二經ニ「盧其之山。無草木。多沙石。沙水出焉。南流注于涔水。其中多鵹鶘」トアリテ、註ニ音黎トアリ。畢氏ハ黎ト鵜ト聲相近シ、鶘ハ當ニ胡ト爲スベシトイフ。

『水澤へ行くと、胡を以て水を戽み涸して魚を取つて食ふ』といつたところから、鵜濁といひ、淘河といひ、俗に淘鵝といふ。形を形容した名稱であつて、又、訛つて駝鶴ともいふ。

［集解］禹錫曰く、鵜鶘は大いさ蒼鵝ほどで、頤下に二升ほどの物を容れ得る皮袋があり、それが展び縮みが自由で、中に水を盛つて魚を養つて置く。身は全部水沫だといふが、しかし胸前に二箇の肉塊があつて、列つて拳のやうになつてゐる。詩に『惟れ鵜梁に在り、其の味を濡さず』とあるが、咮とは喙のことで、嘴を大切にするものだといふ意味だ。

時珍曰く、鵜鶘は處處にゐる水鳥で、鶚に似て甚だ大きく、灰色だ。蒼鵝のやうで喙が長さ一尺餘あり、眞直で且つ廣く、口中は正赤色で、頷下の胡の大いさが數升入れる囊ほどある。好んで群り飛び、水に沈んで魚を食ひ、また能く少かの水をば戽み涸らして魚を取る。地方人はその肉を食ひ、その脂を取つて藥に入れる。その翅骨、胻骨で作つた筒は喉鼻藥を吹くに甚だ妙だ。水を囊に盛つて魚を養ふとか、身は全部水沫だとかいふ說は蓋し妄談だ。

一　胡ハ皮袋ヲ云フ。

(四)嗉ハ食物ヲ貯フル食道ノ一部、胡ニ同ジ。

(五)木村(重)曰ク、嘴ハ蒼黑色。

○又按ずるに、晁以道は『鵜の屬に漫晝といふものがある。嘴で水を晝いて魚を漁(あさ)るのだが、一息も停まずに行動するものだ。また信天緣といふがある。これは終日凝立してその場所を易へず、魚がその前を通り過ぎるまで俟つてゐてそれを取る。所謂天緣に信(まか)せるといふわけだ。俗に青翰と名けるそのものである。また青莊とも名ける。この二鳥は貪慾な人物と、淸廉な人物とに喩(たと)へる』とある。

脂油 時珍曰く、剝いで取つた脂を煮り溶して掠め取る。それをその鳥の(四)嗉(そ)に盛れば滲み漏らないが、他の物に盛れば透り走つて了ふ。〔氣 味〕【鹹し、溫、滑にして毒なし】〔主 治〕【癰腫(ようしゅ)に塗り、風痺を治し、經絡に透り、耳聾を通ずる】(時珍)

〔發 明〕 時珍曰く、淘鵝油は性走つて能く諸藥を導き、或は患部に透つて毒を抜くものだから、能く聾、痺、腫毒の諸病を治す。

〔附 方〕 新一。【耳聾】 淘鵝(たうが)油半匙、磁石一小豆ほど、麝香少量を和勻し、綿で裹んで挺子にして耳を塞ぎ、口に生鐵少量を含む。三五回用ゐれば效がある。(青囊)

(五)**嘴** 〔氣 味〕【鹹し、平にして毒なし】【赤白久痢で疳となつたるに主效があ

る。燒いて性を存して研末し、水で一方寸匕を服す』(嘉祐)

舌【主治】『疔瘡』(時珍)

毛皮【主治】『反胃吐食。燒いて性を存し、二錢づつを酒で服す』(時珍) 記載は普濟にある。

(一)鵞 (別錄上品)

和名　がてう
英名　Gooso
學名　Anas domestica, Linne.
科名　がんあふ(雁鴨)科

【釋名】**家雁**(綱目) **舒雁** 時珍曰く、鵞は自ら呼ぶやうな鳴聲を出すものだ。江東地方でこれを舒雁といふは、雁に似て舒遲たるものだからだ。

【集解】時珍曰く、(二)江淮以南で多くこれを畜ふ。蒼、白の二色があり、また大きくして胡袋を垂れたものもあつて、いづれも眼が綠色、喙が黃色で掌が紅く、善く鬪ふ。その夜中に鳴くは時刻に應ずるものだ。師曠の禽經には『脚の(三)臎に近きものは。能く步む。鵞、鶩がそれだ』とある。又『鵞が卵を伏ふには月に逆ふ』とある。これは卵を抱くときは月に向ひ、月の氣を取つて卵を助けるといふ意味で

(一)木村(重)曰ク、鵞ハ白色ノモノ多シ家禽化サレタル雁ナリ、日本ノ本草書ニ云フ唐雁ナリ。鵞[ウオ(北支)ゴウ(南支)]ト稱ス。

(二)江淮ハ水部雨水ノ註ヲ見ヨ。

(三)臎ハ尾肉ヲ云フ。

ある。性能く蛇、及び蜊を啖ひ、射工を制す。故にこれを飼養すれば能く蟲虺を辟ける。或は鶩は性來生蟲を食はぬものだともいふが、さうではない。

白鷺膏 臘月に錬つて取收める。［氣味］【甘し、微寒にして毒なし】［主治］【耳に灌げば卒聾を治す】(別錄)【皮膚を潤ほす。顔の化粧料に合せるがよし】(日華)【顔に塗れば急に悅澤ならしめる。(頭)白唇瀋、手、足の皴裂、癰腫を消し、礜石の毒を解す】(時珍)

［鶩］

肉 ［氣味］【甘し、平にして毒なし】日華曰く、白鶩は辛し、涼にして毒なし。蒼鶩は冷にして毒あり、瘡腫を發す。詵曰く、鶩肉は性冷なり。多食すれば霍亂せしめ、痼疾を發す。李廷飛曰く、嫩い鶩は毒である。老いたる鶩は良である。

［主治］【五臟を利す】(別錄)【五臟の熱を解す。丹石を服する人に宜し】(孟詵)【煮汁は消渴を止める】(藏器)

(頭)唇瀋ハ口吻着ノ別名、俗ニカラスノキウト云フモノ。

【發明】藏器曰く、蒼鷺は蟲を食ふ、射工の毒に主として良し。白鷺は蟲を食はない、渴を止めるに勝れてゐる。

時珍曰く、鷺は氣、味俱に厚い。風を發し、瘡を發することこれより甚しきものはない。火で熏じたものは就中毒であつて、曾てその害の事實を目擊した。しかるに本草には、その性を涼なりとし、五臟を利すといひ、韓悉の醫通に、この物は風を疏すといつてあるが、さういふ筈はないと思ふ。又、葛洪の肘後方に『人家に白鷺、白鴨を養へば射工に食はるるを辟くべし』とある。して見ると、所謂白鷺は蟲を食はぬ、病を發せぬの說も正しくはない。但し蒼鷺に比すればその力が薄いといふだけである。渴を止めるといふことだが、凡そ胃氣を發するものは皆よく津を生ずるものだ。ただ渴を止めるだけのものと解釋すべきものではない。そこで性涼なり、平なりといふけれども、參苓白朮散は渴を治する要藥だが、しかし全然寒でも涼でもないではないか。

臎 一名尾罌。尾肉である。時珍曰く、內則では舒鴈の臎は食へぬとなつてゐる。厭ふべき臊氣があるからだ。しかし俗間の賤い者はこれを嗜んで食ふ。【主治】

【手足の皴裂に塗る。耳中に納れば、聾、及び聤耳を治す】(日華)

血　[氣味]【鹹し、平にして微毒あり】[主治]【射工の中毒には、これを飲み、幷にその身に塗る】(陶弘景)【藥毒を解す】時珍曰く、祈禱家で多くこれを用ゐる。

膽　[氣味]【苦し、寒にして毒なし】[主治]【熱毒を解す。また痔瘡の初期には頻りにこれを塗抹すれば自ら消する】(時珍)

[附方]　新一。【痔瘡の核あるもの】白鵞膽二三箇から汁を取り、熊膽一分、片腦半分を入れて研勻し、氣の泄れぬやうに甆器に入れて密封し、使用するには手の指で塗る。立ろに效がある。(劉氏保壽堂方)

卵　[氣味]【甘し、溫にして毒なし】[主治]【中を補し、氣を益す。多食すれば痼疾を發す】(孟詵)

涎　[主治]【咽喉の穀賊】(時珍)

[發明]　時珍曰く、按ずるに、洪邁の夷堅志に『小兒が誤つて稻芒を呑み、咽喉中に粘著して出ないものを穀賊と名ける。ただ鵞涎を灌げば癒える』とある。蓋

し鵞涎の穀を消かすは相制の關係だ。

毛【主治】【射工水毒】(別錄)　【小兒の驚癇。又、灰に燒いて酒で服すれば噎疾を治す】(蘇恭)

【發明】弘景曰く、(五)東川には溪毒が多いが、鵞を養つてそれを辟ける。毛羽でも佳く、幷にその血を飮む。鵞は必ずしも射工を食ふものではないが、蓋しその威力で相制するのだ。

時珍曰く、禽經に『鵞飛べば蜮沈む』とある。蜮とは射工のことだ。又、嶺南異物志には『(六)邕州の蠻地では鵞腹の毳毛を選り取つて衣服や寢具にする。綿のやうに柔で暖だが性は冷である。嬰兒に尤も宜く、能く驚癇を辟ける』とあり、柳子厚の詩に『鵞毛臘を禦ぎ山(七)罽を縫ふ』とあるがそれである。蓋し毛と肉とは性が異ふのだ。

【附方】新二。　【通氣散】誤つて銅錢、及び鉤繩を呑みたるには、鵞毛一錢を灰に燒き、磁石を皂子大ほどを煆き、象牙一錢を燒いて性を存して末にし、半錢づつを新汲水で服す。(醫方妙選)　【噎食病】白鵞の尾毛を灰に燒き、一錢づつを米湯で

(五) 東川トハ今ノ四川省ノ東部ヲ指ス。

(六) 邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。

(七) 罽ハ毛織物ヲ云フ。

(八)木村(重)曰ク、掌上黄皮ハみづかきの膜ナリ、一般ニ水禽ノ水カキハ支那ニテ料理トシテ上味ナリ。

(九)眠倒ハ横ニナリテ居ルモノ。

(一)木村(重)曰ク、ひしくひハ羽ハ褐色尾ノ先端白ク嘴ハ淡黄色ナリ、支那本土ニ冬期飛來ス。鴈(シエン(北支)、鴈鵞ゲイゴ(南支))ト稱サル。日本ニ普通

服す。

(八)**掌上の黄皮** 主治 【焼き研つて脚の趾縫の濕爛に捺る。焙じ研り油で調へて凍瘡に塗るが良し】(時珍) 記載は譚埜翁諸方にある。

屎 主治 【汁を絞つて服すれば小兒の鵞口瘡を治す】(時珍) 記載は祕錄にある。【蒼鵞の屎を蟲、蛇の咬毒に傅ける】(日華)

附方 新一。【鵞口瘡】内部から生じて外に出るは治するが、外部から生じて内に入るものは治せない。草を食ふ白鵞の排泄した淸糞から汁を濾し取り、沙糖少量を入れて捺る。或は雄鵞糞の(九)眠倒するものを取つて灰に焼き、麝香少量を入れて捺る。いづれも效がある。(永類鈴方)

(一)鴈 (本經上品)

和名 ひしくひ
學名 Anser segetum serrirostris, Swinhoe
科名 がんあふ(雁鴨)科

釋名 鴻 時珍曰く、按ずるに、禽經に『鳱とは水を以て言ふ。(二)南よりして北す。鳫とは山を以て言ふ、(三)北よりして南す』とあり、張華の註に『鳱、鳫、い

づれも音は鴈である。冬になれば南に適いて水干に集る、故にその文字は干に從ふ。春になれば北に嚮つて山岸に集る、故にその文字は岸に從ふ。小なるを鴈といひ、大なるを鴻といふ。鴻とは大の意味だ。多く江渚に集るから文字は江に從ふ』とある。梵書にはこれを僧(四)娑といつてある。

［集解］別錄に曰く、鴈は江南の池澤に生ずる。取るに一定の時期はない。

弘景曰く、詩疏に『大なるを鴻といひ、小なるを鴈といふ』とあつて、現に鴈類にはやはり大小はあるが、いづれも同一形狀のものだ。また野鵞と呼び、鴈より大きいものがある、人家で養ふ蒼鵞に似たものをば駕鵞といふ。鴈は江湖の地に棲むもので、夏は產卵期なので皆北に往く。これは恐らく(五)鴈門以北の地ではこれを食はないからであらう。採るに一定の時期はないが、冬期に採つたものが好い。

恭曰く、鴈は陽鳥である。燕と反對に往來するもので、冬には南に翔り、夏には北に徂つて北方で子を孵すものだ。北方人はこれを食はないからなどといふことはない。

宗奭曰く、鴈は熱いときは北に往き、寒いときは南に來る。かくて和氣を選んで棲

ノまがん〔Anser albifrons(Scopoli)〕モ亦產シ、鴻鴈ト稱セラル。
(二) 原書ニ北ヨリ南ストアリ。
(三) 原書ニ南ヨリ北ストアリ。
(四) 正字通ニ娑ヲ婆ニ作ル。
(五) 鴈門ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。

むものだ。(六)禮幣にこれを用ゐる意味は、一はその違はざる信を取り。一はその和を取つたものだ。

時珍曰く、鴈は、その形狀は鵞に似て、やはり蒼白の二色がある。今は一般に白くして小なるものを(七)鴈とし、大なるものを鴻とし、蒼いものを野鵞とし、また鴚鵞ともいふ。これは爾雅に鵱鷜とあるそのものだ。鴈に四德あつて、寒くなれば北から南に來て(八)衡陽までに止まり、熱ければ南から北へ往つて鴈門に歸る、これは信である。飛ぶには行列の順序があつて、前方のものが鳴き後方のものがそれに和する、これは禮である。配偶者を失へば再び他と配偶せぬ、これは節である。夜には羣り宿してその内の一羽が巡警し、晝は蘆を啣んで網を避ける、これは智である。

〔鴈〕

(六)禮幣ハ贈答品。

(七)稻若水曰ク、雁上白字ヲ加フベシ。

(八)衡陽、三國呉ニ縣ヲ置ク、今ノ湖南省衡山縣ノ東北ニ故城アリ。今ノ衡山縣ハ湖南省衡陽治ナリ。

ところがこれを捕る者がその特長を利用し、囮を畜つて置いてその同類を誘き寄せる。それは愚なる一點だ。南へ向つて來るときは痩せてゐて食へないが、北に向つて往くときは肥えてゐるから取るに適當の時期だ。又、漢書、唐書にはいづれも五色の鴈なる記載がある。

鴈肪　［正誤］【一名鶩肪】弘景曰く、鶩とは野鴨のことだ。本經に『鴈肪、亦た鶩肪と名く』とあるが、これは鴈と鶩と相類似してゐるので誤つたのだ。

［氣味］『甘し、平にして毒なし』［主治］『風攣拘急、偏枯血氣、通利せぬもの。久しく服すれば氣を益し、飢ゑず、身を輕くし、老に耐へる』(本經)　○心鏡に曰く、上記の證には、肪四兩を錬淨し、毎日空心に一匙づつを暖酒で服す。【毛、髮、鬚、眉を長くする】(別錄)　詵曰く、生髮膏に合せて用ゐる【諸石藥の毒を殺す】(吳普)『耳聾を治す。豆黃と和して丸にして用ゐれば、勞を補し、肥えたるを痩せしめ、人體を白くする』(日華)【癰腫、耳疳に塗る。又、結熱胸痞の嘔吐を治す】時珍曰く、外臺にこの證を治する鴈肪湯といふがある。

［附方］新一。【生髮】鴈肪を日毎に塗る。(千金方)

肉　【氣味】『甘し、平にして毒なし』　思邈曰く、七月には鴈を食つてはならぬ、人の精神を傷めるものだ。禮に『鴈を食ふには腎を去る。人に利あらず』とある。【主治】『風痲痺。久しく食すれば氣を動じ、筋骨を壯にする』(日華)　『臓腑を利し、丹石の毒を解す』(時珍)

【發明】　弘景曰く、鴈肪は一般に多く(九)食はないが、その肉はやはり好いものらしい。宗奭曰く、一般に鴈を食はぬが、それはその物が陰陽の升降、少長の行序を知るものだから、それで食はぬといふのであらう。道家ではこれを天が厭ふといふ。これも一説だが、食へば諸風を治するものだ。

骨　【主治】『灰に燒き、米泔に和して頭を沐すれば髮を長くする』(孟詵)

毛　【主治】『喉下の白毛は小兒の癇を療ずるに有效だ』(蘇恭)　『自ら落ちた翎毛を小兒が佩びると驚癇を辟ける』(日華)

【發明】　時珍曰く、按ずるに、酉陽雜俎に『臨邑地方では春、夏に網で鴻、鴈を取り、その毛で著氣を禦ぐ』とあり、又、淮南萬畢術には『鴻毛で嚢を作れば以て江(一〇)北に渡る可し』とある。やはり一箇の壺を持つて流に入るやうなものだ。

(九) 大觀ニ食字下ニ其肉ノ二字アリ。

(一〇) 金陵本ニ北ヲ此ニ作ル。

水を渡る者には心得て置くべきことである。

屎白　【主治】【灸瘡腫痛には、人精で和して塗る】(梅師)

(一)鵠(食物)

和名　おほはくてう(大白鳥)
學名　Cygnus cygnus(Linne.)
科名　がんあふ(雁鴨)科

【釋名】**天鵞**　時珍曰く、按ずるに、師曠の禽經に『鵠はその鳴聲が皓皓たるものだから鵠といふ』とある。吳僧贊寧は『凡そ物の大なるをばみな天を以て名とする。天とは大なるものの意味だ』といつた。して見ると天鵞なる名稱も蓋しこの意味からであらう。羅氏は『鵠、即ち鶴なり』といつたが、やはりさうではない。

【集解】時珍曰く、鵠は鴈より大きく、羽毛が白くして澤がある。翔れば極めて高く揚り、善く長途を行く。所謂『鵠は浴せずして白く、一擧にして千里』とはそのことだ。また黃鵠といふもあり、丹鵠といふもあつて、(二)湖、海、江、漢の間にいづれもゐる。遼東に産するものは就中甚しく海青鶻を畏れる。その皮毛は天鵞絨といふ服飾になる。按ずるに、飮膳正要には『天鵞には四種の品等があつて、大

(一)木村(重)曰ク、おほはくてうハ全身純白色、嘴基部ハ黃色ナルモ他ハ黑色ナリ、歐洲、亞細亞ノ北部ニ分布シ、冬期ニ地中海、支那ニ渡來ス、青森縣小湊海岸ニテハ年年數百羽越冬ノ爲ニ飛來ス、支那ニテモ珍鳥トシテ想吃天鵝肉ノ言アリ。鵠(クー)天鵝「テイエンエ(北支)テンオ(南支)」ト稱ス、別ニはくてう「Cynus bewicki (Jankowski Alpher.)」アリ。

(二)湖海ハ洞庭、鄱陽等ノ大湖、及ビ海洋。江漢ハ揚子江、

(二)漢江ヲ指ス。

(三)花斑ハ羽毛ニ斑紋アルヲ云フ。

金頭鵞といふは鳫に似て項が長い。食料としての上級品で鳫よりも美味だ。小金頭鵞といふは形がやや小さい。花鵞といふはその色が(三)花斑になつてゐる。一種は不能鳴鵞で、飛ぶと翔ける響がある。その鵞の肉は微し腥い。いづれも大金頭鵞に及ばぬものだ。それぞれ特産地がある』とある。

〔鵠〕

——天　鵞——

肉　氣味【甘し、平にして毒なし】

頴曰く、冷なり。忽氏曰く、熱なり。主治【腌け、炙つて食へば人の氣力を益し、臟腑を利す】(時珍)

油　冬期に肪を取つて錬つて取収める。氣味　缺　主治【癰腫に塗り、小兒の聤耳を治す】(時珍)

附方　新一。【聤耳で膿の出るもの】天鵞油で草烏末を調へ、龍腦少量を入れて和して傅ける。立ろに效がある。無いときは鳫油を以て代用する。(通玄論)

絨毛　〔主治〕　【刀杖(たうぢやう)金瘡に貼れば立ろに癒える】(汪穎)

(一) 鴇　音は保(ホ)である。　(綱目)

和名　のがん
學名　Otis tarda dybowskii, Taczanowski.
科名　のがん(野雁)科

〔釋名〕　**獨豹**　時珍曰く、按ずるに、羅願は『鴇は豹(へう)の文(もん)があるから獨豹と名けたので、それを鴇と訛つたのだ』といひ、陸佃は『鴇は性羣居し、鴈のやうに行列を爲(つく)る。故にその文字は𠤏に從つたので、𠤏は音は保(ホ)である。相次ぐの意味だ』といつた。詩に『鴇行』とあるはこの鳥のことだ。

〔鴇〕
——青　翰——

〔集解〕　時珍曰く、鴇は水鳥であつて、雁に似て斑文があり、後趾がない。性木に止まらぬもので、その飛ぶ状態は肅肅たるものだ。物を食ふには嚙み返して食ふ。肥脂(ひさつ)にして脂多く、

(一) 木村(重)曰ク、まがんニ似テ斑紋豹ノ如シ、北支那ニ多ク分布ス、呼稱ハイヅレモ鳴音ヨリ來ルモノナリ。鴇〔パアオ(北支)又ハペイ(南支)〕鵏〔プー(北支)〕獨豹(トウパオ)青翰ノ稱アリ。

(三) 閩ハ今ノ福建省地方ヲ指ス。

(一) 木村(重)曰ク、あひるハかもノ家禽化サレタルモノ、鴨(アー)家鴨(チヤアー)鴨子(アーツー)ト稱サル。

肉は粗く、味が美味だ。(三)閩地方の俚語に『鴇には舌がなく、兎には脾がない』といひ、或は、雌ばかりで雄がなく、他の鳥と交尾するともいひ、或は、鴇は鷙鳥(してう)を見ると糞で射かける。すると鷙は自ら毛が脱(ぬ)けるものだともいふ。

肉 【氣味】【甘し、平にして毒なし】 時珍曰く、禮記に『鴇奥(ほあう)を食はず』とある。奥とは脾胵(ひし)のこと、深奥なる部分である。【主治】【虚せる人を補益し、風痺氣を去る】(正要)

肪 【主治】【毛髮を長くし、肌膚を澤(つや)やかにする。癰腫に塗る】(時珍)

(一)鶩 音は木(ボク)である。 (別錄上品)

和名 あひる
英名 Duck
學名 Anas boschus domestica, Linne.
科名 がんあふ科

【釋名】 **鴨**(說文) **舒鳧**(爾雅) **家鳧**(綱目) **鸍鴄** 音は末匹(マツヒツ)である。

時珍曰く、鶩は通じて木とも鶩とも書く。性が質木で何等他意ないものだ。故に庶人は以て贄とすといひ、曲禮に『庶人匹を執(と)る』とあつて、匹とは二羽の鶩のことで、匹夫、卑末の意味だ。故に廣雅には鴨を鸍鴄といつてある。禽經には『鴨は鳴

聲が呷呷といふ、その自ら呼ぶ聲を名としたものだ。鳧は能く高く飛ぶが、鴨は舒緩して飛べないものだから舒鳧といふ』とある。

正誤　弘景曰く、鶩、卽ち鴨であつて、家鴨と野鴨とある。

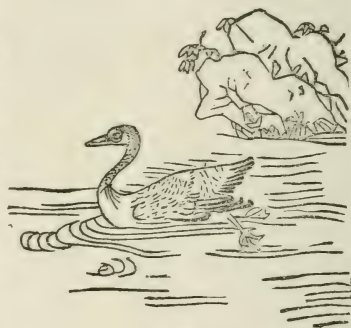
藏器曰く、尸子に『野鴨を鳧といひ、家鴨を鶩といふ』とある。飛翔し得ない有樣は庶人が耕稼を守るやうなものだ。

保昇曰く、爾雅に『(二)野鳧は鶩なり』とあるが、しかし本草に鶩肪とあるは家鴨のことだ。

宗奭曰く、この數說に據ると、鳧と鶩とはいづれも鴨であつて、王勃の滕王閣序に『落霞と孤鶩と齊しく飛ぶ』とあるに見れば、鶩の野鴨なることは明である。勃は名だたる學者だから必ず根據あつていつたものに相違あるまい。

時珍曰く、以上四氏の說では藏器の說が正しい。陶氏は鳧と鶩との名稱を混同し、寇氏は鶩を野鴨とし、韓氏は爾雅を引いて錯つて舒鳧を野鳧としたが、いづれも誤つてゐる。此にその誤を正して置かう。蓋し鶩に舒鳧なる名稱があつて鳧に野鶩なる名稱があるところから、王勃がそれを通用したのだ。それは差閊ないのであつて、

(二) 時珍曰ク、野ハ舒ノ誤。

その意味も自ら明瞭である。按ずるに、周禮に『庶人鶩を執る』とある、いかで野鴨であるわけがあらうか。國風に『鳧と鴈とを弋す』とある、いかで家鴨であるわけがあらうか。屈原の離騷に『寧ろ騏驥と軛を抗せん乎、將た雞鶩と食を爭はん乎。寧ろ昂昂として千里の駒の若くならん乎。將た汎汎として水中の鳧の若くならん乎』とある。かく鳧と鶩とが對照して言はれてあつて見れば、家と野との別は益〻自から明瞭だ。

〔鶩〕
——鴨——

集解 時珍曰く、按ずるに、格物論に『鴨は、雄は頭が綠色で翅に文があり、雌は黄斑があつて色はただ純黑と純白とのみである。又、白くして骨の黑いものがある。これは藥とし食物として更に佳いものだ。鴨はみな雄は瘖啞で雌が鳴く。重陽、卽ち九月九日以後には肥えて美味だ。清明、卽ち三月三日以後に卵を生む。それで內陷して肉が充滿してゐない。卵を抱

き伏してゐて、石臼を挽くやうな聲の聞えるときは孵(かへ)して成らぬときである。雌に抱かせずして孵(かへ)すには牛屎で圍つて產み出さす。これはいづれも物理の不可思議だ』とある。

鶩肪　白鴨のものが良し。錬過して用ゐる。［氣味］【甘し、大寒にして毒なし】思邈曰く、甘し、平なり。［主治］【風虛寒熱、水腫】(別錄)

［附方］　新一。【瘰癧の汁の出るもの】汁が出て止まぬには、鴨脂(あふし)で半夏末を調へて傅ける。(永類方)

肉　［氣味］【甘し、冷にして微毒あり】弘景曰く、黃雌鴨は補するに最も勝れたものだ。詵曰く、白鴨肉が最も良し。黑鴨肉は有毒で、中を滑し、冷を發し、脚氣を利す。目の白いものは食つてはならぬ、人を殺すものだ。瑞曰く、腸風下血の人は食つてはならぬ。時珍曰く、嫩(わか)いものには毒がある。老いたるものが良し。尾臎(びすゐ)を食つてはならぬと禮記に記載がある。昔、ある者が鴨肉を食つて癥となつたとき、秫米(じゆつべい)を用ゐて治療すると癒えたといふ。その例は秫米の條に揭げてある。

［主治］【虛を補し、客熱を除き、臟腑、及び水道を和し、小兒の驚癇を療ず】

（別錄）【丹毒を解し、熱痢を止める】（日華）【頭に生じた瘡腫には、葱、豉と和して煮て汁を飲む。卒然の煩熱を去る】（孟詵）いづれも白鴨を用ゐる。

【發明】劉完素曰く、鶩の水を利するは、其氣が相感じて使となるからである。

時珍曰く、鴨は水禽であつて、水を治す。小便を利するには青頭の雄鴨を用ゐるが宜い、それは水木生發の關係を利用するのである。虛勞、熱毒を治するには烏骨の白鴨を用ゐるが宜い、それは金水寒肅の關係を利用するのである。

【附方】舊三、新一。【白鳳膏】葛可久は『久虛發熱、咳嗽、吐痰、咳血、火が金位に乘ずるものを治するに、黑嘴白鴨一羽を用ゐ、先づ血を取つて溫酒を入れ、適量に飲む。これは直ちに肺の經に入つて潤補せしめるのである。かくて鴨をば毛を乾して挦み取り、脇下に竅を開けて腸を去つて拭ひ淨め、大棗肉二升、參苓平胃散末一升を入れて縛定し、一箇の沙甕中にそれを入れて炭火で慢に煨き、一瓶の陳い酒を三回に入れ、酒が乾くを度として取り出し、その鴨、及び棗を食ふ。頻りに試みて癒效を取る』といつた。（十藥神書）【大腹水病】小便の短少なるには、百一方では青頭の雄鴨を煮て汁を飲み、寢具を厚く被て汗を取る。〇心鏡では、十種の水病

(三)大觀ニ豉半升ヲ饋飯半升ニ作ル。

の死に垂たるを治す。青頭鴨一羽を普通のやうに庖丁を入れ、切つて米、幷に五味を和して粥に煮て食ふ。○又ある方では、白鴨一羽を浄治し、(三)豉半升と葱、椒とを鴨の腹中に入れて縫合し、蒸熟して食ふ。

頭　雄鴨のものが良し。　主治　【煮て服すれば水腫を治し、小便を通利する】

○恭曰く、古方に鴨頭丸といふのがある。

附方　新一。　【鴨頭丸】陽水暴腫で顔面赤く、煩燥し、喘急し、小便の澀るを治し、その效神の如きものだ。これは裴河東の方である。甘葶藶を炒つて二兩を熬膏し、漢防已末二兩、綠頭鴨の血と頭全部を共に三千杵搗いて梧子大の丸にし、一日三回、七十丸づつを木通湯で服す。一には猪苓一兩を加へる。(外臺祕要)

腦　主治　【凍瘡にはこれを取つて塗るが良し】(時珍)

血　白鴨のものが良し。　氣味　【鹹し、冷にして毒なし】　主治　【諸毒を解す】(別錄)　【熱して飲めば野葛の毒を解す。已に死せるものも咽に入れば活きる】(孟詵)　【熱血は生金、生銀、丹石、砒霜の諸中毒、射工の毒を解す。又、中惡を治す。また溺死者にはこれを灌げば活きる。蚯蚓の咬瘡はこれを塗れば癒える】(時珍)

（四）木村（重）曰ク、舌ハミヅカキト共ニ上味ノ料理トサル。
（五）往後ハ後方ニ返張スルコト。

【附方】 新三。 【中悪の卒死】或は先づ病むで痛み、或は就寝中突然絶命せるには、いづれも雄鴨を取り、死人の口に向けてその頭を斷つて口中に血を灑し込み、外に竹筒でその肛門に吹き込む。これを十分に試みれば人氣を通じ易くして活きる。（肘後）【あらゆる蠱毒を解す】白鴨血を熱飲する。（廣記）【小兒の白痢】魚凍に似たものを痢下するには、白鴨を殺してその血を取り、滾つた酒に泡けて服すれば止まる。（摘玄方）

舌（四） 【主治】 【痔瘡に蟲を殺す。相制する力を利用するのだ】（時珍）

涎 【主治】 【小兒の痓風で頭、及び四肢みな（五）往後するには、鴨涎を滴す。又、蚯蚓に吹かれた小兒の陰腫を治するには、雄鴨から取つて抹すれば消く】（時珍）

記載は海上にある。

膽 【氣味】 【苦く辛し、寒にして毒なし】 【主治】 【痔核に塗るが良し。又、赤目の初期に點けるも效がある】（時珍）

肫衣 卽ち臆脛の內皮である。 【主治】 【諸骨硬には、一錢を水に研つて服すれば癒える。その消導の作用を取るのである】（時珍）

卵　［氣味］【甘く鹹し、微寒にして毒なし】詵曰く、多食すれば冷氣を發し、呼吸短くして背悶せしめる。小兒が多食すれば脚軟となる。鹽で貯藏して食ふが人體に宜し。士良曰く、瘡毒を生じた人がこれを食へば惡肉を突出せしめる。弘景曰く、鼈肉、李子と食合せてはならぬ、人體を害ふものだ。椹と食合せれば產兒が順でなくなる。［主治］【心腹、胸膈の熱】（日華）

［發明］時珍曰く、現に世間で鴨子を鹽藏し、その方法もさまざまだが、俗間の話に、小兒の泄痢に鹹卵を炙つて食へば、やはり間ま癒えるものもあるといふ。蓋し鴨肉は能く痢を治し、炒鹽も血痢を治す、その關係に因るものだ。

白鴨通　卽ち鴨屎である。馬通の場合の通と同意義だ。［氣味］【冷にして毒なし】［主治］【石藥の毒を殺し、結縛を解し、畜熱を散ず】（別錄）【熱毒、毒痢を治す。又、雞子白と和して熱瘡腫毒に塗れば消く。蚯蚓咬に塗つても效がある】（孟詵）【汁を絞つて服すれば、金、銀、銅、鐵の毒を解す】（時珍）

［附方］舊一、新二。【石藥の過劑】白鴨屎を末にし、二錢を水で服すれば效がある。（百一方）【乳石の發動】煩熱するには、白鴨通一合を湯一盞に漬け、澄淸して

（一）木村（重）曰ク、かるがもハ蒙古、支那、日本等東亞ニノミ分布ス。野鴨、ユエーヤー（北支）ヤアアー（南支）ト汎稱サルルモ水鴨子（スイヤーツ（四川）沈鳧（チエンフー）トモ云ハル。此外まがも、こがも等種類多ク總テ野鴨（Wild duck）ト稱サル、支那ノ湖沼江河ニ大集團ヲナシテ其數何千タルヲ知ラズ。

冷飲する。（聖惠方）【熱瘡腫痛】忍び難きには、家鴨糞を雞子白と共に調へて傅ければ消く。（聖惠）

（一）鳧（食療）

和名　かるがも（又ハなつがも）
學名　Polionetta pœcilorhyncha Zonorhyncha (Swinhoe)
科名　がんあふ（雁鴨）科

〔鳧〕
——野鴨——

【釋明】 **野鴨**（詩疏）**野鶩**（同上）**鸍** 音は施（シ）である。**沈鳧** 時珍曰く、鳧は几——音は殊（シュ）——に從ふ。几とは羽短くして高く飛ぶ貌であつて、鳧とはその意味を取つた文字である。爾雅に『鸍は沈鳧（ちんぷ）なり』とあるは、鳧の性は好んで沒するものだからである。俗に晨鳧と書くは、鳧は常に晨（あさ）に飛ぶからだといふ。これでも意味は通じる。

【集解】 時珍曰く、鳧は東南方の江、海、

湖泊中にいづれもゐる。數百羽群をなして、朝や夜に天を蔽ふて飛び、その聲は風雨が來たやうに聞え、稻や粱を忽ちに食ひ盡すものだ。陸機の詩疏に『形狀は鴨に似て小さく、雜青白色で背上に文があり、喙短く、尾長く、脚卑く、掌紅く、水鳥としての謹愿なるもので、肥えて寒に耐へる』とある。或は『食用には綠頭のものを上とし、尾の尖つたものがこれに次ぐ』といふ。海中の一種の冠鳧といふは頭上に冠がある。これは石首魚の變化したもので、いづれも冬期に取るべきものだ。

肉　氣味　【甘し、涼にして毒なし】詵曰く、九月以後、立春以前には、食物として病人に益すること全く人家で飼つたものに勝る。寒ではあるが氣を動じない。日華曰く、胡桃、木耳、豆豉と食合せてはならぬ。

主治　【中を補し、氣を益し、胃を平にし、食物を消化し、十二種の蟲を除く。諸種の小熱瘡があつて年久しく癒えぬには、ただ多く食へば癒える】(孟詵)【熱毒風、及び惡瘡癤を治し、腹臟一切の蟲を殺し、水腫を治す】(日華)

血　主治　【挑生蠱毒を解するには熱飮して探吐する】(時珍)記載は摘玄にある。

（一）鸊鷉

音は甓梯（ヘキテイ）である。（拾遺）

和名　しなかひつぶり
學名　Polyocephalus ruficollis poggei(Reichenow)
科名　かいつぶり科

釋名　須贏（爾雅）　水鷿　音は札（サツ）である。（正要）　鸊鷉（日用）　刁鴨（食療）　油鴨（俗）

時珍曰く、鸊鷉、須贏なる名稱の意義は詳でない。鷿、刁、零丁はいづれもその形狀の小なるをいひ、油とはその肥えたることをいつたものだ。

集解　藏器曰く、鸊鷉は水鳥であつて、大いさは鳩ほど、脚は鴨のやう、尾は連り、陸行することは不能で常に水中にゐる。人間が近寄ると直ちに沈むが、或は撃つと飛び起つ。その膏を刀劍に塗ると鏽ない。續英華詩に『馬は嚼む苜蓿葉、劍は瑩なり鸊鷉膏』とあるはそれである。

韓保昇曰く、野鴨には家鴨と似たものもあり、全然別なものもある。その甚だ小な

〔鸊　鷉〕

（一）木村(重)曰ク、しなかひつぶりハ主トシテ湖沼ニ棲息スルモノ、海上ニ出ヅルコトアリ、水中ノ滑行巧ニシテ所謂浮巣ヲ作ル、かいつぶりト稱セラルルモノ支那ニ五屬アリ、今代表者ヲ取ル、一般ニ水鳥（シユキニヨウ）ノ名ニテ知ラル。

るものを刁鴨(てうあふ)と名ける。最も美味なものだ。

時珍曰く、鸊鷉は南方の湖、溪に多くゐる。野鴨に似て小さく、蒼白の文があり、脂が多くして美味だ。冬期に取る。その種類の多いものだ。揚雄の方言に所謂『野鳧の甚だ小さくして好んで水中に沒するものを、(二)楚から以南では鸊鷉といふ。大なるものを鶻蹏(こつてい)といふ』とあるがそれだ。

肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【中を補し、氣を益す。五味で炙いて食へば甚だ美味だ】(時珍) 記載は正要にある。

膏 〔主治〕【耳に滴せば聾を治す】(藏器)

(一)鴛鴦(宋嘉祐)

和名　をしどり
學名　Dendronessa galericulata,(Linné.)
科名　がんあふ科

〔釋名〕黃鴨(綱目) 匹鳥　時珍曰く、鴛鴦(ゑんあう)とは終日竝んで游ぶ有樣に『宛として水の中央に在り』の意味を含んだ名稱だ。或は、雄の鳴聲は鴛といひ、雌の鳴聲は鴦といふのだともいふ。崔豹の古今注には『鴛鴦は雄雌相離れず、人間がその

(二) 楚トハ今ノ湖北湖南兩省ノ地チイフ。

(一) 木村(重)曰ク、をしどりハ三列風切羽發達シテ扇狀チナス、美麗ナルハ雄ナレドモ夏期ハ雌ノ如キ羽トナル。東部西比利亞、支那、朝鮮、日本ニ分布ス。鴛鴦〔ユアンヤン(北支)ローヤン(南支)〕ト稱サル。

一羽を獲ると殘りの一羽は思慕して死ぬ。故にこれを匹鳥といふ』とある。涅槃經にはこれを婆羅迦隣提といつてある。

【集解】時珍曰く、鴛鴦は鳧の類であつて、南方の湖、溪中にゐる。土穴中に

〔鴛鴦〕

棲むもので、大いさは小さい鴨ほど、その質は杏黄色で文彩があり、頭は紅、鬣は翠、翅は黑、尾は黑、掌は紅で、頭に垂れた白い長毛があつて尾に至る。頭を交へて臥し、その交接は再しない。

肉 【氣味】【鹹し、平にして小毒あり】孫曰く、苦し、微温にして毒なし。瑞曰く、酸し、毒なし。詵曰く、多く食へば大風を患はしめる。

【主治】【諸瘻、疥癬。酒に浸して炙き、熱して瘡上に傳貼し、冷えれば易へ

る】（嘉祐）【清酒で炙いて食へば瘻瘡を治す。羹、臛にして食へば人體を肥麗ならしめる。夫婦不和なるものには、私かにこれを食はすれば互に愛情が復活する】（孟詵）【炙いて食へば夢中に戀ひ惱むものを治す】（孫思邈）

附方　舊一、新一。【五瘻漏瘡】鴛鴦一羽を普通のやうに拵へて炙熟し、細に切つて五味醋で食ふ。羹にするも妙である。（食醫心鏡）【血痔の止まぬもの】鴛鴦一羽を淨治し、切片して五味、椒、鹽で醃け、炙いて空心に食ふ。（奉親養老方）

(一)鸂鶒

音は溪敕（ケイチョク）である。（宋嘉祐）

和名　おほをしどり
學名　未詳
科名　未詳

釋名　溪鴨（異物志）　**紫鴛鴦**　時珍曰く、按ずるに、杜臺卿の賦に『鸂鶒は邪を尋ねて害を逐ふ』とある。この鳥は專ら短狐を食物とするので、溪中で物を害ふものを敕逐し、その溪中に游んでは左は雄、右は雌と隊伍整然として居る有様が禮式、節度があるやうに見えるといふ意味である。故に說文には又、谿鷘と書いてある。その形は鴛鴦より大きくして色が多く紫だ。やはり好く竝んで遊ぶ。故に紫

(一)木村(重)曰ク、鸂鶒、學名未詳、和名ハ和書ニおほをしどりトアリ、紫鴛鴦ノ語アリ、コレひどりがも（Mareca屬）ヲ謂フカ、或ハをしどりノ別種ヲ云フカ、後攷ヲ俟ツ。

(三)短狐ハ卷四十二溪鬼ノ條ニ解アリ。

(一)木村(重)曰ク、あをさぎ、頸以下ノ背面ハ尾ニ至ル迄青灰色、嘴ハ黄色ニ脚ハ暗綠色ナリ。東部西比利亞、支那、日本ニ分布ス。日本ノ本草書ニ謂フ如クごゐ

鴛鴦といふのである。

【集解】藏器曰く、鸂鶒は南方の(三)短狐のゐる土地に多くゐる。性短狐を食ふもので、この鳥の棲る處にはその毒氣がない。人家に畜ふて宜きものだ。形は小さくして鴨のやう、毛には五彩があり、首に纓があり、尾に船の柁の形のやうな毛がある。

肉 【氣味】【甘し、平にして毒なし】冬期に用ゐる。【主治】【これを食へば驚邪、及び短狐の毒を去る】(嘉祐)

〔鸂　鶒〕

(一)鵁鶄 音は交晴(カウセイ)である。(拾遺)

和名 あをさぎ
學名 Arda cinerea jouyi, Clark.
科名 さぎ(鷺)科

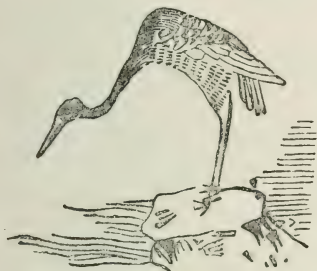
【釋名】交䴖(說文) 茭雞(俗) 鳽 音は堅(ケン)である。(爾雅) 時珍曰く、按ずるに、禽經に『白鷁(はくげき)は相睨んで孕み、鵁鶄は睛交して孕む』とあり、又『旋目

さぎ(せぐろごゐ) Nycticorax nycticorax(Linné)モ鵁鶄ノ中ニ含マル。一般ニ鷺(ルー)ノ名ニテ知ラル。
旋目、和名さんかのごゐ、學名 Botaurus stellaris, Linné.
方目、和名よしごゐ、學名Ixobrychus sinensis(Gmelin)共ニさぎ科。

その名を鶠といふ。方目その名を鳺といふ。交目その名を鳽といふ』とあり、その眸子を觀て命名したものであつて、その意味は十分そこに盡きてゐる。說文に交矑といつてあるもやはり瞳子を目して命けた名である。俗に茭雞と呼び、多く茭菰中にゐるもので、脚が高くして雞に似てゐるからだといふが、その說もやはり通ずる。

【集解】藏器曰く、鵁鶄は水鳥であつて、南方の池澤に產する。鴨に似て綠色の毛を全身に纏へたものだ。人家に飼養すればよく馴れて飛び去らない。火災の禁厭になる。博物志には『鵁鶄は高い樹に巢んで穴中に子を生み、その母の翼に啣まれて飛び下りて飲食する』とある。

〔鵁　鶄〕

時珍曰く、鵁鶄は、大いさは鳧、鷺ほどで脚が高く、雞に似てゐる。喙が長くて好く啄む。その頂には冠のやうな紅毛があり、碧斑のある翠色の鬣があり、嘴は丹く、脛は青い。愛玩用として飼へるものだ。

附録 **旋目** 水鳥であつて、(三)荊郢地方に生ずる。大いさは鷺ほどで尾が短く、紅白色で目が深く、目の傍の毛がみな長くして渦巻いてゐる。上林賦に『交睛旋目』とあるはこのものだ。

方目 一名鳿、音は紡(ハウ)である。一名澤虞。俗に護田鳥と名け、西方の地では蝦蟇護といふ。水鳥であつて、常に田澤中にゐる。形は鷗、鷺に似て色は蒼黑く、頭に白肉冠があり、足が赤い。人を見ると鳴き喚いて去らない。漁人はこれを烏鷄と呼び、閩地方ではそれを姑雞と訛つて呼ぶ。

肉 氣味 【甘く鹹し、平にして毒なし】 主治 【炙いて食へば諸種の魚蝦の毒を解す】(時珍)

(一)鷺 (食物)

和名 かしらさぎ
學名 Hemigarzetta eulophotes,(Swinhoe)
科名 さぎ科

釋名 **鷺鷥**(禽經) **絲禽**(陸龜蒙) **雪客**(李昉の命名したもの) **舂鋤**(爾雅)

白鳥 時珍曰く、禽經に『鸘飛ぶときは霜ふり、鷺飛ぶときは露おく』とある。そ

(三)荊郢ハ今ノ湖北省ノ南部、武昌縣ノ附近ヲイフ。

(一)木村(重)曰ク、鷺ハ全身純白色、後頭部ニ所謂簑毛ヲ生ズ、支那ノ中部及南部ニ主產ス、白鷺(パアルー)(北支)パロー(南支)、雪客(シエーユー)白鳥(パイニヤオ)ノ名アリ。

の名稱は此から出たものだ。淺い水中を歩んで好く自ら上軀を昂げ低げするさまが物を舂くやうな有樣にも見え、鋤を揮ふやうな有樣にも見えるところから舂鋤といふ。陸機の詩疏に『(二)青、齊地方ではこれを舂鋤といひ、遼東、(三)吳揚ではいづれも白鷺といふ』とある。

集解　時珍曰く、鷺は水鳥であつて、林間に棲息し、食物を水中に取り、列をなして羣り飛ぶ。雪のやうに潔白で、頸は細くして長く、脚は青く、善く翹げて高さ一尺餘のものだ。指は別れ、尾は短く、喙の長さ三寸、頂に十數本の長毛があつて、絲のやうに毿毿然として細長く、魚を取らんとするときはそれを弭す。郭景純は『その毛は(四)睫羅に作れるものだ』といつた。變化論には『鷺は目を以て眄に視て受胎する』とある。

〔鷺鷥〕

○頌曰く、鷺に似て頭に絲がなく、脚の黃色な

(二)青、齊ハ今ノ山東省ノ中部、西北部ノ地チ指ス。

(三)吳、揚トハ今ノ江蘇安徽兩省地方チイフ。

(四)睫羅ハ接羅ニ同ジ、白帽ナリ。

るものを俗に(五)白鶴子と名ける。又、これに類して紅色の紅鶴といふものがある。禽經に所謂『朱鷺』がそれだ。

肉 〔氣味〕【鹹し、平にして毒なし】〔主治〕【虚瘦に脾を益し、氣を補す。炙熟して食ふ】(汪頴)

頭 〔主治〕【破傷風で肢强し口緊するものには、尾共に燒いて研り、臘豬脂で調へてその瘡口に傅ける】(救急方)

(一)鷗(食物)

和名 ゆりかもめ
學名 Larus ridibundus, Linne.
科名 かもめ(鷗)科

〔釋名〕 **鷖** 音は翳(イ)である。**水鴞** 時珍曰く、鷗とは輕く漾ふて漚のやうに水上に浮ぶといふ意味だ。鷖とはその鳴聲である。鴞とは形が似てゐるからだ。海にゐるものをば海鷗と名け、江にゐるものをば江鷗と名ける。(二)江夏地方では江鵞と訛つて呼ぶ。海中の潮に隨つて往來する一種をば信鳥といふ。

(五)木村(重)曰ク、白鶴子ハこさぎ一名しらさぎ、學名Egretta garzetta, Linne. 滿洲ニテハこもじろト共ニ窪子(ワーツー)ト稱サル。

紅鶴、和名あかがしらさぎ、學名Ardeola bacchus(Bonaparte)朱鷺(とき)ナラズ。

(一)木村(重)曰ク、鷗ハ冬羽ハ體白色、翼ハ緣ハ黑色、夏羽ハ褐色ヲ帶ブ。歐洲、亞細亞ノ大部ニ產シ、揚子江ニテハ六百哩上流宜昌(湖南省)ニナホ棲ム、江鷗コレナリ。鷗(エ)ト稱ス。みやこどり(都鳥)トモ稱ス。海濱ニ多キハかもめ(Larus ca-

〔鷗〕

【集解】時珍曰く、鷗は南方の江、海、湖、溪中に生ずる。形色は白鴿のやうでもあり、小さい白鷄のやうでもあり、喙長く、脚長く、羣り飛んで日光に耀く。三月卵を産む。羅氏は青黒色だといつたが、誤だ。

肉　【氣味】缺

(一)鸀鳿（拾遺）

音は燭玉（ショクギョク）である。

和名　だいさぎ、一名ももじろ
學名　Casmerodius albus(Linne.)
科名　さぎ(鷺)科

【釋名】**鸑鷟**　時珍曰く、鸀鳿なる名稱の意味は詳でない。按ずるに、許愼の說文に『鸑鷟は鳳の屬なり。又、江中に鸑鷟と呼ぶ鳥があつて、鳧に似て大きく、目が赤い』とある。これに據れば、鸀鳿とは鸑鷟の音の轉化したものらしい。蓋し

ms major, Middorddorff)ナリ。

(二)江夏ハ草部隰草類敗醬ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、だいさぎハ全身白色、蕃殖期ニハ背ニ延長セル羽毛ヲ生ズ、白鷺トモ稱セラル。歐洲、亞細亞ニ棲ム、假ニ定メテ後考ヲ俟ツ。

この鳥は文彩があつて鳳毛のやうだから同一名稱で呼ばれたものであらう。

【集解】 藏器曰く、鸂鶒は溪に出るもので、水毒のある處にゐる。毒蟲を食物とするに因るものである。その形狀は鴨のやうで大きく、項が長く、目が赤く、嘴は斑だ。毛は紫紺色で鵁鶄の色のやうである。

〔鸂鶒〕——白鶴——

時珍曰く、按ずるに、三輔黃圖、及び事類合璧には、いづれも現に一般に白鶴子と呼ぶものを鸂鶒として『その鳥は潔白にして玉の如し』といつてある。陳氏の鴨のやうで紫紺色だといふ說とは一致しない。白鶴子の形狀は、鷺のやうに白く、喙が長く、脚は高いが、ただ頭に絲がないだけのもので、そのすらりとした姿が鶴のやうだから鶴をつけて呼ばれたのだ。林間に棲み、水中に食を漁り、水に近い場所に極めて多い。捕つて食つて見ても甚だ佳味ではないものだ。

毛　及び　屎　【主治】【灰に燒いて水で服すれば、溪(二)鳥毒、砂蝨、水弩、射工、蜮、短狐、蝦鬚等の病を治す。またその鳥を病人の身體に近づけると能く人の身體を嚙ふもので、嚙ひ訖つてから物でそれを承けると沙が出るものである。その沙は卽ち沙を含んで人を射るといふその(三)箭である。又、籠にその鳥を入れて人に近け、鳥をして病人と互に呼吸を吸はせるもよし】(藏器)

【發明】藏器曰く、以上の數病は大略相似たもので、いづれも山の水の中にゐる蟲に沙を含んで射られたために起るものだが、また水のない場所でこれに罹ることもあつて、或は瘧の如く、或は天行寒熱の如く、或は瘡あるもあり、或は瘡なきもあるが、ただ夜間就寢中に手で身體を摩でて見ると辣痛する處があり、よく視ると、針の先ほどの赤點があるものは、急に捻つて芋の葉を內に入れ、細沙を刮出して蒜で封ずれば癒える。右の如くせねば寒熱が漸次に深くなるものだ。就中蝦鬚瘡は最も毒なるもので、十人の患者中活きるものは一二人である。(四)桂嶺には特にこれが多い。但しその發見が早期の場合には、芋、及び甘蔗葉を折つてその角を肉中に入れて勾り出すと、蝦鬚のやうな狀態のその病根が出て癒えるが、手遲れになれば

(二)大觀ニ鳥字ナシ。

(三)大觀ニ之箭也ノ上ニ是此蟲ノ三字アリ。

(四)桂嶺ハ今ノ廣東省ノ西北部、及ビ廣西省ノ地ヲ指ス。

根が骨に達して丁腫のやうになり、最も經過が惡い。これは好く人の陰部に著くものだ。

時珍曰く、水弩、短狐、射工、蜮は一物である。陳氏が四種として分けたのは正しくない。溪毒といふはその毒氣のみのもので形體はない。砂蝨(さしつ)は沙中の細蟲である。

鸕鷀(一)（別錄下品）

和名　しなかはう
學名　Phalacrocorax carbo sinensis(Shaw et Nodder)
科名　かはう(鸕鷀)科

【釋名】 鷧 音は意（イ）である。（爾雅） 水老鴉（衍義） 時珍曰く、按ずるに、韻書には、盧と玆とはいづれも黑いことだとある。この鳥は色が深黑だからかく名けたものだ。鷧とはその鳴聲がその名のやうに聞えるからである。

【集解】 時珍曰く、鸕鷀(ろじ)は處處の水鄕にゐる。鶂(げき)に似て小さく、色は黑くして鴉(あ)のやうだが、喙が長くして微し曲り、善く水に沒して魚を取る。晝は洲渚(しうしよ)に集り、夜は林木に巣み、久しい間に糞の毒で多く木を枯して了ふ。南方の漁夫には往往こ

（一）木村（重）曰ク、日本ノ鵜ニ似ル、支那ニ二屬アリ、飼養シテ魚類ヲ獲ラシムルモ日本ニ於ケル如ク鵜匠ハ繩ヲ用ヰズ、飼馴シテ自由ニ水ニ入テ魚ヲ獲ル、揚子江ノ支流ハ殊ニ鵜多シ。鸕鷀（ルーツエ）水老鴉（シユヰラツヤ）共ニ通ズ。

れを縻いで數十羽を飼養し、それに魚を捕らしめてゐるものがある。杜甫の詩に『家家鳥鬼を養ひ、頓頓黃魚を食す』とあるが、これを謂つたのだといふことだ。又、鸕鷀に似た鳥で、頭が蛇のやうで項が長く、冬期には羽毛が盡く落ち、溪岸に棲息し、人を見ても逃げ歩めずして直ちに水に沒する一種がある。これは爾雅に所謂『(二)鴢、頭は魚鮫』とあるそのものだ。藥用には入れない。鴢の音は拗(エウ)である。

藏器曰く、頭が細く、耳が長く、頂上が長い一種の鳥をば魚鮫と名ける。藥には用ゐない。

正誤　弘景曰く、この鳥は卵生ではなく、口から雛を吐き出す。一種の不可思議だ。

藏器曰く、この鳥は口から生れ出る。兎が兒を吐き出すやうなものだ。それで產婦がこの鳥を持つと安產するといふ。

宗奭曰く、世間で、孕婦は鸕鷀を食ふことを忌む、口から雛を吐くからだといふ。しかし、嘗て余が澧州に在勤中、官舍の裏手に一本の大木があつて、その上に三四

(二) 爾雅ニハ『鴢、頭鵁』トアリテ、郭註ニ鴢ハ江東ニテハ一名魚鵁トイフトアリ、釋ニ鴢、一名頭鵁トアリ。

(三)項、爾雅注ニ頸ニ作ル。
(四)背、爾雅注ニ翅ニ作ル。

十の巣があつたので、朝夕それを注意して見てゐたが、よく交尾もすれば、また碧色の卵殼が地上一面に落ちてあるのを見た。陶氏、陳氏の說は漫然世人の語り草に隨つたもので、事實ではない。

時珍曰く、これは一種の鷀鳥であつて、或は鷁とも書く。鸕鷀に似て色が白い。一般人が誤つて白鸕鷀といふはこの鳥だ。雌雄相視て雄が上風に鳴き、雌が下風に鳴いて孕み、口からその子を吐く。莊周の所謂『白鷁は相視て眸子を運らさず。而して風化す』とあるそのものだ。昔の人は誤つて吐雛を鸕鷀としたが、蓋し鷁と鷊とは發音が似てゐたからだ。善く高く飛び、風にも水にも堪へるところから、舟首にこれを畫いたものだ。又、鷁に似て(三)項が短く、背上が綠色で腹(四)背の紫白色なるものがある、これは靑鷁、一名烏鸔と名ける。陶氏のいつた烏賊魚の變化した鳥とはこのもので、或は鴨のことだともいふが、それは誤だ。

〔鸕　鷀〕

肉　氣味　【酸く鹹し、冷にして微毒あり】　主治　【大腹鼓脹。水道を利す】（時珍）

發明　時珍曰く、鸕鷀は、別錄にはその功用を揭げてないが、ただ雷氏の炮炙論の序に『體寒し腹大なるには全く鸕鷀に賴る』とあり、註に『腹が大鼓のやうに大きく、體の寒するには、鸕鷀を燒いて性を存して末にし、米飮で服すれば立ろに癒える』とある。切に謂ふに、腹の鼓大する諸病は皆熱に屬するもので、衞氣が血脈に竝循する場合に體が寒するのだ。炮炙論にいふこの場合は、水鳥はその氣が寒冷で水を利する。その寒は熱に勝ち、水を利する作用が濕を去る結果である。又、外臺に『凡そ魚骨哽には、ただ密に絕えず鸕鷀を念すれば下る』とあるが、これは禁厭制伏の意味だ。

頭　氣味　【微寒なり】　主治　【哽、及び噎には、燒き硏つて酒で服す】（別錄）

骨　主治　【灰に燒いて水で服すれば魚骨哽を下す】（弘景）

附方　新一。【雀卵面斑】鸕鷀骨を燒いて硏り、白芷末を入れて猪脂で和し、

夜塗つて朝洗ふ。(摘玄方)

喙 〔主治〕 【噎病は、發したとき直ちにこれを喞めばそれで平安を得る】(范汪)

(五)**嗉** 〔主治〕 【魚哽にはこれを呑むが最も效がある】(時珍)

翅羽 〔主治〕 【灰に燒いて半錢を水で服すれば、魚哽噎を治して直ちに癒える】(時珍) 記載は太平御覽にある。

蜀水花 別錄に曰く、鸕鷀の屎である。

弘景曰く、溪谷の間に甚だ多い。手づから取つて白い部分を擇つて用うべきものである。商人の販賣するものは信用し難い。

頌曰く、屎は多く山石上にあつて、色は紫で花のやうなものだ。石からそれを刮り取るのである。別錄にいふ屎が卽ち蜀水花であるが、唐時代の面膏の方中に、屎と蜀水花との二物を竝用するとある。如何なる理由か判らない。

時珍曰く、別錄を正しとすべきである。唐の方は蓋し傳寫の際の誤だ。

〔氣味〕 【冷にして微毒あり】 〔主治〕 【面上の黑䵟、黶誌を去る】(別錄) 【顏面の瘢疵、及び湯火瘡痕を療ず。脂、油で和して疔瘡 傅ける】(大明) 【南方の地で

(五)嗉ノ解ハ鵜鶘ノ條ニアリ。

は、小兒の疳、蚘を治するに、乾して研末し、豬肉を炙いて蘸けて食ふ。奇效があるといふことだ】(蘇頌)【蟲を殺す】(時珍)

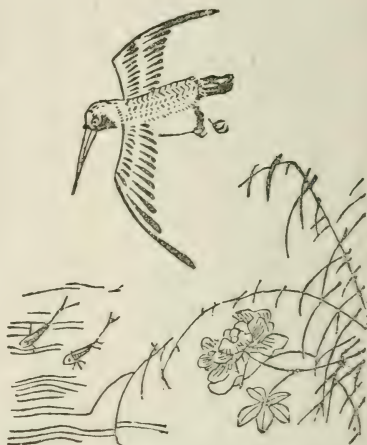
【附方】 舊二、新一。【鼻、面部の酒皶】鸕鷀屎一合を研末して臘月猪脂で和し、每夜塗つて朝洗ふ。(千金)【魚骨哽咽】鸕鷀屎を研つて方寸匕を水で服し、幷に水で和して咽喉の外部に塗る。(范汪方)【酒を斷つ方】鸕鷀屎を燒いて研り、一日一回、水で方寸匕を服す。(外臺)

魚狗(一)（拾遺）

和名　かはせみ
學名　Alcedo atthis japonica, Bonaparte.
科名　かはせみ(翡翠)科

【釋名】 鴗(爾雅)　天狗(同)　水狗(同)　魚虎(禽經)　魚師(同)　翠碧鳥　時珍曰く、狗、虎、師はいづれも動物を噬む獸類の名であつて、この鳥は魚を害するものだからその獸類と同樣の性質なることを取つて名稱としたのである。

【集解】 藏器曰く、これは卽ち翠鳥のことであつて、土に穴を掘つて窠を作る鳥だ。大なるを翠鳥と名け、小なるを魚狗と名ける。その青色は翠に似たもので、

(一)木村(重)曰ク、かはせみ日本ニ於ケルト同種ナリ、支那河湖ニ多シ、魚狗(ユーコウ)鴗(リウ)等ノ名アリ。他ニやませうびん(秦椒嘴(チンチヤチツユ))Halcyon屬アリ。

その尾は物の飾になる。また斑白のものもある。いづれも能く水上で魚を取るものだ。

時珍曰く、魚狗は處處の水涯にゐる大いさは燕ほどで、喙は尖つて長く、足は赤くして短く、背毛は翠色で碧色を帶び、翅毛は黑色で靑い光が浮く。婦人の首飾となる。やはり翡翠の類だ。

〔魚狗〕
—魚翠—

肉

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】

【主治】【魚哽、及び魚骨が肉に入つて出でず、甚しきものには、燒き研つて飮で服す。或は煮汁を飮むも佳し】（藏器）

【發明】時珍曰く、今は一般に魚骨硬を治するにこれを用ゐ、取つて腸を去り、陰陽瓦を用ゐて泥で固濟して煆いて性を存して藥に入れる。蓋しこれもその相制す

る關係を利用したものだ。

附錄　**翡翠**　時珍曰く、爾雅にはこれを鷸といつてある。交、廣、南越の諸地に產し、水邊に在つて水を飲み物を啄み、穴居して子を生む。また木にも巣を作る。魚狗に似てやや大きいものだ。或は『前身は翡であり、後身は翠であつて、鷺翠、雁翠などいふ意味のやうなものだ』といひ、或は『雄を翡といふ、その色は赤が多い。雌を翠といふ、その色は青が多い』ともいふ。彼の地方では、やはり肉で腊を作つて食ふ。方書にはその功用を記してないが、魚狗と同樣なものであらうと思ふ。

蚊母鳥（拾遺）(一)

和名　よたか
學名　Caprimulgus indicus, Temm. et Schleg
科名　よたか(蚊母鳥)科

釋名　**吐蚊鳥**　**鷏**（爾雅）音は田（テン）である。

集解　藏器曰く、この鳥は雞ほどの大いさで色の黒いものだ。南方の池澤の蘆茹の中に生じ、江東にも多くゐる。その鳴聲は人が嘔吐するやうなもので、一二

(一)木村(重)曰ク、夕刻出デテ昆蟲等ヲ捕食ス、東南西比利亞、北支ニ產シ、冬季ハ南方支那ニ分布ス。蚊母鳥（ウンマニヤオ）

（二）塞北ハ蒙古地方。

升づつの蚊を吐出する。そもそも蚊なるものは惡水中の蟲から羽化して生ずるものであるが、江東には蚊母鳥といふがあり、（二）塞北には蚊母樹といふがあり、嶺南には蝱母草といふがある。この三物は異類にして同功のものだ。

時珍曰く、郭璞は『蚊母は烏鸔に似て大きく、黄白色の雜文があり、鳴聲は鴿の聲のやうだ』といつた。嶺南異物志には『吐蚊鳥は大いさ靑鷁ほどで嘴が大きく、魚を食物とする』とある。その產地の相違でかやうにそれぞれの相異があるものだらうか。

翅羽 主治 【扇にして用ゐれば蚊を辟ける】（藏器）

本草綱目禽部第四十七卷 終

本草綱目禽部

第四十八卷

本草綱目禽部目錄第四十八卷

禽の二　原禽類二十三種

雞 本經　雉 別錄　鸐雉 食療 即ち山雞。
鷩雉 拾遺 即ち錦雞。　鶡雞 拾遺　鷴 圖經
鷓鴣 唐本　竹雞 拾遺 杉雞を附す。　英雞 拾遺
秧雞 食物　鶉 嘉祐　鷃 拾遺　鷸 拾遺
鴿 嘉祐　突厥雀 拾遺　雀 別錄　蒿雀 拾遺
巧婦鳥 拾遺 即ち鷦鷯。　燕 別錄　石燕 日華
伏翼 本經 即ち蝙蝠。　鸓鼠 本經 即ち飛生。
寒號蟲 開寶 即ち五靈脂。

右附方　舊八十二　新二百三十七

禽の二　原禽類二十三種

(一)鶏（本經上品）

和名　にはとり
學名　Gallus domostiens, Briss.
科名　きじ(雉)科

釋名　**燭夜**　時珍曰く、按ずるに、徐鉉は『鶏とは稽である。能く時を稽へるといふ意味だ』といつてある。廣志には『大なるを蜀といひ、小なるを荊といふ。その雛を鷇といふ』とある。梵書には鶏を鳩匕咤といつてある。

集解　別錄に曰く、雞は朝鮮の平澤に生ずる。

弘景曰く、雞にはその屬の甚だ多いものだ。朝鮮とは(二)玄菟、(三)樂浪の地をいふのだが、その總てが雞の產地といふのではあるまいと思ふ。

馬志曰く、藥には朝鮮のものを取つて用ゐるが良しといふわけだ。

頌曰く、今では處處の人家で飼養する。朝鮮から來るものを用ゐるといふ事實は聞かない。

(一)木村(重)曰ク、鶏(キー又ハチー)ト稱ス、變種スベテノ稱ナリ。

(二)玄菟ハ蟲部化生類馬陸ノ註ヲ見ヨ。

(三)樂浪ハ鱗部無鱗魚類鱘魚ノ註ヲ見ヨ。

時珍曰く、鷄はその種類の甚だ多いもので、五方それぞれの產地に因つてその大小形色にもやはり往往に差異がある。朝鮮產の一種の(四)長尾鷄は、尾の長さ三四尺ある。遼陽產の一種の食鷄、一種の角鷄は味が倶に肥美で、大いに諸鷄に勝る。(五)南越產の一種の長鳴鷄は晝夜啼き叫ぶ。南海產の一種の石鷄は潮が滿ちて來ると鳴く。蜀中產の一種の鶤鷄、楚中產の一種の傖鷄は、いづれも高さ三四尺ある。江南產の一種の矮鷄は脚が纔に二寸ばかりだ。

鷄なるものは卦に在つては巽に屬し、星に在つては昴に應ずる。外腎がなく、小腸がない。凡そ人家で故なくして羣鷄が鳴くをば荒鷄といひ、それは不祥事のある場合としてある。夕暮に獨り啼くときは天恩がある場合としてあつて、これを盜啼といふ。老鷄にして能く人間の言葉を發するもの、牝雞にして雄鷄の鳴聲を出すもの、雄鷄にして卵を生むもの等は、いづれもそれを殺せば何事もない。田舍では、鷄を飼つて雄がないとき、鷄卵を以て竈に告げ訴へて雌に抱かせる、すると子が生れる。南方の地では鷄卵に墨で畫いて煮熟し、中の黃を取つて見てそれに現はれるところに因つて吉凶を卜ひ、又、鷄骨を以てその年の豐凶を占ふ。

(四) 木村(重)曰ク、長尾鷄　をながどり、土佐產ノ如ク長カラズ。
角鷄　こぶとり、鷄冠瘤ノ如ク固シ。
長鳴鷄　ながなきとり、鷄ノ一品種。
鶤鷄　しやも、支那馬來地方ニ生ゼル一品種。
矮鷄　ちやぼノ支那ノ原產。

(五) 南越ハ石部珊瑚ノ註、南海ハ土部自然灰ノ註ヲ見ヨ。蜀ハ四川省、楚ハ湖北省ノ地ヲ指ス。

鷄は鳴くに時刻を知り、棲むには陰、晴を知る。太淸外術には『蠱を蓄へる家からは鷄が飛び去る』とあり、萬畢術には『その羽を焚けば風を招ぎ得る』とあり、五行志には『雄鷄の毛を焼いて酒に入れて飲めば、求むるところ必ず得る』とある。古

〔鷄〕

代には鷄は能く邪を辟けるものだといつた。して見ると、鷄はやはり靈禽であつて、ただ調理して食物にし得るだけのものではない。

諸鷄肉 〔氣味・食忌〕 ○詵曰く、鷄は、五色あるもの、黑い鷄で首の白いもの、指の六本あるもの、距の四本のもの、死んで足の伸びぬものは、いづれも人を害するものだから食つてはならぬ。

○○時珍曰く、延壽書に『閹鷄にして能く啼くものには毒がある。四月に卵を抱く鷄の肉を食つてはならぬ。癰を作して漏とならしめ、男子、婦人をして虚乏せしめる』

とある。

弘景曰く、五歳以下の小兒が鷄を食へば蚘蟲を生ずる。鷄肉と葫、蒜、芥、李とを食合せてはならぬ。犬肝、犬腎と食合せてはならぬ。いづれも泄痢を起すものだ。兎と共に食へば痢となり、魚汁と共に食へば心瘕となり、鯉肉と共に食へば癰癤となり、獺肉と共に食へば遁尸となり、生葱と共に食へば蟲痔となり、糯米と共に食へば蚘蟲を生ずる。

【發明】宗奭曰く、巽は風であり鷄であつて、鷄が五更に鳴くのは太陽が巽の方位に達したときで、その氣に感じて鳴くやうになるのである。現に風病のあるものは、これを食へば必ず發作する。巽を鷄とする有力な驗證だ。

震亨曰く、鷄は土に屬して金、木、火を有し、又、巽に屬して能く肝火を助けるものだ。寇氏がいふ風を動ずる事實は、習慣、習俗の關係でさうなつたものだ。雞の性は補して能く濕中の火を助けるもので、病邪はこれを得ると助長する。魚肉の類の場合でもみなさうである。且つ西北地方は寒が多いから風に中るといふ事實も確にあるが、東南地方は氣候が溫で濕が多い、風が有るといふは根本的に風があつた

のではなくして、いづれも濕が痰を生じ、痰が熱を生じ、熱が風を生じたものである。
時珍曰く、禮記に『天産は陽となり、地産は陰となる』とあるが、鷄は卵生にして地産である。羽はあるが飛ばないものだ。陽精ではあるが、實は風木に屬するのだから陽中の陰である。故に能く熱を生じ、風を動じ、風火相扇ぐところから中風となるのだ。朱氏は寇氏の說を駁して非なりとしたが、やはり駁する方も非である。
頌曰く、鷄肉は小毒あるものではあるが、虛羸を補するには主要なものだ。故に食治の方に多くこれを用ゐてある。

丹雄鷄肉 [氣味] 【甘し、微溫にして毒なし】扁鵲曰く、辛し。[主治] 【婦人の崩中漏下、赤白沃。神を通じ、惡毒を殺し、不祥を辟ける】(本經)【虛を補し、中を溫め、血を止め、能く久しき傷瘡の瘥えぬものを愈す】(別錄)【肺を補す】(孫思邈)

[發明] 普曰く、丹雄鷄、一名載丹といふ。
宗奭曰く、即ち朱鷄のことだ。
時珍曰く、鷄は木に屬するものではあるが、それぞれの特長に因つて區分すれば、丹雄鷄は離火、陽明の象を稟け得たものだ。白雄鷄は庚金、太白の象を稟け得たも

のだ。故に邪惡を辟けるにはこれがよい。烏雄鷄は木に屬し、烏雌鷄は水に屬する。故に妊娠、出產にはこれがよい。黃雌鷄は土に屬する。故に脾、胃にはこれがよい。而して烏骨のものはまた水、木の精氣を稟け得てゐるものだから、虛熱にはこれがよいのである。各〻その五行とその屬する病證とに從ふのである。吳球は『三年の騸鷄を常に食へば虛損を治し、血を養ひ、氣を補す』といつた。

附方　新二。

【瘟疫の辟禳】冬至の日に赤雄雞を取つて腊にし、立春の日になつて煮て食ふ。その全部を食盡すべきもので、他人に分け與へてはならぬ。（肘後方）

【あらゆる蟲の耳に入りたるもの】鷄肉を香しく炙き、耳中を塞いで引き出す。（總錄）

白雄鷄肉　**氣味**　【酸し、微溫にして毒なし】藏器曰く、甘し、寒なり。**主治**　【氣を下し、狂邪を療じ、五臟を安ずる。傷中、消渴】（別錄）【中を調へ、邪を除き、小便を利し、丹毒(六)風を去る】（日華）

發明　藏器曰く、白雄鷄は三年養へば能く鬼神に使はれる。

時珍曰く、按ずるに、陶弘景の眞誥に『道を山中に學ぶには、宜しく白雞、白犬を養つて邪を辟けるがよし』とある。今の術家で祈禱辟禳にいづれも白雞を用ゐる

（六）大觀ニ風字ナシ。

はここに起源したもので、これは異端の一説に過ぎない。鷄に何の神、何の妖があらうぞ。

附方　舊三、新四。【癲邪狂妄】自ら聖賢を氣取り、行走してやまぬには、白雄鷄一羽を煮て五味を和し、羹、粥を作つて食ふ。(心鏡)【驚駭、憤怒の邪僻】驚愕、憂愁、恐迫を受け、或は激怒し、悲憂して意志錯亂し、精神、行動の常規を逸せるには、白雄鷄一羽を普通の料理の場合のやうに作り、眞珠四兩、薤白四兩、水三升を二升に煮て盡く食ひ、その汁を盡く飲む。(肘後)【卒然の心痛】白鷄一羽を普通の料理の場合のやうに作り、水三升で二升に煮て鷄を去り、その汁を六合に煎じ取つて苦酒六合、眞珠一錢を入れて六合に煎じ取り、麝香を豆二粒ほど納れて頓服する。(肘後)【赤白下痢】白雄鷄一羽を普通のやうにして臛、及び餛飩にして空心に食ふ。(心鏡)【突然の欬嗽】白鷄一羽を苦酒一斗で三升に煮取り、三服に分服し、幷に鷄を淡食する。(肘後)【水氣浮腫】小豆一升、白雄鷄一羽を普通の料理の場合のやうに作り、水三斗で煮熟して食ひ、その汁全部を飲む。(肘後方)【肉の壞れる怪病】凡そ口、鼻から腥臭い水を出し、椀にそれを取つて見ると鐵色の蝦魚のやうな狀態のものが

走り躍り、捉へて見ると化して水となるものを肉壞といふ。ただ多く鷄の料理を食へば癒える。（夏子益奇疾方）

烏雄鷄肉　［氣味］「甘し、微溫にして毒なし」［主治］「中を補し、痛を止める」（別錄）「肚痛、心腹の惡氣を止め、風濕麻痺、諸種の虛羸を除き、胎を安んじ、折傷、幷に癰疽を治す。生で搗いて竹木刺の肉に入りたるに塗る」（日華）

［發明］時珍曰く、按ずるに、李延飛は『黃鷄は老人に宜く、烏鷄は產婦に宜く、血を暖める』といひ、馬益卿は『妊婦は牡鷄肉を食ふがよし。陽精の全きを天產に取るの意味であつて、これはやはり胎敎に虎豹を見るべしといふやうな意味である』といひ、又、唐の崔行功の纂要には『婦人の出產で死亡するは、多くは富貴の家である。騷ぎが大きいために產婦を驚悸し氣亂せしめるからだ。これはただ一切の人を遠ざけてその產婦一人で出產せしめ、更に牡雞を爛煮して汁を取り、その汁で粳米粥を作つて食はせれば自然に無事である。これは和氣の效果だ』とある。蓋し牡雞汁はその性滑にして濡なるものだからである。その肉は食はせられない。恐らく消化し難いものだ。今俗間の產科醫師は產後に鷄を食はせ卵を食はせるが、

氣の壯なるものであれば幸に無事であるが、氣の弱いものはそのために疾を起す。それはいづれも右の意味を理解せぬ結果である。

【附方】 舊四、新六。【虛弱の補益】詵曰く、虛弱の人には、烏雄鷄一羽を洗淨し、五味で極度に煮爛して食ふ。生では反つて人體を損するものだ。或は五味で淹けて炙つて食ふも良し。【反胃吐食】烏雄鷄一羽を普通のやうに作り、胡荽子半斤をその腹中に入れ、烹て食ふ。二羽で癒える。【老人の中風】煩熱し、言語の澀るには、烏雄鷄一羽を用ゐ、葱白一握を切つて入れて臛に煮、麻汁、五味を投じて空心に食ふ。(養老書)【脚氣煩懣】烏雄鷄一羽を普通料理の場合のやうに作り、米を入れて羹にして食ふ。(養老書)【寒疝の絞痛】烏雄鷄一羽を普通料理の場合のやうに作り、生地黃七斤と共に剉んで甑中に入れて蒸し、器に承けてその汁を取り、早朝に溫服して夕刻までに服し盡す。諸種の寒癖の證を下すものだ。かくて白粥を食ふ。久しき疝痛も三服に過ぎずしてよし。(肘後)【卒かに起つた欬嗽】烏雄鷄一羽を普通の料理の場合のやうに作り、酒に半日漬けて飲む。(肘後)【腎虛の耳聾】烏雄鷄一羽を淨治し、無灰酒三升で煮熟し、熱に乘じて食ふ。三五羽で效がある。【狐尿刺瘡】刺されて腫

痛し、死せんとするには、烏鷄を破つて搨するが良し。(肘後方)【猫眼睛瘡】身體、面部に猫の眼のやうで光彩のある瘡が生じ、膿血はないがただ非常に痛痒し、食慾の減退する病を寒瘡と名ける。多く鷄、魚、葱、韭を喫へば自ら癒える。(夏子益奇疾方)【打撲傷、顚蹶傷】及び牛馬に蹴られて胸腹に破(七)血し、四肢の摧折したるには、烏鷄一羽を毛のついたまま一千二百杵搗き、苦酒三升を和勻して新布で患部に搨し、(八)膏を布に塗つて貼る。惡寒し、顫ひて吐氣を催ほすときは徐徐に取下し、須臾にして再び一羽の鷄を用ゐて右の如く試み、少頃して更に繰返し、癒えるを度とする。(肘後方)

黑雌鷄肉 [氣味]【甘く酸し、溫、平にして毒なし】 [主治]【羹にして食へば風寒濕痺、五緩、六急を治し、胎を安ずる】(別錄)【心を安じ、志を定め、邪辟、惡氣を除き、血邪を治し、心中の宿血を破り、癰疽を治し、膿を排し、新血、及び産後の虛羸を補し、色を益し、氣を助ける】(日華)【反胃、及び腹痛、踒折骨痛、乳癰を治す。又、新産婦には、一羽を淨治して五味を和し、香しく炒つて酒二升の中に投じ、一晝夜封じてそれを取つて飲む。人體を肥白ならしめるものだ。又、烏油

(七 血、大觀ニ陷ニ作ル。
(八 膏、大觀ニ藥ニ作ル。

麻二升を和して香しく熬り、それを酒中に入れて用ゐるも極めて有效だ」(孟詵)

發明　時珍曰く、黑色は水に屬し、牝の象は陰に屬する。故に烏雌の主として治效のある病證はみな血分の病であつて、各〻その類に從ふのである。

附方　新三。【中風の舌强】言語不能となり、眼睛が動かず、煩熱するには、烏雌鷄一羽を治淨し、酒五升で二升に煮取り、滓を去り、三回に分けてつづけて服し、葱、薑の粥を食つて暖に臥し、少し汁を取る。(飲膳正要)【死胎の下らぬもの】烏鷄一羽を毛を去り、水三升で二升に煮て鷄を去り、帛にその汁を蘸けて臍下を摩すれば自ら出る。(婦人良方)【虛損、積勞】男女の積が原因で虛し、或は大病後に虛損して沈困し、酸疼し、盜汗し、少氣し、喘惙し、或は小腹拘急し、心悸し、胃弱し、多く橫臥して起きること少く、漸次に極端に瘦せるものは、長時日を經過して氣力が竭きた場合には治し難い。烏雌鷄一羽を普通のやうに淨治し、生地黃一斤を切り、飴糖一升と共にその腹中に入れ、縛定して銅器中に入れ、それを瓶中で米五升を蒸す中に入れて熟したとき取出し、その肉を食ひ汁を飲む。鹽を用ゐてはならぬ。一个月に一回試みれば神效がある。(姚僧坦方)

（九）大觀ニ絶上ニ續字アリ。

（一〇）大觀ニ疾チ瘦ニ作ル。

黄雌鷄肉 〔氣味〕 【甘く酸く鹹し、平にして毒なし】日華曰く、性は溫である。骨熱を患ふものは食つてはならぬ。〔主治〕 【傷中、消渇で、小便頻數にして禁ぜぬもの、腸澼、洩痢するもの。五臟、（九）絶傷を補益し、五勞を療じ、氣力を益す】（別錄）【勞劣を治し、髓を添へ、精を補し、陽氣を助け、小腸を暖め、洩精を止め、水氣を補す】（日華）【男子の陽氣を補し、冷氣（一〇）疾で牀に著くものを治す。漸漸に食ふが良し。光粉、諸石末を飯に和したもので飼つた鷄を煮て食へば補益の效がある】（孟詵）【産後の虚羸を治するには、煮汁で藥を煎じて服するが佳し】（時珍）

〔發明〕 時珍曰く、黄は土の色、雌は坤の象であつて、味の甘は脾に歸し、氣の溫は胃を益す。故に主たる治效はいづれも脾、胃の病に在る。丹溪朱氏の「鷄は土に屬す」とはこの鷄を指して特に示したものに相違ない。他の鷄ではこの鷄のやうには行かぬものだ。

〔附方〕 舊三、新六。【水癖水腫】詵曰く、腹中の水癖水腫には、黄雌鷄一羽を普通のやうに治淨し、赤小豆一升を和して共に煮た汁を、日中二回、夜一回飲む。【時行黄疾】時行發黄には、脚の金色なる黄雌鷄を普通のやうに淨治し、煮熟してそれ

を食ひ、汁を飲み、全部を食ひ盡す。二回以上の必要はない。また鹽豉少量を入れてもよし。(肘後方)【消渇飲水】小便頻數なるには、黄雌鷄の煮汁を冷飲し、幷に羹にして肉を食ふ。(心鏡)【下痢禁口】肥えた黄雌鷄一羽を普通のやうに臛にし、それで濕餛飩を作つて空心に食ふ。(心鏡)【脾虚の滑痢】黄雌鷄一羽を炙いて鹽醋を塗り、煮熟して食ふ。(心鏡)【脾、胃の弱乏】身體が痿えて黄瘦するには、黄雌鷄肉五兩、白麪七兩を用ゐ、肉を切つて餛飩にし、五味を投じて煮熟し、空心に食ふ。一日一回試みれば顔色を益し、臟腑を補す。(壽親)【産後の虚羸】黄雌鷄一羽を毛を去り、背部を開破して生百合三箇、白粳米半升を入れて縫合し、五味汁中に入れて煮熟し、腹を開いて百合、幷に飯を取り、汁に和して羹にして食ひ、幷に肉を食ふ。(聖惠)【病後の虚汗】傷寒後の虚弱で晝夜汗が出て止まず、口乾き、心躁するには、黄雌鷄一羽を腸、胃を去つて治淨し、麻黄根一兩、水七大盞と共に煮て汁三大盞に煮取り、滓、及び鷄を去り、肉蓯蓉を酒に一夜浸して淨め剖つて一兩、牡蠣を煆いた粉二兩を入れて一盞半に煎じ取り、一日に服し盡す。(聖惠)【老人の噎食】通らぬには、黄雌鷄肉四兩を切り、伏苓二兩、白麪六兩で餛飩にし、豉汁を入れて煮て食ふ。三五

（一）木村（重）曰ク、うこつけい嘴、脚、骨スベテ黒シ、支那ニ家禽トシテ多シ。

服にして效がある。（養老書）

（一）**烏骨鷄**　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【虚勞羸弱を補し、消渇、中惡、鬼撃、心腹痛を治し、産婦に益し、婦人の崩中帶下、一切の虚損の諸病、大人、小兒の下痢禁口を治す。いづれも煮て食ひ汁を飮む。搗き和して丸藥にするもよし】（時珍）

發明　時珍曰く、烏骨鷄には、毛白くして骨の黑きものと、毛黑くして骨の黑きものと、毛は斑で骨の黑きものとがあり、骨、肉ともに黑きものと、肉白くして骨の黑きものとがあるが、但し鷄の舌の黑いものは肉、骨俱に黑く、藥に入れて更に良好である。鷄は木に屬するものであるが、骨が反て黑いものは巽が坎に變じたものであつて、水、木の精氣を受けてゐる。故に肝、腎、血分の病にはこれを用ゐるがよく、男には雌を、女には雄を用ゐる。婦人科の方にある烏鷄丸は婦人のあらゆる病を治するもので、鷄を爛れるまで煮て藥に和し、或は竝に骨を研つて用ゐてある。

按ずるに、太平御覧に『夏侯弘が江陵へ行つたとき、一の大鬼が數百の小兒を率

ゐて行くに逢つた。弘が潛にその列の最後について行く一小鬼を捉へて問ふて見ると「われわれは廣州の大殺の一行だ。弓と戟とを持つて荊、揚二州へ人を殺しに往くのだが、この弓や戟が心腹に中つたものは死んで了ふ。他の處に中つたものは救はれぬこともない」といつた。そこで弘が「治療に何か方法があるか」と訊ねると「ただ白烏骨雞を殺して心に薄れば瘥える」といつた。恰もその頃、荊、揚地方には心腹を病むものが甚だ衆かつたので、弘はそのとき敎へられた方を用ゐて治療してやつたが、十中の八九まで癒えた。中惡に烏雞を用ゐるは弘から始つたのだ』とある。この說はやや荒唐無稽なところもあるが、しかし方そのものは不可思議な妙效がある。神の授けとでもいふ外はないやうなものだ。鬼擊卒死には、その血を心下に塗つても效がある。

附方　新三。【赤白帶下】白果、蓮肉、江米各五錢、胡椒一錢を末にし、烏骨雞一羽を普通のやうに淨治し、それを木瓜の腹中に裝塡し、煮熟して空心に食ふ。【遺精白濁】下元の虛憊せるには、前記の方を用ゐて食ふがよし。【脾虛の滑泄】烏骨母雞一羽を治淨し、豆蔻一兩、草果二箇を燒いて性を存してその鷄の腹中に摻入

し、紮定して煮熟し、空心に食ふ。

(一二)**反毛鷄**　[主治]　【反胃には、一羽を煮爛して骨を去り、人參、當歸、食鹽各半兩を入れて再び共に煮爛し、その全部を食ふ】(時珍)　記載は乾坤生意にある。

[發明]　時珍曰く、反毛鷄、即ち翻翅鷄であつて、毛、翮がみな逆に前に向いて生えるものだ。反胃を治するはその類に從ふわけである。

泰和老鷄　[氣味]　【甘く辛し、熱にして毒なし】　[主治]　【小兒の痘瘡を内托する】(時珍)

[發明]　時珍曰く、江西の(一三)泰和、吉水の諸縣の俗間には、老鷄は能く痘瘡を發出せしめるといふ言ひ傳ひがあつて、家毎にこれを飼ひ、年數の少いものでも五六年、多いものでは十年二十年のものを、痘瘡の發する時を待つて五味で煮爛して病兒に與へて食はせ、甚しきには胡椒、及び桂、附の屬を加へる。これはやはり陳文中が痘を治するに木香異攻散を用ゐたと同じ意味であつて、濕熱を助け膿を發する效能を利用したものだが、風土の關係上その適する地方と適せぬ地方とがあるから、一般的の通則とするわけには行かない。

(一二)木村(重)曰ク、反毛鷄ハ羽毛ノ捲キタルモノ、形大ナラズ、支那ダケニ産ス。

(一三)泰和、吉水ハ縣名、倶ニ今ハ江西省盧陵道ニ屬ス。

（二四）大觀ニ良上ニ尤ノ字アリ。

（二五）本草滙詮ニ死ヲ邪ニ作ル。

鷄頭　丹、白雄鷄のものが良し。［主治］【鬼を殺す。東門上のものが（二四）良し】（本經）【蠱を治し、惡を禳ひ、瘟を辟ける】（時珍）

［發明］　時珍曰く、古代には、正月元日に雄鷄を磔して門戸を祭り、それで邪鬼を辟けたのだ。蓋し鷄は陽の精、雄は陽の禮、頭は陽の會であつて、東門は陽の方である。純陽は以て純陰に勝つ意味から行つたものだ。千金方の胎兒の女を男に轉ずる方の中にこれを用ゐたのも、やはりこの意味を取つたのである。按ずるに、應劭の風俗通に『俗に鷄を以て門戸を祭る。鷄は乃ち東方の牲であつて、東方は萬物の作るところだから、その門戸を通過して出るといふ意味だ』とある。山海經にも、鬼神を祠るにはいづれも雄鷄を用うとしてあつて、現に賊風を治する藥に鷄頭散といふがあり、蠱を治するには東門の鷄頭を用ゐ、鬼痱を治するには雄鷄血を用ゐる。これはいづれもそれに因つて（二五）死を禦ぎ惡を辟けたものである。又、崔寔の月令に『十二月、東門に白鷄頭を磔す。以て藥に合すべし』とあり、周禮には『鷄人は凡て祭祀禳釁にその鷄牲を供す』とあり、その註に『郛、及び彊を禳つて災變を卻くるなり。宮室の器物を作り、血を取つて釁隙に塗るなり』とある。淮南子には『鷄頭

は瘻を已む』とある。これはいづれも類推される事柄だ。

[附方]　新一。【邪魅に襲はれて卒かに昏死せるもの】東門上の鷄頭を末にし、酒で服す。(千金方)

鷄冠血　三年の雄鷄のものが良し。[氣味]【鹹し、平にして毒なし】[主治]【烏鷄は(一六)乳難に主效がある】(別錄)【目涙の止まぬを治す。日毎に三回點けるが良し】(孟詵)【また暴赤目にも點ける】(時珍)○【丹鷄は白癜風を治す】(日華)【いづれも經絡の間の風熱を療ず。頰に塗れば口喎不正を治し、顏面に塗れば中惡を治し、卒にこれを飲めば縊死者の絶命せんとするもの、及び小兒の卒驚、客忤を治す。諸瘡癬、蜈蚣、蜘蛛の毒、馬嚙瘡、あらゆる蟲の耳に入りたるに塗る】(時珍)

[發明]　時珍曰く、鷄冠血は、三年の老雄の血を用ゐるはその陽氣の充溢せるを取るのであつて、風が血脈に中れば口が僻喎し、冠血は鹹くして血に走り肌に透る。鷄の體中で精華の集中された部分であり、天に本づくものであり、上に親しむものである。丹は陽中の陽であつて能く邪を辟けるものだから。中惡、驚忤の諸病を治するのである。烏は形は陽にして色は陰なるもの、陽中の陰である。故に產乳、

(一六)乳・本草洞詮ニ產ニ作ル。

(二七)太陽石、第十一巻諸石下ニ其名ヲ擧グレドモ其物詳ナラズ。

目涙の諸病を治するのである。蜈蚣、蜘蛛の諸毒を治するは、鷄はあらゆる蟲を食ふものだから、それを制するにその畏の關係を利用するのである。高武の痘疹正宗に『鷄冠血を酒に和して服すれば痘を發するに最も佳し』とあるは、鷄は巽に屬し、風に屬し、頂血は至清、至高なるものだからである。

附方　舊八、新十一。【陽氣の益助】誌曰く、丹雄鷄の冠血に天雄、(二七)太陽粉各四分、桂心二分を和して丸にして服す。【鬼擊で突然死したるもの】烏鷄冠血を口中に瀝して嚥ませ、同時にその鷄を開破して心下に搨し、冷えてから道傍へ棄てるが妙である。(肘後)【卒死、寢死】卒死、或は寢死で、氣息極めて微弱にして絕命せんとするを治す。いづれもこれは中惡である。雄鷄冠血を顏面に塗つて乾けば再び塗り、同時に鼻中に吹き入れ、幷に灰でその死人の周圍を圍む。(肘後)【卒然の忤死】言語を發し得ぬには、鷄冠血で眞珠を和して小豆大の丸にし、三四丸を口中に入れば效がある。(肘後方)【縊死者の死に垂たるもの】心中のなほ溫なるものならば繩を斷つてはならぬ。鷄冠血を刺し取つて口中に滴し、それで心神を安ずる。或は、男には雌を用ゐ、女には雄を用ゐるといふ。(肘後)【小兒の卒驚】痛む處があるやうだ

がその疾の狀態の判明せぬには、雄鷄冠血少量を口中に滴すが妙である。(譚氏小兒)【小兒の解顱】丹雄鷄冠上の血を滴し、それに赤芍藥末を紛すが甚だ良し。(普濟)【陰毒卒痛】雄鷄冠血を熱酒中に入れて飲み、暖に臥して汗を取る。(傷寒蘊要)【婦人の陰血】婦人が不自然な交接のために出血するには、雄鷄冠血を塗る。(集驗)【爛弦風眼】一日三五回、鷄冠血を點ける。(聖惠)【(一八)對口毒瘡】熱鷄血を頻りに塗つて散ぜしめる。(皆效方)【發背癰疽】雄鷄冠血を疽上に滴し、血が盡きたときは再び換へる。鷄五六羽に過ぎずして痛が止み毒が散じ、數日にして自ら癒える。(保壽堂方)【浸淫瘡毒】早期に治療せねば全身に及んで死亡する。鷄冠血を一日四五回塗る。(肘後)【燥癬の痒きもの】雄鷄冠血を頻りに塗る。(范汪方)【馬に咬まれた瘡】腫痛するには、鷄冠血を塗る。(一九)駁馬には雌鷄を用ゐ、牝馬には雄鷄を用ゐる。(肘後方)【蜈蚣の咬瘡】鷄冠血を塗る。(錢相公篋中方)【蜘蛛の咬瘡】同上。【蜈蚣の毒に中りたるもの】舌が脹つて口から出るものである。雄鷄冠血に舌を浸し、并に咽ふ。(靑囊雜纂)【諸蟲の耳に入りたるとき】鷄冠血を滴入すれば出る。(勝金)

鷄血　烏鷄、白鷄のものが良し。[氣味]【鹹し、平にして毒なし】[主治]

(一八)對口瘡ハ俗ニ云フクビキリチヤウ。

(一九)駁馬ハ牡馬。

【踒折骨痛、及び痿痺、中惡腹痛、乳難】（別錄）【驢馬を手術する爲に受けた傷、及び馬咬傷を治するには、熱血に浸す。白癜風、瀝瘍風には、雄鷄翅下の血を塗る】（蘇器）【熱血を服すれば小兒の下血、及び驚風を治し、丹毒、蠱毒、鬼排、陰毒を解し、神を安じ、志を定める】時珍曰く、肘後の驚邪恍惚を治する大方中にやはり用ゐてある。

附方　舊一、新九。【陰毒】鷄血を熱酒に衝して飲む。【鬼排卒死】烏雄雞血を心下に塗れば甦る。（風俗通）【あるゆる蠱毒を解す】白鷄血を熱飲する。（廣記）【驚風で意識不明となつて回復せぬもの】白い烏骨雄鷄の血を唇に抹すれば回復する。（集成）【縊死者のまだ絶命せぬもの】鷄血を喉下に塗る。（千金）【黃疸で重體のもの】半斤の大雄鷄の背を破開し、毛を去らずに熱血を帶びたまま患者の胸前に合せ、冷えれば換へる。日に數羽の鷄を換へて用ゐれば積毒を拔き去つて癒える。これに用ゐた雞は有毒だから食つてはならぬ。犬はやはりこれを食はない（唐瑤經驗方）【筋骨の折傷】急に雄鷄一羽を刺して血を取り、患者の酒量を量つて或は半椀に和して飲む。痛は立ろに止んで神驗がある。（青囊）【雜物の眯目】出ぬものには、鷄肝血少量を滴せ

ば出る。(聖惠)【蚰蜒の耳に入りたるとき】生油で鷄心血を調へて滴せば出る。(總錄)
【金瘡の腸出】乾いた人屎末を抹して桑皮線で縫合し、熱鷄血を塗る。(生生編)

肪　烏雄鷄のものが良し。氣味【甘し、寒にして毒なし】主治【耳聾】(別錄)【禿頭病で髮の落ちるもの】(時珍)

附方　新一。【年久しき耳聾】錬成した鷄肪五兩、桂心十八銖、野葛六銖を共に文火で煎じ、三沸して滓を去り、棗ほどづつを葦筒に入れて炙き溶し、耳中に傾け入れる。かく十日間繼續すれば長さ一寸ばかりの耵聹が自ら出る。(千金翼)

腦　白雄鷄のものが良し。主治【小兒の驚癇。灰に燒いて酒で服すれば難産を治す】(蘇恭)

心　烏雄鷄のものが良し。主治【(二〇)五邪】(別錄)

肝　雄鷄のものが良し。氣味【甘く苦し、溫にして毒なし】時珍曰く、微毒あり。内則に『鷄を食ふには肝を去る。人を利せざるためだ』とある。

主治【陰を起す】(別錄)【腎を補し、心腹痛を治す。漏胎下血を安ずるには、一羽分を切つて酒五合に和して服す】(孟詵)【風虛目暗を療ず。婦人の陰蝕瘡を治す

(二〇)五邪ハ風、寒、濕、霧、飮食、或ハ霧ヲ除キ暑ヲ入ル。

るには、切片して挿入する。蟲を引き出し盡して良し】(時珍)

［附方］新三。【陰痿不起】雄鷄肝三羽分、菟絲一升を末にし、雀卵で和して小豆大の丸にし、一日二回、一百丸づつを酒で服す。(千金)【肝虚目暗】老人の肝虚目暗には、烏雄鷄肝一羽分を切つて豉と米とを和し、羹を作り粥を煮て食ふ。(養老書)【睡眠中の遺尿】雄鷄肝、桂心等分を搗いて小豆大の丸にし、一日三回、一丸づつを米飲で服す。遺精には白龍骨を加へる。

膽 烏雄鷄のものが良し。［氣味］【苦し、微寒にして毒なし】［主治］【目の明かならぬもの、肌瘡】(別錄)【月蝕瘡の耳根を遶るには、一日三回塗る】(孟詵)【燈心に蘸けて胎赤眼に點けるが甚だ良し。水に化して痔瘡に塗るも有效だ】(時珍)

［附方］新四。【沙石淋瀝】雄鷄膽の乾いたもの半兩、鷄屎白を炒つて一兩を研勻し、溫酒で一錢を服す。利するを度とする。(十便良方)【耳瘡、肬目】黑雌鷄の膽汁を一日三回づつ塗る。(聖惠)【眼熱で淚を流すもの】五倍子、蔓荊子の煎湯で洗つて後、雄鷄膽を點ける。(摘玄方)【沙塵の眯目】鷄膽汁を點ける。(醫說)

腎 雄鷄のものが良し。［主治］【鼽鼻の臭さには、一對を(二一)脖前の肉と等分

(二一)脖、靈樞經ノ註

に豉七粒を入れ、新瓦で焙じ研り、鷄子淸で和して餅にし、鼻前に置いて蟲を引き出す。陰人、鷄、犬に見られることを忌む】（十便良方）

嗉　主治　【小便の禁ぜぬもの、及び氣噎して食物の消化せぬもの】（時珍）

附方　新三。【噎して食物の通らぬもの】鷄嗉の中に食物の入つたまま二箇を濕紙で包み、黄泥で固濟して煅いて性を存して末にし、木香、沈香、丁香の末各一錢を入れ、棗で和して梧子大の丸にし、三丸づつを汁で服す。【小便の禁ぜぬもの】雄鷄の喉嚨、及び（二二）膍胵、幷に屎白等分を末にし、麥粥淸で服す。（衞生易簡方）【發背腫毒】鷄嗉、及び（二三）肶內黄皮を焙じ研り、濕へるものには乾して摻り、乾けるものには油で調へて搽る。（醫林正宗）

膍胵裏の黄皮　一名　**鷄內金**　膍胵の音は脾鴟（ヒシ）である。鷄の肶のことだ。近世では一般にそのまま肶內の黄皮と呼ぶことを諱んで鷄內金と呼ぶ。男には雌のものを用ゐ、女には雄のものを用ゐる。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【洩（二四）痢、小便を（二五）頻りに（二六）遺するもの。熱を除き、煩を止める】（別錄）【泄精、並に尿血、崩中帶下、腸風瀉血

ニ脖胦・臍ナリトアリ。

（二二）膍胵ハトリノ胃。

（二三）肶ハトリノ胃。

（二四）痢、大觀ニ利ニ作ル。

（二五）大觀ニ頻ナ利ニ

作ル。(三六)大觀ニ遺下ニ溺字アリ。

を止める』(日華)『小兒の食瘧を治し、大人の淋漓、反胃を療じ、酒精を消し、喉閉、乳蛾、一切の口瘡、牙疳、諸瘡を治す』(時珍)

附方　舊二、新十八。『小便遺失』鷄膍胵一羽分、竝に腸を焼いて性を存し、酒で服す。男は雌を用ゐ、女は雄を用ゐる。(集驗)『小便淋瀝』忍び難く痛むには、鷄肫內の黃皮五錢を陰乾し、焼いて性を存して一服となし。白湯で服す。立ろに癒える。(醫林集要)『膈消飲水』鷄內金を洗つて晒し乾し、栝樓根を炒つて五兩を末にし、糊で梧桐子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを溫水で服す。(總錄)『反胃吐食』鷄膍胵一羽分を焼いて性を存し、酒で調へて服す。男は雌を用ゐ、女は雄を用ゐる。(千金)『酒積を消化し導く』鷄膍胵、乾葛を末にして等分を麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを酒で服す。(袖珍方)『禁口痢疾』鷄內金を焙じ研り、乳汁で服す。『小兒の瘧疾』鷄膍胵黃皮を焼いて性を存し、乳で服す。男は雌を用ゐ、女は雄を用ゐる。(千金)『喉閉乳蛾』鷄肫黃皮を洗はずに陰乾して焼いて末にし、竹管で吹入る。直ちに破れて癒える(靑囊方)『一切の口瘡』鷄內金を灰に焼いて傅ける。立ろに效がある。(活幼新書)『鵝口白瘡』鷄肫黃皮を末にし、半錢を乳で服す。(子母祕錄)『走馬牙疳』

經驗では、鷄肶黄皮の水に落さぬもの五箇、枯礬五錢を研つて搽る。立ろに癒える。

○心鑑では、鷄肶黄皮を燈火の上で焼いて性を存し、枯礬。黄柏末等分、麝香少量を入れ、先づ米泔で洗ひ漱いで後に貼る。【陰頭の瘡蝕】鷄內金を水に落さずに拭き淨め、新瓦で焙じて脆くし、火毒を出して細末にし、先づ米泔水で瘡を洗つてから搽る。また口瘡をも治す。(經驗方)【穀道に生じた瘡】久しく癒えぬには、鷄膍胵を焼いて性を存し、末にして乾して貼る。神の如きものだ。(總錄)【脚脛に生じた瘡】雄鷄肶內皮を洗淨して貼り、一日一回易へる。十日にして癒える。(小山奇方)【瘡口の合はぬもの】鷄膍胵皮を日毎に貼る。【發背の初期】鷄肶黄皮の水に落さぬものを陰乾し、使用時に溫水で潤ほし、開いて貼る。乾く都度また潤ほす。三五箇に過ぎずして消く。(楊氏經驗方)【發背の已に潰れたもの】鷄肶黄皮を綿絮と共に焙じ、末にして搽れば癒える。【金(二七)顋瘡蝕】初生には米、豆ほどで、久しくすると穿蝕するには、鷄內金を焙じ、鬱金と等分を末にし、鹽漿で漱いでから貼る。米食を忌む。(總錄)【小兒の疣目】鷄肶黄皮で擦れば自ら落ちる。(集要方)【鷄骨の哽咽】活きた鷄一羽を打ち死して鷄內金を取り出し、洗淨して燈草で裹み、火の上で焼いて性を存

(二七)顋ハ腮ノ誤、金腮瘡ハ頰腮ニ生ズル瘡ヲ云フ。

し、竹筒で咽中に吹入れば消する。肉を見てはならぬ。(攝生方)

腸 男は雌を用ゐ、女は雄を用ゐる。[主治]【遺溺。小便頻數にして禁ぜぬには、燒いて性を存し、三指づつを酒で服す】(別錄)【遺精白濁、消渇を止める】(時珍)

[附方] 舊一。【小便頻りにして遺するもの】心鏡では、雄鷄腸一羽分で臛を作り、酒に和して服す。○普濟では、雄鷄腸を水で煮て、一日三回その汁を服す。

肋骨 烏骨鷄のものが良し。[主治]【小兒が羸瘦して食事を攝つても肌を生ぜぬもの】(別錄)

[附方] 新二。【小兒の顖陷】臟腑の壅熱が原因で氣血の働きの十分ならぬためである。烏鷄骨一兩を酥で黄に炙き、生地黄を焙じて二兩と末にし、半錢づつを(二八)引飲で調へて服す。(聖惠方)【瘡中に朽骨あるもの】久しく經過した疽、久しく經過しか漏で、中に朽骨あるには、烏骨鷄の脛骨に砒石を塡實し、鹽泥で固濟して赤く煆き、毒を出し、骨を研末して飯で粟米大の丸にし、一粒づつを白紙に撚り込んで竅中に送入し、拔毒の膏藥で封ずる。その朽骨は自ら出る。(醫學正傳)

距 白雄鷄のものが良し。[主治]【難產には、燒き研つて酒で服す】(蘇恭)

(二八)引飲ハ吸飲器ノコトナラン。

【骨哽を下すには、鷄足一羽分を灰に燒いて水で服す】(時珍) 記載は外臺にある。

翮翎 白雄鷄のものが良し。［主　治］【血閉を下す。左翅毛は能く陰を起す】(別錄) 【婦人の小便の禁ぜぬものを治し、陰癩を消し、骨哽蝕、癰疽を療ず。小兒の夜啼を止めるには、その母の氣づかぬやうに席下に置く】(時珍)

［發　明］ 時珍曰く、翅翮は、形が鋭くして飛揚の場合にそこに力を集中する部分である。故に能く血を破り、腫を消し、癰を潰し、哽を下すのだ。按ずるに、葛洪は『凡そ古井、及び五月には井中に毒がある。そのまま直ちに中に入つてはならぬ。入れば直ちに死ぬものだ。豫め鷄毛を落して試みるがよし、毛が直下に落ちるときは毒がないが、回旋してゐるものならば毒がある』といつた。又、感應志には『(二九)五酉の日に白鷄の左の翅を灰に燒いて揚げると風が立ろに吹いて來る。黑犬の皮毛を灰に燒いて揚げれば風が立ろに止む』とある。巽を風となし、鷄を巽に屬すといふはこれでも知られる。

［附　方］ 舊二、新七。【斗ほどの陰腫】鷄の翅毛の一孔に二本生えたものを灰に燒いて飲服する。左腫には(三〇)右翅を取り、右腫には(三一)左翅を取り、雙方腫れたるに

(二九)五ハ五行チ云フ、酉ハ老ナリト云フ、五行ハ木火土金水ナレバ、七曜中日月チ除キタル特別ノ日チ五酉日トイフナルベシ。

(三〇)大觀ニハ右チ左

ニ作ル。
(二一)大觀ニハ左ナ右ニ作ル。
(二二)大觀ニハ古今錄驗ニ作ル。
(二三)大觀ニハ毛字下ニ各一莖ノ三字アリ。
(二四)大觀ニハ經驗後方ニ作ル。

は雙方の翅を取る。(肘後方)【突然の陰腫痛】鷄翮六本を焼いて性を存し、蛇床子末と等分をその左右に隨つて傅ける。(二二)(肘後方)【婦人の遺尿】雄鷄翎を灰に焼き、一日三回、方寸匕を酒で服す。(千金翼)【咽喉骨哽】白雄鷄の左右翮の大毛各一本を灰に焼き、水で服す。(外臺)【腸内に癰の生じたるもの】雄鷄頂上の毛、幷に屎を焼いて末にし、空心に酒で服す。(千金)【鍼の代用として癰を決する】白鷄翅下の兩方の第一番目の(二三)毛を灰に焼き、水で服す。直ちに破れる。(二四)(外臺)【蜀椒の毒を解す】鷄毛を焼いて烟を吸ふ。幷に水で一錢を調へて服す。(千金方)【馬汗の瘡に入つたもの】鷄毛を灰に焼き、酒で方寸匕を服す。(集驗方)【蠼螋尿瘡】烏鷄の翅毛を灰に焼き、油で調へて傅ける。蟲は鷄を畏れるものだからである。(瑣碎錄)

尾毛

【主治】【刺の肉中に入りたるには、十四本を男兒を産んだ母の乳で和して封ずれば出るものである】(孟詵)【蜀椒の毒を解するには、烟に焼いて吸ふ。幷に水で灰を調へ服す。又、小兒の痘瘡後に生じた癰を治するには、焼灰を水で和して傅ける】(時珍)

【附方】新一。【小便の禁ぜぬもの】雄鷄翎を焼いて研り、方寸匕を酒で服す。

(外臺祕要)

屎白 雄鷄の屎には白がある。臘月に取り收める。白鷄にして烏骨のものの屎が更に良し。素問には鷄矢と書いてある。［氣味］【微寒にして毒なし】

［主治］【消渴、傷寒寒熱。(三五)石淋を破る。及び轉筋。小便を利し、遺尿を止め、瘢痕を滅す】(別錄)【中風の失音、痰迷を治す。炒つて服すれば小兒の客忤、蠱毒を治し、(三六)白虎風を治す。風痛に貼る】(日華)【賊風、風痺を治す。血を破るには黑豆に和して炒り、酒に浸して服す。また蟲咬毒を治す】(藏器)【氣を下し、大、小便を通利し、心腹鼓脹を治し、癥瘕を消し、破傷中風、小兒の驚啼を療ず。水で取つた淋汁を服すれば金、銀の毒を解す。醋で和して蜈蚣、蚯蚓の咬毒に塗る】(時珍)

［發明］頌曰く、按ずるに、素問に『心腹が滿し、朝は食事を攝るが暮には攝取不能なるを鼓脹と名ける。これを治するには鷄屎醴を以てし、一劑にして反應があり、二劑にして已む』とあり、王冰の註に『本草には、鷄屎は小便を治すとあるが、蠱脹を治すとはしてない。今の方法では、湯に漬けて服することになつてゐるだけだ』とある。

(三五)大觀ニ(本經)ノ二字アリ。

(三六)白虎風ハ急性關節僂麻質斯。

(三七)范汪ハ字ハ玄平東晉潁陽ノ人。
(三八)青龍ハ曹魏ノ文帝ノ年號。

時珍曰く、鼓脹は濕熱から生じ、また積滯から成るものもある。鷄屎は能く氣を下し、積を消し、大、小便を通利するものだから鼓脹を治するに特殊な功果があるのであつて、これは岐伯の神方である。醴とは一夜にして始めて發酵したばかりの酒醅のことだ。又按ずるに、(三七)范汪の方に『宋の(三八)青龍年間に、司徒の下僚の顏奮といふものの娘が風疾に苦み、一方の髀が偏痛したが、ある人が、地に坑を掘り、鷄屎、荊葉を取つてその中で燃し、脛をその中に入れて薰ずると、長い蟲が出て遂に癒えた』とある。

附方 舊十四、新三十。【鷄矢醴】普濟方に『鼓脹で朝には食ふが暮に食はれるものを治す。この病は脾虛のために水の處分が十分でなく、水が反つて土に勝ち、水、穀の營養分が十分に運行せず、氣が宣流せぬところから中滿を起し、その脈が沈し、實して滑するものである。これには鷄矢醴を主として用ゐるがよし』とある。何大英は『諸種の腹の脹大するものはみな熱に屬する。精氣が膀胱に滲入し得ずして別に腑に走り、皮裏、膜外に溢れるから脹滿となつて小便が短く澁るのだ。鷄矢は性が寒であつて小便を利す。誠に萬全不傳の寶だ』といつた。臘月の乾いた鷄矢

白半斤を袋に盛り、酒醅一斗の中に七日間漬け、一日三回、三盃づつを温服する。或は末にして二錢を服するもよし。○宜明では、鷄矢、桃仁、大黃各一錢を水で煎じて服す。○正傳では、鷄矢を炒つて研り、沸湯で淋汁を取り、木香、檳榔末二錢を調へて服す。○ある方では、鷄矢、川芎藭等分を末にし、酒糊で丸にして服す。

【牽牛酒】鼓脹と、氣脹と、濕脹と、水脹等とに拘らず、一切の肚脹、四肢の腫脹を治す。峨嵋山のある僧がこの方を用ゐて一般人の治療に效を擧げた。治療を受けた患者が牛を牽いて行つて謝禮をしたといふところから牽牛酒と名けたものだ。乾鷄矢一升を黃に炒り、酒醅三椀で一椀に煮て濾して汁を飮む。少頃して腹中の氣が大いに轉動し、利下する。それで脚下から皮が皺んで消くものだ。なほ消し盡さぬときは隔日に再び試み、同時に田蠃二箇を滾る酒の中へ入れて淪でて食ひ、後に白粥を食つて適度に處置する。（積善堂經驗方）【小兒の腹脹】黃瘦するには、乾鷄矢一兩、丁香一錢を末にし、蒸餅で小豆大の丸にし、一日三回、十丸づつを米湯で服す。（活幼全書）【心腹の鼈瘕】及び宿癥、并に突然起つた癥には、白雄鷄を飯で飼つて糞を取り、小便と共に瓦器に入れて黃に熬つて末にし、一日四五回、方寸匕づつを温酒で

服す。或は雑飯で飼つたものを用ゐ、消するを度とするも佳し。(集驗方)【米を食つて瘕となつたもの】好んで生米を食ひ、口中から清水を出すには、鶏矢、白米各半合を共に炒つて末にし、水一鍾で調へて服す。良久して米のやうな形のものを吐出して瘥える。昔、慎恭道がこれを病んで勞のやうな狀態に飢瘦したとき、蜀の僧道廣がこの處方を用ゐて治癒した。(醫說)【反胃吐食】烏骨鶏一羽を四五日間食物を與へず水のみを與へ、五蒲蛇二條を竹刀で切つて與へて食はせ、排糞するを待つて取り、陰乾して末にし、水で粟米大の丸にし、一分づつを桃仁湯で服す。五七服にして癒える。(證治發明)【諸菜の中毒】發狂し、吐下し、死せんとするには、鶏矢を燒いて末にし、水で方寸匕を服す。(葛氏方)【石淋疼痛】鶏矢白を日中に乾して半乾にし、香しく炒つて末にし、一日二回、方寸匕を(三九)酸漿で飲服する。石を下出するものだ。(古今錄驗)【小兒の血淋】鶏矢尖白の粉のやうな部分を炒つて研り、糊で菉豆大の丸にし、三五丸づつを酒で服す。四五服で效がある。【產後の遺尿】禁ぜぬには、鶏矢を灰に燒いて方寸匕を酒で服す。(產寶)【轉筋の腹に入りたるもの】その患者の臂、脚が直くすくみ、脈の上下微弦するには、鶏矢を末にし、水六合で方寸匕を和

(三九) 大觀ニ漿下ニ飯字アリ。

して温服する。(張仲景方)【中風寒痺】口噤し、人事不省なるには、鷄矢白一升を黄に炒り、酒三升を入れて攪きまぜ、澄清して飲む。(葛氏)【白虎風痛】詵曰く、飯を患部に鋪いて丹雄鷄に食はせ、良久して熱糞を取つて封じ、取り訖つてから患者の寢臺の下に伏せしめる。【破傷中風】腰脊反張し、牙緊口噤し、四肢強直するには、鷄矢白一升、大豆五升を黄に炒つて酒を沃ぎ、微し烹て豆を澄み沈ませ、量を計つて飲み、汗を取り風を避ける。(經驗方)【産後の中風】口噤し、瘛瘲し、角弓反張するには、黒豆二升半を鷄矢白一升と共に炒熟し、清酒一升半を入れて浸して一升を取り、竹瀝を入れて服して汗を取る。(産寶)【角弓反張】四肢不隨にして煩亂し死せんとするには、鷄矢白一升、清酒五升を搗き篩つて合せ、それを千回汲み揚げて飲む。大人は一升を服し、小兒は五合を服す。一日二服。(肘後)【小兒の口噤】顏色の赤くなるのは心に屬し白くなるは肺に屬する。鷄矢白を棗の大いさほど綿に裹み、水一合で煮て二回に分服する。ある方では酒に研つて服す。(千金方)【小兒の緊唇】鷄矢白を研末して傅け、涎が出たときは易へ去る。(聖惠)【小兒の驚啼】鷄矢白を灰に燒き、二字を米飲で服す。(千金方)【頭風の痺木】臘月の烏鷄矢一升を黄に炒つて

（四〇）大觀ニ痛上ニ安字アリ、處下ニ咬ノ字アリ。
（四一）大觀ニ雄ニ作ル。
（四二）大觀ニ五ノ上ニ取ルノ字アリ。
（四三）大觀ニ續千金方ニ作ル。

末にし、絹袋に盛つて三升の酒中に漬け、頻りに溫服して醉はしめる。（千金方）【喉痺腫痛】鷄矢白を含んで汁を嚥む。（聖惠）【牙齒の疼痛】鷄矢白を燒いて末にし、綿で裹んで（四〇）痛む處で咬む。立ろに瘥える。（經驗方）【鼻血の止まぬもの】鷄矢の白色の半截あるものを取つて灰に燒いて吹く。（唐氏經驗方）【牙齒の生えぬもの】大人、小兒に拘らず、雄鷄矢、雌鷄矢十五顆を焙じて研り、麝香少量を入れ、先づ齒根を針で挑破して血を出して傅ける。老年者も二十日を過ぎず、少年者は十日にして必ず生える。〇普濟では、ただ烏鷄雌雄の糞に舊い麻鞋底を燒いて性を存して等分を入れ、麝香少量を入れ、三晝夜休まず擦つて熱せしむるが佳し。察院の李亮卿は嘗て用ゐて奏效した。【耳が聾して聽えぬもの】鷄矢白を炒つて半升、烏豆を炒つて一升を熱した無灰酒二升に投入して服し、汗を取る。耳が鼓のやうに鳴るが危惧するに及ばぬ。（外臺）【面目の黃疸】鷄矢白、小豆、秫米各二分を末にし、三回に分けて水で服す。黃汁が出るものだ（肘後方）【胎兒死亡】（四一）雌鷄糞二十一箇を水二升（四二）五合で煮て米を入れ、粥にして食ふ。（四三）（產寶）【乳妬、乳癰】鷄矢白を炒つて研り、酒で方寸匕を服す。三服で癒える（產寶）【乳頭破裂】方は上に同じ。【內癰の未だ成らぬ

（四四）尸脚ハ脚ノ踝（クロブシ）ガ拆ケ破ルル病。

もの】伏鶏屎を取つて水に和して服すれば瘥える。（千金）【頭瘡白禿】雄鶏屎末を陳醬、苦酒で和して洗ふ。（千金）【瘢痕を消滅する法】豬脂三升で烏鷄一羽を飼ひ、三日後に矢を取り、白芷、當歸各一兩を共に煎じて十沸し、滓を去つて鷹矢白半兩を入れて調へて傅ける。（外臺）【耳中の惡瘡】鷄矢白を炒り研つて傅ける。（聖惠）【瘰癧瘻瘡】雄鷄矢を灰に燒き、臘豬脂で和して傅ける。（千金）【金を食つて中毒したもの】已に死したるには、鷄矢半升を取つて水で淋汁を取り、一升を飲む。一日三回。（肘後方）【縊死者の未だ絶命せぬもの】鷄矢白を棗の大いさほど酒半盞に和して口、鼻、から灌ぐ。（肘後）【（四四）尸脚で折裂せるもの】冬となく夏となく起るものには、鷄屎を煮た湯に半日漬け、瘥えたならば止める。（千金）【射工溪毒】白鷄矢の白きもの二箇を餳で和して瘡上に塗る。（肘後）【骨疽の合はぬもの】骨が孔中から出るものには、地坑を口小さく內大きく深さ三尺に掘り、乾鷄屎二升を艾、及び荆葉と共に搗き碎いてその坑中に入れ、燒いて烟を出し、疽口をそれに就けて熏じ、衣服で擁ふて氣の洩れぬやうにする。半日にして蟲が出るものだ。甚だ有效である。（千金方）【陰毒腹痛】鷄糞、烏豆、地膚子各一把、亂髮一團を共に炒つて烟を起て、好き酒一椀に傾

け入れて浸し、滓を去つて熱服すれば止む。(生生編)【小兒の心痛】白烏骨鷄屎五錢を晒して研り、松脂五錢と末にし、葱頭汁で和して梧子大の丸にし、黄丹を衣にかけ、五丸づつを醋湯で服す。生物、冷物、硬物を忌む。三四日にして立ろに效がある。(嬰童百問)

(四五)**鷄子** 卽ち**鷄卵**である。黄雌のものを上とし、烏雌のものはこれに次ぐ。

氣味 【甘し、平にして毒なし】思邈曰く、微寒なり、醇醋を畏る。鼎曰く、多く食ふと人の腹中に聲あらしめ、風氣を動ぜしめるものだ。葱、蒜と和して食へば氣短となり、韮子と共に食へば風痛を成し、鼈肉と共に食へば人體を損じ、獺肉と共に食へば(四六)遁尸と成り、兎肉と共に食へば洩痢となり、妊婦が鷄子、鯉魚と共に食へば生兒に瘡を生ぜしめ、糯米と共に食へば生兒をして蟲を生ぜしめる。時珍曰く、小兒が痘疹を患つたときは鷄子を食ふことを忌む。また煎食する臭氣を聞けば翳膜を生ぜしめる。

主治 【熱火灼爛瘡、癇痓を除く。虎魄に作り、神物を作り得る】(別錄)弘景曰く、これを作るに用ゐるには、毈した鷄子で黄と白が混雑したものが適當であつ

(四五)木村(重)曰ク、鷄子ハ鷄卵、鷄蛋(チータン)ト稱ス。卵子(ランツ)ハ卵ニ非ズ蠶丸ナリ。(俗稱)

(四六)遁尸ハ勞瘵ノ一種。

（四七）光粉ハ粉錫、即オシロイ。

て、煮て作るものだ。極めてよく似たものになるが、ただ芥を吸ひ付けぬだけである。又、煮た白を銀と合せて口に含めば須臾にして金のやうな色になる。「心を鎮め、五臓を安じ、驚を止め、胎を安じ、妊婦の天行熱疾で狂走するもの、男子の陰囊濕痒を治し、また喉聲失音を開く。醋で煮て食へば赤白久痢、及び産後の虚痢を治す。（四七）光粉と共に炒り乾したものは疳痢、及び婦人の陰瘡を治す。豆淋酒に和して服すれば賊風、痲痺を治す。醋に浸して壞れしめて疵䵟に傅ける。酒にして用ゐれば産後の血運を止め、水臓を暖め、小便を縮め、耳鳴を止める。蠟に和して炒つて用ゐれば耳鳴聾、及び疳痢を治す」（日華）「氣を益す。濁水で一箇を煮て水共に服すれば産後の痢を治す。蠟に和して煎じて用ゐれば小兒の痢を止める」（藏器）「小兒の發熱には、白蜜一合に三顆を和して攪きまぜて服すれば立ろに瘥える」（孟詵）太平御覽に『正月元日の朝、烏雞子一箇を呑んでその身形を練る』とあり、岣嶁神書に『八月晦日の夜半、北に面して烏雞子一箇を呑めば、何事かあつた場合に形を隱し得る』とある。

【發明】時珍曰く、卵白は天に象り、その氣は清み、その性は微寒である。卵

黄は地に象り、その氣は渾り、その性は温である。卵といへばその黄と白を兼ねたものであつて、これを用ゐればその性は平である。精不足のものはこれを補するに氣を以てするものだ。故に卵白は能く氣を清し、伏熱、目赤、咽痛の諸疾を治するのである。形不足のものはこれを補するに味を以てするものだ。故に卵黄は能く血を補し、下痢、胎産の諸疾を治するのである。卵全體としては氣と血とを兼理するものだから上記の諸疾を治するのである。

附方　舊八、新二十三。【天行の解せぬもの】已に汗したるものには、生んだばかりの鷄子五箇を盞中に傾け入れ、水を鷄子一箇の量ほど入れて攪渾し、水一升を煮沸した中に投じ、少量の醬を入れて啜り、汗を出さすれば癒える。(許仁則方)【天行嘔逆】食物が入れば直ちに吐くには、鷄子一箇を水で煮て三五沸し、冷水に浸して少頃して呑む。(外臺)【傷寒發狂】煩燥し、熱の極端なるには、生鷄子一箇を呑めば效がある。(食鑑)【三十六黄】急救方では、鷄子一顆を殼のまま灰に燒いて研り、酢一合で和して温服する。鼻中から蟲が出て奏效する。身體の極めて黄なるものも三箇に過ぎずして神效がある。(外臺祕要)【白虎風病】藏器曰く、鷄子を取つて病處に

搐り、咒文を唱へて糞を頭上に堆く積む。三回に過ぎずして癒える。白虎とに糞神のことであつて、好んで鶏子を喫ふものだ。【身體、面部の腫滿】鶏子の黄と白を相和して腫れた部分へ塗り、乾けば再び塗る。（肘後方）【年月久しき哮喘】鶏子を少し敲いて損し、三四日間尿缸中に浸して煮て食ふ。能く風痰を去る（集成）【心氣痛】鶏子一箇を打ち破り、醋二合で調へて服す。（肘後）【小兒の疳痢】肚脹するには、鶏子一箇に孔を開けて巴豆一粒、輕粉一錢を入れ、紙で五十重に裹んで飯の上で三回蒸し、放し冷して殼を去り、研つて麝香少量を入れ、糊で和して米粒大の丸にし、二丸乃至三丸を食後に温湯で服す。（經驗方）【痘毒の預解】保和方では、鶏卵一箇を用ゐ、活きた地龍一條をその卵の中へ入れて飯の上で蒸し熟し、地龍を去つて卵を小兒に與へて食はせる。立春の日に一箇を食へば終身痘が出ない。○李氏の方では、鶏卵一箇を七日間童尿に浸し、水で煮て食ふ。永く痘が出ない。○李捷は、頭生の鶏子三五箇を厠坑内に五七日間浸して取出し、煮熟して與へて食はせ、數日後に再び一箇を食はせた。永く痘が出ない。徐都司が浙地方の人から傳へた方である。【痘瘡赤瘢】鶏子一箇を酒醅に七日間浸し、白殭蠶十四箇を和勻し、赤く搭つて

（四八）大觀ニ方上ニ後字アリ、

塗る。甚だ有效だ。（聖惠）【雀卵面皰】鷄卵を醋に浸し、壞して取出して傅ける。（聖惠）【妊娠時疾】冷胎で動せぬには、鷄子七箇を井中に入れて冷し、取出して打ち破つて呑む。（子母祕錄）【母體病氣の場合の墮胎法】鷄子一箇に鹽三指撮を入れて服す。（張文仲方）【胎動下血】藏器曰く、鷄子二箇を打破り、白粉を和稀して食ふ。【胎兒死亡】三戸の家の鷄卵各一箇、三戸の家の鹽各一撮、三戸の家の水各一升を共に煮て、その妊婦をして東に向つて飲ませる。（千金方）【產後に血の多きもの】止まぬには、烏鷄子三箇、醋半升、酒二升を攪きまぜ、一升に煮取つて四回に分服する。（拾遺）【產後の心痛】鷄子を酒で煮て食ふ。直ちに安らかになる。（備急方）【產後の口乾】舌の縮まるには、鷄子一箇を打破り、水一盞と攪拌して服す。（四八）（經驗方）【婦人の白帶】酒、及び艾葉を用ゐて鷄卵を煮て日毎に食ふ。（袖珍方）【頭風白屑】生みたての鷄子三箇を沸湯五升に攪和し、三回に分けて沐するが甚だ良し。（集驗）【腋下胡臭】鷄子二箇を煮熟し、殼を去つて熱きまま夾み、冷えるを待つて三叉路に棄てる。回顧してはならぬ。三回試みれば效がある。（肘後方）【乳石の發渴】鷄子を水に浸して淸を取り、生で服す。甚だ良し（總錄）【野葛の毒を解す】已に死したる場合には、

物で口を開けて後に鷄子三箇を灌ぐ。須臾にして野葛を吐出して甦る。（肘後方）【胡蔓野毒】これは斷腸草のことであつて、葉一枚口に入ればあらゆる身竅から血を流すものである。ただ急に鳳凰胎――卽ち鷄が抱いてまだ雛にならぬもの、已に雛となつたものは用ゐない――を研り爛らし、麻（四九）血で和して灌ぐ。毒物を吐出して復活する。少し手遲れれば死ぬ。（嶺南衛生方）【癰疽發背】發生の初期、及び十日以上を經過して赤腫し焮熱し、晝夜疼痛し、あらゆる藥も效なきには、鍜鷄子一箇を新狗屎を鷄子の大いさほどと攪き勻ぜ、微火で熬つて適度に稀稠し、捻つて餅にして腫の頭に貼り、帛で包抹し、時時に看視してその餅が熱するを覺えたときは易へる。動かし、又は藥の氣を歇めてはならぬ。一夜を經れば定まるものだ。もし日數多くかかる場合には、三日これを貼つて一日に一回易へる。瘥えたならば止める。この方は實行上甚だ穢惡なものだから高貴の人には用ゐかねるが、あらゆる方法でいづれも奏效しなかつた場合のために備へて置く必要がある。（千金方）【蛛、蠍、蛇傷】鷄子一箇を輕く敲いて小孔を開け、それを傷に合せれば立ろに瘥える。（兵部手集）【蠼螋尿瘡】上記の法に同じ。【身體の發熱】大人、小兒に拘らず、鷄卵三箇、白蜜

（四九）血ハ油ノ誤ナラン。

(五〇)大觀ニ一半ナ如白之半ノ四字ニ作ル。

一合を和して服すれば立ろに瘥える。(普濟方)

卵白 [氣味] 【甘し、微寒にして毒なし】[主治] 【目熱赤痛。心下の伏熱を除き、煩滿、欬逆、小兒の下泄を止める。婦人の難産で胞衣の出ぬもの。いづれも生で呑む。醋に一夜浸して用ゐれば、黃疸の破れて大いに煩熱するを療ず】(別錄)【産後の血閉で下らぬには、白一箇を取つて醋(五〇)一半に入れ、攪きまぜて服す】(藏器)【赤小豆末を和して一切の熱毒、丹腫、顋痛に塗るが神效がある。冬期の生みたてのものを酒に漬けて七日間密封し、取り出して毎夜顏に塗れば皯黯、皶皰を去り、顏色を悅澤ならしめる】(時珍)

[發明] 宗奭曰く、産後の血運で身體が痙直し、口、目が上に向ひて牽急し、人事不省なるには、鷄子一箇を殼を去つて淸を分け、荊芥末二錢を調へて服す。直ちに平安を得ること甚だ敏捷なものだ。烏鷄子が就中善し。

[附方] 舊四、新六。【時行發黃】醋、酒に鷄子を一夜浸し、その白數箇を呑む。(肘後方)【下痢赤白】生鷄子一箇の白を取つて紙上に攤し連ねて日光で乾し、摺つて四重にして肥えた烏梅十箇を包み、熨斗中に置いて白炭で燒いて性を存し、取出し

て碗で覆ひ、よく冷めてから研末し、水銀粉少量を入れ、大人には二服に分け、小兒には三服に分けて空心に井華水で調へて服す。もし微し利するを覺えたならば再服するに及ばぬ。（類證）【蚘蟲の攻心】口に清水を吐くには、鷄子一箇を黄を去り、好き漆を納れ、鷄子殼中に入れて和合し、頭を仰いで呑む。蟲は直ちに出るものだ。（古今錄驗）【五種の遁尸】その狀態は、腹脹し、氣急して心に冲し、或は礧磈が涌起し、或は腰脊に牽くものである。鷄卵白七箇を頓に呑むが良し。（千金）【咽塞鼻瘡】及び乾嘔し、頭痛し、食物の下らぬには、鷄子一箇に一竅を開け、黄を去つて白を留め、米酢を著けて煻火で頓に沸して取下し、更に頓に同様に三回繰返し、熱に乘じて飲む。一二回に過ぎずして癒える。（普濟方）【顔面の皰瘡】鷄子を三歲の苦酒に三晝夜浸し、軟くなるを待つて白を取つて塗る。（肘後）【湯火燒灼】鷄子清に酒を和して調へて洗ふ。勤めて洗へば肌を生じ易い。發動する食物を忌む。或は主としてこれを傅けるもよし。（經驗祕方）【頭髮の垢膩】鷄子白を塗つて少頃して洗ひ去る。光澤が出て燥かない。（類湖）【顔色の黑きを白くする】鷄子三箇を酒に浸して四週間密封し、毎夜その白を顔に傅ければ雪のやうに白くなる。（普濟）【塗つて顔色の老衰を

禦ぐ】鷄子一箇に孔を開けて黄を去り白を留め、金華臙肢、及び硇砂少量を入れて紙で封じ、それを鷄に與へて抱かせ、他の卵が雛になつて出るを俟ち、それを取つて顔に塗る。洗つても落ちず、半年經つても紅顔を持續する。（普濟）

卵黄 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【醋で煮て用ゐれば產後の虛痢、小兒の發熱を治す。煎じて食へば煩熱を除く。鍊つて用ゐれば嘔逆を治す。常山末を和して丸にし、竹葉湯で服すれば久瘧を治す】（藥性）【炒つて油を取り、粉に和して頭瘡に傅ける】（日華）【卒かの乾嘔には、生で數箇を吞むが良し。小便不通にもやはり生で吞む。數回試みれば效がある。陰血を補し、熱毒を解し、下痢を治し、甚だ效驗がある】（時珍）

〔發明〕 時珍曰く、鷄子黄は氣、味倶に厚い。陰中の陰である。故に能く形體を補するのだ。昔の人がこれを阿膠と同功だと考へたのは正にその關係を見たのであつた。その嘔逆、諸瘡を治するは、熱を除き、蟲を引く效果だけを取るのである。

頌曰く、鷄子は最も多く藥に入れて用ゐるが、髮煎の方が特に奇效のあるものだ。

劉禹錫の傳信方に『亂髮鷄子膏は孩子の熱瘡を治す。鷄子五箇を煮熟して白を去つて黄を取り、亂髮を鷄子の大いさほどを相和し、鐵銚に入れて炭火で熬る。初め甚だ乾くが、少頃して髮が焦げると液が出る。それをやがて椀中に取り、その液の盡きるまでを度として取つて瘡に塗り、苦參末を粉す。近頃武陵にゐて產まれた子が、まだ產蓐中に在つて熱瘡があり、諸種の藥を塗つたが奏效せず、日にますます劇しくなつて半身に蔓延し、晝夜號啼して乳も飲ますことも眠ることも出來なかつたが、その折、本草の髮髲の條を見ると「鷄子黄に合せて煎じ、消かして水にしたものは小兒の驚熱、下痢を療ず」とあり、註に「俗中の嫗母は小兒のために鷄子煎を作り、髮を雜へて熬つて良久して出る汁を小兒に與へて服ませると痰熱を去り、病あるを治す」とあり、又、鷄子の條に「火瘡を療ず」とあつたので、それに因つてこの方を用ゐて見ると果して神の如き效を奏した』とある。

附方　舊三、新十一。【赤白下痢】鷄卵一箇の黄を取つて白を去り、胡粉をその殼に滿てて燒いて性を存し、一錢匕を酒で服す。（葛氏方）【妊娠下痢】絞痛するには、烏鷄子一箇に孔を開けて白を去り黄を留め、黄丹一錢を入れ厚紙で裹んで泥で固め、

煨き乾して末にし、三錢づつを米飲で服す。一服で癒えるときは胎兒が男である。二服で癒えるときは女である。(三因方)【胎兒死亡】鷄子黄一箇を薑汁一合に和して服すれば下るものだ。【小腸疝氣】鷄子黄を溫水に攪きまぜて服す。三服で效がある。【小兒の癇疾】鷄子黄を乳汁に和して攪ぜて服す。二三箇に過ぎずして自ら定まる。(普濟)【小兒の頭瘡】煮熟した鷄子の黄を炒つて油を取し、麻油、膩粉を搽る。(事林廣記)【鼠瘻の已に潰れたもの】鷄卵一箇を米に入れて半日蒸し、黄を取つて熬つて黑くし、先づ瘡を拭ひ乾してからその藥を孔中に納れる。三回にして癒える。(千金方)【脚上の臭瘡】熟鷄子黄一箇、黄蠟一錢を煎じてその油を塗る。【湯火傷瘡】熟鷄子(五二)一箇の黄を取つて炒り、その油を取つて膩粉十文を入れて攪き勻ぜ、三五日間それを瘡上に(五三)掃く。永く瘢痕を除く。(集驗方)【杖瘡の已に潰れたるもの】鷄子黄を熬つてその油を搽る。甚だ效がある。(唐瑤經驗方)【天泡水瘡】方は上に同じ。【瘢痕を消滅する法】鷄子五七箇を煮熟し、黄を取つて黑く炒り、一日三回づつ拭ひ塗れば久しくして自ら滅する。(聖惠方)【妊娠胎漏】血が下つて止まず、血が盡きれば胎兒の死ぬものである。鷄子黄十四箇を好き酒二升で飴のやうに煮て服す。なほ

(五二)大觀ニ十ニ作ル。

(五三)大觀ニ掃上ノ二字ヲ用鷄翎掃瘡上ノ六字ニ作ル。

瘥えぬときは再び試み、瘥えるを度とする。(普濟方)【汁の出る耳疳】鷄子黄を炒り、その油を塗る。甚だ妙である。(談埜翁方)

抱出卵殼　時珍曰く、俗に混沌池鳳凰蛻と名ける。抱いて雛の出たものを用ゐるはその蛻脱の意味を取つたものだ。李石の續博物志には『鷄子殼を踏めば白癜風が生ずる』とある。【主治】【研末して用ゐれば障翳を磨す】(日華)【傷寒勞復には、炒つて黄黒にして末にし、熱湯に和して一合を服す。汗を取り出して瘥える】(蘇頌)記載は深師方にある。【灰に燒き油で調へて癬、及び小兒の頭部、身體の諸瘡に塗る。酒で二錢を服すれば反胃を治す】(時珍)

【附方】舊二、新七。【小便不通】鷄子殼、海蛤、滑石等分を末にし、一日三回、半錢づつを米飲で服す。(聖惠方)【小兒の煩滿】死せんとするには、鷄子殼を燒いて末にし、方寸ヒを酒で服す。(子母祕錄)【癍痘の目に入りたるもの】鷄子殼を燒いて研り、片腦少量を入れて點ける。(鴻飛集)【頭瘡白禿】鷄子殼七箇を炒つて研り、油で和して傅ける。(祕錄)【頭の軟癤】抱出鷄卵殼を燒いて性を存して研末し、輕粉少量を入れて淸油で調へて傅ける。(危氏方)【耳疳で膿の出るもの】抱出鷄卵殼を黄に

炒つて末にし、油で調へて灌げば疼が止む。（杏林摘要）【玉莖の下疳】鷄卵殼を炒つて研り、油で調へて傅ける。（同上）【外腎の癰瘡】抱出鷄卵殼、黄連、輕粉等分を細末にし、錬つた香油で調へて塗る。（醫林正宗）【痘瘡の惡證】癍痘が倒陷し、毒氣が裏に壅遏するところから便血となり、昏睡して意識回復せず、その證甚だしきものには、抱出鷄子殼を膜を去つて新瓦で焙じて研り、半錢づつを熱湯で調へて服す。嬰兒には、酒で調へて唇舌上に抹し、幷に(五三)風池、胸、背に塗る。神效がある。

(五四)**卵殼中の白皮** 【主治】【久欬氣結には、麻黄、紫菀と配合して服すれば立ろに效がある】（別錄）

【發明】時珍曰く、按ずるに、仙傳外科に『ある者がたまたま口に刀を含んで舌を割き、已に斷ち落ちねばかりとなつたが、ある人が鷄子白皮を袋にして用ゐ、舌根に止血藥を摻つて血を止めてから、臘に化した蜜で沖和膏を調へてその鷄子皮上に敷き、それで三日の間接住して置いてから、その皮を去つてただ蜜臘で勒敷したが、七日にして全く平安を得た。若し速效のないときは金鎗藥を摻へて治療する』とある。此に鷄子白皮を用ゐたのは他に理由があるのではない。ただその柔軟にし

(五三)風池ノ穴ハ耳ノ後ノ髪際ニアリ。
(五四)木村(重)曰ク、卵殼中白皮ハ外殼膜ヲ謂フ。

て薄く、舌を護つて藥を透らしめる點を利用したものだ。

附方　新二。【欬嗽の日久しきもの】鷄子白皮を炒つて十四枚、麻黄三兩を焙じて末にし、一日二回、方寸匕づつを飲で服す。(必效方)【風眼腫痛】鷄子白皮、枸杞白皮等分を末にし、一日三回、鼻中に吹く。(聖濟總錄)

雞白蠹肥脂(本經)　弘景曰く、これは何物なるや判明せぬ。恐らく別の一種のものだらう。

藏器曰く、現に鷄にはやはり白臺といふものがある。卵のやうで硬く、白があつて黄のないものだ。これは牡鷄が生むもので、父公臺と名けるものだといふ。臺の字は橐の字に似てゐるから、そのためにかく誤り傳はつたものではないかと思ふ。

機曰く、この物は、本經の文には黑雌鷄の條下に列してある。雌鷄の肥脂で蠹蟲の肥白のやうなものを指したらしい。その物が似てゐるところからかく名けたのだ。

時珍曰く、蠹は音妬(ト)である。而るに藏器がこれを橐としたのは何のことか判らない。現に牡鷄の生む子にやはり時とするとかやうな物があるが、しかしそれには肥脂なる文字を當てるいはれはない。これは機の說が事實に近いやうに思はれ

(五五)天絲ハ微細紛末ノコトナラン。

(五六)燖鷄湯ハ沸湯ニ鷄ヲ浸シ出來タル湯。

(五七)鷄眼ハウヲノメ。

(七)木村(重)曰ク、支那ニ雉多種アル如キモ調査完カラズ、ココニ北支那產ノ雉ヲ代表トシテ出ス。野雉(ヤーチー)雉鷄

る。さもなくば雌鷄の生腸を指したものに相違ない。本經にその物名を掲げてあつて、その功を列記してないが、蓋し文中に脫簡があつたのだ。

窠中の草 【主治】 【頭瘡白禿には、白頭翁草と和して灰に燒き、猪脂で調へて傅ける】(日華)【(五五)天絲の眼に入りたるには、灰に燒いて淸汁を淋し取り、それで洗ふが良し】(時珍) 記載は不自祕方にある。

【附方】 舊一、新一。【小兒の夜啼】鷄窠草を母の氣付かぬやうに席下に置く。(日華本草)【產後の遺尿】鷄窠草を燒いて末にし、一錢匕を酒で服す。(聖惠方)

(五六)**燖鷄湯** 【主治】 【消渴で度なく水を飮むには、燖雄鷄水を濾し澄して服す。鷄二羽の水に過ぎずして癒える。神效がある】(楊氏經驗方)

【附方】 新一。【(五七)鷄眼で痛むもの】皮を剝ぎ去り、燖鷄湯で洗ふ。(簡便方)

(一)雉 (別錄中品)

和名 かうらいきじ
學名 Phasianus colchicus, Karpowi Buturlin.
科名 きじ(雉)科

【釋名】 **野雞** 宗奭曰く、雉の飛ぶ有様は矢のやうで、一飛び前方へ飛ぶと墮

（ズウキー）ノ名ニテ知ラル。

るものだ。故にその文字は矢に從ふのである。今世間でその尾を取つて舟や車に著けて置くのは、その快速なるにあやからうといふのである。漢の呂大后の名は雉といつたので、高祖が鳥の雉の名を改めて野鷄と呼んだのだといふが、その實は鷄類のものである。

○○時珍曰く、黄氏の韻會に『雉は理であつて、雉とは文理のある鳥といふことだ。故に尙書にはこれを華蟲といひ、曲禮にはこれを疏趾といつてある。雉には種類が甚だ多いが、やはりそれぞれ形狀、色彩に因つて區別しただけのものだ』とある。禽經には『雉は介鳥であつて、質素くして五彩備はるものを翬雉といひ、質靑くして五彩備はるものを鷂雉といひ、朱黃なるを鷩雉といひ、白きを鵫――音は罩（トウ）である。――雉といひ、玄きを海雉といふ』とある。爾雅には『鷂雉、靑質にして五采、鳪雉、黃色にして自ら呼ぶ。翟雉、山雉である。尾長きは鷮雉。長尾くして走り且つ秩秩と鳴くは海雉』とある。梵書には雉を迦頻闍羅といつてある。

集解　○○時珍曰く、雉は南方、北方いづれにもゐる。形體は、大いさは鷄ほどで斑色があり、翼は繡いたやうなもので、雄は文彩が明かで尾が長く、雌は文彩が

暗くして尾が短い。その性鬪を好み、その名を鷕といふ。鷕の音は杳（エウ）である。その交尾は再せず、その卵は褐色だ。産卵せんとするときは雌が雄を避けて潜伏する。雄にその卵を食はれて了ふからだ。月令に「仲冬、雉始めて雊く、所謂陽動けば雉鳴いてその頸を勾ける孟冬、雉大水に入つて蜃となる。蜃とは大蛤のことだ」とある。陸佃の埤雅には「蛇が雉と交れば蜃を生ず」とある。蜃は蛟類である。類書には『蛇が雉と交つて生んだ子を蟂といふ』とある。蟂は水蟲である。

〔雉〕

陸禋の續水經には『蛇、雉は卵を地に遺し、千年にして蛟となる。龍の屬であつて、蛇に似て四足あり、能く人を害す』とある。魯至剛の俊靈機要には『正月、蛇と雉と交つて卵を生む。それが雷に遇ふと數丈の土中に入つて蛇形となり、二三百年を經て蛟となつて飛騰する。若しその卵が土中に入らぬときはただの雉となるだけで

ある」とある。又、任昉の述異記には『江淮中に能——音は耐(ダイ)——といふ獸がある。これは蛇精の化したもので、冬になると雉になり、春にはまた蛇になる。晉の時に、武庫に雉がゐたことがあつて、張華はそれを蛇の化したものに相違ないといつたが、よく注意して見ると果して蛇蛻があつた』とある。これ等はいづれも類を異にし情を同じうする造化の變化であつて、臆測すべからざるものだ。

肉　【氣味】【酸し、微寒にして毒なし】恭曰く、溫なり。日華曰く、平にして微毒あり。秋、冬は益あり、春、夏は毒あり。痢疾のある人は食つてはならぬ。

頌曰く、周禮に『庖人は六禽を供す』とあつて、雉はその一に舉げられてある。やはり食品としての高貴なものだが、しかし小毒があるから常食はされない。損するところ多く、益するところ少いものだ。

詵曰く、久しく食へば人をして瘦せしめる。九月から十一月まではやや補するところがあるが、その他の月に食へば五痔、諸瘡疥を發する。胡桃と食ひ合せれば頭風眩運、及び心痛を發するから食つてはならぬ。菌、蕈、木耳と食ひ合せれば五痔を發して立ろに下血する。蕎麥と共に食へば肥蟲を生じ、卵と葱と共に食へば寸白

蟲を生ずる。自死して爪甲の伸びぬものは人を殺す。

〔正誤〕思邈曰く、黄帝の書に『丙午の日には鷄、雉の肉を食つてはならぬ。男子は燒死し、目盲する。婦人は血死し、妄りに恠しきものを見る。野鷄肉と家鷄子とを共に食へば遁尸となつて尸鬼が身に纏ふ』とある。

弘景曰く、雉は辰の屬ではなくして正に離の禽である。丙午の日に食つてならぬといふは、火に主たるものだといふことを明示したものだ。

時珍曰く、雉は離火に屬し、鷄は巽木に屬する。故に鷄は煮れば冠が變じ、雉は煮れば冠が赤い。明かに火に屬することを示してゐる。春、夏は食つてならぬといふは、蟲、蟻を食ひ、及び蛇と交り、變化を生じて有毒であるからである。能く痔、及び瘡疥を發し、人をして瘦病せしめるといふは、能く蟲を生ずることが鷄肉と同樣なものだからである。黄帝の名に假托して出所不明な恠しい者が作つた書だから、丙午の日に食つてはならぬとか、遁尸となるとかいふ不經の謬談を書いてあるのだが、その說に陶氏が和し、孫氏が採用したのは。いづれも誤である。此にその誤を正して置く。

【主治】『中を補し、氣力を益し、洩痢を止め、蟻瘻を除く』（別錄）

【發明】時珍曰く、雉肉に就いて、諸家は『痔を發するものだ。下痢の人は食つてはならぬ』といつてゐる。然るに別錄にこれを用ゐて痢、瘻を治すとあるは問題だが、蓋し雉は禽に在つては上に胃土に應ずるものだ。故に能く中を補するのである。又、蟲蟻を食ふものだ。故に能く蟻瘻を治するのであつて、それは制伏の關係を利用するわけである。しかし久しく食ひ、またはその適當ならぬ時期に食つては、蟲を生じて有毒だから宜しくない。

【附方】舊三、新一。【脾虛の下痢】晝夜止まぬには、野鷄一羽を普通の料理の場合のやうに作り、橘皮、葱、椒、五味を入れて和し、餛飩にして煮て空心に食ふ。（食醫心鏡）【產後の下痢】野鷄一羽を餛飩にして食ふ。（同上）【消渴飲水】小便頻數なるには、野鷄一羽を五味で煮て三升ほどの汁を取り、それを飲み肉をも食ふ。甚だ效がある。（同上）【心腹脹滿】野鷄一羽を雄雌に拘らず、茴香を炒り、馬芹子を炒り、川椒を炒り、陳皮、生薑と等分を用ゐ、醋で一夜蒸した餅とで雉肉に和して餡料にし、外部を麪皮で包んで餛飩にし、煮熟して食ふ。かくして早朝に嘉禾散を服して

午前八時頃にこれを服し、正午に導氣枳殼丸を服す。(朱氏集驗方)

腦【主治】【凍瘡に塗る】(時珍)

嘴【主治】【蟻瘻】(孫思邈)

尾【主治】【灰に燒き、麻油で和して天火丹毒に傅ける】(時珍)

屎【主治】【久瘧】(時珍)

【附方】新一。【久瘧の止まぬもの】雄野鷄屎、熊膽、五靈脂、恒山等分を末にし、醋糊で黑豆大の丸にし、發作時に一丸を冷水で服す。(聖惠)

(一)鸐雉 音は狄(テキ)である。(食療)

和名 やまどり
學名 Phasianus scintillans(Gould)?
科名 きじ(雉)科

【釋名】鸐鷄(禽經) 山鷄(同上) 山雉 時珍曰く、翟とは美しい羽の形容である。雉は原野に居り、鸐は山林に居るところから山をつけた名稱があるのだ。大なるものをば鷮といふ。

【集解】頌曰く、(二)伊洛、江淮地方では、一種の雉で小さくして尾の長いもの

(一)木村(重)曰ク、日本ニ普通ノやまどり(Graphophasianus sp.)ト同屬ノモノ産スルザ如ケレドモ、今假ニ一種ト定メテ後攷ヲ俟ツ。

(二)伊洛ハ草部[illegible]草類大陽附錄開荊ノ註ヲ見ヨ。江淮ハ安徽、江蘇地方。

を山鷄といひ、一般にこれを籠に入れて飼つてゐる。即ち爾雅に所謂『鸐、山鷄なり』とあるそのものだ。

時珍曰く、山鷄と呼ぶものに四種あつて、名は同じだが物は異ふ。雉に似て尾の長さ三四尺のものは鸐雉である。鸐に似て尾の長さ五六尺、能く走り且つ鳴くものは鷮雉である。これを俗に通じて鸐と呼んでゐる。その他の二種は鷩雉、錦鷄である。鷮と鸐とはいづれも勇健なもので、自らその尾を愛し、叢林に入つない。雨や雪のときは岩に隱れ、木に栖み、敢て下りて來て物を食はぬので往往にして餓死する。故に師曠は『雪枯林を封じて文禽多く死す』といつたのだ。南方の賤民間では多くその尾を冠に挿んでゐる。その肉はいづれも雉より美味なもので、傳に『四足の美なるものに麃あり、兩足の美なるものに鷮あり』といつてある。

〔鸐雉〕山鷄

肉 【氣味】【甘し、平にして小毒あり】詵曰く、五痔を發し、久しく食すれ

(三)大觀ニ麥下ニ麪字アリ。

(一)木村(重)曰ク、支那及中央亞細亞ニ原產ス。金鷄、錦鷄(共ニチンチー)ノ名ニテ知ラル、愛玩用トシテ飼養サル。

(二)憋急、憋ハ惡ナリ。即チ性急惡ナルナイフ。

(三)耿介トハ志節アツテ苟合セザルノ意ナリ。

ば身體が痩せる。蕎麥(三)と和して食へば肥蟲を生ずる。豉と共に食へば人を害す。卵を葱と共に食へば寸白蟲を生ずる。その他いづれも雉と同じ。

主治 【五臟(ござう)氣喘(きぜん)して呼吸困難なるには、羹(かう)、臛(かく)にして食ふ】(孟詵)【炙いて食へば中を補し、氣を益す】(時珍)

(一)鷩雉 鷩(セウ)鷩(ベツ)の二種の發音がある。 (拾遺)

和名 きんけい
學名 Chrysolophus pictus (Linne)
科名 きじ(雉)科

釋名 山鷄(禽經) 錦鷄(同上) 金鷄(綱目) 采鷄(周書) 鵕鸃 音は峻儀(シユンギ)である。時珍曰く、鷩は性の(二)憋急(べつきふ)ニ耿介(かうかい)なものだ。故にかく名けたのである。鵕鸃とはその儀容が俊秀だといふ意味である。周時代の鷩冕(べつべん)といつた冠、漢時代の鵕鸃といつた冠は、いづれもこの鳥の文が明にして形の俊秀なる意味を取つたものだ。鷩と鸐とは同じく山鷄なる名があるが、鸐は大きくして鷩は小さい。鷩と鷸(やく)とは同じく錦鷄なる名があるが、鷸は文が綬にあつて鷩は文が身にあるだけの相異がある。大體に於ていづれも雉の屬である。按ずるに、禽經に『首に采毛ある

を山鶏といひ、腹に采色あるを錦鶏といひ、頸に采囊あるを避株といふ』とあつて、かく見ても山鶏と錦鶏との區別はやゝつくのであるが、俗には一樣に通稱してゐる。蓋し一類の物であつて甚だ懸隔のあるものではない。

集解　藏器曰く、鷩は雉に似て五色がある。山海經に『(四)小華の山、赤鷩多し　これを養へば火災を禳ふ』とあるがこの物だ。

時珍曰く、山鶏は、南越の諸山中に産し、湖南、湖北にもゐる。形狀は小さい鶏ほどで冠も小さく、背に黄、赤の文があり、項は綠で腹は紅く、嘴が紅く、距が利く、善く闘ふもので、家鶏に闘はせてこれを捕獲し得る。これは爾雅に所謂『鷩、山鶏なり』とあるそのもので、逸周書にはこれを采鶏といつてある。錦鶏と呼ぶものは鷩よりも小さく、背に文があつて赤色が浮き出で、腩の前は五色炫耀して孔雀の羽のやうだ。これに爾雅に所謂『鷩、大鶏なり』とあるそのもので、逸周書にはこれを文鶾といつてある。鶾の音は汗(カン)である。この二種は大體に於て同類だが、錦鶏の文が尤も燦爛たるもので錦のやうだ。或は錦鶏といふはその鳥の雄をいふのだともいふが、これでも通じる。劉敬叔の異苑に『山鶏はその羽毛を愛するもので、

(四) 小華之山、卽チ今ノ少華山ナリ。陝西省華州ノ南十支里ニアリ。

(五) 南越ハ今ノ廣東廣西兩省ノ地ナリ。

水に照せば舞ひ、目眩して多く死ぬ。鏡に照してもその通りだ」とある。鸐鷄が尾を愛するために餓死すると同一轍で、いづれもその美しい文がその身に累するのである。

【鷲雉】
——錦鷄——

附録 (六)**吐綬鷄** 時珍曰く、(七)巴峡、及び閩、廣の山中に産し、一般に愛翫用としてこれを飼ふ。大いさは家鷄ほど、小さいものは、鴝鵒ほどで、頭、頬は雉のやう、羽の色は多くは黑で、黄、白色が雜り、眞珠のやうな圓點の斑がある。項に嗉囊があり、その内部に肉綬があつて平常は外から見えないが、春、夏のよく晴れた日には、太陽に向けてそれを出して搖す。先づ頂上から二寸ばかりの二本の翠の角を出して、それから徐ろにその頷下の綬を舒べるのだが、長く闊くして一尺に近く、紅、碧相間つて采色燦爛たるものだ。しばらくの間搖してゐてやがて悉く斂め、また全然見えなくなる。割いて視て

(六) 吐綬鷄
和名 しちめんてう
學名 Meleagris gallopavo, Linne.
科名 きじ(雉)科
木村(重)曰ク、七面鳥ノ野生ヲ云フ。現在七面鳥ハ火鷄(ホアーチー)ト稱セラル。(七面鳥參照)
(七) 巴峡ハ今ノ湖北省巴東縣ノ西二十七里、揚子江ガ巫山ヨリ巴東ニ入ル地點ナリ。閩、廣ハ福建、廣東。

も一向にその物を斂めてある部分を發見し得ない。この鳥も生れるとやはり(八)反哺(はんぽ)の行動には草木を避ける。故に禽經にはこれを避林といひ、食物本草には吐錦鷄といひ、古今注には錦囊といひ、蔡氏の詩話には眞珠鷄といひ、倦游錄には孝鳥といし、そつてあるのだ。詩經に鷊——音は厄(ヤク)——といひ『邛(こう)に旨鷊あり』とあるはこの鳥だ。

肉　【氣味】【甘し、溫にして微毒あり】【主治】【これを食へば人をして聰慧ならしめる】(汪穎)【これを養へば火災を禳(はら)ふ】(藏器)

(一)鶡鷄　鶡(アツ)、渴(カツ)の二種の發音がある。（拾遺）　和名　缺　學名　Gennaeus horsfieldii, Gray,　科名　きじ(雉)科

【釋名】時珍曰く、その羽の色が黑黃にして褐色だ。故に鶡と名けたのであつて、青黑色なるものをば鴧——音は介(カイ)——と名ける。性の耿介なるものだからだ。青鳳(せいほう)も鶡といふが、それはこの鳥に似てゐるからである。

【集解】藏器曰く、鶡鷄は(二)上黨(じやうたう)に產する。魏の武帝の賦に『鶡鷄猛氣、その

(八)反哺ハ、鳥ニ反哺ノ孝アリト云フ如ク、此鳥モ親鳥ニ食物ヲ供給スル行爲アルナリ。

(一)木村(重)曰ク、支那南方及印度高山地方ニ分布ス。體雄ハ黑色ニシテ、ヤヤ濕氣アル深林中ニ棲ム、假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。又しやも(軍鷄)ノ野生ヲ謂フトノ說アリ。

(二)上黨ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(三)潞州ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

〔鶡雞〕
―黑雉―

鬪ふや必死を期す』とある。今世人が鶡を以て冠とするはこの意味を取つたものだ。

時珍曰く、鶡は、狀態は雉に類して大きく、黄黑色で首に冠のやうな毛角があり、性その同類のものを愛し、侵害を受けると直ちに往つて戰鬪を開始し、死ぬとも屈しない。故に古の虎賁と稱した猛勇の武士の一隊は鶡冠を戴くことになつてゐたのである。禽經に『鶡は毅鳥なり、毅くして死を知らず』とあるはこのことだ。性質の甚だ粗暴なもので、攫んだ物は忽ち之を折り摧くものだ。上黨とは今の(三)潞州の地である。

肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【炙いて食へば人をして勇健ならしめる】(藏器)【炙いて食へば人をして肥潤ならしめる】(汪頴)

(一)白鷴（圖經）

和名　はくかん
學名　Gennaeus nycthemerus, Linne.
科名　きじ(雉)科

〔校正〕　もとは雉の條に附錄となつてゐたが、本書には一條を分けて掲出した。

〔釋名〕　**白鷴**　音は寒(カン)である　**閑客**　時珍曰く、按ずるに、張華は『行止閑暇なるが故に鷴(かん)といふ』といひ、李昉はこれに閑客と命名し、薛氏はこれを雉類とし、汪氏はこれを白雉としたが、按ずるに、爾雅には白雉の名を鵫としてある。南方人は閑の字を讀んで寒の字のやうに發音するから、鵫は雉の音の轉訛(てんくわ)のやうだ。白鵫と書くが正しいやうに思ふ。錦鷄を文鵫といふやうなもので、鵫とは羽の美しいことの形容である。又、西京雜記に『(二)南粤王(なんゑつわう)が白鷴、黑鷴各一羽を獻じた』とある。蓋し雉にも黑色のもので鸕(ろ)雉と呼ぶものがあるから、彼の地ではそれをも通じて鵫と呼んだものであらう。

〔集解〕　頌(しよう)曰く、白鷴は江南(かうなん)に產する。雉の類であつて、白色にして背に細か

(一)木村(重)曰ク、雄ハ背白ク黑紋アリ尾ハ純白、顏ハ紅、嘴ハ淡青ナリ。南支那ニ產ス。白鷴「パイカン(北支)パヘイ(南支)」ノ名ニテ呼バル、きんけいニ似タリ。

(二)南粤ハ南越ニ同ジ。今ノ廣東、廣西ノ地ナリ。

〔白鷴〕
——白雉——

な黒文がある。飼養し得るものだ。彼の地ではやはりこれを食ふ。

頴曰く、卽ち白雉のことだ。

時珍曰く、鷴は山鷄に似て色白く、さざ波のやうな黒文があり、尾の長さは三四尺、體に冠と距とを備へ、紅頰、赤嘴、丹爪でその性が耿介だ。李太白は『この鳥の卵は雞に抱かせて生ませ得るものだ』といつた。やはり黒鷴といふものもある。

肉　氣味【甘し、平にして毒なし】　主治【中を補し、毒を解す】（汪頴）

(一)鷓鴣（唐本草）

和名　さんけい
學名　Hierophasis sp.
科名　きじ(雉)科

【釋名】越雉　時珍曰く、按ずるに、禽經に『隨陽は越雉と云ふものであつて、飛ぶには必ず南に翥る。(二)晉安では懷南といひ、江左では逐影といふ』とあり、張華の註に『鷓鴣はその名を自ら呼ぶ。飛ぶには必ず南に向ひ、東、西に回つて翔ける場合でも、先づ翅を開いた始めには必ず南に翥る。その志に南を懷ふところがあるので北に徂かぬのだ』とある。

【集解】孔志約曰く、鷓鴣は江南に生ずる。形が母鷄に似て『鉤輈格磔』と鳴くものがそれである。これに似た鳥はあるが、かく鳴かぬものはこの鳥でない。

頌曰く、今は(三)江西、閩廣、蜀夔の州郡にいづれもゐる。形は母鷄に似て頭は鶉の如く、臆の前に眞珠のやうな白い圓點があり、背の毛には紫赤の浪の文がある。

時珍曰く、鷓鴣はその性霜露を畏れるもので、早朝と夕方に出ることは稀なものだ。夜は木の葉で身體を蔽ふて栖む。多くは對して鳴くものだ。今俗間では『行不

(一)木村(重)曰ク、しやこニ非ズ、北支ニテハうづらチ鷓鴣(チエークー)ト稱ス、今假ニ定ム。又てつけいノ一種ナリト謂フ説アリ。江南省ノ山地ニ多産スト云フ。しやこハ石鷄[シーチー(滿洲)]ト稱ス。

(二)晉安ハ金部金ノ註チ見ヨ。

(三)江西ハ今ノ江西省地方、閩ハ福建、廣ハ廣東、蜀ハ今ノ四川省西半部、夔ハ四川省ノ東部、湖北省ニ接近セル夔州地方チイフ。

得哥』といつて鳴くのだといふ。その性潔を好む。獵人はそれで黐竿を以て粘して取り、或は囮を用ゐて誘ふて取る。南方では專ら炙いて料理するが、肉は白くして脆く、味は雞、雉に勝るといふことだ。

〔鷓　鴣〕

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】日華曰く、微毒あり。詵曰く、竹筍と食合せてはならぬ。人をして小腹を脹らしめるものだ。自死したものは食つてはならぬ。或はこの鳥は、天地の神が毎月一羽づつを取つて至尊神に饗するので自死するのだから、それで食はれないのだといふ。

主治　【嶺南の野葛菌子の毒、生金の毒、及び溫瘴や久病で死せんとするには、毛共に煮つて酒に漬けて服す。或は生で擣いて汁を服するが最も良し】(唐本)【酒で服すれば蠱氣で死せんとするを治す】(日華)【能く五臟を利し、心力を益して聰明ならしめる】(孟詵)

（四）廣州ハ土部伏龍肝、金部金ノ註ヲ見ヨ。

（五）楚州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

發明　時珍曰く、按ずるに、南唐書に『丞相馮延巳が腦病を病んで已まなかつたとき、太醫吳廷紹が「あなたは山雞、鷓鴣を多食したから、その毒が發したのだ」といつて、甘草湯を與へるとそれで癒えた。この物は烏頭、半夏の苗を多く食ふので其毒が發するのだから、それで甘草でその毒を解したのだ』とある。又、類說には『通判楊立之が（四）廣州から（五）楚州へ歸り、その時多食した鷓鴣のために遂に咽喉の間に癰の生ずる病を發し、癰が潰れて膿血が已まず、寢食俱に廢するありさまで、醫師も手を束ねるばかりであつたが、たまたま楊吉老がその地へ往つたので迎へて診療を請ふと、楊吉老は「これは先づただ生薑一斤を喫つてから藥を投ずるがよい」といつた。初め一回生薑を食つて見ると甘く香しく覺えたが、半斤まで食ふとやや寛なるを覺え、一斤を食ひ盡すと辛辣さをそのままに覺えて、粥を食つて口に入つても少しも綾調を認めなくなつた。この鳥は好んで半夏を食ふものだから、その毒が發したのだ。故に薑を以てその毒を利したのである』とある。この二說に就いて觀ると、鷓鴣は多く食へばやはり微毒があるが、その功用にはまた毒を解し、蠱を解する能があつて、功過共に沒却出來ない。凡そ鳥獸の自死したものは皆有毒

(二)木村(重)曰ク、揚子江南方、殊ニ雲南四川省ニ多シ。山林、竹林等チ好ミテ棲所トス。竹鷄(チエキー)ト稱サル、異種臺灣ニ產ス。

だから食つてはならぬ。それはその死に至つた毒惡の氣を受けるがためである。何も鷓鴣だけ神が取つて至尊神に饗するからだといふわけがあらうか。馬鹿なことをいつたものだ。

脂膏 〔主治〕【手の皸瘃に塗れば龜裂しなくなる】(蘇頌)

(二)竹鷄(拾遺)

和名 しなてつけい
學名 Bambusicola fytchii, Anderson.
科名 きじ(雉)科

〔釋名〕**山菌子**(藏器) **雞頭鶻**(蘇東坡集) **泥滑滑** 頴曰く、山菌子とは竹鷄のことだ。時珍曰く、菌子とは味が菌子の如く美味なるをいつたものだ。蜀地方では雞頭鶻と呼び、南方では泥滑滑と呼ぶ。それはその鳴聲に因んだのだ。

〔集解〕藏器曰く、山菌子は江東の山林中に生ずる。形狀は小さい鷄のやうで尾のないものだ。

時珍曰く、竹鷄は今は江南、川、廣の處處にゐる。多く竹林にゐるもので、形は鷓鴣に比すればやや小さく、褐色で斑赤文が多い。その性よく啼き、その同類を見

ると必ず闘ふ。それでこれを捕るものはその闘の相手となる鳥を囮に使つて網にかける。諺に『家に竹鶏がゐて啼けば白蟻が化して泥になる』といふが、蓋し好んで蟻を食ふものだからだ。また壁虱を辟ける。

〔竹　雞〕

〔附録〕　(三)**杉雞**　時珍曰く、按ずるに、臨海異物志に『閩越に杉雞といふがゐる。常に杉樹の上にゐるもので、頭上に長い黄色の毛冠があり、頬は正青色で垂緌のやうだ。やはり食へる。竹雞のやうなものだ』とある。

肉〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに唐小説に『崔魏公が暴かに死んだとき、太醫梁新が診察して「これは食物の中毒だ」といふと、公の從僕が「公は好んで竹雞を食つた」といふ。新は「竹雞は多く半夏の苗を食ふからだ」といつて、薑を搗いて汁を取らせ、歯を押し開けて灌ぎ込むと遂に甦つた』と

(三)**杉鷄**
和名　やけい
學名　Gallus bankiva Robinsoni, Rothschild?
科名　きじ(雉)科
木村(重)曰ク、南方支那ヨリ印度ニ分布シ、叢中ニ棲ム。假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。

ある。これは呉廷紹、楊吉老が鷓鴣の中毒を治した方法を踏襲したものだ。

【主治】【野雞病に用ゐて蟲を殺す。煮、炙いて食ふ】(藏器)

英鷄(一)（拾遺）

和名 缺
學名 Phasianus elegans, Elliott.
科名 きじ(雉)科

【集解】藏器曰く、英鷄は(二)澤州の石英の産地に出る。常に碎けた石英を食ふもので、形状は鷄のやうで尾は雉のやうだ。體は熱にして毛がなく、腹下に赤い毛があり、飛んでも遠くは翔けれない。腸中に常に石英がある。人間がそれを取つて食ふは石英の功力を取るのだ。現に世間で石英末で鷄を飼ひ、その産んだ卵を取つて食ふが、到底この鳥には及ばない。

肉 【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【陽道を益し、虚損を補し、人をして肥健、悅澤ならしめ、能く食へば冷を患はなくなり、常に實氣はあるが發せない】(藏器)

(一)木村(重)曰ク、四川、雲南、西藏方面ニ分布シ、西藏語ニテトウカト稱ス。山岳等ノ小叢ニ棲ミ、石雉トモ云ハル。英雉ナリヤ疑ハシケレドモコヽニ出ス。
(二)澤州ハ石部不灰木ノ註ヲ見ヨ。

(一)秧鶏（食物）

和名　くひな
學名　Rallus aquaticus indicus, Blyth.
科名　くひな(秧鶏)科

【集解】時珍曰く、秧鶏は大いさ小さい鶏ほどのもので、頬白く、嘴長く、尾短く、背に白斑がある。多く田澤の畔にゐて、夏至後には夜から曉方まで鳴き、秋後になると止む。

䳾雞——䳾の音は鄧(トウ)である——といふも秧鶏の一種で、大いさは鶏ほどで脚が長く、冠が紅く、雄は大きくして褐色、雌はやや小さくして斑色だ。秋期にはゐなくなる。その聲の甚だ大なるものだ。一般にいづれも食ふ。

〔秧　雞〕

肉

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】

【主治】【蟻瘻】(汪穎)

(一)木村(重)曰ク、蒙古、北支那、日本ニ棲ミ、夏ハ南支那、印度ニ分布ス。此屬ノるノ、ひなモ産ス、其他支那ニハ多産ス。Porzana, Ortygops, Limnobaenus 等ノ屬ヲ産スルモ、スベテ秧鶏(アンチー)(北支)ヤンキー(南支)ト呼バル。

（一）木村（重）曰ク、東南西比利亞、蒙古、支那、日本、朝鮮ニ棲ム。鶉 チュン（北支）ション（南支）」ト稱シ、食用ニ貴ワレ、殊ニ滿洲ニ多産ス。所ニヨリテハ鷓鴣トモ稱ス。此外やまうづら（沙鶏ジヤチー）屬アリ。

（二）醇ハ和厚ナリ。

（一）鶉（嘉祐）

和名　うづら
學名　Coturnix japonica, Temm. et Schleg.
科名　きじ（雉）科

〔鶉〕

釋名　時珍曰く、鶉は性の（二）醇なるもので、淺い草の中にもぐつてゐる。一定の居處はないが一定の配偶があつて、その地に隨つて安んじてゐる。莊子に所謂『聖人は鶉居す』とはこの意味をいつたのだ。歩行いてゐて小草に遭ふと遠廻りにそれを避ける。やはり醇なる性質といふべきだ。その子を鴳といふ。

宗奭曰く、その卵から生れたばかりのものをば羅鶉といふ、秋初にはこれを早秋といひ、中秋已後にはこれを白唐といふ。一物にして四種の名稱がある。

(三)大觀ニ正ヲ至ニ作ル。
(四)汴ハ草部芳草類香薷ノ汴洛ノ註參照。

集解　禹錫曰く、鶉は蝦蟇の變化したものだ。楊億の談苑に『(三)正道二年の夏、秋、(四)汴地方の鶉を賣る商人が車に積載して市場へ出したが、それはみな蛙の變化したものだつた。その中にはまだ完全に變化しきらぬものも交つてゐた。列子に所謂「蛙化して鶉となる」の事實である』とある。

宗奭曰く、鶉には雌雄があつて、常に田野に於て屢その卵を得ることがある。變化したものとはいひ得ない。

時珍曰く、鶉は大いさ雞の雛ほどのもので、頭が細くして尾がなく、毛に斑點があり、甚だ肥えたものだ。雄は足が高く、雌は足が低い。その性寒を畏れるものだ。田野に在つても夜は群り飛ぶが、晝は草にもぐつてゐる。世間では能くその鳴聲をまねて呼び寄せて捕へ、飼養して鬪爭を行はせる。萬畢術には「蝦蟇が瓜を食ふと鶉になる」とあり、交州記には『南海のある黄魚は九月に變化して鶉になる。鹽で炙いて食ふと甚だ肥美だ』とある。蓋し鶉なるものの發生の初には化成したもので、それが後に卵から生れるやうになつたのであらう。故に四季を通じてこの物がゐるのだ。鴽といふものならば、始め鼠から變じて終にまた鼠となるものだから、夏は

ゐるが冬はゐない。

肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】禹錫曰く、四月以前にはまだ食ふわけに行かぬ。猪肝と食合せると黒子を生じ、菌子と食合せると痔を發すものだから食合せてはならぬ。

〔主治〕【五臟を補し、中を益し、氣を續け、筋骨を實し、寒暑に耐へ、結熱を消す。小豆、生薑と和して煮て食へば洩痢を止める。酥で煎じて食へば下焦を肥らせる】(孟詵)【小兒の疳、及び下痢五色を患ふものは、毎朝これを食ふが有效だ】(寇宗奭)

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、董炳の集驗方に『魏秀才の妻が腹大を病んで鼓のやうになり、四肢骨立して床に身を横へることも出來ぬほどになり、ただ衣服や寢具を吊つてそれに臥し、穀物の食事が通らぬこと數日に及んだが、ふと鶉を食はせて見ようと思ひつき、法則の通りに調へて進めると、やがて運劇して少頃すると雨のやうに汗を出し、言語も不能になつたが、ただ衣服を替へたいやうな様子があるので、扶け起して便通をさせると、小便から突然鵞脂のやうに凝つた白液を出し

た。同様に數回下してそれから大いに元氣ついたのであつた。これは蓋し中焦の濕熱が久しい間鬱積して發つたもので、本草に、鶉は熱結を解し、小兒の疳を療ずとある意味を詳に考へれば、やはり當然の理だ』とある。董氏はかやうに說いたが、時珍が謹んで按ずる所に據れば、鶉なるものは蛙の化氣であつて性の相同じきものだ。蛙と蝦蟇とはいづれも熱を解し、疳を治し、水を利し、腫を消するものであつて見れば、鶉が鼓脹を消するといふも、蓋しその功力が同一だからである。

(一)鷃（拾遺）

和名　みふうづら
學名　Turnix tanki blanfordi, Blyth.
科名　きじ(雉)科

釋名　**鴳**　あるひは鶕と書く。**鸋**　音は寧(ネイ)である。**鴽**　音は如(ジョ)である。**鳸**　時珍曰く、鷃は木の上に棲まぬ。安寧自如たるものといふべきだ。莊子に所謂『騰躍すれども數仞に過ぎず、蓬蒿の間に下り翔る』のそれである。張華の禽經の註に籬鷃といつたのはこの鳥だ。鴳とは鷃の音轉である。(二)靑州ではこれを鴾母といひ、また鷃雀ともいふ。又、鳸と呼ぶ鳥に九種あつて、これもその内の一

(一)木村(重)曰ク、うづらニ似テ體ヤヤ小ナリ、頭黑色ニシテ羽根ニ斑點アリ。一般ニ鶉ノ名ニテ呼バル。印度、ビルマ、支那、滿洲、東南西比利亞ニ分布ス。鵪鶉(アンチユン)トモ云ハル。

(二)靑州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

種である。

集解　藏器曰く、鷃は小さい鳥で、鶉の類だ。一名鴽(じよ)といふ。鄭玄の禮記の註には、雉兎鶉鷃とあり、鷃を鴽としてある。一般に多くこれを食ふ。

時珍曰く、鷃は候鳥と云つて渡り鳥である、鷄のやうに常に早朝に鳴いて農民に麥の收穫を促(うなが)すので、麥を耕作するものはこの鳥の聲で適當な時期を測る。春秋運斗樞に『立春、雨水、鶉鵪鳴く』とあるはこれである。鵪と鶉との二種は形狀はよく似てゐて倶に黑色だが、ただ斑のないものが鵪である。今は一般に總(すべ)てを鵪鶉なる名の下に通稱してゐるが、按ずるに、夏小正に『三月、田鼠化して鴽となり、八月、鴽化して田鼠となる』とあり、その註に『鵪のことだ』とある。爾雅には『鶉の子は鳼(あん)、鴽の子は鸋(ねい)』とあり、註に『鵪は鶉の屬だ』とある。禮記には『鶉を羹にし、鴽を

〔鷃〕
――鴽――

釀すに蓼を以てす』とあり、註に『鴽は小さくして羹にならない。酒、蓼で釀して蒸煮して食ふのだ』とある。この數說に據れば、鶉と鴽との二種別のものなること明である。兩者俱に田野に在つて形狀も彷彿たるところから區別がつかなかつただけで、鶉なるものは始は蝦蟇、海魚から變化し、それが終に卵から生まれるやうになつたのだから斑があり、四季を通じて常にあるのだ。鴽なるものは始は鼠から變化して終にまた鼠に復る。それで斑もなく、夏にはゐるが冬にはゐないのだ。本來の質に既にそれだけの相異があるのだから、療病上の藥性にも當然差異があるべきわけで、混同すべきものではないと思ふ。

肉　[氣味]【甘し、平にして毒なし】[主治]【諸瘡、陰䘌に、煮て食へば熱を去る】(時珍)

(一)鷸　(拾遺)

和名　たしぎ
學名　Capella gallinago raddei, (Buturlin.)
科名　しぎ(鷸)科

(一)鷸　音は述(ジユツ)である。

(一)木村(重)曰ク、冬期ニ支那、日本等ニ渡ル。水鶏兒(シユイチール)水鷲(スイチヤ)鵪鶉鷲(アンチユンチヤ)ト稱セラ

[集解]　藏器曰く、鷸は鶉のやうで色が蒼く、嘴が長く、泥塗中にゐて鷸鷸と

いふ鳴聲を出す。村落の人民はこれを田鶏の變化したものだといふ。やはり鶬、鶉の類である。蘇秦が『鷸蚌相持す』といつたのはこの物だ。

〔鷸〕

時珍曰く、說文に『鷸は天候を知り、雨が降らんとするときは鳴く。故に天文の學者が鷸を冠にするのだ』とある。現に田野中にゐる小鳥で、まだ雨の降らぬ前に鳴くものがこの鳥だ。翡翠と同じ名を呼ばれるが實物は異ふ。

肉　氣味【甘し、溫にして毒なし】主治【虛を補し、甚だ人體を暖める】(藏器)

鴿（宋嘉祐）(一)

和名　どばと(いへばと)
英名　Dove
科名　はと(鳩)科

ル。鷸トハ一般ニしぎ科(Charadriidae)ノ總稱ニシテたげり(水鶏、溌子Vanellus)其他支那產約四十二屬ヲ包含ス、今代表的ノモノヲ揭ゲ。

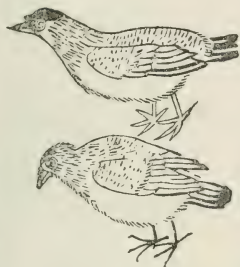
(一)木村(重)曰ク、かはらばと(Columba livia intermedius, Strickland.)ヨリ家

禽化サレタルモノニテ、鴿子（ハアツー（北支）ゲツ（南支））ト呼バル。藥用トスルハ殆ンド白鴿ナリ「鳩」ハきじばとヲ云フ。

（三）大觀ニ疥ヲ瘙ニ作ル。

【釋名】 **鵓鴿**（食療） **飛奴** 時珍曰く、鴿は性淫にしてよく交合する。故にかく名けたのだ。鵓とはその鳴聲だ。張九齡は鴿を書信傳達に使をするところから飛奴と呼んだのだ。梵書には迦布德迦と名けてある。

〔鴿〕

【集解】 宗奭曰く、鴿の毛色は禽類中でも最も品級の多いものだが、白鴿だけを藥に入れる。凡そ鳥はみな雄が雌に乘ずるものだが、この鳥だけは雌が雄に乘ずる。故にその性が最も淫だ。

時珍曰く、處處の人家で飼養し、また野鴿といふものもあつて、品種は多くあるが大體の毛羽の色は青、白、黑、綠、鵲斑の數種に過ぎない。目は大小はあるが黃、赤、綠色だけだ。やはり鳩と配偶する。

白鴿肉 【氣味】【鹹し、平にして毒なし】 詵曰く、暖なり。【主治】【諸藥毒を解す。また人、馬の疥の久患には、これを食へば立ろに癒える】（嘉祐）【精を調へ、氣を益す。惡瘡、疥癬、風（三）瘡、白癜、癧瘍風を治するには、炒熟して酒で服

(三)上蘇、百病主治ニ土蘇ニ作ル。

す。人體に益あるものではあるが、多く食つては恐らく藥力を減ずる】(孟詵)

附方 舊一、新一。【消渇飲水】際限なく水を飲んで止まぬには、白花鴿一羽を小片に切り、(三)上蘇で煎じて含み咽む。(心鏡)【痘毒の預解】毎年十二月末日の夜、白鴿を煮炙して小兒に食はせ、同時に毛の煎湯で浴すれば痘が出ても少しで濟む。

血 主治【諸藥、百蠱の毒を解す】(時珍) 記載は事林廣記にある。

卵 主治【瘡毒、痘毒を解す】(時珍)

附方 新一。【痘毒の預解】小兒がこれを食へば永く痘が出ない。或は出ても少しで濟む。白鴿卵一對を竹筒に入れ、半月間厠中に入れて取出し、その卵白で辰砂三錢を和して菉豆大の丸にし、三十丸づつを三豆飲で服す。毒は大、小便と共に排出する。(潛江方)

屎【左盤龍と名ける】時珍曰く、野鴿のものが就中良し。この鳥の屎はいづれも左に卷くものだ。故に宣明方にこれを左盤龍といつてある。氣味【辛し、溫にして微毒あり】主治【人、馬の疥瘡には、炒り研つて傅ける。驢、馬をば草にこれを和して飼ふ】(嘉祐)【腫、及び腹中の痞塊を消す】(汪穎)【瘰癧、諸瘡を消し、

破傷風、及び陰毒で死に垂たるものを療じ、蟲を殺す】(時珍)

【附方】　舊四、新六。【帶下に膿を排す】宗奭曰く、野鴿糞一兩を炒つて微し焦し、白朮、麝香各一分、赤芍藥 青木香各半兩、延胡索を赤く炒つて一兩、柴胡三分と末にし、溫めた無灰酒で一錢を調へて空心に服し、膿の盡くるを候つて止め、後に子臟を補する藥を服す。【破傷中風】病が裏に傳入したるには、左蟠龍、卽ち野鴿糞、江鰾、白殭蠶を各〻炒つて半錢、雄黃一錢を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、十五丸づつを溫酒で服して效を取る。(保命集)【陰症腹痛】顏色の甚しく青きには、鴿子糞一大抄を研末し、極熱した酒一鍾で和勻し、澄淸して頓服すれば癒える。(劉氏)【蚘蟲腹痛】白鴿屎を燒いて研り、飮で和して服す。(外臺)【冷氣心痛】鴿屎を燒いて性を存し、一錢を酒で服すれば止まる。【項上の瘰癧】左盤龍を炒つて研末し、飯で和して梧桐子大の丸にし、三五十丸づつを米飮で服す。(張子和方)【頭痒くして瘡を生じたるもの】白鴿屎五合を醋で煮て三沸し、杵いて一日三回づつ傅ける。(聖惠)【頭瘡白禿】鴿糞を研末して傅ける。豫め醋(四)泔で洗淨する。また燒き研つて摻るもよし。(同上)【反花瘡毒】初期には米粒ほどの惡肉があつて、破れば血が出て

(四) 大觀ニ泔上ニ米字アリ。

（一）木村（重）曰ク、體ハ暗灰色ニ背ニ斑アリ。脚ハ三趾ニテ毛生ズ。大イサ鴿大、北部支那ヨリバイカル湖ニ分布ス。突厥雀（トウチエーチヤオ）冠雉（コウチー）ト呼バル。
（二）突厥ハ長城以北ノ蒙古地方。即チ匈奴ノ地方ナリ。
（三）塞ハ長城。

肉が隨つて生じ、外部に反出するものである。鵓鴿屎（ほつかふし）三兩を黄に炒つて末にし、溫漿水で瘡を洗つて後に傅ける。（聖惠方）【鵞掌風（がしやうふう）】鴿屎、白雄鷄屎を炒つて研り、水で煎じて日毎に洗ふ。

（一）突厥雀（拾遺）

和名　さけい
學名　Syrrhaptes paradoxus, Pallas.
科名　さけい（沙鷄）科

【釋名】**鵽鳩**　鵽の音は奪（ダツ）である。**寇雉**　藏器曰く、この雀が北方から來ると、賊亂があつて國境の蠻族が中國を候（うかが）ふものだ。故にかく名けたのである。

時珍曰く、按ずるに、唐書に『高宗の時、（二）突厥（とつけつ）が塞を犯した際に、鳴鵽が羣飛して塞に入つた。その時國境の住民は驚いて「この鳥は一名突厥雀といふもので、南へ飛ぶときは必ず突厥が入寇するさうだ」といつた。やがて果して入寇したのであつた』とあるが、これは爾雅に『鵽鳩（だつきう）は寇雉なり』とあるところから見ると、奪（だつ）掠（りやく）、寇賊に結びつけたわけはやはり此から出たものだ。

【集解】藏器曰く、突厥雀は塞北に生ずる。形狀は雀のやうで身が赤い。

時珍曰く、按ずるに、郭璞は『鵽鳩は北方の沙漠地に生ずる。大いさは鴿ほど、形は雌雉に似たもので、脚は鼠のやうで後趾がなく、尾が岐れてゐる。性質の憨急なもので、羣り飛ぶ』といひ、張華は『鵽は關西に生ずる。飛ぶには雌が前に雄が後になり、相隨つて行動する』といひ、莊周は『青鵽はその子を愛するがその母を忘れる』といつた。

肉　［氣味］【甘し、熱にして毒なし】［主治］【虚を補し、中を暖める】（藏器）

雀[一]（別錄中品）

和名　すずめ
學名　Passer montanus saturatus, Stejneger.
科名　すずめ(雀)科

［釋名］　瓦雀　賓雀　時珍曰く、雀は尾の短い小鳥だ。故にその文字は小に從ひ隹に從ふのであつて、隹は錐(スヰ)と發音し、尾の短いことだ。簷の瓦の間に宿り棲んで、馴れ近いて庭先や階段まで來る。その樣子が賓客のやうだといふところから瓦雀、賓雀などといひ、また嘉賓とも呼ぶのである。俗に老いて斑あるものを麻雀と呼び、小さくして口の黄なるものを黄雀といふ。

（一）木村(重)曰ク、顏ニ黑斑アリ。北亞種たいわんすずめ、及てうせんすずめ、及ビ顏ニ黑斑ナキにうないすずめ［Passer rutilans (Temm.)］等ヲ産ス。雀（チヤチ）瓦雀（ワーチヤチ）麻雀兒（マチヤチル）家雀（チヤチヤチ）ト呼バル。

【集解】時珍曰く、雀は處處にゐる。羽毛は斑褐で頷と觜とはみな黑く、頭は蒜の顆のやう、目は椒を擘いたやう、尾の長さは二寸ばかり、爪と距とは黄白色で、躍つて行くが步まない。物を視る樣子は驚いたやうに見え、その目は夜は盲する。その卵には斑がある。その性の最も淫なるものだ。小なるものをば黄雀と名け、八九月に田の中に羣飛する。體は非常に肥えてゐて、背には綿を被たやうに脂があるものだ。性味はいづれも同一で、炙いて食ひ、鮓にして食ふと甚だ美味だ。按ずるに、逸周書に『秋の季に雀が大水に入つて蛤となる。雀が水に入らねば國に淫泆の事が多い』とあり、又、臨海異物志には『南海には黄雀魚といふがあつて、常に六月に變化して黄雀となり、十月に海に入つて魚となる』とある。して見ると、所謂雀が蛤に化す

〔雀〕

とは蓋しこの類のものをいふのだ。人家に近くゐる雀では未だ嘗て變化したものを見たことがない。又、白雀といふがあつて、緯書にはこれを瑞應の所感としてある。

肉【氣味】【甘し、溫にして毒なし】弘景曰く、雀肉は李と食合せてはならぬ。諸種の動物の肝と食合せてはならぬ。妊婦が雀肉を食つて酒を飮めば多淫の子を生み、雀肉と豆醬を食へば生れる子に面䵟が生ずる。凡そ白朮を服する人はこれを忌む。

【主治】【冬三个月間これを食へば陽道を起し、人をして子あらしめる】(藏器)【陽を壯にし、氣を益し、腰膝を暖め、小便を縮め、血崩、帶下を治す】(日華)【精、髓を益し、五臟の不足の氣を(二)縮める。常にこれを間斷なく食ふがよし】(孟詵)

【發明】宗奭曰く、正月以前、十月以後に食ふがよい。それはその陰陽靜定してまだ泄れないものを用ゐる意味だ。故に卵も一産卵期の第一番目に生んだものを取る。

頌曰く、現に一般に雀肉に蛇牀子を和して熬膏し、それで藥を和して服するが、下部を補すのに有效だ。これを驛馬丸と呼ぶ。この法は唐時代に始めて行はれたも

(二)大觀ニ縮ヲ續ニ作ル。

ので、玄宗皇帝がこれを服して效驗あつたといふ。

時珍曰く、聖濟總錄の虛寒を治する雀附丸に、肥雀肉三四十箇を附子と共に熬膏して丸藥にするとあるは、やはり右の意味を祖述したものだ。

附方　新八。【老人の補益】老人の臟腑の虛損で羸瘦し、陽氣の乏弱せるを治す。雀五羽を普通の料理の場合のやうに作り、粟米一合、葱白三本を用ゐ、先づ雀を炒り熟して酒一合に入れて煮てから、少時して水二盞を入れ、葱、米を入れて粥にして食ふ。（食治方）【心氣勞傷】朱雀湯——心氣勞傷から諸種の疾に變じたるには、雄雀一羽の肉を取つて炙き、赤小豆一合、人參、赤茯苓、大棗肉、紫石英、小麥各一兩、紫菀、遠志肉、丹參各半兩、甘草を炙いて二錢半を細かに剉んでよく拌ぜ合せ、三錢づつを水一盞で六分に煎じて滓を去り、食事と時間を隔てて溫服する（奇效方）【腎冷偏墜】疝氣である。生雀三羽を毛を燎き腸を去り——洗つてはならぬ——舶來の茴香三錢、胡椒一錢、縮砂、桂肉各二錢をその雀の肚中に入れ、濕紙で裹んで煨熟し、空心に酒で服するが良し。（直指方）【小腸疝氣】毛のついたままの雀一羽を腸を去り、金絲礬末五錢を入れて縫合し、桑柴火で煨いて炭にして末にし、空心に

無灰酒で服す。發病以來年久しきものも二服で癒える。(瑞竹堂方)【赤白痢下】臘月に取つた雀を腸肚、皮毛を去り、巴豆仁一箇をその肚中に入れ、缾に入れ固濟して煆いて性を存して研末し、好き酒で黄蠟を煮て百沸し、その蠟を用ゐて梧子大の丸にし、一二十丸づつを、赤痢には甘草湯で服し、白痢には乾薑湯で服す。(普濟方)【内外目障】視力乏しく、翳を生じ、遠くを視ると黒花があるやうに覺えるもの、及び内障で物の見えぬものを治す。雀十羽を翅、足、觜を去り、腸、胃、骨、肉の付いたまま研り爛らし、磁石を煆いて醋に淬すこと七回して水飛し、神麴を炒り、青鹽、肉蓯蓉を酒に浸し炙いて各一兩、兎絲子を酒に三日浸して晒して三兩を末にし、酒二升に少し煉蜜を入れたもので雀、鹽と共に膏に研り、それで諸藥を和して梧子大の丸にし、一日二回、二十丸づつを溫酒で服す。(聖惠方)

雀卵　氣味　【酸し、溫にして毒なし。五月に取る】　主治　【氣を下す。男子の陰痿で起たざるものを強くし、熱せしめ、精多くし、子あらしめる】(別錄)【天雄、兎絲子末を和して丸にし、空心に五丸を酒で服すれば、男子の陰痿不起、女子の帶下、大小便不利を治し、疝瘕を除く】(孟詵)

【發明】弘景曰く、雀は陰陽を利するものだから卵も同様なのだ。術に『雀卵で天雄を和して服すれば陰莖を衰へざらしめる』とある。

頌曰く、按ずるに、素問に『胸脇肢滿するもので、食事に妨があり、病が發して來ると先づ臊臭を感じて清液を出し、先づ唾血して四肢淸し、目眩し、時時に前後する血病を血枯と名ける。これは年少の頃に大いに脫血したことがあるか、若くは醉ふて房事を行ひ、氣が竭き、肝が傷んだことに原因するものである。故に月經が衰少となつて潮來せぬものだ。これを治するには、烏鰂魚骨、䕡茹の二物を合せて雀卵で小豆大の丸にし、五丸を後飯として用ゐ、鮑骨汁を飮んで腸中、及び腸、肝を和するのである。飯を後にし藥を先にするを後飯といふ』とある。本草には右の三藥いづれも血枯を治すとはないが、經方には用ゐてあるのであつて、これは病の發生する根本に向つて藥の作用を加へたものである。

時珍曰く、今は一般に、雀卵の能く男子の陽虛に益することを知つてゐるが、能く女子の血枯を治することを知らない。蓋し雀卵は精血を益するものなのである。

肝【主治】【腎虛陽弱】(聖惠)四雄丸に用ゐてある。

頭血 [主治] 【雀盲】（別錄）弘景曰く、雀盲とは人が黄昏時に物の見えなくなり、雀の目が夜間盲するやうなものだ。一日二回血を取つて點ける。

腦 [氣味] 【平なり】 [主治] 【綿で裹んで耳を塞げば聾を治す。又、凍瘡に塗る】（孟詵）時珍曰く、按ずるに、張子和の方に、臘月の雀腦を灰に燒き、油で調へて塗るもよしとある。

喙及び**脚脛骨** [主治] 【小兒の（三）乳癖には、一羽づつを煮て汁を服す。或は灰に燒いて米飮で調へて服す】（時珍）

雄雀屎 一名 **白丁香**（俗名）**靑丹**（拾遺）**雀蘇**（炮炙論） [修治] 日華曰く、凡そ鳥は、左翼が右を掩ふものは雄である。その屎は頭が尖つて挺直だ。斅曰く、凡そこれを使用する場合には雀兒の糞を用ゐてはならぬ。雀兒とは口が黄でまだ淫行の經驗なきものである。ここに雀蘇といふは底が坐つて尖が上にあるもので、雄の糞である。兩頭の圓いものは雌の糞だ。陰人には雄を使用し、陽人には雌を使用する。臘月に採つて兩畔の附著物を去り、鉢に入れて研細し、甘草水に一夜浸し、水を去つて焙じ乾して用ゐる。

（三）乳癖、詳ナラズ、吐乳ヲ指スカ。

時珍曰く、別錄にはただ雄雀屎を用うとあるだけで、雌、雄それぞれの用途を區別したのは雷氏からである。

【氣味】【苦し、溫にして微毒あり】【主治】【目痛を療じ、癰(四)疽を決する。婦人の帶下、小便不利。疝瘕を除く】(別錄)【齲歯を療ず】(陶弘景)【初めて男子を生んだ母の乳に和して目中の努肉、赤脈の瞳子(五)を貫きたるに點ける。直ちに消する神效がある。蜜で丸にして服すれば癥瘕久痼の(六)諸病を治す。少量の乾薑に和して服すれば大いに身體を肥えしめ、悅澤にする】(蕭炳)【癰癤の潰れぬものに點塗すれば直ちに潰れる。急黄で死せんとするものには、湯に溶化して服すれば立ろに甦る。腹中の痃癖、諸塊、伏梁には、乾薑、桂心、艾葉と和して丸にして服す。能く消爛せしめる】(藏器)【天雄、乾薑に和して丸にして服すれば、能く陰を強くする】(孟詵)【積を消し、脹を除き、咽塞、口噤を通ずる。婦人の乳腫、瘡瘍、中風、風蟲牙痛】

【發明】時珍曰く、雀は諸種の穀物を食つて容易に消化するものだ。故に疝瘕、積脹、痃癖、及び目瞖、努肉、癰疽、瘡癤、咽噤、齒齲の諸症を治するは、みなその能く消爛する意味を取るのである。

(四)疽、大觀ニ瘡ニ作ル。
(五)大觀ニ子下ニ上ノ字アリ。
(六)大觀ニ諸ニ冷ニ作ル。

附方

舊六、新八。【霍亂不通】脹悶して死せんとするものであつて、飽食し傷めて涼を取つたことが原因である。雄雀糞二十一粒を研末し、溫酒で服す。なほ奏效せぬときは再服する。（總錄）【目中の瞖膜】日熱で赤白膜を生じたるを治するには、雄雀屎を人乳に和して點ければ自ら爛れる。（肘後方）【風蟲牙痛】雄雀屎を綿で裹んで孔中を塞ぎ、一日二回易へれば效がある。（外臺）【咽喉噤塞】雄雀屎末半錢を溫水で灌ぐ。（外臺）【小兒の口噤】風に中つたものには、雀屎を水で麻子大の丸にし、二丸を飲服すれば瘉える。（七）（千金方）【小兒の乳を飲まぬもの】雀屎四箇を抹して吮はす。（總微）【小兒の痘靨】白丁香末に麝香少量を入れ、一錢を米飲で服す。（保幼大全）【婦人の吹乳】白丁香半兩を末にし、一錢を溫酒で服す。（八）（聖惠）【破傷風瘡】白痂が生じて血なきものは死に至る、最も危急なものだ。黃雀糞の直きものを研末し、半錢を熱酒で服す。（普濟）【癰癤の破決】諸癰が已に十分化膿したにも拘はらず、患者が鍼を懼れるには、雀屎を取つて瘡頭に塗れば決し易い。（梅師方）【瘭瘡の痛むもの】雀屎、燕巢土を研つて傅ける。（直指）【浸淫瘡癬】洗淨し、雀屎、醬（九）瓣を和して研り、日毎に塗る。（千金翼）【喉痺乳蛾】白丁香二十箇に沙糖を和して三丸にし、

（七）大觀ニ子母祕錄ニ作ル。

（八）大觀ニ簡要濟衆ニ作ル。

（九）瓣ハ、瓜實ノ瓤ヲ包ム外部ノ肉ヲ云フ、醬瓣ハ漬物ノ瓜。

ノ中子ヲ去リタルモノ。

一丸づつを綿に裹んで含み噙む。卽時に癒える。甚しきものも一丸に過ぎずして極めて奇效がある。（普濟方）【顏面・鼻の酒皶】白丁香十二粒、蜜半兩を朝、夕點ければ久しくして自ら除去する。（聖惠方）

（一）蒿雀（拾遺）

和名　からあをじ
學名　Emberiza spodocephala, Pallas.
科名　すずめ（雀）科

〔集解〕藏器曰く、蒿雀は雀に似た青黑色のもので、蒿の中にゐる。（二）塞外へ行く〳〵ほど多くゐる。食つては諸種の雀より美味なものだ。

肉〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【これを食へば陽道を益し、精、髓を補す】（藏器）

腦〔主治〕【凍瘡に塗る。手足が皹裂しない】（藏器）

（一）巧婦鳥（拾遺）

和名　みそさざい
學名　Troglodytes peninsulae, (Clark)
科名　みそさざい（鷦鷯）科

（一）木村（重）曰ク、日本產ーあをじニ類スルモ喉ハ帶綠色ヲ呈ス。からのじこ（E. sulphulata, T. & S.）共ニ蒿雀、靑頭兒（チンタオル）ト稱セラル。北滿ヨリ南支那ニ分布ス。

（二）塞外トハ長城以北ノ蠻地ヲ指ス。

（一）木村（重）曰ク、黃肚（脰）雀（ウワントウチヤチ）ト呼バル。北支那產ノモノヲ揭グ。

(二)關トハ函谷關ヲ指ス、蟲部卵生類蜘蛛ノ註參照。
(三)燕ハ草部隰草類燕脂ノ註ヲ見ヨ。

【釋名】 鷦鷯(詩疏) 桃蟲(詩經) 蒙鳩(荀子) 女匠(方言) 黃脰雀(俗) 時珍曰く、按ずるに、爾雅に『桃蟲は鷦なり。その雌を鴱といふ』とあり、揚雄の方言には『(二)關より東ではこれを巧雀といひ、或は女匠といふ。關より西ではこれを韈雀といひ、或は巧女といふ。(三)燕地方ではこれを巧婦といふ。江東ではこれを桃雀といひ、また有呼ともいふ』とある。また鳩は性が拙であり、鷦は性が巧だからかく呼ぶのだといふ。かかる意味から諸種の名稱が起つたのだ。

【集解】 藏器曰く、巧婦は雀より小さく、林や藪の中に窠を作る。窠は小さい袋のやうなものだ。

時珍曰く、鷦鷯は處處にゐるもので、蒿木の中で生れて柴や竹の垣の上にゐる。形狀

〔巧婦鳥〕
——鷦鷯——

(四)毛毳、毳ハ獸類ノ細毛、及ビ鳥類ノ腹部ノ毛ヲイフ。此ニハソレ等ノ細毛ノ如キ茅、葦ノ毛ナリ。

(五)爾雅ニ鴱ニ作ル。

(六)鷦ノ誤字。

は黄雀に似て小さく、灰色で斑があり、聲は口笛のやう、喙は利い錐のやうだ。茅や葦の(四)毛毳を取つて雞卵ほどの大いさの窠を作り、麻や髮毛などで樹上に繋ぎ懸けるのだが、極めて精巧なもので、或は房の一箇あるものもあり、房の二箇あるものもある。故に『林に巣ふて一枝に過ぎず、毎食數粒に過ぎず』といふのだ。卑賤な者にはこの鳥を飼ひ馴して戯藝をさせるものもある。又、爾雅には剖葦といつてある一種の(五)鷦鷯がある。それは雀に似て青灰色の斑があり、尾は長く、好んで葦蠹を食ふものだ。やはり(六)鷦の類である。

肉 氣味 【甘し、溫にして毒なし】 主治 【炙いて食へば甚だ美味だ。人をして聰明ならしめる】(汪頴)

窠 主治 【烟に燒いて手を熏ずれば婦人をして養蠶を巧ならしめる】(藏器)【膈氣、噎疾を治す。一箇を灰に燒いて酒で服す。或は一回に三錢を服すれば神驗がある】(時珍) 記載は衞生易簡方にある。

(一)燕（別錄中品）

和名　つばめ
學名　Hirundo rustica gutturalis, (Scopoli)
科名　つばめ(燕)科

釋名　**乙鳥**（說文）　**玄鳥**（禮記）　**鷙鳥**（古今注）　**鷾鴯**（莊子）　**游波**（炮炙論）　**天女**（易占）

時珍曰く、燕の字の篆文はその姿態の象形だ。乙とはその自ら呼ぶ鳴聲。玄とはその色である。鷹、鷂はこれを食へば死ぬ。能く海東の青鶻を制する。故に鷙鳥なる名稱がある。能く波を興し、雨を祈るところから游波なる稱呼がある。雷斆が『海竭き、江枯るも、游波を投じて立ろに汎る』といつたのはこれである。京房は『人が白燕を見れば貴女を生むしるしだ』といつた。それで燕を天女と呼ぶのである。

集解　別錄に曰く、燕は高山、平谷に生ずる。

弘景曰く、燕に二種ある。胸が紫で輕小なものは越燕といふもので、藥用には入れない。斑黑があつて聲の大きいものは胡(二)燕といふもので、藥用に入れるものだ。胡燕の作る窠は能く二疋の絹を容れ得るほど長いもので、人の家を富ましめる。窠

(一)木村(重)曰ク、亞細亞北部ニテ蕃殖スル普通ノつばめナリ。此他あかはらつばめ、とつくりつばめ、あじあつばめヲ見ル。燕(エエ)ト稱ス。

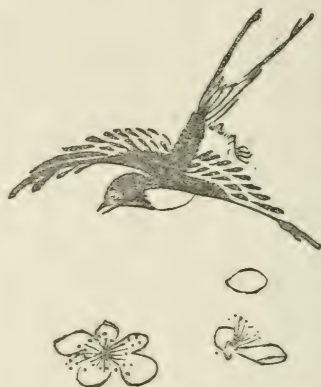
(二)大觀ニ燕字下ニ俗呼胡鷰爲夏候ノ七字アリ。

(三)大觀ニ屈ヲ倔求爲ニ作ル、何ノ義ナルヲ知ラズ。

の入口が北に向き、尾が(三)屈して色の白いものは數百歳のものであつて、仙經ではこれを肉芝といひ、これを食へば天年を延べるとしてある。

時珍曰く、燕は大いさ雀ほどで、身が長く、籋口、豐頷で翅を布き、尾が岐れ、背で飛び、向つて宿る。巢を作るには戊巳の日を避け、春社に來て秋社に去る。この鳥は、來ると泥を啣んで屋根の下に巢を作り、去れば氣を伏して窟穴中に蟄居するのである。或は海を渡つて去來するといふが、それはでたらめだ。玄鳥が來たとき高禖といふ緣結びの神に祈ると世嗣の子が授かるとか、或は

「燕」

燕の卵を呑めば子が生れるとかいふも無根のことだ。或は燕は井底に蟄するものだといふ。燕は屋内には入らぬけれども、井戸は空いてゐるものだからだ。燕は巢に艾があるとこれに栖まぬ。凡そ狐、貉の皮毛は燕に觸れると毛が脫ける。これはそ

の物に何等かの關係があつて起る現象だ。

肉 〔氣　味〕【酸し、平にして毒あり】 弘景曰く、燕肉を食へば人の神氣を損じ、水に入ると蛟龍に呑まれるから食つてはならぬ。また殺すことも宜しくない。

時珍曰く、淮南子に『燕は水に入つて蜃蛤となる』それで高誘の註に『蛟龍は燕を嗜む。人が燕を食つたときは水に入つてならぬ』といつたのであつて、祈禱家は燕を用ゐて龍を召ぶ。しかし深く考へて見るに、燕は蟄するもので變化はせぬものだ。蛤に變化するといふ說は、その眞否のほど信用の限でない。但し燕肉は有毒なものだから、それで食はれぬとなつてゐるのだ。

〔主　治〕【痔蟲、(四)瘡蟲を出す】(別錄)

(五)**胡燕卵黄** 〔主　治〕【卒水浮腫には十箇づつを呑む】(別錄)

秦燕毛 〔主　治〕【諸藥毒を解す。十四本を取つて灰に燒き、水で服す】(時珍)

屎 〔氣　味〕【辛し、平にして毒あり】 〔主　治〕【蠱毒、鬼疰、不祥の邪氣を逐ひ、五癃を破り、小便を利す。(六)香しく熬つて用ゐる】(別錄) 頌曰く、胡洽の疰病を治する靑羊脂丸の中に用ゐてある。【痔を療じ、蟲を殺し、目瞖を去る】(甄權) 【口

(四) 大觀ニ痔蟲ノ二字ナシ。
(五) 木村(重)曰ク、胡燕ハ前揭ノつばめヲ云フカ。
(六) 此處ニ本經ノ二字ヲ註スベシ。

（七）大觀ニ此處ニ葛氏方ノ三字アリ。

瘡、瘧疾を治す】（孫思邈）【湯にして小兒の驚癇を浴す】（弘景）

附方　舊三、新三。【蠱毒を解す】藏器曰く、燕屎三合を取つて炒り、獨蒜を皮を去つて十箇と和して梧子大の丸にし、三丸づつを服す。蠱は利するに隨つて出るものである。【瘧疾の禁厭】藏器曰く、燕屎方寸匕を、發作の日の早朝に酒一升に和し、患者に兩手で捧げてその氣を吸はせる。口に入れぬやうに注意を要する。人を害するものだ。【石淋を下す】燕屎末五錢を冷水で服す。早朝服すれば食事時刻には尿中に石水が下るものだ。（七）【小便を通ずる】燕屎、豆豉各一合を糊で梧子大の丸にし、一日三回、三丸づつを白湯で服す。（千金）【牙痛を止める】燕子屎を梧桐子大の丸にし、疼く部分で咬む。丸が溶化すれば疼が止まる。（袖珍）【小兒の卒驚】痛む處があるやうで明に判らぬものである。燕窠中の糞を湯に煎じて洗浴する。（救急方）

窠中土　土部に記載してある。

燕蓐草　卽ち窠草である。草部の九に記載してある。

（一）石燕（日華）

和名　いはつばめ
學名　Delichon urbica sp.
科名　つばめ(燕)科

【釋名】土燕（綱目）

【集解】詵曰く、石燕は鍾乳穴の石洞中にゐるものだ。冬期に採れば食へるが、その他の月ではただ治病に用ゐ得るだけである。

炳曰く、石燕は蝙蝠に似て口の四角なものだ。石乳汁を食物とする。

時珍曰く、これは石部中にある石燕とは異ふ。廣志に『燕に三種あつて、これは土燕といつて巖穴に乳するものだ』とあるそのものだ。

肉　【氣味】【甘し、暖にして毒なし】　【主治】【陽を壯にし、腰膝を暖め、精を添へ、髓を補し、氣を益し、皮膚を潤ほし、小便を縮め、風寒、嵐瘴・溫疫の氣を禦ぐ】（日華）　詵曰く、治法は、石燕十四羽に五味を和して炒熟し、酒一斗に三日間浸し、毎夜就寝時に一二盞を飲む。甚だ能く補益し、體力を强健にし、徤啖ならしめる。

（一）木村(重)曰ク、北支那ニハ羽毛白きしべりやつばめ〔D. whitelei(Swinh.)〕ヲ産ス。滿洲ニテ土燕(トエエ)ト稱スルモノハつばめちどりナリ。

(一)伏翼（本經(二)上品）

和名　だうべんかはほり
學名　Myotis daubentoni, (Leinsel)
科名　かはほり科

【校正】時珍曰く、本經には、上品の部に伏翼の條があり、また天鼠屎の條があるが、此には李當之の本草に依つて一條に併合した。

【釋名】**蝙蝠**　音は編福（ヘンプク）である。**天鼠**（本經）**仙鼠**（唐本）**飛鼠**（宋本）**夜燕**　恭曰く、伏翼（ふくよく）とは晝は伏して翼のあるものといふ意味だ。時珍曰く、伏翼は、爾雅には服翼と書いてある。(三)齊地方では仙鼠と呼ぶ。仙經には肉芝なるものの中に列してある。

【集解】別錄に曰く、伏翼は太山の川谷、及び人家の屋間に生ずる。立夏の後に採つて陰乾する。天鼠屎は(四)合浦（がつぽ）の山谷に生ずる。十一月、十二月に採る。弘景曰く、伏翼は白色にして倒に懸る（さかしま）もの以外は服されぬ。恭曰く、伏翼、卽ち仙鼠であつて、山孔中にゐて諸乳石の精汁を食物とする。いづ

(一)木村(重)曰ク、人家ニ潛ムかはほり(あぶらむし)ハ、雛蝙蝠科ニ屬スルいへかはほり Pipistrellus abramus(Temm.)ニシテ、日本、支那ニ分布ス。共ニ蝙蝠（ペンフー(北支)ピンフオ(南支))ト呼バル。

(二)上、本經ニ下ニ作ル。大觀ニ中ニ作ル。

(三)齊ハ水部阿井泉ノ註ヲ見ヨ。

(四)合浦ハ草部山草類吉利草ノ註ヲ見ヨ。

れも千歲に達し、純白雪の如く、頭上に冠があり、大いさ鳩や鵲ほどのものだ。陰乾して服すれば肥健ならしめ、長生して千歲の壽を得せしめる。大いさ鶉ほどで、まだ白くならぬものは百歲のものだ。いづれも倒に懸り、その腦の重いものである。その屎はいづれも白色だ。藥に入るにはこの屎を用ふべきものである。

○頌曰く、蘇恭の說は仙經に所謂肉芝なるもののことをいつてゐるのだ。現に蝙蝠は古屋根の中に生ずる。白くして大なるものは蓋し稀だ。その屎もやはり白色のものもあるが、想ふに乳石孔中に產したものが右のやうなものになるのであらう。

○宗奭曰く、伏翼は日中にもやはり飛べるのだが、ただ鷙鳥を畏れるので出ないだけだ。この物は善く氣を服するところから能く長壽を保つのであつて、それは冬期に食物を食はぬを見ても判る。

○時珍曰く、伏翼は形が鼠に似て灰黑色だ。薄い肉翅があり、四足、及び尾を連合して一のやうになつてゐる。夏は出て冬は蟄し、日中は伏して夜間に飛び、蚊、蚋を食物とし、自ら能く發生し成育する。或は、鼍虱が變化して蝠となり、鼠も化して蝠となり、蝠がまた化して魁蛤となるといふが、恐らく全然さうではない。乳穴

に生ずるものは甚だ大きいものだ。或は、燕は戊巳の日を避け、蝠は庚申の日に伏すといふが、これは理解し能はぬ事實である。かの白色のものといふは、自らさういふ種類があるのだ。仙經に、千百歳のものを服すれば人をして不死ならしめるなどいつてあるは方士の駄法螺といふものだ。陶氏、蘇氏がそれを信じたのは馬鹿げたことである。

按ずるに、李石の續博物志に『唐の陳子眞は大いさ鴉ほどの白蝙蝠を得て服したところ、一夕にして大いに泄して死亡した』とある。又、宋の劉亮は白蝙蝠、白蟾(五)蛤の仙丹を得

〔伏翼〕
—蝙蝠—

て服し、立ろに死亡したといふ。これを記載して置いたならば愚なる迷を破るに十分であらう。この不死の說は抱朴子の書の記載に始つたものだが、その著者葛洪が世を誤るの罪、滿天下に及ぶといふべきだ。又、唐書には『(六)吐番に天鼠といふがある。形狀は雀のやうで大いさ貓ほどあり、皮は裘に作り得る』とあるが、これは

(五)蛤ハ蜍ノ誤。

(六)吐番ハ種族名、今ノ西藏ノ地ニ據ル。此ニ吐番トハ西藏ノ地チ指スナリ。

別の一種の鼠であつて、ここにいふ天鼠ではない。

伏翼【修治】斅曰く、凡そこれを使用するには重量一斤のものを要する。先づ肉上の毛を拭ひ去り、また爪、腸を去り、肉翅、幷に嘴、脚を留め、好き酒に一夜浸して取出し、黃精の自然汁五兩を塗つて炙き、汁が盡きるまで炙いて乾して用ゐる。

時珍曰く、近世ではこれを用ゐるに多くは煆いて性を存するだけだ。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】日華曰く、微熱にして毒あり。之才曰く、莧實、雲實が使となる。

【主治】【目瞑癢痛。目を明にし、夜闇物を視るに精光あらしめる。久しく服すれば人をして熹樂し、媚好し、憂無からしめる】（本經）日華曰く、久しく服すれば愁を解く。【五淋を療じ、水道を利す】（別錄）【婦人出產の餘疾、帶下の病で子無きに主效がある】（蘇恭）【久欬上氣、久瘧、瘰癧、金瘡內漏、小兒の鬾病、驚風を治す】（時珍）藏器曰く、五月五日に倒に懸つたものを取つて晒し乾し、桂心、薰陸香を和して烟に燒けば蚊を避ける。夜明砂、鼈甲を末にして烟に燒いても蚊を辟ける。

【發明】時珍曰く、蝙蝠は性能く人を瀉す。故に陳子眞等はこれを服していづれも死んだのである。後文に掲ぐる金瘡を治する方を觀るに、いづれも下利を發すことになつてゐるのだから、その毒なることが推知されるのである。本經に、この物を毒なし、久しく服すれば憙樂して憂をなくすといひ、日華が、久しく服すれば愁を解くといつたのは、いづれも後世を誤まることだ。適〻憂を增し愁を益すにはよいであらう。病を治するに用ゐるは兎も角、服食することはよろしくない。

【附方】舊三、新八。【仙乳丸】上焦が熱し、晝間常に好んで瞑するものを治す。伏翼の重量二兩のもの一箇を腸、骨のあるまま炙き燥し、雲實を炒つて五兩、威靈仙三兩、牽牛を炒り、莧實と各二兩、丹砂、鉛丹各一兩、膩粉半兩を末にし、蜜で綠豆大の丸にし、七丸づつを木通湯で服し、知あるを度とする。（普濟）【久欬上氣】十年二十年の長きに及び、諸藥の效果なきには、蝙蝠を翅、足を除いて燒き焦して研末し、米飮で服す。（百一方）【久瘧の止まぬもの】范汪の方では、蝙蝠七個を頭、翅、足を去り、千杵擣いて梧子大の丸にし、一丸づつを淸湯で服す。鷄鳴時に一丸、正午前に一丸を服するのである。【久瘧の止まぬもの】伏翼丸——蝙蝠一箇を炙き、

蛇蛻皮一條を燒き、蜘蛛一箇を足を去つて炙き、鼈甲一枚を醋で炙き、麝香半錢を入れて末にし、五月五日の正午に研り勻ぜ、煉蜜を入れて和して麻子大の丸にし、五丸づつを溫酒で服す。(聖惠方)【小兒の驚癇】蟄に入つた蝙蝠一箇の腹中に塊になつた硃砂三錢を入れ、新瓦合に入れて煆いて性を存し、冷えるを候つて末にし、空心に四回に分服する。小兒のまだ小さきものには五回に分けて白湯で服ます。(醫學集成)【小兒の慢驚】返魂丹――小兒の慢驚、及び天弔夜啼を治す。蝙蝠一箇を腸、翅を去つて黃に炙き焦し、人中白を乾し、蠍を焙じ、麝香と各一分を入れて末にし、煉蜜で綠豆大の丸にし、三丸づつを乳汁で服す。(聖惠方)【多年の瘰癧】癒えぬものに神效の方である。蝙蝠一箇、猫頭一箇を俱に黑豆を上に撒いて骨が炭になるまで燒き、末にして摻り、乾けるときは油で調へて傅け、連翹湯を內服する。(集要)【金瘡出血】止まずして內漏となりたるには、蝙蝠二箇を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。水を下して血が消くものである。(鬼遺方)【腋下胡臭】蝙蝠一箇に赤石脂末半兩を全面に塗り、黃泥で包み固めて晒し乾し、煆いて性を存し、田螺水で調へて腋下に塗り、毒氣の上冲するを待つて急に下藥を服す。一二回通じがあつて妙效がある。

（七）洗洗ハ皮毛凄滄惡寒ノ貌ヲ云フ。

（乾坤祕韞）【乾血氣痛】蝙蝠一箇を燒いて性を存し、一錢づつを酒で服すれば直ちに癒える。（生生編）【婦人斷產】蝙蝠一箇を燒いて研り、五朝酒酵で調へて服す。（摘玄方）

腦 主治 【顏に塗れば婦人の面皰を去る。これを服すれば人をして忘れざらしめる】（藏器）

血及び膽 主治 【目に滴せば人をして睡らざらしめ、夜中物を見得る】（藏器） 弘景曰く、伏翼の目、及び膽は、術家で洞視の法に用ゐる。

天鼠屎（本經） 釋名 **鼠法**（本經） **石肝**（同上） **夜明砂**（日華） **黑砂星** 弘景曰く、方家では用ゐない。俗間でも識らない。李當之曰く、卽ち伏翼の屎だ。方言に天鼠と呼ぶものだ。

修治 時珍曰く、凡そこれを採取したならば、水で灰土、惡氣を淘り去り、細砂を取つて晒し乾して焙じて用ゐる。その砂は乃ち蚊蚋の眼である。

氣味 【辛し、寒にして毒なし】 之才曰く、白斂、白微を惡む。 主治 【顏面の癰腫で皮膚が（七）洗洗として時に痛むもの、腹中の血氣。寒熱積聚を破り、驚悸を除く】（本經）【顏面の黑皯を去る】（別錄）【灰に燒いて方寸匕を酒で服すれば死

胎を下す」（蘇恭）「炒つて服すれば瘰癧を治す」（日華）「馬撲損痛を治す。三箇を熱酒一升に投じ、その清を取つて服すれば立ろに止み、數服にして癒える」（蘇頌）記載は續傳信方にある。「擣き熬つて末にし、飯に拌ぜて三歳の小兒に與へて食はせれば無辜病を治するに甚だ效驗がある」（愼微）「瘧を治するに效がある」（宗奭）「目盲、障瞖を治し、目を明にし、瘧を除く」（時珍）

【發明】時珍曰く、夜明砂、及び蝙蝠はいづれも厥陰、肝經の血分の藥であつて、能く血を治し、積を消す。故にその治するところの目瞖、盲障、瘧、魃、疳、驚、淋、帶、瘰癧、癰腫はいづれも厥陰の病である。按ずるに、類説に『(八)定海の徐道亨は赤眼を患ひ、蟹を食つて遂に內障となつて五年の間苦んだが、ふと夢に、ある僧が藥水で洗つて羊肝丸といふを服ませてくれた。その處方を求めると、僧は「洗淨した夜明砂、當歸、蟬蛻、木賊を節を去り、各一兩を末にし、黑羊肝四兩を水で煮爛してその末を和し、梧子大の丸にして食後に熟水で五十丸を服するのだ」といつた。覺めてからその法の通りにして服すると、遂に視力が完全に回復した』とある。

(八)定海、五代ノ吳越ノ時、今ノ浙江省鎭海縣ノ地ニ望海縣ヲ置キ、宋ニ定海ト改ム。又明ノ時、今ノ舟山ニ定海衞ヲ置ク、卽チ今ノ浙江省會稽道ノ定海縣ナリ。

（九）扎ハ托ノ誤。

一〇 大觀ニ簡要濟衆ニ作ル。

【附方】 舊一、新十一。【內外障瞖】夜明砂末を豬肝中に（九）扎入して煮て食ひ、汁を飲むが有效だ。（直指方）【青盲で見えぬもの】夜明砂を糯米で黃に炒つて一兩、柏葉を炙つて一兩を末にし、牛膽汁で和して梧子大の丸にし、毎夜就寢時に竹葉湯で二十丸を服し、五更に米飲で二十丸を服す。瘥えれば止める。（聖惠）【小兒の雀目】夜明砂を炒つて研り、猪膽汁で和して綠豆大の丸にし、五丸づつを米飲で服す。ある方では、黃芩等分を加へて末にし、猪肝を米泔で煮て取つた汁で半錢を調へて服す。【五瘧の止まぬもの】（一〇）聖惠では、夜明砂末一錢づつを冷茶で服す。立ろに效がある。○又ある方では、瘧が不定時に發作し、久しく經過して瘥えぬには、蝙蝠糞五十粒、硃砂半兩、麝香一錢を末にし、糯米飯で小豆大の丸にし、發作前に十丸を白湯で服す。【產前の瘧疾】夜明砂末三錢を空心に溫酒で服す。（經驗祕方）【欬嗽の止まぬもの】蝙蝠を翅、足を去り、酒をつけて燒いて末にし、一錢を食後に白湯で服す。（壽域神方）【小兒の魃病】紅紗袋に夜明砂を盛つて佩びる。（直指方）【一切の疳毒】夜明砂五錢を瓦瓶中に入れ、精猪肉三兩を薄く切つてその瓶に入れ、水で煮熟し、先づその肉を病兒に與へて食はせ、その汁を飲ませて腹中の胎毒を取り下し、

次に生薑四兩を皮共に切つて炒り、黄連末一兩と共に糊で黍米大の丸にし、一日三回、米飲で服す。(全幼心鑑)【聤耳の汁の出るもの】夜明砂二錢、麝香一字を末にし、拭淨してから摻る。(聖惠)【潰腫の排膿】夜明砂一兩、桂半兩、乳香一分を末にし、乾砂糖半兩を入れて井水で調へて傅ける。(直指方)【腋下の胡臭】夜明砂末を豉汁で調へて用ゐる。【(二)風蚛牙痛】夜明砂を炒り、吳茱萸を湯に泡けて炒り、等分を末にし、蟾酥で和して麻子大の丸にし、綿で二丸を裹んで含み、涎を吐く。(普濟方)

(一)鸓鼠　纍(ルヰ)壘(ルヰ)の二種の發音がある。　(本經下品)

和名　からむささび
學名　Petaurista leucogenys, Temm.
科名　りす(栗鼠)科

校正

鸓鼠はもとは獸部に掲げられてあつたが、今此には爾雅、說文に據つて禽部に移し入れることにした。

釋名

鸓鼠(本經)　鼯鼠(爾雅)　耳鼠(山海經)　夷由(爾雅)　鷽(禽經)　飛生鳥(弘景)

時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『鸓は、飛走し、且つ哺乳する鳥である。故に文字は鳥に從ふ。又、飛生と名ける』とある。本經に鼠に從つて書い

(二)風蚛ハ齒蝕。

(一)木村(重)曰ク、他ニ Sciuropterus ナル屬アリ、ももんが(Pteromys)屬又アリ、共ニ鼯鼠(ウーシユ)又ハ耳鼠(ルーシユ)ト呼バル。

(二)山都ハ秦ノ縣名、北周ニ廢ス。故城ハ今ノ湖北省襄陽縣ノ西北ニ在リ。

(三)湖嶺トハ湖南・廣東、廣西地方ヲイフ。

(四)關西ハ水禽類鶡鷄ノ註ヲ見ヨ。

たのは形が似てゐるからである。この物は肉翅が尾に連り、飛んでも上に上れぬもので、ともすると礧り墜ちる。故にこれを鸓といふ。俗に癡なる物を呼んで鸓といふはこの意味から來たものだ。また螻蛄と同名の鼯鼠とも呼ぶ。

集解 別錄に曰く、鸓鼠は(二)山都の平谷に生ずる。

弘景曰く、この鼠は卽ち鼯鼠である。飛生鳥のことだ。形狀は蝙蝠のやうで、大いさは鴟、鳶ほどあり、毛は紫色で暗夜に行飛する。世間ではその皮毛を取つて産婦に持たせ、それで出産を容易にする。

〔鸓鼠——飛生〕

頌曰く、今は(三)湖、嶺の山中に多い。南方ではこれを多く妖怪視してゐる。

宗奭曰く、(四)關西の山中によくゐる。毛の極めて密なものだ。いづれも下に向つて飛ぶもので、遠くは飛べない。その地では捕獲して皮を取り、それで防寒用の帽子を作る。

時珍曰く、按ずるに、郭氏の爾雅註に『鼯鼠は、形狀は小さい狐ほどで、蝙蝠に似た肉翅と四足があり、翅、尾、項、脇の毛はみな紫赤色、背上は蒼艾色、腹下は黃色、喙、頷は雜白色だ。脚は短く、爪が長く、尾は長さ三尺ほどあり、飛ぶものだ。子には哺乳し、子はその母の後に隨ふ。聲は人の呼ぶ聲のやうだ。火烟を食ふ。高い處から下に飛ぶが、下から高くは飛び上がれない。性よく夜鳴く』とある。山海經に『耳鼠は、形狀は鼠のやうで、首は兎のやう、耳は麋のやうだ。その尾を以て飛ぶ。これを食へば眯せない。百毒を禦ぐ』とあるがこのものだ。その形狀は翅が四足、及び尾に聯つて蝠と同じである。故に『尾を以て飛ぶ』といつたのだ。嶺南に產するものは好く龍眼を食ふ。

氣味 【微溫にして毒あり】 主治 【墮胎。出產を容易にする】（本經）

發明 頌曰く、世間ではその皮毛を取り、臨產にこれを持たせれば分娩が容易になるとして產婦に與へるが、小品方では服藥に入れ、飛生一箇、槐子、故弩箭羽各十四箇を合せ擣いて梧子大の丸にし、酒で二丸を服すれば產し易しとしてある。

時珍曰く、鼺は能く飛ぶもので且つ出產する。故にその皮に寢、その爪を懷にす

（一）木村（重）曰ク、大蝙蝠（タアペンフー）ト稱セラル。寒號蟲ニ當ルヤハ疑ハシケレド、五靈脂（ツーリンシユ）ト稱セラルルハ蝙蝠類ノ糞ナリ。

（二）周ハ草部山草類升麻ノ註、魏ハ草部

ればいづれもよく分娩を催すといふ。それはその性が相感するのだ。濟生方の難産を治する金液丸には、その腹下の毛を丸にして服すとしてある。

（一）寒號蟲（宋開寶）

和名　しなおほかはほり？
學名　Pteropus sp.
科名　おほかはほり科

校正　蟲部より此に入る。

釋名　**鶡鴠**　**獨舂**　屎を**五靈脂**と名ける。時珍曰く、楊氏の丹鉛錄に、寒號蟲、即ち鶡鴠としてある。ここにはそれに從つた。鶡鴠は、詩には盍旦とし、禮には曷旦とし、說文には鳱鴠とし、廣志には侃旦とし、唐詩には渴旦としてあつて、いづれも意義に隨つて假借した名稱だ。揚雄の方言に『關より西ではこれを鶡鴠といひ、關より東ではこれを城旦といひ、また（二）周、魏、宋、楚ではこれを獨舂といふ』とあり、郭璞は『鶡鴠は倒懸ともいふ。

〔寒號蟲〕
——五靈脂——

陽草類紅藍花ノ註チ見ヨ。宋ハ草部山草類防風ノ註參照。楚ハ石部石炭ノ註チ見ヨ。

(三) 河東ハ草部山草類甘草ノ註チ見ヨ。

(四) 五臺ハ石部菩薩石ノ註チ見ヨ。

夜鳴いて早く朝になるを待つ鳥だ。夏期には毛が生え盛つてゐるが冬期には裸體となり、晝夜鳴叫するところから寒號といひ、鶡旦といつたのであつて、古代に城旦春といふ晝夜米を舂かせる刑があつたところから、また城旦、獨舂などいふ名稱を呼ばれたのだ』といつた。月令には『仲冬、鶡旦鳴かず』とある。蓋し冬至には陽が生じて漸く暖になるからだ。その屎を五靈脂と名けたのは、凝つた脂のやうな狀態で五行の靈氣を受けたものといふ意味だ。

集解　志曰く、五靈脂は北地に產する寒號蟲の糞である。

禹錫曰く、寒號蟲は四足にして肉翅がある。遠くは飛べないものだ。

頌曰く、今は(三)河東の州郡だけにゐる。五靈脂は鐵のやうに色の黑いものだ。採收に一定の時期はない。

時珍曰く、鶡旦は時刻を候ひ知る鳥であつて、(四)五臺の諸山に甚だ多い。その形狀は小さい鷄のやうで、四足に肉翅があり、夏期には毛に五色の彩があつて、その鳴聲は『鳳凰不如我』といふ。冬には毛が落ちて鳥の雛のやうになり、寒さを忍んで『得過且過』と鳴き叫ぶ。その屎は常に一處に集り、臭氣は甚だ臊惡で、粒の大

いさ豆ほどのものだ。糊のやうなものもあり、餹のやうな粘塊のものもある。世間ではやはり沙石を混入して賣つて居る。凡そ使用するには心が餹のやうになつてゐて潤澤なものを眞物とする。

肉 【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【食へば人體を補益する】(汪穎)

五靈脂 【修治】 頌曰く、この物は多く沙石が夾雜してあつて、非常に修治の六ヵ敷いものだ。凡そ用ゐるには、研つて細末にし、酒で飛過して沙石を去り、晒し乾して貯藏して用ゐる。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】人參を惡み、人を損ずる。【主治】【心腹冷氣、小兒の五疳。疫を辟け、腸風を治し、氣脈、婦人の血閉を通利する】(開寶)【傷冷(二)積を療ず】(蘇頌)【凡そ血崩の過多なるには、半炒半生にして酒で服す。能く血を行り、血を止め、血氣刺痛を治するに甚だ效がある】(震亨)【婦人の經水過多、赤帶の絕えぬもの、產前、產後の血氣諸痛、男、女一切の心腹、脇肋、少腹の諸痛、疝痛、血痢、腸風の腹痛、身體の血痺刺痛、肝瘧で寒熱を發するもの、反胃、消渴、及び痰涎に血を挾んで窠を成すもの、血の瞳子を貫くもの、血が凝つて齒痛するも

(二)大觀ニ積下ニ聚字アリ。

(六) 大觀ニ此二字行經穴ノ三字ニ作ル。

の、重舌、小兒の驚風、五癇、癲疾を止める、蟲を殺し、藥毒、及び蛇、蠍、蜈蚣傷を解す】(時珍)

【發明】 宗奭曰く、五靈脂は(六)引經には有功だが、血を生ずることは不能である。この物は肝に入ることの最も速なものだ。嘗てある者が目中瞖を病み、往來不定であつたが、これは血に病があつたので、肝に血を受ければ視力が明になる。目の病は血を治せねば合理的でない。そこで五靈脂の藥を用ゐると、それで癒えた。又、ある者は毒蛇の咬傷で良久して昏倒したが、一老僧が酒で藥二錢を調へて灌ぐと遂に甦つた。そこで滓を咬傷の患部に傅け、少頃してまた二錢を灌ぐとその苦痛が皆去つた。その方を尋ねて見ると、それは五靈脂一兩、雄黃半兩を共に末にするだけであつた。その後も蛇毒に中つたものに用ゐて悉く奏效した。

時珍曰く、五靈脂は足の厥陰、肝の經の藥であつて、氣、味俱に厚い。陰中の陰である。故に血分に入るのである。肝は血を主り、諸痛はみな木に屬し、諸蟲はみな風に生ずる。故にこの藥は能く血病を治し、血を散じ、血を和して諸痛を止め、驚癇を治し、瘧痢を除き、積を消し、痰を化し、疳を療じ、蟲を殺し、血痺、血眼

の諸症を治するのだ。いづれも肝經に屬する病である。失笑散は獨り婦人の心痛、血痛を治するのみではなく、凡そ男女、老幼、一切の心腹、脇肋、少腹痛、疝氣、幷に產前、產後の血氣で痛むもの、及び血崩、經溢であらゆる藥の效を擧げぬものにいづれも能く奏功する。屢、實驗上效果を收めた。眞に近世の神方である。又、按ずるに、李仲南は『五靈脂は崩中を治す。ただ血を治するだけの藥ではなく、風を去るの劑である。風は動くものだ。衝任の經が虛して風に傷められ、營血を襲はれると、ために崩中暴下となるのであつて、荊芥、防風の崩を治すると同じ意味である。この點でも古人の識見の深奧なることが肯かれる』といつた。これも一說であるが、しかし肝血の虛滯もやはり自ら風を生ずるといふ關係には想到してゐなかつたやうだ。

附方　舊六、新三十一。【失笑散】男女、老少の心痛、腹痛、少腹痛、小腸疝氣で諸藥の效を奏せぬものを治し、能く行り、能く止め、婦人妊娠の心痛、及び產後の心痛、小腹痛、血氣痛に就中妙である。五靈脂、蒲黃等分を研末し、先づ醋二盃で末を調へて熬つて膏にし、水一盞に入れて七分に煎じ、その藥の入つたまま熱服

する。なほ止まぬときは再服する。ある方では、醋の代りに酒を用ゐる。ある方では、醋糊で和して丸にし、童尿酒で服す（和劑局方）【紫金丸】産後の惡露がさつぱりせず、腰痛して小腹が刺すやうに覺え、時に寒熱を作し、頭痛し、食思なきを治し、又、久しく瘀血があり、月經不順にして黃瘦し、食思なきを治し、また心痛を療ず。功は失笑散と同じ。五靈脂を水で淘淨し、炒つて末にして一兩を好き米醋で調稀し、慢火で熬膏し、眞蒲黃末を入れて和して龍眼大の丸にし、一丸づつを、水と童尿と各半盞を七分に煎じたもので溫服し、少頃して再服する。惡露は直ちに下る。血塊、經閉には酒に磨つて服す。（楊氏産乳）【靈脂散】男子の脾積氣痛、婦人の血崩諸痛を治す。飛過した五靈脂を烟が盡きるまで炒つて研末し、一錢づつを溫酒で調へて服す。この藥は惡臭氣があつて服し憎いが、燒いて性を存すれば妙である。或は酒、水、童尿で煎じて服す。これは抽刀散と名け、産後の心腹、脇肋、腰胯痛を治し、能く惡血を散ずる。心煩し、口渴するには、炒つた蒲黃半減をを加へ、霹靂酒で服す。腸風下血には、烏梅、柏葉の煎湯で服す。中風麻痺痛には、草烏半錢を加へ、童尿、水、酒を共に煎じて服す。（永類鈐方）【産後の血運】産後の血運で

人事不省となるを治す。五靈脂二兩を半生半炒にして末にし、一錢づつを白水で調へて服す。口噤するときは押し開けて灌ぐ。喉に入れば癒える。(圖經)【產後の腹痛】五靈脂、香附、桃仁等分を研末し、醋糊で丸にして一百丸を服す。或は五靈脂末を神麴糊で丸にし、白朮陳皮湯で服す。(丹溪方)【兒枕で痛むもの】五靈脂を慢に炒つて研末し、二錢を酒で服す。(產寶)【血氣刺痛】五靈脂を生で研つて三錢を、酒一盞を煎沸して熱服する。(靈苑方)【卒かの暴しき心痛】五靈脂を炒つて一錢半、乾薑を炮いて三分を末にし、熱酒で服すれば立ちに癒える。(事林廣記)【心、脾の蟲痛】男女に拘らず、五靈脂、檳榔等分を末にし、石菖蒲を煎じた水で三錢を調へて餅にして服す。猪肉一二片。(海上仙方)【小兒の蚘痛】五靈脂末二錢、靈礬を火飛して半錢を用ゐ、一錢づつを水一盞で五分に煎じて溫服する。蟲を吐出して癒えるものだ。(閻孝忠集效方)【經血の止まぬもの】五靈脂を烟が盡きるまで炒つて研り、每服二錢、當歸二片、酒一盞を六分に煎じて熱服し、三五囘で效を取る。(經效方)【血崩の止まぬもの】頌曰く、五靈脂十兩を研末し、水五盞で三盞に煎じて滓を去り、澄淸して再び煎じて膏にし、神麴末二兩を入れて和して梧子大の丸にし、二十丸づつを空心に

溫酒で服すれば止む。極めて效がある。〇集要では、五靈脂を燒いて研り、鐵秤錘を紅く燒いて酒に淬し、その酒で調へて服す。效があるまでを度とする。【胞衣の下らぬもの】惡血が心に冲するには、五靈脂を半生半炒にして研末し、二錢づつを溫酒で服す。(產寶)【子腸脫出】五靈脂を烟に燒いて薰ずる。豫め鹽湯で洗淨する。(危氏)【吐血、嘔血】五靈脂一兩、盧會三錢を研末し、水を滴して芡子大の丸にし、二丸づつを漿水に溶化して服す。〇又、血が妄行して胃に入り、吐して止まぬを治するには、五靈脂一兩、黃芪半兩を末にし、新汲水で二錢を服す。【吐逆の止まぬもの】男女に拘らず、連日に亙つて粥も、(七)飲も、湯藥も咽を下らぬものに卽效がある。五靈脂を治淨して末にし、狗膽汁で和して芡子大の丸にし、一丸づつを生薑を煎じた酒に磨り溶かし、勢込んで一口に熱呑する。口を漱いではならぬ。急に溫粥少量を食つて壓する。(經驗)【食物を消化し、氣を消す】五靈脂一兩、木香半兩、巴豆四十箇を煨熟して油を去り、末にして糊で菉豆大の丸にし、五丸づつを白湯で服す。(普濟方)【久瘧の止まぬもの】或は一日に一回、二三回、或は二三日に一回發作するには、五靈脂、頭垢各一錢、古城石灰二錢を研末し、(八)飩で皂子大の丸にし、

(七)大觀ニ食ニ作ル。

(八)飩ハ餅ノ誤歟。

一丸づつを五更に無根水で服す。直ちに止む神效の方である。(海上)【消渇飲水】竹瀧散——五靈脂、黑豆を皮を去つて等分を末にし、三錢づつを冬瓜皮湯で服す。皮がなければ葉を用ゐてもよし。一日に二服する。更に熱藥を服してはならないが、八味丸から附子を去つて五味子を加へたものは宜し、少し渇するものは二三服で止める。(保命集)【中風癱緩】追魂散——五靈脂を研末し、水飛して上に浮く黑濁と下に沈む沙石とを去つて研末し、二錢づつを熱酒で調へて一日一回服し、小續命湯を少しづつ服す。(奇效方)【手足の冷痲】寇曰く、風冷で氣血閉し、手足身體が疼痛し、冷痲するには、五靈脂二兩、沒藥一兩、乳香半兩、川烏頭一兩半を炮いて皮を去り、末にして水を滴らして彈子大の丸にし、一丸づつを生薑を溫酒に磨つたもので服す。(本草衍義)【骨折腫痛】五靈脂、白及各一兩、乳香、沒藥各三錢を末にし、熱水と香油とで調へて患部に塗る。(乾坤祕韞)【損傷接骨】五靈脂一兩、茴香一錢を末にし、先づ乳香末を極痛處に傅けて小黃米粥をそれに塗り、それから右の二末をその粥上に摻つて帛で裹み、木牌子で夾んで縛る。三五日で效がある。(儒門事親)【五疳潮熱】肚脹し、髮焦げるには大黃、黃芩を用ゐてはならぬ。胃氣を損傷して別の病症を生ず

る恐がある。五靈脂を水飛して一兩、胡黄連五錢を末にし、雄猪膽汁で黍米大の丸にし、一二十丸づつを米飮で服す。(全幼心鑑)【欬嗽肺脹】皺肺丸――五靈脂二兩、胡桃仁八箇、柏子仁半兩を研り勻ぜ、水を滴し和して小豆大の丸にし、二十丸づつを甘草湯で服す。(普濟)【痰血凝結】紫芝丸――五靈脂を水飛し、半夏を湯に泡け、等分を末にし、薑汁に浸した蒸餅で梧子大の丸にし、飮で二十丸づつを服す。(百一方)【酒積黄腫】五靈脂末一兩に麝香少量を入れ、飯で小豆大の丸にし、一丸づつを米飮で服す。(普濟方)【目に浮瞖を生じたもの】五靈脂、海螵蛸各等分を細末にし、熟猪肝に蘸けて日毎に食ふ。(明目經驗方)【重舌脹痛】五靈脂一兩を淘淨して末にし、米醋で煎じて漱ぐ。(經驗良方)　【惡血齒痛】五靈脂末を米醋で煎じた汁を含み咽む。(直指方)　【血痣の潰血】一患者が、もとあつた一痣をたまたま抓破して一筋の出血が止まず、七日に及んで死せんとしたが、或人が五靈脂末を上に摻つてやると直ちに止んだ。(楊拱醫方選要)【血潰怪病】凡そ人の目中の白珠が黒く渾り、物は平常のやうに視え、毛髮が堅直して鐵條のやうになり、飮食は十分に攝れるが、物を言はず、醉へるが如き狀態のものを血潰と名ける。五靈脂を末にし、二錢を湯で服すれば癒える。

（夏子益奇疾方）【大風瘡癩】五靈脂末を油で調へて塗る。（摘玄方）【蟲、虺の螫蠚】凡そ蜈蚣、蛇、蠍、毒蟲の傷には、五靈脂末を塗れば立ろに癒える。（金匱鉤玄）【赤蛇の螫傷】上に同じ。

本草綱目禽部第四十八卷　終

本草綱目禽部

第四十九巻

本草綱目禽部目錄第四十九卷

禽の三　林禽類十七種

斑鳩 嘉祐　青鵻 拾遺 即ち黄褐侯。　鳲鳩 拾遺 即ち布穀。
桑鳸 食物 即ち蠟觜。　伯勞 嘉祐 鶪鳩を附す。　鸜鵒 唐本
百舌 拾遺　練鵲 嘉祐　鸎 食物　啄木鳥 嘉祐
慈烏 嘉祐　烏鴉 嘉祐　鵲 別錄　山鵲 食物
鶻嘲 嘉祐　杜鵑 拾遺　鸚䳇 食物 秦吉了、鳥鳳を附す。

右附方　舊五、新九。

禽の四　山禽類十一種　附一種

鳳凰 拾遺　孔雀 別錄　駝鳥 拾遺　鷹 別錄
鵰 綱目　鶚 綱目 即ち魚鷹。　鴟 別錄　鴟鵂 拾遺
鴞 拾遺　鴆 別錄　姑獲鳥 拾遺　治鳥 綱目 木客鳥、獨足

鬼車鳥 拾遺　　諸鳥有毒 拾遺

鳥か附す。

右附方　舊四、新九。

禽の三　林禽類十七種

(一)斑鳩（宋嘉祐）

和名　しらこばと、一名じゅずかけばと。
學名　Streptopelia decaocta (Frivalszky)
科名　はと科

〔釋名〕　**斑隹**　音は錐(スヰ)である。**錦鳩**(范汪方)　**鳺鳩**(左傳註)　**祝鳩**　時珍曰く、鳩といひ、鵓(ぼつ)といふはその聲である。斑といひ、錦といふはその色である。隹とは尾の短いものをいふ名である。古には、庖人は以て尸祝して尊俎(そんそ)に登す。これを祝鳩と謂ふとある。これはいづれも鳩の大にして斑あるものをいつたのだ。その小にして斑なきものをば隹といひ、鵻――音は葵(キ)――といひ、荊鳩といひ、楚鳩といふ。鳩の子をば鵓鳩(ぶきう)といひ、役鳩といひ、

〔斑　鳩〕

(一)木村(重)曰ク、背面灰褐色、下面ハ灰白色ニ微紅アリ、頭ニ黒色ノ輪アリ、念珠掛ノ名ココニ因ス。印度、支那、朝鮮ニ多シ、斑鳩(バンキウ)ト稱ス、いかるナラズ。桑鳲參照。

糠鳩といひ、郎臯といひ、辟臯といふ。揚雄の方言に諸種の鳩を混列してあるが、據るに足らない。

【集解】禹錫曰く、斑鳩は處處地にゐる。春分には化して黃褐侯となり、秋分には化して斑鷦となる。黃褐侯とは靑鷦のことだ。

宗奭曰く、斑鳩には、斑あるものと、斑なきものと、灰色のものと、大なるものと、小なるものと、かく數色あるが、その用途は一である。嘗て數年間飼養して見たが、一向に春秋分に變化したものはなかつた。

時珍曰く、鳲鳩は能く鷹に化し、斑鳩は黃褐侯に化すといふ說はその出處が判らない。現に鳩は、小さくして灰色のものと大きくして梨花點のやうな斑あるものとあるが、いづれも善く鳴かない。ただ項下に眞珠のやうな斑のあるものが大きい聲で能く鳴く。それを媒として鳩を誘ひ寄せ得るものだ。これだけが藥に入れて就中良い。鳩はその性嚴格で孝行なものだが、巢を作ることが拙だ。纔に數本の枝を掛け渡しただけなので、往往にして卵が墮ちる。天候が雨になりさうなときは雌を追ひ、霽れると反對に呼びかける。故に『鵻は巧にして危く、鳩は拙にして安し』といひ、

(二)本草逢原ニ鴿ヲ鳩ニ作ル。

或は『雄は晴に呼び、雌は雨に呼ぶ』といふ。

鳩肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【目を明にし、多食すれば氣を益し、陰陽を助ける】(嘉祐)【久病虚損の人はこれを食へば氣を補す】(宗奭)【これを食へば人をして噎(いつ)せざらしめる】(時珍)

〔發明〕 時珍曰く、范汪の方に、目を治するものに斑(二)鴿丸といふがあり、總錄に、目を治するものに錦鳩丸といふがある。倪惟賢氏は、斑鳩は腎を補する。故に能く目を明にするのだといつたが、竊(ひそ)かに謂(おも)ふに、鳩は能く氣を益するものだから能く目を明にするのだ。獨り腎を補するだけではない。古には、仲春に羅氏が鳩を獻じて以て國老を養ひ、仲秋に年老の者に授くるに鳩杖を以てした。それは鳩の性は噎せずして物を食ひ、且つまた氣を助けるからだといふ。

血 〔主治〕【熱飲すれば蠱毒(こどく)を解するに良し】(時珍)

屎 〔主治〕【聤耳の膿が出て疼痛するもの、及び耳中に耵聹(ちやうれい)を生じたものを治す。夜明砂末と共に等分を吹く】(時珍)

(一)青鵻 音は隹（スヰ）である。（拾遺）

和名 あをばと
學名 Sphenurus Sieboldii, Temm
科名 はと科

釋名 黄褐侯（拾遺）

集解 藏器曰く、黄褐侯の形狀は鳩のやうで綠褐色だ。聲は小兒が竿を吹くやうである。

時珍曰く、鳩には白鳩と綠鳩とあるが、現に夏期に出る一種の糠鳩に、微し紅色を帶び、小さくして羣をなすものがある。掌禹錫の所謂、黄褐侯は秋に斑隹に變化するとは、恐らくこれをいつたのだらう。好んで桑椹、及び半夏の苗を食ふ。昔、ある人がこれを過多に食つて喉痺を患ひ、醫師が生姜で解して癒えたことがある。

肉 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【蟻瘻、惡瘡には五味で淹けて炙いて食ふ。極めて美味だ】（藏器） 【五臟を安じ、氣を助け、虛損を補し、膿を排し、血を活す。幷に一切の瘡癤、癰瘻】（嘉祐）

(一)木村(重)曰ク、頭以下背面ハ濃綠色、頭ト胸ハ赤シ、きんばと(Chalcophaps indica sp.)モコレニ類ス。

鳲鳩(一)（拾遺）

和名　くわくこう
學名　Cuculus canorus telephonus, Heine.
科名　とけん（杜鵑）科

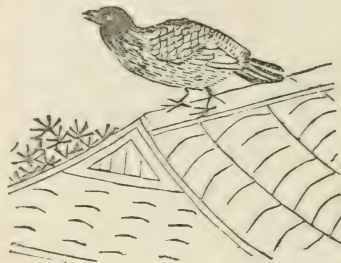
釋名　**布穀**（列子）　**鴶鵴**　音は戛匊（クワツキク）である。　**穫穀**（爾雅註）　**郭公**

藏器曰く、布穀とは鳲鳩のことだ。江東では獲穀と呼び、また郭公といふ。北方の地では撥穀と呼ぶ。

時珍曰く、布穀には多くの名があるが、みなそれぞれ鳴聲の似たところに因つて呼んだもので、俗に『阿公阿婆』とか、『割麥插禾』とか、『脫却破袴』とかいふ類は、いづれもその鳴く時期が農耕の時期に當るから呼んだものだ。或は、鳴鳩、即ち月令の鳲鳩であつて、鳴の字は鳲の字の訛だともいふが、それでも通じる。禽經、及び方言には、いづれも鳴鳩、即ち戴勝といひ、郭璞はそれを非なりとしてあ

〔鳲鳩〕——布穀——

（一）木村（重）曰ク、北滿地方ニ棲息シ、冬期ニ南支ニ至ル。日本ニ普通ニ見フルほととぎす、つつどり等モ亦棲ム。郭公（コウクン）最モ知ラレ、布穀（プークー）鳲鳩（ミーチウ）喀咕（コーク）等ト呼バル。杜鵑ノ項參照。

る。

［集解］ 藏器曰く、布穀は鷂に似て尾が長く、牝牡飛び鳴いて翼を以て相い拂ひ撃つ。

時珍曰く、按ずるに、毛詩疏義に『鳲鳩は大いさ鳩ほどで黄色を帶び、啼鳴して相呼ぶが相集らぬ。巣をば作れぬもので、多くは樹穴、及び鵲の空巣に栖んで子を哺し、朝には上から下り、暮には下から上る。二月、穀雨の後に始めて鳴き、夏至後に止む』とあり、張華の禽經註には『仲春に鷹が化して鳩となり、仲秋に鳩がまた化して鷹となる。故に鳩の目はやはり鷹の目のやうなのだ。列子に「鷂が鸇となり、鸇が布穀となり、布穀が久して復た鷂となる」といふはそのことだ』とあり、禽經には、又『鳩は三子を生じ、一は鶚となる』とある。

肉 ［氣味］ 【甘し、溫にして毒なし】 ［主治］ 【神を安じ、志を定め、人をして睡を少からしめる】(汪穎)

脚脛骨 ［主治］ 【人をして夫妻相愛せしめる。五月五日に取收め、各一本づつ男は左、女は右を帶びる。それを水中に置けば自ら能く寄り添ふものだといふ】(藏器)

（一）桑鳸（食物）

和名　しないかる、一名はしぶといかる
學名　Eophona personata magnirostris, Hartert.
科名　すずめ（雀）科

【釋名】　竊脂（爾雅）　青雀（郭璞）　蠟嘴雀　時珍曰く、鳸の意味は扈と同じ、止である。左傳に、少皞氏は鳥を以て官に名け、九扈を九農正となすとあつて、それは民を止めて淫するなからしめる職務であつた。桑鳸とは桑の間にゐる鳸の意味である。その觜が或は淡白にして脂の如く、或は凝黄にして蠟の如くだから、古代に竊脂と名け、俗に蠟觜と名けたのであつて、淺色を竊といふ。陸機が、この鳥は好んで脂肉を盜んで食ふからだといつたのは當てにならぬ。

〔桑　鳸〕
——蠟　嘴——

（一）木村（重）曰ク、東部西比利亞ヨリ支那ノ大陸ニ分布ス。蠟嘴（ラーツエ）ノ名ガ普通ニシテ愛玩用ニ飼育サル。斑鳩ノ項參照。日本ノいかるヨリ嘴强大ナリ。

集解　時珍曰く、鳸鳥は處處の山林にゐる。大いさは鴝鵒ほど、蒼褐色で黃色の斑點があり、好んで粟、稻を食ふ。詩に『交交桑鳸、有鶯其羽』とあるはこの鳥だ。その觜喙は微し曲つて厚く、頑丈で光瑩なものだ。或は淺黃、淺白、或は淺靑、淺黑、或は淺玄、淺丹色のものがある。鳸の類に九種あるが、いづれも喙の色と聲音で別けたものだ。故に毛の色をいふのではない。爾雅に『春鳸は鳻鶞、夏鳸は竊玄、秋鳸は竊藍、冬鳸は竊黃、桑鳸は竊脂、棘鳸は竊丹、行鳸は唶唶、宵鳸は嘖嘖、老鳸は鷃鷃』とあるがそれである。現に俗間には多くこの鳥の雛を飼つて戲舞を仕込むものがある。

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【肌肉の虛羸に皮膚を益す】（汪頴）

伯勞[一]（宋嘉祐）

和名　おほからもず
學名　Lanius sphenocercus, Cabanis.
科名　もず(鵙)科

釋名　伯鷯（夏小正註）　博勞（詩疏）　伯趙（左傳）　鵙（豳詩）　音は狊（ゲキ）で

（一）木村(重)曰ク、大型ノもずニシテ支那大陸ニ分布ス。もず、ちごもず、かあもず、しまもず、おほもず、共ニ産スル

モ、代表的ノモノヲ掲グ。伯勞（ボーロー）鵙（ケウ）雲南青（ユンナンチン）等ノ名稱アリ。

ある。鴂（孟子）音は決（ケツ）である。時珍曰く、按ずるに、曹植の惡鳥論に『鵙（げき）は鳴聲が嗅嗅（げきげき）といふ。それで名としたのだ。陰氣に感じて動く殘害の鳥だといふは、その聲を惡むためにいつたことで、愚人は信ずるが通士は問題にしない』とある。世俗に、尹吉甫は後妻の讒（ざん）を信じてその子伯奇を殺した。それが後に化してこの鳥となつたので、この鳥の鳴く家には凶事があるといひ傳へてゐるが、それは好事家の牽強傅會（けんきやうふくわい）の説である。伯勞とはその聲に象（かたど）つたもの、伯趙とはその色をいつたもので、趙とは皂（さう）の音の訛である。

〔伯　勞〕
——鵙——

【集解】時珍曰く、伯勞、即ち鵙（げき）である。夏鳴いて冬止む。それで月令に候時の鳥としたのである。本草にはその形狀の説明がなく、後世一般にはこの鳥に關す

る知識がないが、郭璞の爾雅註に『鵙は鶷鶡に似て大きい』といひ、服虔は『鶷鶡は轄軋（クワツアツ）と發音する。項の白い鴉だ』といひ、張華の禽經註には『伯勞は形は鴝鵒に似てゐるが、鴝鵒は喙が黃で伯勞は喙が黑い』といひ、許愼の說文には『鴝鵒は鵙に似て幘がある』といひ、顏師古の漢書註には、鴂を子規とし、王逸の楚詞註には、鴂を巧婦とし、揚雄の方言には、鵙を鶡鴠とし、陳正敏の遯齋閑覽には、鵙を梟とし、李肇の國史補には、鴂を布穀とし、楊愼の丹鉛錄には鵙を駕犁としてあつて各〻異つてゐる。しかし竊に謂ふに、鵙は旣にその鳥で季節を候ひ知るといふ以上、必ず見ることの稀なものではないに相違ない。ここにこれ等の諸說を通じてその得失を考へるに、王氏の說は全然謬であつて議論の餘地がない。郭氏の說に據ると今の苦鳥をいふらしい。張、許二氏の說に據ると今の百舌をいふらしく、鴝鵒に似て幘があるといふが、しかし鵙は單獨に棲むことを好み、鳴けば蛇が結するものだが、百舌には蛇を制する能力はないのだからその點が同じくない。顏氏の說に據ると、子規を鶗鴂——音は弟桂（タイケイ）——と名け、伯勞を鴂——音は決（ケツ）と名けるといふのであるが、月令には北方に起るとしてある。子規は北方の鳥

でない。楊氏の說に據ると鶡鴠だといふが、鶡鴠とは寒號蟲のことで、ただ㈡晉地方にだけゐるものだ。陳（正敏）氏の說に據ると、目擊したといひ、斷然これを梟なりとしただけで、その形態に就ては何もいつてないが、陳藏器の『鴞、卽ち梟なり』といふ說とは合致せぬやうに思はれるし、爾雅に『鴟鴞、一名鸋鴂』とあるから、これとは同物でない。李氏の說に據ると、布穀、一名鴶鵴といひ、字の發音は相近いが、また月令の鳲鳩その羽を拂ふとあると矛盾する。楊氏の說に據ると鴽犁だといふが、鴽犁とは鵖鳩のことで、鴝鵒ほどの小さいもので三月に鳴くものだ。禮記に、五月鵙始めて鳴くとあり、豳風に、七月鳴鵙とある文の內容と合致しない。以上八氏の說はかくその一致點を缺いてゐるが、要するに郭氏の說が正しい準據となるやうに思はれる。按ずるに、爾雅に『鵲、鵙の醜はその飛ぶや㈢翪す』といつてある。翪とは足を斂めて翅を竦てることだ。旣にかやうに鵲、鵙と竝稱してあり、今の苦鳥は鳩ほどの大いさで色黑く、四月に鳴き、その鳴聲は苦苦といひ、また姑惡とも名け、一般に多くこれを惡み、俗に嫁が姑に苦められて死んだのが化したものだといひ、尹吉甫が伯奇を殺したといふ說と頗る相近いのであるが、ただその苦鳥が能

㈡晉地トハ今ノ山西省地方ヲイフ。水部井泉水晉ノ註參照。

㈢本書ニハ翪ヲ猣ニ作ル。

く蛇を制するや否やが判らないのである。淮南子には『伯勞の血を金に塗つて置けば人が敢て取らない』とある。

附録

(四)鵙鳩　時珍曰く、鵙鳩は、爾雅に鵯鶋――音は批及(ヒキウ)――と名け、又、『(五)鵖鴔――音は匹汲(ヒツキフ)――は戴勝なり』ともある。一に鵯鴔といふを訛つて批鵊鳥ともいふ。羅願は『卽ち祝鳩である。江東ではこれを烏臼――音は鵴(キク)――といひ、また鴉鵲といふ。烏より小さくして能く烏を逐ふ。三月に鳴く』といつてある。今俗にこれを駕犂といひ、農家ではこれで季節を候ふ。五更に『架架格格』と曉方まで鳴き續けて止む。それで(六)滇地方では榨油郎と呼び、また鐵鸚鴞ともいふ。能く鷹、鶻、烏、鵲を啄むもので、隼の屬である。南方では鳳凰皂隷と呼び、汴地方では夏鷄と呼ぶ。古代に夜明けを催す鳥に喚起と名けるものがあつたといふが、蓋しこの鳥であらう。この鳥は大いさ燕ほどで色黑く、尾は長くして岐があり、頭上に(七)勝を戴くもので、巢を作つてある場所にはその類の鳥に再び巢を作らせない。作れば必ず徹底的に鬪ふものだ。楊氏はこれを指して伯勞とし、批頰をば鵖鴔としたが、倶に誤だ。月令には『三月戴勝桑に降る』とある。

(四) 木村(重)曰ク、鵙鳩後攷ヲ要ス。戴勝ナレバやつがしらナリ、鵃鵰ノ項參照。

(五) 本書ニハ『鵖鴔戴鵀』トアリ、郭註ニ『今亦呼爲戴勝』トアリ。

(六) 滇ハ今ノ雲南省ノ地ナリ。

(七) 勝ハ首飾ナリ。

（六）丁奚疳病ハ、小兒ノ腹ノ大キクナル疳病。

毛　氣味【平にして毒あり】　主治【小兒の繼病には、毛を取つて帶びる。】繼病とは母が妊娠してなほその兒に乳を飲ませ、その兒が瘧痢のやうな病になり、他日相繼いで腹大となり、瘥えたり發つたりするもので、他の妊婦がそれに近づいてもやはり能くそれに繼いでその病を發するものだ。北方の地ではまだこの病を識らない】（嘉祐）

發明　時珍曰く、按ずるに、淮南子に『男子が蘭を種ゑると美く育つが芳しくない。繼の子は物を食つても肥るが澤がない。それは情が往來せぬからだ』とある。蓋し母親の情がその腹の子の方に在るからだ。繼病は鬾病とも書く、鬾とは小鬼の名であつて、その病兒が鬾鬼のやうに羸瘦するといふ意味だ。大抵これも（六）丁奚疳病である。

踏枝　主治【小兒の發語の遲きには、これで鞭てば速に物言ふやうになる】（嘉祐）

發明　時珍曰く、按ずるに、羅氏の爾雅翼に『本草に、伯勞の踏んだ樹の枝で小兒を鞭てば速に物言ふやうになるといふは、萬物の鳴けない時に獨りこの鳥だ

けよく鳴くものだから、その類にあやかるのだ』とある

(一)鸜鵒 音は劬欲（クヨク）である。（唐本草）

和名　きうくわんてう
學名　Eulabes intermedia, (A. Hay.)
科名　むくどり(椋鳥)科

【釋名】　鴝鵒（周禮）　哵哵鳥（廣韻）　八哥（俗名）　寒皐（萬畢術）　時珍曰く、この鳥は好んで水に浴し、その睛が(二)瞿瞿然たるものだからかく名けたのだ。王氏の字說には、行欲の意味で、尾があつて足が勾つてゐるから鴝鵒といふ。勾に從ひ欲に從ふ省文の文字だといつてあるが、やはりそれでも通じる。哵哵といふはその聲だ。天候が寒くなつて雪が降りさうなとき羣飛する。それが雪を豫告するやうだから寒皐といつたので、皐は告の意味である。

【集解】　恭曰く、鸜鵒とは鵙に似て幘のあるもののことだ。

藏器曰く、五月五日に雛を取り、舌端を剪り去ると能く人間の言葉を眞似するものだ。又、火を取らせることの出來るものだ。

時珍曰く、鸜鵒は鵲の巢、樹の穴、及び人家の屋脊中に巢を作るもので、身も首

(一)木村(重)曰ク、俗名八哥(パアコウ)ナレバ九官鳥ナリ。舌ニ硬キ莢アリ、脫スレバ人語ヲ眞似スト云フ。南支那ニ見ル。愛玩用トス。和書くろつぐみニ作ル。

(二)瞿瞿然ハ無守ノ貌、驚遽不審ノ貌。

（三）濟ハ水名、亦タ沇水ト稱ス。河南省濟源縣ノ西、王屋山ニ源ヲ發シ、東南流シテ豬龍河トナリ黄河ニ入ル。又、山東省鄆城縣ノ沮河モ濟ト稱ス。

も倶に黒く、兩翼の下に各〻白點があり、その舌は人の舌のやうなもので、剪りつめてやると能く人間のやうに物を言ふ。嫩いうちは口が黄だが、老いると口が白くなり、頭上には幘のあるものも無いものもある。周禮に『鴝鵒は（三）濟を踰えず』とあるが、それは地氣の關係があるからだ。

〔鴝鵒〕
──八哥──

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】詵曰く、寒なり。主治　【五痔に血を止める。炙いて食ひ、或は散にして飲服する】（唐本）【一羽を炙いて食へば吃噫を治し、氣を下し、靈に通ずる】（日華）【老嗽を治す。十二月末日に取つて五味で醃け、炙いて食ひ、或は羹にして食ひ、或は散に搗いて蜜で丸にして服す。十二月末日に得たものでなければ用ゐてはならぬ】（孟詵）

附方　（原文缺）

目睛　主治　【乳汁に和して研り、日中に滴す。人をして目明にしてよく霄外

の物を見せしめる』(藏器)

(一)百　舌（拾　遺）

和名　つぐみ?
學名　Merula eunomus (Temm.)
科名　つぐみ(鶇)科

【釋名】反舌　鶷鶡　音は轄軋(クワツアツ)である。時珍曰く、按ずるに、易通に『能く反復して百鳥の音のやうだ。故に鶷鳥と名ける』とある。やはり聲に象(かたど)つたものだ。今俗間では牛屎(ぎうし)哵哥(べつか)と呼ぶ。それは形が鴝鵒(くよく)に似て氣が臭いからだ。梵書には舍羅と名けてある。

〔百舌〕

【集解】藏器曰く、百舌とは今の鶯のことだ。時珍曰く、百舌は處處にゐる。樹孔や窟穴中に棲み、形狀は鴝鵒のやうで小さいが身がやや長く、灰黑色で微(かすか)に斑點があり、喙も尖つて黑く、行くには頭を俛せ、好んで蚯蚓を食ふものだ。春以後に絶えず鳴き囀り、夏至後には聲

(一)木村(重)曰ク、分布廣ク、春秋ノ渡リノ時ハ大群ヲナシテ支那大陸ヲ去來ス。滿洲ニテハ畫眉(ファメイ)ト稱ス。今百舌ノ語ナシ、假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。つぐみ他ニ數種ヲ分布ス。

を出さなくなり、十月以後には蟄に入る。世間でこれを飼ふものもあるが、冬期には死んで了ふ。月令に『仲夏、反舌に聲なし』とあるがこの鳥だ。蔡邕がこれを蝦蟇としたのは誤だ。陳氏は鶯だといひ、服虔の通俗文に、鸜鵒を白脰鳥としたのも誤だ。音は似てゐるが毛の色が異ふ。

肉 【氣味】缺 【主治】【炙いて食へば小兒の久しく物を言はぬを治し、また蟲を殺す】(藏器)

窠及び糞 【主治】【諸蟲咬に研末して塗る】(藏器)

(一)練鵲（宋嘉祐）

和名 かはりさんくわうてう
學名 Terpsiphone incei, (Gould).
科名 さんくわうてう(三光鳥)科

【集解】禹錫曰く、練鵲は鴝鵒に似て小さく、黑褐色である。槐子を食物としたものが佳し。冬、春期間に採る。

時珍曰く、その尾は鵲のやうで長く、練帶のやうな白毛のあるものがこの鳥である。禽經に『冠鳥は性勇である。纓鳥は性樂である。帶鳥は性仁である』とあつて、

(一)木村(重)曰ク、尾長ク美ナルタメ愛玩用トシテ飼養ス。朝鮮、支那、滿洲ニ棲ミ、冬ハ馬來半島ニ越ス。練鵲(リエンシュー)帶鳥(タイニヤオ)白練(パイリエン)ト稱サル。

張華は「帶鳥とは練鵲の類をいふのだ」といつてある。今は俗に拖白練と呼ぶ。

〔練　鵲〕

氣味　［甘し、溫、平にして毒なし］

主治　［氣を益し、風疾を治す。細剉して香しく炒り、袋に盛つて酒中に浸し、毎日その酒を取つて溫めて飲服する］（嘉祐）

（一）鸎（食物）

和名　かうらいうぐひす
學名　Oriolus chinensis indicus, Jerdon.
科名　黃鳥科

釋名　**黃鳥**（詩經）　**黃鸝**（說文）　**鵹黃**（爾雅）　**倉庚**（月令）　爾雅には商庚としてある。**靑鳥**（左傳）　**黃伯勞**　時珍曰く、禽經に『鸎は嚶嚶と鳴くからかく名けたのだ』とある。或は鸎は項に文があるから、その文字は賏に從ふので、賏とは項の飾のことだといふ。或は鶯鳥とも書く、それは羽に文があるからで、詩に『有鶯

（一）木村（重）曰ク、もず大ノ黃鳥ニテ、日本ノ鶯ノ如ク美聲ヲ張ラズ、滿洲ヨリ支那本土ニ分布ス。南方支那ニ於テハHorornis屬ノきばらうぐひす、たいわんうぐひす等ヲ產ス。黃鳥（ホアンニヤチ）靑鳥（チンニヤチ）黃鸝（ホアンリー）黃伯

勢（ホアンポウラオ）ノ名アリ。
（二）齊ハ水部阿井泉ノ註、周ハ草部山草類升麻ノ註、幽州ハ同ク人參ノ註、秦、淮ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。

其羽』とあるがそれだ。その色が黄にして黧を帯びてゐるから黄鸝などの諸名があるのだ。陸機は『(二)齊地方ではこれを博黍といひ、周地方ではこれを楚雀といひ、幽州ではこれを黄鸎といひ、秦地方ではこれを黄鸝鶹といひ、淮地方ではこれを黄伯勞といふ』といつてある。唐の玄宗はこれを金衣公子と呼んだ。或は黄袍ともいふ。

集解　時珍曰く、鸎は處處にゐる。鸜鵒よりも大きく、雌雄雙び飛び、身體の毛は黄色で、羽、及び尾には黒色が雜り、眉黒く、觜尖り、脚青く、立春後に鳴き、麥が黄ばみ、椹の熟する時期に尤も甚しく鳴く。その音は圓滑にして機を織る音のやうに聞える。これは節に應じ時に趨く鳥であつて、月令に『仲春、倉庚鳴く』とあり、說文に「倉庚が鳴けば蠶が生れる』とある。冬期には蟄に藏

［鸎］

れて田塘中に入り、泥で自らを卵のやうに裹み、春になると出る。

肉【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【氣味】【陽氣を補益し、脾を助ける】(汪穎)【これを食へば妬まなくなる】(時珍)

【發明】穎曰く、この鳥は春の陽に感じて先づ鳴くものだ。人體を補するはそれがためである。

時珍曰く、按ずるに、山海經に『黃鳥、これを食へば妬せず』とあり、楊夔の止妬論に『梁の武帝の郗后は嫉妬深い性質だつたが、ある者が、倉庚の料理が妬を療ずるものだといふことを聞き、それを食はせると果して半ば減じた』とある。

(一)啄木鳥(宋嘉祐)

和名　たいわんこげら
學名　Yungipicus pygmaeus Kaleensis (Swinhoe)
科名

【釋名】斲木(爾雅)　鴷　時珍曰く、この鳥は樹木を斲裂して蠹を取つて食ふものだからかく名けたのだ。禽經に『鴷の志は木にあり、鵜の志は水にあり』とある。

(一)木村(重)曰ク、南方支那、臺灣等ニ産ス。コレニ類シテ頭部ニ紅色ナキたいわんやまげら(Picus屬)モ産ス。北支那ニテハまんしうくまげら(Dryocopu屬)ヲ産ス。共ニ啄木鳥(チヨームーニヤチ)ト

呼バル。山啄木(サンチヨーム)ハたいわんこげらナリ。

【集解】禹錫曰く、異物志に『啄木には大あり、小あり、褐あり、斑あり、褐なるは雌であつて、斑あるは雄である。木を穿つて蠹を食ふので、俗に、雷公といふ採薬吏が化けたのだといふ。山中にゐる一種に、大いさ鵲ほどにして青黒色の、頭上に紅毛のあるものを、土人は山啄木と呼ぶ』とある。

〔啄木鳥〕

時珍曰く、啄木は、小なるは雀ほど、大なるは鴉ほどあり、面は桃花のやうで喙と足の色はみな青く、爪が剛く、觜が利く、觜は錐のやう、長さ數寸あつて舌は味よりも長く、その端に針刺があつて、蠹を啄み鉤り出して食ふ。博物志に『この鳥は能く觜で字を畫いて蟲を自ら外に出させる』とあり、魯至剛は『現に閩、廣、蜀地方では、巫家がその符字を收めて驚を收め、瘡毒を治療する』といつてある。山啄木なるものは頭上に赤毛があるので、野人は火老鴉と

呼ぶ。よく火炭を食ふものだ。王元之の詩に『淮南の啄木は大いさ鴉の如く、頂は仙鶴に似て丹砂を堆くす』とあるがその鳥だ。やはり藥用に入れるが、その功果は同じものだ。

肉　氣味【甘く酸し、平にして毒なし】主治【痔瘻、及び牙齒の疳䘌、蟲牙には、燒いて性を存して研末し、孔子中に入れる。三回以上は用ゐない】(嘉祐)【勞蟲を追ひ、風癇を治す】(時珍)

發明　禹錫曰く、淮南子に『啄木は齲を癒す』とあるは、類するところを以てその效果を收めるのだ。荊楚歲時記には『野人は五月五日に啄木を取つて齒痛を治す』とある。

時珍曰く、勞を追ひ、癇を治し、瘻を治すといふは、いづれも蟲を制する意味を取つたのだ。

附方　舊一、新二。【瘻瘡膿水】止まずして瘻口の合はぬには、啄木一羽——或は火老鴉もよし——を鹽泥で固濟して煆いて性を存して研末し、二錢匕を酒で服す。(姚大夫方)【勞を追ひ、蟲を取る】啄木禽一羽、硃砂四兩、精猪肉四兩を用ゐ、啄

木を一晝夜餌を與へずに置いて、砂と肉との二味を食はせ、全部食ひ盡したとき鹽泥で固濟して一夜煆き、五更に取出して打破らずに泥のまま土中三尺深さに埋め、次の日取り出して破開し、銀、石器に入れて研末し、無灰酒に麝香少量を入れたもので一服し、十分手配をして蟲の出るを監視し、速かに鉗み出して油鍋に入れて煎じ、後に局方の嘉禾散一劑を服す。（胡雲翺經驗方）【多年の癎病】臘月に啄木鳥一羽を取り、先づ瓦礶に荊芥穗を一寸厚さに鋪いてその上に鳥を置き、再び一寸厚さに穗で蓋ひ、無灰酒三升をそれに傾け入れ、鹽泥で固濟して炭火で煆き、酒が乾くを度としてそのまま置いて冷まし、取出して末にし、石膏二兩、鐵粉一兩、炮いた附子一兩、硃砂、麝香各一分、龍腦一錢を入れて共に研り勻ぜ。先づ溫水を二口三口飮んでから、一錢づつを溫酒一盞で調へて服して直ちに臥す。發作するとまた一服し、一日隔てて再服する。十服に過ぎずして癒える。（保幼大全）

舌　主治　【齲齒の痛むには、綿で尖を裹んで咬む】（梅師）

附方　新一。　【啄木散】蟲牙を治す。啄木舌一枚、巴豆一箇を研勻し、猪騣一莖を用ゐて少量づつを牙根に點ける。立ろに癒える。（聖惠）

血　［主治］　【庚の日に西に向つて熱飲すれば、人の顏色を朱の如くにして光彩人を射せしめる】（時珍）記載は岣嶁神書にある。

腦　［主治］　魯至剛の俊靈機要に『三月三日に啄木を取り、丹砂、大青を肉に拌ぜて餌とすること一年にして腦を取り、雄黄半錢を和して十丸にし、毎日東に向つて水で一丸づつを服す。久しくして能く形を變じ、怒るときは神鬼の如くなり、喜ぶときは常人そのままだ』とある。

慈烏（宋嘉祐）（一）

和名　みやまからす
學名　Trypanocorax frugilegus pastinator Gould.
科名　からす科

［釋名］　**慈鴉**（嘉祐）　**孝烏**（說文）　**寒鴉**　時珍曰く、烏の字の篆文はその形を象したものだ。鴉の字は鵶とも書く。禽經には、鵶は啞啞と鳴くから鵶といふとある。この鳥は初生から六十日間母に餌を哺せられ、成長すると反つてその母に六十日間哺する。慈孝なりと謂ふべきだ。北方の地ではこれを寒鴉といふ。冬期に尤も甚しくゐるものだ。

（一）木村（重）曰ク、全身深黑色ニシテ紫色光澤ヲ帶ブ、東部西比利亞ヨリ支那ニ分布ス。老公（ラオコン）ト稱サル、支那南部ニテハおうちう（秋烏科Buchanga屬）及ビかはがらす（河烏科 Cinclus屬）モ共ニ慈烏ト稱スルコトアリ。みやまからすハ四川省彭縣城ニテ文字通リニ空闊キ程何萬羽トナク群集ス。

（二）玄ハ袁ノ誤。（三）蜀徼トハ今ノ四川省ノ國境地方ヲイフ。

〔慈　烏〕

集解　禹錫曰く、慈烏は北方の土地に極めて多い。烏鴉に似て小さく、多く羣飛して鴉鴉といふ鳴聲を出す。羶臭でなく、食へるものだ。

時珍曰く、烏には四種あつて、小さくして純黒な、嘴小さく、反哺するものは慈烏である。慈烏に似て嘴大きく、腹下が白く、反哺せぬものは鴉烏である。鴉烏に似て大きく、項の白いものは燕烏である。鴉烏に似て小さく、嘴赤く、穴居するものは山烏である。山烏は一名鶪といひ、西方に産する。燕烏は一名白脰、一名鬼雀、一名鶡鸛——音は轄軋（クワツアツ）——といふ。禽經には『慈烏は反哺す。白脰は不祥なり。大嘴は善く警す。（二）玄鳥は夜に吟ず』とあり、又『烏鳥は背いて飛び、向つて啼く』とある。又、（三）蜀徼には火鴉と呼ぶ火を啣むものがゐる。

肉　【氣味】【酸く鹹し、平にして毒なし】【主治】【勞を補し、瘦を治し、氣を助け、咳嗽を止める。骨蒸羸弱(るゐじやく)のものには、五味を和して淹け、炙いて食ふが良し】(嘉祐)　詵曰く、北帝攝鬼錄中にもまた『慈鴉卵を用う』とある。

(一)烏鴉（宋嘉祐）

和名　たうがらす、一名こくまろからす
學名　Coloeus dauricus, (Pallus)
科名　からす科

【釋名】　鴉烏（小爾雅）　老鴉　雅と鴉と同じ。　鷽　音は預(ヨ)である。　鵯鶋　音は匹居(ヒツキヨ)である。　楚烏（詩義疏）　大觜烏（禽經）

【集解】　時珍曰く、烏鴉は觜大きく、性貪鷙(さんし)で好んで鳴き、善く鳥網を避ける。古代には鴉經といふがあつて、この鳥で吉凶を占(うらな)つたものだが、北方の地では鴉を喜んで鵲を惡み、南方の地では鵲を喜んで鴉を惡む。しかし師曠が白項のものを不祥なりとしたのが正しいやうだ。

肉　【氣味】【酸く澀し、平にして毒なし】　詵曰く、肉は澀く臭(くさ)くして食はれない。ただ病を治するだけに用ゐる。藏器曰く、肉、及び卵を食へば人をして昏

(一)木村(重)曰ク、胸以下ノ下面ハ灰白色、他ハ黑色ナリ、北部支那ニ多ク、稀ニ日本ニ來ル。鷽(ユ)鵯鶋(ヒーチユ)老鴉(ラオヤー)小寒鴉兒(シアオハンヤール)ト稱サル。

〔烏鴉〕

忘せしめる。その毛を把つてもさうだ。蓋し昏するほどにはないにしてもその羶臭が甚しいのだ。

【主治】【瘦病欬嗽、骨蒸勞疾には、臘月に瓦瓶で固濟して燒いて性を存し、末にして一錢づつを飲服する。又、小兒の癇疾、及び鬼魅を治す】（嘉祐）【暗風癇疾、及び五勞七傷の吐血、欬嗽を治し、蟲を殺す】（時珍）

【發明】頌曰く、烏鴉は、今は一般に多く急風を治するに用ゐるが、本經には記載がない。臘月に捕取し、翅、羽、觜、足の全きものを泥で固濟して煆いて藥に入るべきものであつて、諸風を治する烏犀丸中に用ゐることが和劑局方に記載してある。

時珍曰く、聖濟總錄に、破傷中風で牙關緊急し、四肢强直するを治するものに金烏散といふがあつて、煆いて藥に入れるとしてある。調合する品目が多くあるが、

ここには記錄しない。

附方　新五。【五勞、七傷】吐血し、欬嗽するには、烏鴉一羽の肚中に、栝樓穰一具、白礬少量を入れて縫合し、煮熟して四回に分服する。（壽域神方）【暗風癇疾】臘月の烏鴉一羽を瓶に入れて鹽泥で固濟して煆き、放冷して取出して末にし、硃砂末半兩を入れ、一日三回、一錢づつを酒で服す。十日に過ぎずして癒える。○又ある方では、烏鴉一羽全體を瓶で固濟して煆いて研り、胡桃七箇、蒼耳心子七箇と末にし、一錢づつを空心に熱酒で服す。（いづれも保幼大全）【疝氣偏墜】右の胡桃、蒼耳を用ゐる方に新生兒衣一副を煆き研つて入れる。（同上）【經脈不通】積血の散ぜぬには、烏鴉散を用ゐて治す。烏鴉を皮、毛を去つて炙いて三分、當歸を焙じ、好き墨と各三分、延胡索を炒り、蒲黃を炒り、水蛭を糯米で炒つて各半兩、芫青を糯米で炒つて一分を末にし、一錢づつを酒で服す。（總錄）【虛勞瘵疾】烏鴉一羽を絞殺して毛、腸を去り、人參片、花椒各五錢を入れて縫合し、水で煮熟して食ひ、その湯で飲下し、鴉骨、參、椒を焙じ研つて棗肉で丸にして服す。（吳球便民食療）

烏目　氣味　【毒なし】　主治　【呑めば人をして諸魅を見せしめる。或は

研つて汁を目中に注げば夜中よく鬼を見る】(藏器)

頭　主治　【土蜂瘻には灰に燒いて傅ける】(聖惠)

心　主治　【卒に發つた欬嗽には炙熟して食ふ】(肘後)

膽　主治　【風眼で紅爛せるものに點ける】(時珍)

翅羽　主治　【高處から墜下して瘀血が心を搶き、顏色青く、呼吸短きには、右翅七枚を取つて燒き、研つて酒で服す。吐血して癒えるものだ】(蘇頌)　記載は肘後にある。【鍼刺の肉に入りたるには、三五枚を炙き焦して研末し、醋で調へて傅ける。數回にして出て甚だ效がある。又、小兒の痘瘡の出ずして復た入るを治す】(時珍)

附方　新一。【痘瘡の復陷】十二月に老鴉の左翅を取り、辰の日に灰に燒き、豶猪血で和して芡子大の丸にし、豶猪尾血と溫水とに一丸づつを溶化して服す。それで出るものだ。(聞人規痘疹論)

(一)鵲（別錄下品）

和名　かささぎ
學名　Pica sericea, Gould.
科名　からす科

【釋名】飛駮鳥（陶弘景）　喜鵲（禽經）　乾鵲（新語）　時珍曰く、鵲の古文は舃の象形を描いたものだ。鵲は唶唶と鳴くから鵲といひ、鵲は色が駮雜だから駮といひ、靈にして喜を報ずるものだから喜といひ、性最も濕を惡むものだから乾といつたのである。佛經にはこれを芻尼といひ、小說にはこれを神女といつてある。

【集解】時珍曰く、鵲は烏の屬であつて、大いさは鴉ほどで尾が長く、觜が尖り、爪が黑く、背が綠、腹が白で、尾、翮は黑白駮雜である。上下に飛んで鳴き、聲で感じて孕み、卵をば視て孵へす。冬末に始めて巢くひ、巢の入口は太歲を背にし太乙に向ふ。來年風の多いときは、それを豫知して必ず低い場所に巢を作る。故に『乾鵲は來を知り、猩猩は往を知る』といふのだ。段成式は『鵲は梁のやうになつた木の下に隱して巢を作るものだ。それは鷙鳥に狙はれないやうにするのである。人がもしそれを見れば富貴になる前兆だ。鵲は秋になると毛が正しく生え更り、

(一)木村(重)曰ク、光澤アル黑色ノ地ニ白斑アリ。支那全土、臺灣、九州、朝鮮ニ分布ス。支那大陸、人家近キ樹木ニ大ナル巢アルハ、總テかささぎノ巢ニテ群集ス。鵲(チユエ)喜鵲(シーチユエ)四喜鵲(スージーチエユ)神女(シエンニユ)ト稱サル。

頭が禿げる』といつてある。淮南子には『鵲が糞を蝟に落すと、蝟は反つてそれを受けて啄む。火が金に勝つ意味だ』とある。

雄鵲肉 〔氣味〕 【甘し、寒にして毒なし】日華曰く、涼なり。

〔主治〕 【石淋に結熱を消す。燒いて灰にした中に石を投ずると解散するものは雄である】(別錄) 藏器曰く、燒灰の淋汁を飲めば淋石が自ら下る。【消渴疾を治し、風、及び大、小腸澀、幷に四肢の煩熱、胸膈の痰結を去る。婦人は食つてはならぬ】(蘇頌) 【冬至に鵲を圊の前に埋めれば時疾溫氣を辟ける】(時珍) 記載は肘後にある。

【鵲】

〔發明〕 弘景曰く、凡て鳥の雌雄は區別し難いものだが、その翼の左が右を覆ふものは雄である。右が左を覆ふものは雌である。又、毛を燒いて屑にし、それを

水中に納れて見て、沈むものは雌、浮くものは雄である。ここに石を投ずるとあるが、これは恐らく鵲だけのことで、その他の鳥はさうと限らない。

腦　［主治］　弘景曰く、五月五日に取つた鵲腦は術家で用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、淮南萬畢術に『丙寅の鵲腦は人をして相思はしめる』とあり、高誘の註に『鵲腦を雌雄各一箇を道の中で燒き、丙寅の日に酒中に入れて飲めば人をして相思はしめるのだ』とある。又、媚藥の方中にもこれを用ゐてあるところを見ると、陶氏の所謂術家とはやはりそれ等の類をいつたのらしい。

巢　［主治］　【多年を經たものを燒いて水で服すれば、顚狂、鬼魅、及び蠱毒を療じ、それで祟りの物の名を呼ぶものだ。また瘻瘡に傅けるも良し】（日華）【正月元日の朝、灰に燒いて門内に撒けば盜を辟ける。その重巢を柴で燒いて研り、一日三回、方寸ヒを飲服すれば、積年の漏下斷えずして困篤なるものを治し、一个月にして效を取る】（時珍）　記載は洞天錄、及び千金方にある。重巢とは連年重産した巢のことだ。

［附方］　新一。　【小便の禁ぜぬもの】　重鵲巢中の草一箇を灰に燒き、一日二回、二錢ヒづつを薔薇根皮二錢の煎湯で服す（聖惠）

（一）山鵲（食物）

和名 しなをなが
學名 Cyanopica cyanus interposita Harter.
科名 からす科

釋名 **鷽** 渥(アク)學(ガク)の二音がある。（爾雅） **鸐** 音は汗(カン)である。（同上） **山鷓**（俗名） **赤嘴鳥** 酉陽雜俎）

集解 時珍曰く、山鵲は處處の山林にゐる。形狀は鵲のやうで色黒く、文采(もんさい)があり、嘴赤く、足赤く、尾が長く、遠くは飛べない。これも能く鷄、雀を食ふ。諺に『翢鷽(てうがく)は晴に叫び、莽鷽は雨に叫ぶ』といふ。說文にはこれを未來の事を知る鳥とし、字說には『能く鷹、鸇(せん)の聲を眞似、性惡であつて、その類のものが相値(あ)ふと搏(う)つ』とあるはいづれもこの物を指

（山鵲）—鷽—

（一）木村（重）曰ク、かささぎニ似テ尾長ク嘴赤シ。雲南地方ニ一屬(Urocissa)アリ、共ニ山鵲（サンチュエ）山喜鵲（サンシーチュエ）灰喜鵲（ウイシチュエ）ト呼バル。日本ノしなをなが二類ス。

したのだ。鄭樵はこれを喜鵲としたが、誤だ。花勝を戴いたやうな文采があるので、また(三)戴鵀(たいじん)・戴鳻(たいふん)と呼ぶ。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【これを食へば諸果の毒を解す】(汪頴)

(一)鶻嘲（宋嘉祐）

鶻は骨(コツ)滑(クヮツ)の二種の發音がある。

和名　やつがしら
學名　Upupa epops saturata, Lönnberg.
科名　やつがしら(戴勝)科

【釋名】鶻鵃（爾雅）鶻鳩（左傳）屈鳩（爾雅）鸒鳩　鸒は渥(アク)學(ガク)の二音がある。阿鵴、辨狙）鷽鷅　音は藍呂(ランロ)である。時珍曰く、その目は鶻に、その形は鸒に似てゐる。鸒とは山鵲のことだ。その聲は啁嘲(てうてう)たるもので、その尾は屈促し、その羽は襤褸(らんる)のやうだ。故にかかる諸種の名稱がある。阿鵴(あきく)といふは鸒鳩の訛である。陸佃は『凡そ鳥は、朝鳴くを嘲といひ、夜鳴くを㖿(や)といふ。この鳥は朝鳴くからだ』といつてある。禽經に『林鳥は朝嘲(な)き、水鳥は夜㖿(な)く』とあるはこのことだ。

(三)一說ニ戴鵀、戴鳻ハ即鵖鴔ヲ云フ、疑フラクハ誤ツテ混說セルナリ。

(一)木村(重)曰ク、頭ニ羽冠アリ。西比利亞、蒙古ニ棲ミ、渡リノ際支那、日本ニ來ル。鶻鵃(クーチ ヨウ)鵖鴟(ピーチ)戴勝(タイシエン)ト呼バル。

【集解】禹錫曰く、鶻嘲は南北の總てにゐる。山鵲に似て小さく、尾が短く、青毛冠があり、聲多く、青黑色のもので、深林中にゐる。飛翔しても遠くへは行けぬ。北方の地では鸝鷅鳥と呼ぶ。東都賦に『鶻嘲春鳴く』とあるはこの鳥だ。

〔鶻嘲〕—山鵲—

時珍曰く、この鳥は春來て秋去り、好んで桑椹を食ひ、醉ひ易くして性の淫なるものだ。或は、鶻嘲は戴勝だといふものもあるが、その眞否は審でない。鄭樵がこれを鸜鵒としたのは誤だ。

肉【氣味】【鹹し、平にして毒なし】【主治】【氣を助け、脾、胃を益し、頭風目眩を治す。煮炙して一回に一羽全部を食へば至つて效驗がある】（嘉祐）〇現に江東の地方人が瘡頭と呼ぶ頭風で、先づ兩項邊から筋起し、直線に上に頭に入つて頭悶し目眩するその病のことである。

杜鵑（拾遺）[一]

和名　ほととぎす
學名　Cuculus poliocephalus, Latham.
科名　とけん（杜鵑）科

［釋名］　**杜宇**（禽經）　**子嶲**　音は携（ケイ）である。　**子規**　また秭歸とも書く。　**怨鳥**　また思歸とも書く。　**催歸**　また鷤鴂とも書く。　**鶗鴂**　音は弟桂（タイケイ）である。　**周燕**（說文）　**陽雀**　時珍曰く、蜀人は鵑を見て古の王杜宇を思ふといふところから杜鵑と呼んだのだ。それを杜宇が化して鵑となつたのだなどといふ說をなすものもあるが、それは誤だ。鵑と子嶲、子規、鶗鴂、催歸などの諸名とは、いづれもその聲の似てゐるところに因み、それぞれ地方音で呼んだだけのものだ。その鳴聲は『不如歸去』といふやうに聞える。諺に『陽雀が叫べば鶗鴂が央する』といふその鳥である。禽經には『江左では子規といひ、[二]蜀右では杜宇といひ、[三]甌越では怨鳥といふ』とある。服虔の漢書の註に、鶗鴂を伯勞としたのは誤で、名は同じだが物は異ふ。伯勞は一名鴂といふが、その字は決（ケツ）と發音するのであつて桂（ケイ）と發音するのではない。

[一] 木村（重）曰ク、西比利亞、北支那ニ棲息シ、冬期ニ南支那ニ至ル。くわつこうヨリ小型ナリ。日本ニテハ三四月ニ來リ、秋南方ニ去ル。とぐろ（つつどり）。くわつこう（以上Cuculus屬）ばんけん（Centrops屬）他二屬ヲ産ス。鳲鳩項參照。

[二] 蜀右トハ四川省ノ東半部、蜀江以東ノ地ヲイフ。

[三] 甌越トハ珠崖、儋耳、即チ瓊州島ノ地ヲイフ。

「集解」　藏器曰く、杜鵑は鴿のやうな小さいもので、鳴き呼んで已まぬものだ。蜀王本紀に『杜宇は蜀に君臨して望帝となり、その臣鼈靈の妻に淫したことから位を禪つて亡げ去つた。その時子規鳥が鳴いてゐたので、蜀人は鵑の鳴くのを聞くと望帝の身の上を思ひ悲しむ』とある。荊楚歳時記には『杜鵑の初聲を眞先に聞けばその人に別離のある前兆だ。その聲を眞似ると血を吐く。厠にゐて聞くと不祥だ。その禁厭の法としては、ただ狗の聲を眞似てそれに應へることだ』とある。異苑には『ある者が山に入つて行く時、その一羣を見て退屈紛らしにその眞似をし、嘔血して死んだ』とある。これは世間でこの鳥は血の出るまで啼かねば止まぬものだといふところから、嘔血云云の話が始つたのだ。

〔杜　鵑〕

時珍曰く、杜鵑は蜀中に產し、現に南方にもゐる。形狀は雀、鴿のやうで黲黑色だ。口が赤く、小さい冠がある。春の末頃に鳴き、夜は曉方まで鳴き徹し、鳴くには必

ず北に向ふ。夏になると尤も甚しく鳴いて晝夜止まず、その聲の哀切なものだ。農家ではこの鳥の鳴くので時候を見て農事に著手する。ただ蟲、蠹だけを食ふもので、巢を作つて居れず、他の鳥の巢に子を產む。冬期には蟄し藏れるものだ。

肉　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【瘡瘻の蟲あるものには、薄く切つて炙き熱して貼る。蟲が出盡きて已む】（時珍）

【發明】時珍曰く、按ずるに、呂氏春秋に『肉の美なるものは雟燕の(四)翠』とあるところを見ると、昔は一般にもやはり常に食つたものだ。

(一)鸚鵡（食物）

和名　あうむ、及びいんこ
英名　Parrots and Macaws.
科名　あうらむ科、及びいんこ科

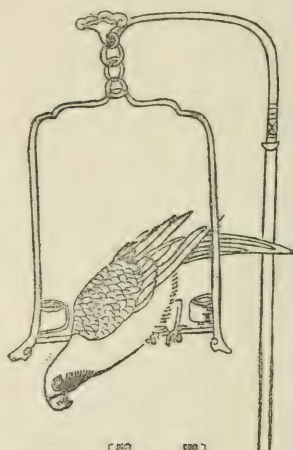
【釋名】鸚哥（俗名）　乾皐　時珍曰く、按ずるに、字說に『鸚鵡といふは、嬰兒が母の言葉を學ぶやうだからで、文字は嬰母に從ふ』とある。また鸚䳇とも書く。熊太古は『大なるものを鸚鵡といひ、小なるものを鸚哥といふ』といつてあるから、鵡の字の意味はまた此に取つたものだらう。師曠はこれを乾皐といひ、李昉は隴客

(四)翠ハ臎ニ同ジ尾肉ナリ。

(一)木村(重)曰ク、孰レモ支那ニ原產セズ、總テ熱帶地方ヨリ舶來サレタルモノナリ。鸚鵡（アーモー）ト云ハル。

（二）木村（重）曰ク　集解ノ文中
綠鸚鵡ハさとうてう、全身美シキ綠色、倒挂子ト云フ。
紅鸚鵡ハづぐろいんこ、頭ヲ除イテハ總テ紅色。
白鸚鵡ハこばたん、普通ノあうむト稱スルモノ、一名小白鸚鵡、鳩大ナリ。
五色鸚鵡ハごしきせいがいいんこ、鳴聲鋭シ。
（三）隴蜀ハ陝西省西部、及ビ四川省ノ地ヲ指ス。
（四）滇南ハ雲南省、交廣ハ廣東、廣西、及ビ交州。

といひ、梵書には臊陀といつてある。

集解　時珍曰く、鸚鵡には數種あつて、（二）綠鸚鵡は（三）隴、蜀に產し、（四）滇南、交廣、近海諸地に尤も多く、大いさは烏鵲ほどで數百羽羣り飛ぶ。その地ではこれを鮓にして食ふ。紅鸚鵡は紫赤色で大いさも似たものだ。白鸚鵡は西洋、南番に產し、大いさは母鷄ほどのものだ。五色鸚鵡は海外諸國に產し、白よりも大きく、綠よりも小さいもので、性尤も怜悧だ。いづれも味が丹く、吻が鈎り、尾が長く、足が赤く、睛が金色で目が深く、上下の瞼はいづれもよく動いてまばたきし、舌は嬰兒のやうだ。その趾は前後各二つあつて他の諸鳥と異ふ。その性寒を畏れ、寒さに遭ふと瘴のやうに發顫して死ぬが、餘甘子を餌にしてやると解するものだ。或はその背を摩すると瘖になるといひ、或は雄は喙が丹に變ずるが、雌は喙が

〔鸚鵡〕

黒くして變じないといふ。張思正の倦游錄に『海中にゐる黄魚は能く鸚鵡に變化する』とあるが、これはまた別の一種に相違ない。秦吉了、鳥鳳といふ皆人言を能くする鳥がある。いづれも左に附錄する。

附錄　(五)**秦吉了**　時珍曰く、卽ち了哥のことだ。唐書に結遼鳥と書いてあるは外國音のままである。嶺南の(六)容管、廉、邕の諸州の峒中に產し、大いさは鸜鵒ほどで紺黑色だ。腦を夾んで黄肉冠があり、人の耳のやうであり、咮は丹く、距は黄で、人のやうな舌と人のやうな目とあり、目の下から頸に連つて深黄の文があり、頂と(七)尾とに分縫がある。よく人間の言葉を眞似し、音が頗る雄重だ。熟雞子と飯とを和して飼ふ。白色のものもある。

(八)**鳥鳳**　按ずるに、范成大の虞衡志に『鳥鳳は(九)桂海の左右江の峒中に產する。大いさは喜鵲ほどで紺碧色だ、項の毛は雄雞に似て頭上に冠があり、尾は二本の弱骨を垂れて長さ一尺四五寸の端に始めて毛があり、その形はほぼ凰に似てゐる。その音聲は笙簫のやうに淸越で、能く短い小唄などを節も調子も合はせて唄ひ、また能くあらゆる鳥の聲を眞似する。彼の地でもやはり得難いものとなつてゐる。

(五)木村(重)曰ク、秦吉了
和名　きばたん
學名　Cacatua galerita (Lathan)
科名　あうむ科
普通ニあうむト稱サルルモノノ一種ナリ。

(六)容管ハ容州、草部毒草類鉤吻ノ註ヲ見ヨ。廉州ハ介部蚌蛤類眞珠ノ註、邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。

(七)曲籍便覽ニ尾ヲ毛ニ作ル。

(八)木村(重)曰ク、鳥鳳ハ和名おかめいんこ。
學名　Calopittacus

鸚鴞肉 氣味 【甘く鹹し、溫にして毒なし】 主治 【これを食へば虚嗽を已む】（汪穎）

novae-hollandiae, Gmelin.

科名 あうむ科

日本ニテ普通ニ見ラル、尾他ノあうむヨリ長シ。

(九) 桂海ノ左右江、桂海、卽チ南海、嶺南ノ桂林ノ地方、卽チ今ノ廣西省地方ヲ指ス。左右江トハ廣西省境ヲ流ルル鬱江ノ上流、麗江、西洋江ノ二水ヲイフ。

禽の四　山禽類十三種　附一種

鳳凰（拾遺）[一]

和名　ほうわうじやく
學名　Pavo cristatus, Linne.
科名　きじ(雉)科

〔鳳　凰〕

釋名　瑞鶠　時珍曰く、禽經に『雄は鳳、雌は凰である。また瑞鶠といふ』とある。鶠とはあらゆる鳥が偃伏するといふ意味だ。羽蟲三百六十の中で鳳がその長である。故に鳥に從ひ凡に從ふのであつて、凡は總てである。古代には朋と書いた。象形である。凰とは美の意味、大の意味である。

集解　時珍曰く、鳳は南方の朱鳥である。韓詩外傳に『鳳の象は、前は鴻に、後は麟に、頷は燕に、喙は雞に、頸は蛇に、

(一) 木村(重)曰ク、一名印度孔雀、雄ノ全長七尺ニ達ス。冠毛ハ扇狀ニ開キ、體ハ藍色ニ輝ク。印度、せいろん島ニ產ス。或ハ瑞祥ノ鳥トシテ有名無實カ、假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。

尾は魚に、顙は鸛に、〔一〕顋は鴛に、文は龍に、背は龜に似たもので、羽には五采を備へ、高さ四五尺あり、四海に翺翔し、天下に道あれば見はれる。その翼は竿の如く、その聲は簫の如く、生蟲を啄まず、生草を折らず、羣つて居らず、侶に行かず、梧桐以外には棲まず、竹實以外をば食はず、醴泉以外には飲まぬ』とある。山海經には『〔二〕丹穴の山。鳥あり、狀鷄の如く、五采にして文あり、飲食自然にして自ら歌ひ自ら舞ふ。見るれば天下安寧なり』とある。蔡衡は『鳳に象たものが四種ある。赤多きものが鳳であつて、青多きものは鸞、黃多きものは鵷、紫多きものは鸑鷟、白多きものは鷫鷞だ』といつてある。又、多くの典籍には種種異つた名稱が揭げられてあるが、繁冗に涉るから載錄せぬ。按ずるに、羅存齊の爾雅翼に『〔三〕南恩州の北甘山といふ山は、壁立千仞で猿狖も行けない處だが、その頂上には鳳凰が巢くつてゐる。食物はただ蟲魚のみだ。大風雨の場合にその雛が吹き墮されることがあるが、小さいうちは鶴のやうで足がやや短い』とある。

〔四〕**鳳凰臺**　【氣味】【辛し、平にして毒なし】　【主治】【勞損積血に血脈を利し、神を安ずる。驚邪、癲癇、鷄癇の發熱狂走するを治するに、水に磨つて服す】（藏器）

〔二〕丹穴之山、所在未詳。

〔三〕南恩州ハ石部石蛇ノ註ヲ見ヨ。

〔四〕木村(重)曰ク、鳳凰臺、未詳。

發明　藏器曰く、鳳凰の脚下の石のやうな白いものを鳳凰臺と名ける。鳳凰は靈鳥ではあるが、時によるとその嚴な姿を現はすことがあつて、その棲止した場所の土を二三尺掘つて取るのである。形狀は圓石のやうで白く、卵に似たものだ。しかし、鳳は梧桐以外には棲まず、竹實以外をば食はずといふのだから、地に下つて地中に臺が出來るといふやうな道理はなささうなものだが、これも物の有する自然の現象で、理解では判らない。現に鳳がゐてもそこに竹が生えてゐると限らず、竹の生えた處に鳳がゐると限らないのであつて、恐らくこれは麟、鳳には特別の棲息地があるものと思はれる。漢の時代に朝廷に貢納した續絃膠(五)は鳳の髓を煎じて製造したものだといふが、それも怪むに足らないであらう。

時珍曰く、按ずるに、呂氏春秋に『(六)流沙の西、丹山の南に鳳鳥の卵がある。沃民の食するものだ』とあるところから見ると、それを產する土地も別段不思議な土地ではあるまい。續絃膠は、洞冥記では鸞血で製造するものとなつてゐる。故に雷公の炮炙論に『弦斷え、劍折れたるは、鸞血に遇へば初の如くなる』とあるのだ。陳氏はそれを鳳髓で作るとした。要するに、いづれも妄談であつて、深く問題にす

(五) 大觀ニ膠下ニ卽ノ字アリ。

(六) 流沙ハ沙漠ノ古稱、此ニハ西北境ノ沙漠地ヲ指ス。丹山未詳。

るほどの價値はない。

(一)孔雀（別錄下品）

和名　くじやく
學名　Pavo muticus, Linne.
科名　きじ(雉)科

【釋名】越鳥　時珍曰く、孔とは大の意味である。李昉は南客と呼んだ。梵書にはこれを摩由邏（まゆら）といつてある。

【集解】弘景曰く、(二)廣、益の諸州に產する。方家では用ゐることが稀だ。

恭曰く、(三)交、廣に多くゐる。(四)劍南にはもとはゐなかつた。

時珍曰く、按ずるに、南方異物志に『孔雀は(五)交趾（かうち）、雷、(六)羅の諸州に甚だ多く、高山の高い木の上にゐるもので、大いさは鴈ほど、高さは三四尺、鶴ほど位の高さがあり、頸は細く、背が隆（たか）く、頭に長さ一寸ばかりの三本の毛を戴き、數十羽羣つて飛び、岡陸に棲み游（あそ）び、朝になると聲を相和して鳴く。その聲は『都護』といふやうに聞える。雌は尾が短くて金翠がなく、雄は三年まではなほ小さいが、五年になると二三尺の長さになり、夏には毛が脫けて春になると復た生え、背から尾まで

(一) 木村(重)曰ク、支那南部、印度等ニ原產ス。しろくじやくハ變種ナリ。

(二) 廣州ハ土部伏龍肝ノ註、益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三) 交、廣ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四) 劍南ハ草部芳草類牡丹ノ註ヲ見ヨ。

(五) 交趾、漢ニ交趾郡ヲ置ク、率ラ今ノ安南北部東京地方ヲ指ス。雷州ハ石部霹靂碪ノ註、羅州ハ石部鹵石類鹽藥ノ註ヲ見ヨ。

(六) 本草洞詮、羅ヲ雁ニ作ル。

圓文があり、銭のやうな五色の金翠が相繞つてゐる。その鳥自身にその尾を愛し、山に棲んでは必ず先づその尾を置くだけの餘地ある場所を擇んで棲む。雨が降るとその尾が重くなつて高く飛べなくなるので、南方の地の者はその時往つて捕獲し、

〔孔　　雀〕

或は暗中にその通るのを狙つてゐて生きたままその尾を切り取り、それを贈物にする。その場合鳥が切るのを顧視するとその金翠が忽ち色が褪めるものだ。山間の住民はその雛を飼つて囮に使ひ、或はその卵を捜し取つて雞に孵させ、猪腸、生菜などのやうなものを餌にして飼ふ。人間が手を拍つて歌を唱ふと舞ふ。嫉妬深い性質で、色模様の衣服を著たものを見ると必ず啄む』とある。北戸錄には『孔雀は交尾せぬ。聲や影で相接して孕む。或は雌が下風に鳴き、雄が上風に鳴いてゝ孕む』とある。冀越集には『孔雀には雌雄があるが、生殖を行はん

とするときは木に登つて哀鳴する。すると蛇が來て交尾するものだ。故にその血、膽はやはり人を傷める』とある。禽經に『孔は蛇を見れば宛として躍る』とある。その事實だ。

肉　〔氣　味〕【鹹し、涼にして微毒あり】藏器曰く、毒なし。〔主　治〕【藥毒、蠱毒を解す】(日華)

〔發　明〕時珍曰く、按ずるに、紀聞に『山谷に住む蠻人は多く食ふ。或はこれで脯、腊を作るが、味は鷄、鶩のやうなものだ。能くあらゆる毒を解す。その肉を食つたものはその後で藥を服しても效がない。そのものが毒を解するものだからだ』とある。又、續博物志には『李衞公は「鶩は鬼を驚し、孔雀は惡を辟け、鵁鶄は火を厭する」といつた』とある。

血　〔主　治〕【生で飮めば蠱毒を解するに良し】(日華)

〔發　明〕時珍曰く、熊太古は、孔雀は蛇と交尾するものだから血、膽いづれも人を傷めるといひ、日華、及び博物志には、その血と首とは能く大毒を解すといひ、合致せぬやうであるが、按ずるに、孔雀はその肉が毒を解するものである以上、

血だけが人を傷めるわけはあるまい。蓋しこれも雉と蛇と交尾する時には有毒だが、蛇が蟄に入つた期間は無毒であると同じやうな關係のものであらう。

屎 【氣味】【微寒なり】【主治】【婦人の帶下、小便不利】(別錄)【崩中帶下を治す。惡瘡に傅けるもよし】(日華)

尾 【氣味】【毒あり】 宗奭曰く、目に入れてはならぬ。昏翳せしめるものだ。

(一)駝鳥(拾遺)

和名 だてう
學名 Struthio camelus, Linne.
科名 だてう科

【釋名】 **駝蹄鷄**(綱目) (二)**食火鷄**(同上) **骨托禽** 時珍曰く、駝はその形態が似てゐるからの形容だ。托といふはやはり駝の字の訛である。

【集解】 藏器曰く、駝鳥は駱駝のやうなもので、西戎に產する。高宗の永徽年間、(三)吐火羅からこれを獻じた。高さ七尺、足は橐駝のやうで、翅を鼓して行くと一日に三百里走れ、銅鐵を食つたといふ。

時珍曰く、これもやはり鳥であつて、能く他の動物の食へないものを食ふものだ。

(一)木村(重)曰ク、尾羽ト稱スル尖端ニ眼狀點アルハ眞ノ尾ニ非ズ、上尾筒ノ羽毛ノ延長セルモノナリ。尾ハ短クシテ外部ニ現レズ。

(二)木村(重)曰ク、現存鳥類中最大ノモノ、北亞弗利加、亞剌比亞等ノ沙漠地ニ產ス。
食火鷄ハひくひどり(Casuarius Casuaris, Linno)ナルベシ。ニウキネア附近ノ島ニ

産ス。火鷄ハ現時七面鳥ノ俗稱ナリ。
(三)吐火羅國ハ今ノ布哈拉、及ビ阿富汗ノ地ナリ。
(四)波斯國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)安息國ハ古代波斯ノ地ナリ。
(六)富浪ハ佛郎ノ轉音、アラビヤ人佛蘭西ヲ佛郎ト稱スルニ因ルトイフ。丁謙氏ハソノ地埃及海西ニ在ラントイフ。
(七)竹步國、阿丹國共ニアラビヤ西南端地方ヲ指スガ如シ、阿丹、卽チアデンノ地ナリ。
(八)河州ハ今ノ甘肅省ノ蘭州、鞏昌兩府

按ずるに、李延壽の後魏書に『(四)波斯國に駝のやうな形の鳥がゐる。能く飛ぶけれども高くは上れず、草と肉とを食物とし、また火を噉ふもので、一日に七百里を行く』とある。郭義恭の廣志には『(五)安息國から貢納した大雀は、身は鷹のやう、蹄は駝のやうで色蒼く、頭を擧げると高さ七八尺あり、翅を張ると丈餘あつて、大麥を食物とし、その卵は甕ほどあつた。その名を駝鳥といふ』とある。劉郁の西域記には『(六)富浪に、蹄が駝のやうで高さ一丈餘の大鳥がゐる。火炭を食ひ、卵は一升ほどの大いさのものだ』とある。費信の星槎錄には『(七)竹步國、阿丹國ともに駝蹄鷄を産する。高いものは六七尺あり、その蹄が駝のやうなものだ』とある。彭乘の墨客揮犀には『骨托禽は(八)河州に産し、形狀は鵰のやうで高さ三尺餘、その名を自ら呼び、能く鐵石を食ふ』とある。宋祁の唐書には『開元の初年に、(九)康國から駝鳥の卵を貢納した』

〔駝鳥〕—火雞—

とある。鄭曉の吾學編には『洪武の初年に、(一〇)三佛齊國から火鷄を貢納した。鶴よりも大きく、長さ三四尺あり、頸、足はやはり鶴にも似てゐるが、嘴が鋭くして軟く、紅い冠があり、毛の色は青羊のやう、足の指は二本で爪が鋭く、能く人の腹を傷けて殺すことがある。火炭を食ふものだ』とある。諸書の記載にはやや異ふ點もあるが、實はみな一物である。

屎

氣味 【毒なし】

主治 【誤つて鐵石を呑んで腹に入つたときは、これを食へば立ろに消ける】(藏器)

(一)鷹 (本經中品)

和名 はげわし
學名 Aegypius monachus (Linne)
科名 はげわし科

釋名 角鷹(綱目) 鷞鳩 時珍曰く、鷹は膺で擊つものだ。故に鷹といふ。その頂に毛角があるから角鷹といひ、その性が爽猛だから鷞鳩といふ。昔、少皞氏は鳥を以て官名とし、祝鳩、鳲鳩、鶻鳩、雎鳩、鷞鳩の五氏を置いた。蓋し鷹と鳩とは氣を同うし、交代に變化するものだから鳩なる名稱が起つたのだ。禽經に『小

ノ地ナリ。州治ハ民國ノ導河縣地ナリ。
(九)康國ハ今ノ撒馬爾罕ノ地ナリ。康居國ト混ズルハ誤ナリ。
(一〇)三佛齊ハ石部婆娑石ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、頭及ビ頸ハ裸出ス。歐洲南部、小亞細亞、印度、支那、朝鮮ニ分布ス。[illegible]鷹(コン)狗頭鷲(クートウチヤナ)ノ稱アリ。一屬(Falco)ハ黄鷹(ホアンエン)ト稱サル。

にして鷙するものはみな隼といふ」大にして鷙するものはみな鳩といふ』とあるはこの意味だ。爾雅翼には『北に在ては鷹といひ、南に在ては鷂といふ』とあり、あるひは、大なるを鷹とし、小なるを鷂とする。梵書には、嘶那夜といつてある。

集解　時珍曰く、鷹は(二)遼海に產するものを上とし、北地、及び(三)東北胡のものがこれに次ぐ。北方の地では多く雛を取つて飼養し、南方の地では八九月に囮を使用して取る。この鳥は鳥の中での疏暴なもので、雉鷹、兎鷹といふものある。その類の鳥は夏の末期に撃つことを習ひ、秋の中期に鳥を祭する。隋の魏彥深の鷹賦に頗る詳敍してあるから、左にその概要を揭げる。

『金方の猛氣を資とし、火德の炎精を擅にす。指は十字を重んじ、尾は合盧を貴び、觜は鈎利に同じく、脚は枯荊に等し。或は白くして散花の如く、或は黑くして點漆の如く、大文は錦の如く、細斑は纈に似たり。身は重くして金の如く、爪は剛くして鐵の如し。毛衣屢々改つてその色常なく、寅に生じて酉に就り、總號して黃と云ふ。二周にして(四)鴘となり、三歲にして蒼となり、雌は體大に、雄は形小なり。これを察するは易しとなせども、これを調ぶるは實に難し。薑は以て熱を取り、酒は

(二)遼海ハ鱗部無鱗魚類鱣魚ノ註ヲ見ヨ。

(三)東北胡、滿洲以北ノ異種族地ヲ指ス。

(四)本書ニ鴘ヲ鷂ニ作ル。

以て寒を排す。窟に生ずるものは好く眠り、木に巣ふものは常に立つ。雙骹（さうかう）長きものは起つこと遲く、六翮（ろくかく）短きものは飛ぶこと急なり』

肉 氣味 缺 主治【これを食へば野狐の邪魅を治す】（藏器）

［鷹］

頭 主治【五痔には灰に燒いて飮服する】（藥性）【痔瘻を治するには、一箇を灰に燒いて麝香少量を入れ、酥（そ）、酒で服す。頭風眩運を治するには、灰に燒いて酒で服す】（時珍）

附方 新一。【頭目の虛運】車風一箇——卽ち鷹頭である——を毛を去つて焙じ、川芎（せんきう）一兩と末にし、三錢を酒で服す。（選奇）記載は王右軍の法帖、及び溫隱居の海上方にある。

觜及び爪 主治【五痔、狐魅には、灰に燒いて水で服す】（藏器）

睛 主治【乳汁に和して研り、一日三回づつ眼中に注ぐ。三日にして(五)碧霄（へきせう）中の物を見得る。烟で薰ずることを忌む】（藥性）

（三五）碧霄トハ高遠ナル大空ヲイフ。

骨　【主治】【傷損の接骨には、灰に燒いて二錢づつを酒で服す。患部の上下に隨つて食前、食後を分つ】(時珍)

毛　【主治】【酒を斷つ。水で煮て汁を飲めば直ちに酒を止めるやうになる】(千金)

屎白　【氣味】【微寒にして小毒あり】【主治】【打撲傷の痕を滅す】(六)(本經)【灰に燒いて酒で服すれば中惡を治す】(藥性)【灰に燒いて酒で方寸匕を服すれば(七)邪惡を治す。(八)本人にそれと知らしめてはならぬ】(蘇恭)【虛積を消し、勞蟲を殺し、面皰、鼾黯を去る】(時珍)

【發明】弘景曰く、單用しては瘢を滅する效能がない。殭蠶、衣魚の屬を合せて膏にして用ゐれば效がある。

【附方】舊一、新四。【奶癖】寇曰く、凡そ小兒の(九)脇下に何物か硬いものがあるやうなものは、俗に奶癖と名けるものだ。ただ脾を溫め積を化する丸藥を服す。轉瀉してはならない。黃鷹屎一錢、密陀僧一兩、舶來の硫黃一分、丁香二十一箇を末にし、一字づつ——三歲以上は半錢——を、乳汁、或は白麪湯で調へて服す。いづ

(六)本經マサニ別錄ニ作ルベシ。
(七)邪惡、大觀ニ惡酒ニ作ル。
(八)大觀ニ本ナ欲ニ作ル。
(九)大觀ニ脇ニ作ル。

れも轉瀉せずして一(一〇)復時にして青黒の物を取下す。後に補藥を服し、醋石榴皮を黑く炙いて半兩、蛜蝌一分、木香一分、麝香半錢を末にし、一(一一)錢づつを(一二)薄酒で調へて二回に連服する。(外臺)【面皰】鷹屎白二分、胡粉一分を蜜で和して傅ける。【滅痕】千金では、鷹屎白を人精で和して一日三回傅ける。○總錄では、鷹屎白、殭蠶一兩半を末にし、蜜で和して傅ける。○聖惠では、鷹屎二兩、白附子各一兩を末にし、醋で和して傅ける。日毎に三五回傅ければ痕がなくなる。【食哽】鷹糞を灰に燒き、方寸匕を水で服す。(臺外)

(一)鵰 音は凋(テウ)である。 (綱目)

和名 をじろわし
學名 Haliaeetus albicilla, (Linne.)
科名 わし科

【釋名】 鷲 音は就(シユ)である。(山海經) 鷻(說文) 音は團(ダン)である。時珍曰く、禽經に『鷹は以て(二)膺し、鶻は以て猾し、隼は以て尹し、鵰は以て周し、鷲は以て就し、鷻は以て搏す』とあるは、いづれもその搏擊する樣子の特長をいつたものだ。梵書にはこれを揭羅闍といつてある。

(一〇)復ハ伏ニ通ズ、一伏時、一晝夜ニ同ジ。
(一一)錢、大觀ニ字ニ作ル。
(一二)大觀ニ薄字上溫字アリ。
(一)木村(重)曰ク、海東鵰(ハイトンチヤチ)ト呼ブ。いぬわし(紅頭鵰(ホントウチヤチ)Aquila屬)あかあしちやうけんぼう(靑鵟(チヤンユン)Vespertium屬)等アリ、其代表者ヲ取ル。
(二)膺ハ胸ニテ搏擊スルコト。猾ハソノ

集解　時珍曰く、鵰は鷹に似て大きく、尾が長く、翅が短く、土黃色だ。兇猛で力强く、空中を旋回して下の物を視るに、如何なる細かなものでも見落さない。皂鵰は卽ち鷲であつて、北地に產する色の皂いものだ。靑鵰は遼東に產する最も俊なるもので、海東靑と稱する。羌鷲は(三)西南夷に產し、頭は黃、目は赤で五色みな備はるものだ。鵰の類は能く鴻、鵠、獐、鹿、犬、豕を搏つものだが、また虎鷹といふ翼の廣さ一丈餘のものがあつて、能く虎を搏つ。鷹、鵰は鳥を取るものではあるが燕子を畏れる。故に物は大小では判斷されない。この鳥の翮は箭羽の材料になる。劉郁の西域記には『皂鵰は一回に三箇の卵を產むもので、その内の一箇には犬に化するものがある。それは毛が短い灰色で犬と異りはないが、ただ尾と背とに數本の羽毛のある動物で、その母鳥に隨

〔鵰〕

態ノ猜點ナルコト。卉ハ笄ノ誤、意義未詳。周ハ周旋、メグルコト。就ハ蹴、ケルコト。搏ハ搏、ウツコトナリ。

(三) 西南夷トハ今ノ雲南省以南ノ蠻地ヲ指ス。

つて走り、その追ひかけたものは必ず捕獲するものだ。これを鷹背狗といふ」とある。

骨 〔氣味〕 缺 〔主治〕 【折傷で骨の斷れたるには、灰に燒いて二錢づつを酒で服す。患部が上體にある場合には食後、下體にある場合には食前に服す。骨は舊の通りに接がる】（時珍） 記載は接骨方にある。

〔發明〕 時珍曰く、鷹、鶚、鵰の骨はいづれもよく骨を接ぐ。蓋し鷙鳥の力は骨に在るものだからであつて、骨を以て骨を治するはその類に從ふのだ。

屎 〔主治〕 【諸鳥獸の骨硬には、灰に燒いて方寸匕を酒で服す】（時珍） 記載は外臺祕要にある。

（二） 鶚 （綱目）

和名 みさご
學名 Pandion haliaetus (Linne)
科名 みさご科

〔釋名〕 **魚鷹**（禽經） **鵰鷄**（詩疏） **雎鳩**（周南） **王雎** 音は疽（ソ）である。**沸波**（淮南子） **下窟烏** 時珍曰く、鶚はその狀貌が愕くべきものだから鶚といひ、物

（一）木村（重）曰ク、分布廣ク、歐洲、亞細亞、亞弗利加、北米等ニ產ス。魚鷹（ユーエン）ノ名最モ知ラレ、鳴鶚（チヤナキー）鶚鳩ノ名アリ。世界ニ一種知ラル。

食餌ハ殆ンド魚類ニ限ラル。

を視ること雎從だから雎といひ、能く穴に入つて食物を取るから下窟鳥といひ、水上を翱翔し、扇つて魚を出すから沸波といつたのだ。禽經には『王雎は魚鷹である。尾上の白きものを白鷢と名ける』とある。

【集解】時珍曰く、鶚は鵰の類であつて、鷹に似てゐるが土黄色で、目が深くして險しく峙つてゐる。雄と雌と相携へて物を鷙へるが、雄のものと雌のものと各別のものを獲る。交尾には雙んで翔けるが、交尾が畢れば處を異にしてゐる。能く水上を翱翔して魚を捕つて食ふので、江表地方では食魚鷹と呼ぶ。やはり蛇をも啖ふものだ。詩に『關關たる雎鳩、河の洲に在り』とはこの鳥である。肉は腥惡で食へない。陸機はこれを鷲とし、揚雄はこれを白鷢とし、黃氏はこれを杜鵑としたが、いづれも誤だ。禽經に『鳩は三子を生み、一は鶚鳩とな

〔鶚〕
——魚鷹——

る』とあるは尸鳩のことだ。杜預が王雎を尸鳩としたのは、或はこのためだらう。

骨 主治 【接骨】(時珍)

附方 新一。【接骨】下窟鳥、即ち鶚の骨を取つて燒いて性を存し、古銅錢一箇を紅く煅き醋に淬すこと七回し、末にして等分を用ゐ、一錢を酒で服す。過多に服してはならぬ。患部が下に在るときは空心に、上に在るときは食後に服す。極めて效がある。先づ夾縛してから服すべきものである。(唐蘭道人方)

(二)嘴 主治 【蛇咬には、燒いて性を存して研末し、一半を酒で服し、一半を塗る】(時珍)

(一)鴟(別錄下品)

和名 とび
學名 Milvus migrans lineatus, (Gray).
科名 鷹科

釋名 雀鷹(詩疏) 鳶(詩經) 鷂 音は淫(イン)である。隼 本は鵻と書いた。音は筍(ジユン)である。鷂 時珍曰く、鴟、鳶の二字の篆文は象形である。一には、鴟とはその聲であつて、鳶とは物を擢ふことと射る如しとの意味、隼とは物を撃

(二)木村(重)曰ク、嘴扁平ニシテ鈍ク鉤曲ス。

(一)木村(重)曰ク、鳶(ユアン)鷂鷹(ヤチユン)ノ稱アリ。鷂(ヤチ)ハちうひ(Circus aeruginosus, Linne.)隼ハ青茶兒(チンチヤル)能兒(トール)ト呼バルちごはやぶさ(Falco subbuteo Butur-

l(iii)ナリ。

(二)齊ハ山東省ノ中部以西。

(三)竊玄ハ淺黑色ナリ。

(四)猾ハ擧動ノ形容、瞭ハ遠視、展ハ翅ヲ展ブル形容、奪ハ奪掠ノ形容。

(五)攘掇ハ掠メルコトナリ。

つことの隼いの意味、鷂とは遙な處を目擊するの意味だといふ。詩疏には『隼には數種あつて、通稱して鷂といふ。雀鷹は春布穀に變化する。爾雅にはこれを茅鴟といひ、(二)齊地方では擊征といひ、或は題眉といふ』とあり、爾雅には『鷣、負雀なり』とあり、梵書にはこれを阿黎耶といつてある。

[集解] 弘景曰く、鴟は俗に老鴟と呼ぶものだ。又、鵰、鶚といふがあり、いづれも相似て大なるものだ。

時珍曰く、鴟は鷹に似て稍や小さく、その尾は舵のやうだ。極めて善く高く翔り、專ら鷄、雀を捉へる。鴟の類には數種あつて、禽經を按ずるに『善く搏つものを鷂といひ、(三)竊玄なるを鵰といひ、(四)猾なるを鶻といひ、瞭なるを鷂といひ、展するを鸇といひ、奪するを鵽といふ』とあり、又『鵰は三子を生み、その一が鴟となる。鶻は鴟よりも小さくして最も猛く捷く、能く鳩、鴿を擊つ。また鷸子、一名籠脫とも名ける。鸇は色靑く、風に向つて翅を展べ、迅く搖つて鳥、雀を搏つて捕る。鳴けば大風が起る。一名晨風といふ。鵽は鸇よりも小さく、その脰を上下し、やはり鳥雀を取ること(五)攘掇するやうなものだ。一名鷸子といふ』とある。又、月令には『二月に鷹が變

化して鳩となり、七月に鳩が變化して鷹となる』とあり、莊子には『鷂が鸇となり、鸇が布穀となり、布穀が復た鷂となる』とある。いづれもこの屬を指したものだ。隼、鶻は鷙ではあるが義あるものだ。故に鷹は卵を抱いたるを

〔鷂〕
—鷹雀—

撃たず、隼は胎んだものを撃たず、鶻は鳩を握ると自から暖めてやつて曉方になると釋すといふ。これはいづれも殺中に仁あるものだ。

鷂頭 〔修治〕 弘景曰く、雌と雄と何れでも宜敷いが、雄の方が勝れてゐる筈である。これを用ゐるには微し炙いて用うべきもので、蠹のついたものは用ゐられぬ。古方の頭、面を治する方に鴟頭酒といふがある。

〔氣味〕 【鹹し、平にして毒なし】 時珍曰く、按ずるに、段成式は『唐の肅宗皇帝の皇后張氏は朝權を専にした人だが、帝に酒を進める都度鴟腦をその中に入れた。これは人をして長く醉ひ、健忘ならしめるものだといふことだ』とある。これ

で見ると鴟頭もやはり微毒がある。

［主治］【頭風目眩、顚倒癇疾】（別錄）

［附方］舊二。【癲癇瘈瘲】飛鴟頭三箇、鉛丹一斤を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、三丸づつを酒で服す。（千金方）【旋風眩冒】鴟頭丸——鴟頭一箇を黄に炒り、眞䕡茹、白朮各一兩、川椒半兩を炒つて汁を去り、末にして蜜で和して梧子大の丸にし、二十丸づつを酒で服す。（聖惠）

肉 ［氣味］缺 ［主治］【これを食へば癲癇を治す】（孟詵）【これを食へば鷄肉、鵪、鶉で起つた積を消す】（時珍）

骨 ［主治］【鼻衄の止まぬには、老鴟の翅關の大骨を取つて微し炙き、研末して吹く】（時珍）記載は聖濟總錄にある。

（一）鴟鵂（拾遺）

和名　わしみみずく
學名　Bubo tenipus, Clark.
科名　梟鴟科

［釋名］角鴟（說文）　怪鴟（爾雅）　雚　音は丸（クワン）である。老兎（爾雅）　鉤

（一）木村（重）曰ク、歐洲大部、亞細亞中、北部ニ分布ス。日本ニテハ九州ニ居ルモ稀ナリ。鴟鵂（チーシユウ）角鴟（チユーチ

ー）怪鴟（クアイチー）猫頭鷹（ミヤチトウエン）鉤鵅（コウコ）ト呼バル。みみずく他ニ數種ヲ産ス。

鵅　音は格（カク）である。　**鵋鶀**　音は忌欺（キキ）である。　**轂轆鷹**（蜀地方で呼ぶ名）**呼哮鷹**（楚地方で呼ぶ名）　**夜食鷹**（呉地方で呼ぶ名）　時珍曰く、その形狀は鴟に似て毛角がある。故に鴟といひ、角といひ、藿といふのであつて、藿の字は鳥の頭、目に角の形のある象形だ。老兎とは頭、目の形容、鵂、怪はいづれも不祥なものの意味だ。鉤鵅、轂轆、呼哮はいづれもその聲がさう聞えるからだ。蜀地方ではまた鉤格を訛つて鬼各哥といふ。

【集解】藏器曰く、鉤鵅は爾雅の鵋鶀であつて、江東では鉤鵅と呼ぶ。その形狀が鴟に似た怪鳥で、夜飛び晝伏す。城邑に入れば城邑が滅びて空になり、家宅に入れば家宅が滅びて空になるが、一定の場所に棲んで移動せねば害がない。その聲の笑ふやうに聞えるものは速に逐ひ去らねばならぬものだ。北方の地に訓狐といふがあつて、二物は似てゐるが、各々その類があるので、訓狐は、聲はその名

〔鴟鵂〕

を呼ぶやう、兩の目は猫兒のやう、大いさは鴝鵒ほどのものであつて、笑ふやうな聲を出すときは人が死ぬものだ。又、鵂鶹といふがある。これもやはりその類で、微小にして黃色だ。夜能く人家に入つて人の爪甲を拾ひ、それで人の吉凶を知るものである。ある人がこの鳥を獲つて嗉囊の中を調べて見ると、やはりまだ爪甲があつたといふ。故に爪を取つたとき戶內に埋めるはこのためだ。

時珍曰く、この物には二種ある。鴟鵂といふは、大いさは鴟、鷹ほど、黃黑斑色で頭、目は猫のやう、毛角と兩耳とがあり、晝伏して夜出る。鳴くときは雌雄相喚び、その聲は老人の如く、初めは呼ぶやうで後には笑ふやうになる。この鳥の行く處には不祥が多い。莊子に『鴟鵂は夜蚤を拾ひ、毫末を察するが、晝出ては山や丘も見えない』とあり、何承天の纂文には『鴟鵂は白日人を見ず、夜能く蚤虱を拾ふ』とある。俗に蚤を訛つて人の爪としたのであつて、謬妄だ。一種の鵂鶹は、大いさは鴝鵒ほど、毛色は鷂のやう、頭、目はやはり猫のやうで、鳴くと肛門からも應へる聲を出し、その聲が連つて『休留休留』といふやうに聞える。故に鵂鶹と名けたのだ。江東ではこれを車載板と呼び、楚地方では快扛鳥と呼び、蜀地方では春哥兒

と呼ぶ。いづれもこれが鳴けば死人があるといふ。實際に就いて見るにやはりその事實がある。說文にはこれを鵲——音は爵(シャク)といつてある。小さいものの意味だ。藏器の所謂訓狐は鴞(けう)のことだ。所謂鵂鶹は鴟鵂の小さいもののことだ。いづれも誤である。周禮に、哲蔟氏(たくぞくし)は夭鳥(えうてう)の巢を覆すことを掌るとあつて、四角の板にて十日の號、十二月の號、十二辰の號、十二歲の號、二十八宿の號を書いてその巢に懸けるとその鳥が去るものだといふ。續博物志には『鵂鶹、鸛(くわん)、鵲(じやく)は其抱は聒(くわつ)を以てするものだ』とある。此は卵を孵(かへ)す時囂(やかま)しく鳴く事だ。

肉　[氣味] 缺　[主治] 【瘧疾には、一羽を毛、腸を去つて油で燥(に)て食ふ】(時珍) 記載は陰憲副方にある。

[附方] 新一。【風虛眩運】大頭鷹を閉め殺(し)し、毛を去つて煮て食ひ、骨を燒いて性を存して酒で服す。(便民食療)

肝　[主治] 【法術家の用ゐる材料になる】(時珍)

(一)鴞（拾遺）

和名　このはづく、一名かきづく
學名　Otus sunnia japonicus, Temm. at Schleg.
科名　づく科

［釋名］　**梟鴟**　梟の音は嬌(ケウ)である。**土梟**(爾雅)　**山鴞**(晉灼)　**鵂鴞**(十六國史)　**鵩**(漢書)　**訓狐**(拾遺)　**流離**(詩經)　**魑魂**　時珍曰く、鴞、梟、訓狐といふはその聲である。鵩(ふく)といふはその色が服の色のやうだからである。地方人が訓狐を訛つて幸胡といふがこの鳥であつて、鴟と鴞とは二種別物である。周公がこの二鳥を合せて詠(よ)んだので、後世一般に鴟鴞といふ一種の鳥として了つたのだが、それは謬だ。魑の字は韻書には見當らないが、匈攡の切(キヨウ)と發音するのであらう。魑魂、流離といふは緣起の惡い鳥といふ意味だ。吳球の方には逐魂としてある。梟とは、この鳥は成長すると母を食ふものだから、古代には夏至(げし)にこの鳥を磔(しつき)にしたといふ。それでその字を鳥の首を木の上に置いて書いたものだ。

［集解］　藏器曰く、鴞とは梟のことで、一名鵩といふ。吳地方では魑魂と呼ぶ。この惡聲の鳥だ。賈誼は『鵩は鴞に似てゐる』といつたが、その實は一種の鳥だ。この

(一)木村(重)曰ク、耳小ナリ、個體ニヨリ色彩ノ變化アリ。北中支那、日本ニ產ス。鴞(レヤチ)梟鴟(シアチチー)土梟(トウシヤチ)山梟(サンシヤチ)ノ呼稱アリ。

鳥が家宅に入れば人が居なくなる兆である。この鳥は日中には物が見えず、夜になると飛行し、常に人家に入つて鼠を捕つて食ふ。周禮の硩蔟氏は夭鳥の巣を覆すことを掌るとある註に『惡鳴の鳥、鴞鵩、鬼車の屬』とある。

〔鴞〕
——鴞——

時珍曰く、鴞鵩、鵂鶹、梟はいづれも惡鳥である。說明を試みた人人は往往にして混亂した註解を下し、賈誼は鵩は鴞に似てゐるといひ、藏器は鴞と訓狐とは二物だとし、許愼、張華は鴞、鵩、鵂鶹を一物とし、王逸は鵩、卽ち訓狐だといひ、陳正敏は梟は伯勞だといひ、宗懍は土梟は鴝鵒だといひ、それぞれ一說を主張してゐるが、今總括してその根據を考へ、地方人に就いて調べて見ると、鴞、梟、鵩、訓狐が一種、鵂鶹が一種のものだ。藏器が說明してゐる訓狐の形狀は鵂鶹そのもので、鴞といふは今俗

に幸胡と呼んでゐるそのものだ。處處の山林に時としてゐる。幼いうちは可愛いものだが成長すると醜惡になり、形體は母雞ほどで斑文があり、頭は鴝鵒のやう、目は猫の目のやうになり、その聲はそれ自身の名を呼ぶやうに聞え、好んで桑椹を食ふ。古代には多くこれを食つたものだ。故に禮に『鴞胖を食はず』とあるので、それは脇側の薄弱な部分を指したのだ、莊子には『彈を見て鴞炙を求む』とあり、前涼錄には『張天錫は「北方の美なるものは桑椹、甘香、鷄鴞、革饗だ」といつた』とある。いづれもこの物を指したのだ。按ずるに、巴蜀異物志に『鵩は小鷄ほどのもので、體に文色がある。それで土俗にかく名けたのだ。遠くは飛行し得ず、その棲む地域から出ない』とある。盛弘之の荊州記には『〔二〕巫縣には雌雞ほどの鳥で鴞と名けるものがある。楚地方では鵩といふ』とある。陸機の詩疏には『鴞は大いさ鳩ほどで綠色だ。人家に入れば凶事がある。賈誼の賦にある鵩そのものだ。その肉は甚だ美味で、羹、臛にもなり炙いても食へる』とある。劉恂の嶺表錄には『北方では梟が鳴くと一般に怪しむが、南方地方では晝夜飛んで鳴いてゐる。烏鵲などと異つたことがない。桂林地方では各戶に網で捕つて置いて鼠を捕らせるが、狸より

〔二〕巫縣ハ今ノ四川省巫山縣ノ地ナリ。

もよく働く』とある。これ等の諸說を綜合して見ると、鴞、鵩、訓狐の一物なることが明瞭だ。又按ずるに、郭義恭の廣志には『鴞は楚鳩が生むもので、はぐくみ育て得ないものだ。騾、駏、驢のやうである』とあるが、しかし梟は成長すれば母を食ふといふのだから、はぐくんで育てることになる。それとも食はれるそのものは鳩なのかも知れぬ。淮南子には『甑瓦を投ずると梟が鳴き止む。性が相勝つのだ』とある。

肉 氣味 【甘し、溫にして毒なし】 主治 【鼠瘻には炙いて食ふ】（藏器）【風癇、噎食病】（時珍）

附方 新二。 【風癇】風癇には、寶鑑第九卷に就いて見ると、神應丹、惺神散と名けるがある。（齊方大成下册）【噎食】鵩鳥のまだ毛の生えぬもの一對を取り、黃泥で固濟して煆いて性を存して末にし、一匙づつを溫酒で服す。（壽域神方）

頭 主治 【痘瘡の黑陷には、臘月のもの一二箇を用ゐ、灰に燒いて酒で服す。それで起きるものだ】（時珍） 記載は雲岐子保命集にある。

目 主治 【呑めば夜間鬼物を見るやうになる】（藏器）

鴆[一] 音は沈(チン)を去聲に發音する。（別錄下品）

和名　ちん(古稱)
學名　未詳
科名　きじ科

【校正】外類より此に移し入る。

【釋名】䳢日　運日(ウンジツ)と同じ。(別錄)　同力鳥(陶弘景)

【集解】別錄に曰く、鴆は南海に生ずる。

弘景曰く、鴆と䳢日とは二種の鳥だ。鴆鳥は形狀が孔雀(くじやく)のやう、五色雜斑で高く大きく、頸は黑く、喙は赤い。廣の深山中に產する。䳢日は形狀が黑傖鷄のやうで、同力といふやうに聞える聲を出す。故に江東では同力鳥と呼ぶのである。いづれも蛇を啖(く)ふ。人が誤つてその肉を食へば立ろに死ぬ。いづれも蛇毒を療ずるものだ。昔は鴆毛(ちんまう)で毒酒を作つたので、それで鴆酒と名けたのであるが、近頃では一向作らない。又、海中に赤色で龍のやうな形狀のものがある。これは海蠆と名けるもので、やはり大毒があり、鴆羽よりも甚しい。

恭曰く、鴆鳥は[二]商州以南に產し、[三]江(かう)、嶺地方に大いにゐるので、一般に直ぐに

(一) 木村(重)曰ク、雉科ノモノナルベシ。學名未詳。支那ニ雉科ノ鳥多シ。

(二) 商州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(三) 江嶺ハ江西、廣東地方。

（四）禹歩トハ歩ムニ兩足相過ギザル貌ヲイフ。竊ミ歩行クナリ。

あの鳥かと肯づかれる。その肉は腥く、有毒だから喫ふわけに行かぬ。羽で酒の上に盡けば人を殺すなどいふは、やはり無根の妄說だ。郭璞は『鴆は大いさ鵰ほど、頸長く、喙赤く、蛇を食ふ』といひ、說文、廣雅、淮南子には、いづれも鴆を䲰日としてある。交、廣地方でもやはり、䲰日、卽ち鴆、一名同力鳥だといふ。孔雀のやうなものなどは更に無い。陶氏は何か人のために誑されたのだ。

〔鴆〕

時珍曰く、按ずるに、爾雅翼に『鴆は鷹に似て大きい。形狀は鴞のやうで紫黑色、喙は赤く、目は黑く、頸は長さ七八寸あり、雄を運日と名け、雌を陰諧と名ける。運日が鳴けば晴れ、陰諧が鳴けば雨が降る。蛇、及び橡實を食物とするもので、木や石に蛇がゐるのを知ると、（四）禹步して禁をやる。すると須臾にして木は倒れ、石は崩れて蛇が出る。蛇はこの鳥の口に入ると直ちに爛れて了ふ。その糞、尿が石に著くと石はみな黃爛する。あらゆる蟲はこの鳥が水を飮んだ處で吸へばみな死ぬ。た

だ犀角を服めばその毒を解すものだ』とある。又、楊廉夫の鐵厓集には『鴆は(五)蘄州の(六)黄梅山中に産する。形狀は訓狐に類し、聲は腰鼓を撃つやうなもので、大木の頂上に巣くふ。巣の下は數十歩の間みな草が生えぬ』とある。

毛　【氣味】【大毒あり、五臟に入れば人を爛殺する】(別錄)

喙　【主治】【これを帶びれば蝮蛇の毒を殺す】(別錄)　時珍曰く、蛇の咬傷を受けたときは、刮つて末にして塗ればその場で癒える。

(一)姑獲鳥（拾遺）

和名　うぶめどり（古稱）
學名未詳
科名未詳

【釋名】　**乳母鳥**（玄中記）　**夜行遊女**（同）　**天帝少女**（同）　**無辜鳥**（同）　**隱飛**（玄中記）　**鬼鳥**（拾遺）　**譩譆**（杜預の左傳註）　**鉤星**（歲時記）　時珍曰く、昔は一般に、この鳥は産婦が化けたもので、陰慝して妖をなすといふので右の諸名がある。

【集解】　藏器曰く、姑獲は能く人の魂魄を取る。玄中記に『姑獲鳥は鬼神の類であつて、毛を衣ては飛鳥となり、毛を脱いでは女人となる。これは産婦が死んで

(五)蘄州ハ草部隰草類艾ノ註ヲ見ヨ。
(六)黄梅山ハ湖北省黄梅縣ノ西北ニ在リ。
(一)木村(重)曰ク、或ハ梟科ノ鳥ノ傳説カ。

(二)荊州ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。

(一)越ハ今ノ廣東、廣西地方。

からこの鳥に化けたものだといふことだ。故に胸前に兩乳があり、喜んで人の子を取り、それを養つて己れの子とする。凡そ小兒のある家では夜間衣類を外に露してはならぬ。この鳥が夜中飛んで來て血を點けて誌にすると、その兒が驚癇、及び疳疾を病むものだ』とある。(二)荊州に多くゐる。また鬼鳥ともいふ。周禮に、庭氏は救日の弓、救月の矢を以て天鳥を射るとあるはこの鳥だ。

時珍曰く、この鳥は雌のみで雄がない。七八月に夜飛んで人を害する。就中毒あるものだ。

治鳥（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】時珍曰く、按ずるに、干寶の搜神記に『(一)越地の深山に治鳥といふがゐる。大いさは鳩ほどで色青く、樹を穿つて巢を作る。その巢は大いさ五六升入れる器ほどで、口徑が數寸あり、土堊で飾つて赤白相間り、射候のやうな狀態だ。樵夫はこの巢のある樹を見ると避けて伐らない。それを伐ると能く虎を役つて人を害

し、人の家屋を燒拂ふ。白晝に見ると鳥の形で、夜その鳴聲を聞いても鳥の聲だが、時として或は長さ三尺ばかりの人間の形となり、澗に入つて蟹を取り、それを人家に入つて火で炙いて食ふ。山間に住む人民はこれを越祀の祖といふ』とある。又、段成式の酉陽雜俎には『俗說に、昔、ある人が洪水に遇ひ、都樹の皮を食つて餓死し、それが化けてこの物になつた。それで樹の根にゐるものを猪都といひ、樹の中にゐるものを人都といひ、樹の尾にゐるものを鳥都といふ。鳥都は左脇下に濶さ二寸一分の鏡印がある。南方の地ではその窠を食ふ。味は木芝のやうだ』とある。竊に謂ふに、獸には山都、山𤢖、木客があり、鳥にも治鳥、山蕭、木客鳥がある。これはいづれも戾氣を天然に持つて生ずるもので、それぞれ異る形となつて現はれたものだ。共に左に附錄する。

附錄　(三)**木客鳥**　時珍曰く、按ずるに、異物志に『木客鳥は、大いさは鵲ほどのもので、幾千幾百羽が羣をなし、飛び集るには節度があつて、俗に、黃白鳥と呼ぶものだ。翼があり、綬があり、その中でただ一羽だけ高く飛ぶものが君長、前にゐて正赤のものが五伯、正黑のものが鈐下、緗色に赤の雜るものが功曹、左脇に白

(二) 木村(重)曰ク、雀族ノ一種ナルベキモ、詳シクハ後攷ヲ俟ツ。

帶のあるものが主簿で、それぞれ官職に隨つて正服があるのだといふ。(三)廬陵郡の東にこの鳥がゐる』とある。

(四)**獨足鳥**　一名山蕭鳥。廣州志に『獨足鳥は閩、廣にゐる。大いさは鵠ほどで、その色は蒼く、その聲は自らを呼ぶ』とあり、臨海志に『足が一本、身に文があり、口赤く、晝伏し、夜飛ぶ。時によると晝出ることがあるが、すると衆くの鳥がそれを譟る。ただ蟲豸を食ふだけで稻、粱をば食はない。聲は人が嘯くやうで、雨が降りさうなとき頻りに鳴く。孔子の所謂、一足の鳥は商羊なりといつたそのものだ』とある。山海經には『(五)羭次の山、鳥あり。狀は梟の如く、人面にして一足。名けて槖𩇯——音は肥(ヒ)——といふ。冬には蟄す。これを服すれば雷を畏れず』とある。孫愐の唐韻には『鷙は土精なり。鷹に似て一足。色黄なり。これを毀れば人を殺す』とある。

槖𩇯

主治　【履屐に作つて用ゐれば脚氣を治す】(時珍)　記載は雜俎にある。

(三)廬陵郡ハ三國呉ニ置ク、今ノ江西省吉安縣ノ西高昌ニ故城アリ。

(四)木村(重)曰ク、雁鴨科、鷸科ノ鳥ノ靜止狀態ヲ謂フモノカ。

(五)羭次之山、畢氏ノ考證ニ據レバ、今ノ陝西省咸寧縣ノ南ニ在ラントイフ。

鬼車鳥（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】 鬼鳥（拾遺） 九頭鳥（同上） 蒼鸆（白澤圖） 奇鶬　時珍曰く、鬼車は妖鳥であつて、周易に鬼を一車に載すとある意味を取つて名としたものだ。鶬に似てゐるが異ふ。故に奇鶬といつたのだ。

【集解】 藏器曰く、鬼車は晦瞑なる暗中に飛んで鳴き、能く人家に入つて人の魂氣を取る。言ひ傳へには、この鳥は昔は首が十箇あつたのを、犬にその一箇を嚙まれたので九箇だけ殘り、その取られた一箇からは常に血を滴してゐるが、その血が人家に著くと凶事があるといふ。（一）荊楚地方では、夜間この鳥が鳴いて飛ぶのを聞くと、ただ燈火を消し、門に狗の耳を捩つて括り付けて厭にする。この鳥は狗を畏れるといふわけだ。白澤圖にある蒼鸆には九箇の首があり、また孔子が子夏と奇鶬の九首を見たといふはいづれもこの物だ。荊楚歲時記にこれを姑獲としたのは誤で、その二鳥は似たものだから鬼鳥と同名で呼ばれたのだ。

（一）荊楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。

○○時珍曰く、鬼車は形狀は鵂鶹のやうで、大なるものは翼の廣さ一丈ばかりあり、晝は盲し、夜は瞭に見えるもので、火光を見ると墜落する。按ずるに、劉恂の嶺表錄に『鬼車は(二)秦中に產するが(三)嶺外に尤も多い。春、夏の頃に少し薄晴がりになると飛んで鳴き、その鳴きながら飛び過ぎる聲は力車の鳴るやうに聞える。よく人家に入つて人の魂氣を消磨させることを好む。その血の滴つた家には必ず凶事がある』とある。便民圖には『冬期に鬼車が夜飛んで鳴く。その聲が北から南へ行くをば出巢といひ、雨が降る。南から北へ行くをば歸巢といひ、雨が晴れる』とある。周密の齊東野語には『宋の李壽翁が長沙の地方長官をしたとき、曾てこの鳥を捕獲したことがある。形狀は野鳧に類して色赤く、身は圓く箕のやうで、十箇の頸が環になつて簇がり、頭が九箇あつて一の頸にだけ頭がなくして鮮血が滴り、一の頸每に兩翼があつて、飛ぶ有樣は霍霍として竝び進むものだつた』とある。又、周漢公主が病の時、この鳥が䃋石の處まで飛んで來た。すると同時に公主が薨去したといふ。怪氣の鍾る結果かやうに妖異なものとなつて現はれるといふことは心得て置くべきことである。

(二)秦ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。
(三)嶺外ハ石部鹵石類硫黃ノ註ヲ見ヨ。

諸鳥有毒（拾遺）

【凡そ鳥は

自死して目を閉ぢたもの、
自死して足の伸びぬもの、
白鳥にして首の玄きもの、
玄鳥にして首の白きもの、
三足のもの、
四距のもの、
六指のもの、
四翼のもの、
異しい形、異しい色のもの、
いづれも食つてはならぬ。食へば人を殺すものだ】

本草綱目禽部第四十九卷　終

昭和六年二月十一日印刷
昭和六年二月十五日發行

頭註國譯本草綱目(第十一册)

非賣品

監修兼翻譯者　白井光太郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　和田利彥

東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行